

研 究 集 録

第 28 集

(第 2 分冊)

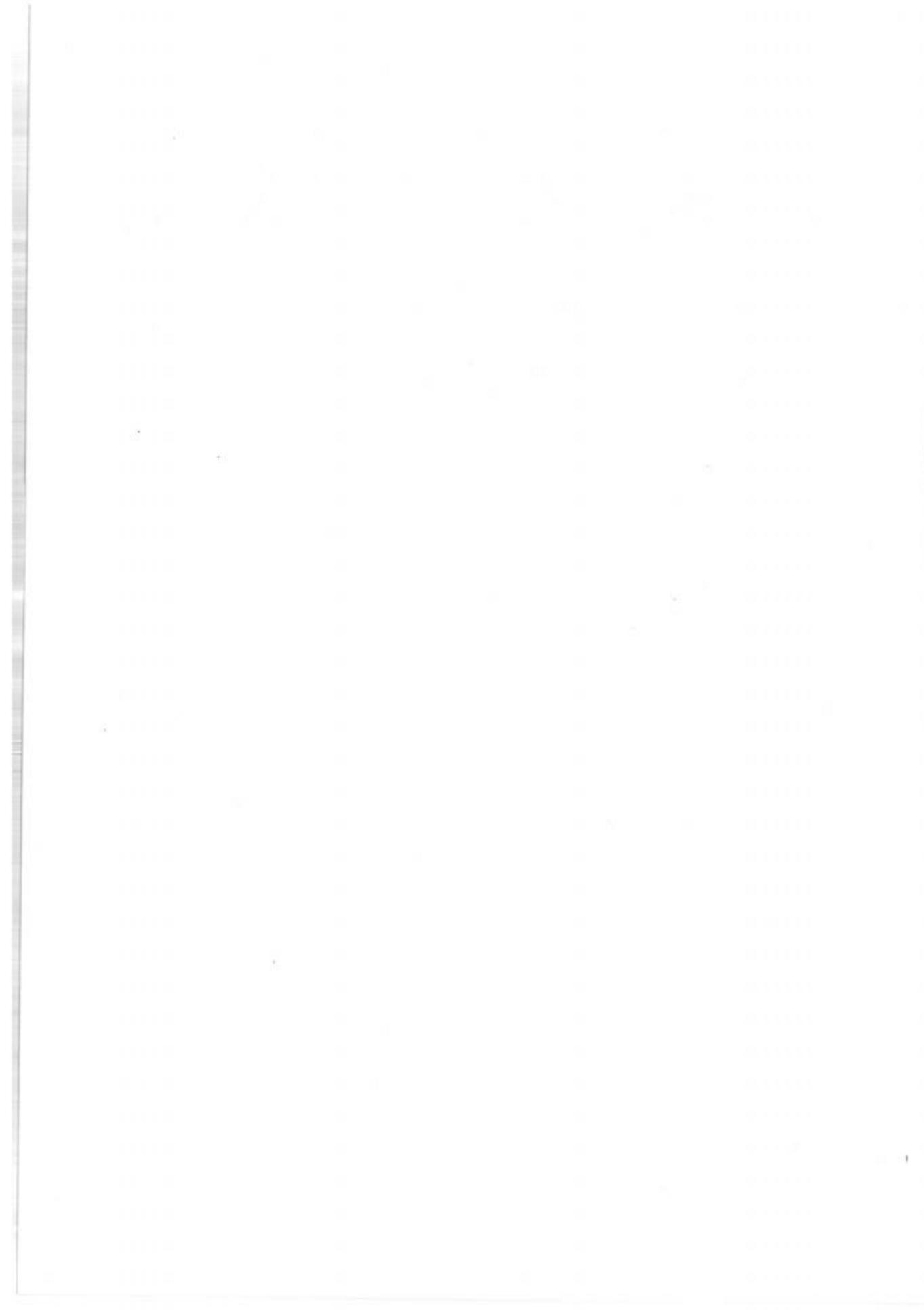
昭和 60 年 度

中 学 校 創 立 40 周 年 を 記 念 し て
高 等 学 校 創 立 30

—— 本 校 に お け る 中 ・ 高 一 貫 教 育 ——

大 阪 教 育 大 学 教 育 学 部 附 属 天 王 寺 中 学 校

大 阪 教 育 大 学 教 育 学 部 附 属 高 等 学 校 天 王 寺 校 舎



序

本学の附属中学校と附属高等学校は、今年それぞれ創立40周年並びに30周年の記念の年を迎えます。我が附中・附高は、まさに戦後の40年間にわたり実験・実習学校としての使命を立派に果たしながら、中・高一貫教育のなかで個性豊かな人間を育てる教育のあり方を探究し、創造して来ました。このことは、現在改革を迫られている日本の教育の現状に照して特に重要な意義を持っていると思います。

言うまでもなく教育は、真空のなかで行われるものではなく、個人的・社会的生活の諸条件と密接にかつ厳しくかかわっています。聞くところによると、現在の小・中学生のなかには食事の際、箸を適切に操作出来ない子が可成り見受けられるために、学校での給食の時間に箸の使い方を指導している小学校は珍しくないようです。いやそれどころではなく、現代子のなかには、生活リズムが確立されていないために個性が十分に育たないことに加えて不眠症や拒食症に悩む子も稀ではない、といわれています。現代の教育は、現代子のこのような問題的傾向と対決しながらその解決に努めねばなりません。

とはいえ、現代の個人的・社会的諸条件が生み出す問題的傾向は極めて重くかつ深刻です。これを学校教育が適切に受け止め、教育的指導を通して問題を解決し、豊かな人間性を十分に育てるのは容易ではないでしょう。それは、問題の根が大きく深い場合が少くないからです。母原病あるいは校原病という言葉に示されているように、親や教師自身が青少年の逸脱行動や問題的傾向の原因の一つになっていることがあるといわれています。このようにして、いま青少年をめぐる問題的事態は、家庭・学校・社会を包み込む形で進行していると考えられ、ことの重大さが増しているように思われます。

このように考えると、青少年を取り巻く生活と教育の環境を抜本的に改善・改革する必要性は、ますます高まって来ていると思います。しかしいま求められている改革は、教育基本法の本質の変革に結び付くべきものではなく、むしろこの精神の原点に立ち帰って追求されるべきだと思います。すなわち、個性が豊かで自主的精神に充ちた心身共に健康な人間を育てるといふ基本法の本質に基づいて青少年の実態を点検し、問題点を整理して改革の具体的方策を青少年の健全育成を中軸として探究することが実り多い改革を推進するための筋道ではないでしょうか。

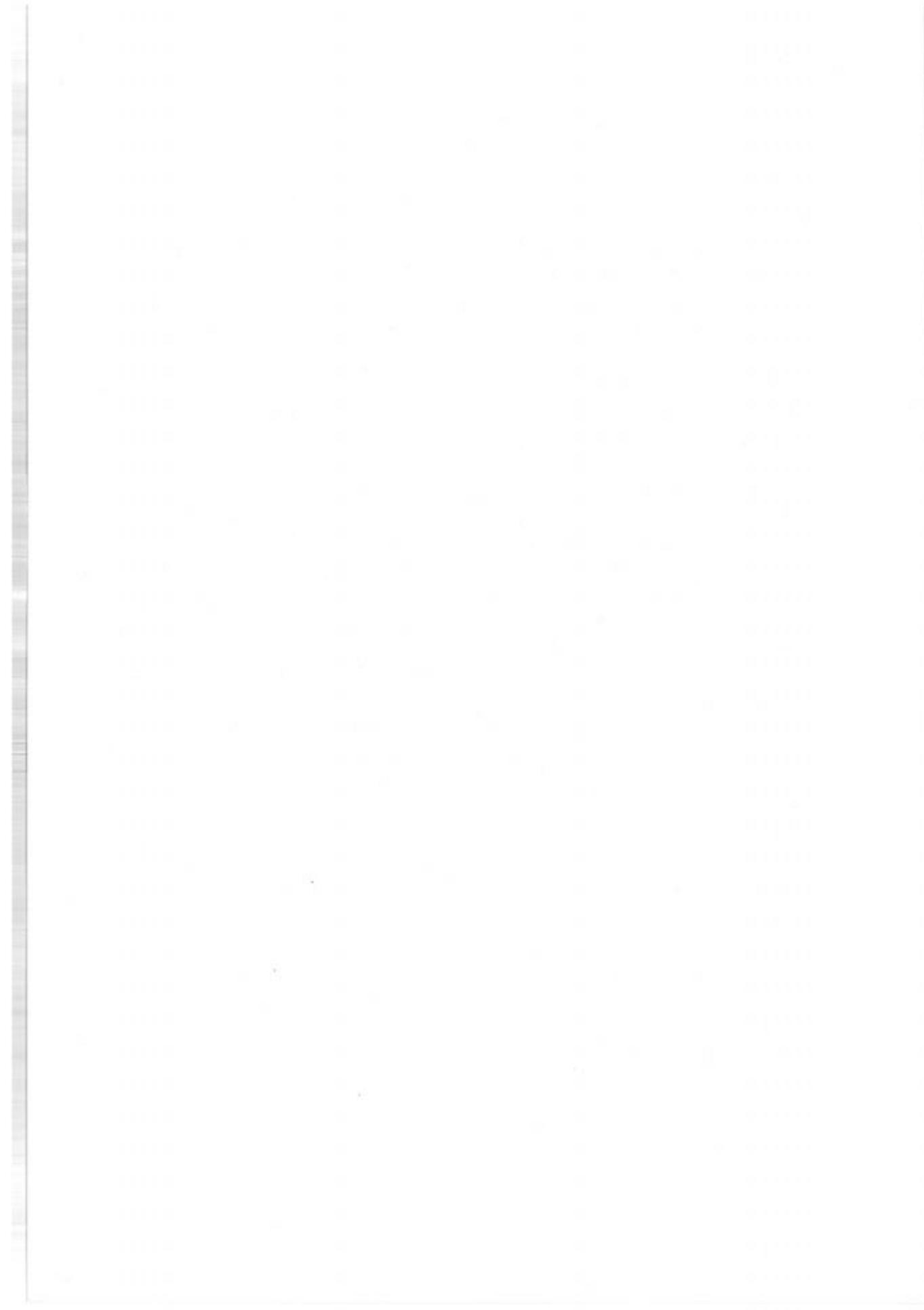
前述したように、我が附中・附高は、6ヶ年の一貫教育を通して人間性豊かで自主的精神に充ちた健康な人間を育てる道を30年ないし40年にわたって探究し、実践して来ました。この研究集録に収められている内容は、この長期間にわたる一貫教育における探究・実践の成果を総括的に示していると思います。従ってこの内容は、現代日本の教育が模索している教育改革の方向に対して多くの示唆を与えるものと確信します。

昭和61年3月

大阪教育大学長

大阪教育大学教育学部附属高等学校長

西田文夫



序

このたび、大阪教育大学附属天王寺中学校は創立40周年を、附属高等学校天王寺校舎は30周年を迎えることになりました。このときに当たり、中学校・高等学校が一体となって創立以来の発展の歴史と、附属学校としての使命である教育研究の進展の跡を回顧し、併せて、明日の教育への展望を開くため、我が校の中・高一貫教育について、この10年間を中心にまとめ、「研究集録」とし発行することになりました。

顧みますと、中学校は昭和22年4月、戦後の混乱期における設立であります。直面する幾多の困難を克服しながら次第に充実し発展を遂げて来ました。9年遅れて、昭和31年4月には、義務教育としての中学校と、それに続く高等学校の課程を合わせた6ヶ年の一貫教育を行うという趣旨のもとに附属高等学校が設立されました。高等学校におきましても創設当時は苦難の道でありましたが、附属中・高の教育にかける先輩諸先生方の情熱と保護者各位のご理解とご協力が今日の輝かしい伝統を誇る附属学校を育て上げて来たのであります。例年のことながら、我が附属中・高の生徒諸君の学校内外における文化、体育両面にわたる活躍は目を見張るものがあり、また多くの卒業生諸氏のあらゆる分野における実社会への貢献を思いますとき、本校は斯界における確かな地歩を占めつつあるという感を強くいたします。

一方、教育の科学的研究の実験・実証の場としての使命を持つ本校では、生徒指導、学校行事等の教育活動、教科指導、授業分析等の研究活動に不断の努力を積み、それらの成果は教育研究会において、あるいは研究集録として発表して来ました。現代の急速な科学技術の進歩と経済の成長は家庭の生活様式、社会事情の変化をもたらし、教育界に次々と深刻な問題を提起しておりますが、時代の移り変わりに従って教育の内容も、その方法も日々の営みの中に検討されなければならないことを痛感します。こうした時代の流れを経験しながら、我々の附属中学校・高等学校が大学と連繫を保って進んできた40年、30年のたゆみない歩みの歴史は、自ずから一つの伝統として受け継がれて来ました。私たちは更に努力を重ね、研鑽を積んで次代にこれを引き継ぐ責任があり、心を新たにせざるを得ません。

いま、私たちは個性を尊び、個人を育てるという教育理念のもとに、明日への教育の創造に向かって、更に前進を続けたいと思います。諸氏、諸機関の忌憚なき御批正と御教示をお願い申し上げます。

昭和61年3月

大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎主任
大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校長

下 村 昇



目 次

I	本校の性格と概要	1
II	本校の教育理念	17
III	本校の使命と研究活動	29
IV	行事等における中・高一貫教育の実践と課題	
	[文化活動]	
§ 1	文化活動の教育的意義	49
1	本校の文化活動のねらい	49
2	本校の文化活動	49
§ 2	中学校における文化活動	49
1	学芸会・鑑賞会・講演会	49
2	自由研究	54
3	文化クラブ発表会・展示会	60
§ 3	高等学校における文化活動	65
1	芸能鑑賞	65
2	博物館見学	66
3	講演	66
§ 4	図書館活動	68
1	蔵書数の変化と利用状況の変化	68
2	校内読書感想文コンクール	70
3	図書委員会の活動	70
4	図書館活動の課題	71
§ 5	今後の課題	72
	[保健体育活動]	
§ 1	保健行事	74
1	保健行事の目標と概観	74
2	スポーツテスト	78
§ 2	体育的行事	80
1	体育大会	80
2	臨海訓練	95
3	耐寒訓練・マラソン大会	106

4	遠足	114
5	富士登山	116
6	スキー訓練	121
[合宿訓練・修学旅行]		
§ 1	合宿訓練	130
1	中1合宿訓練	130
2	高1合宿訓練	140
3	附高ふるさと村	148
§ 2	修学旅行	152
1	中3修学旅行	152
2	高Ⅲ修学旅行	159
3	今後の課題	166
[生徒会・自治会]		
§ 1	生徒会	167
1	生徒議会	167
2	三附中・交歓会	173
§ 2	自治会	177
1	附高祭	177
2	百軒徒歩	186
3	音楽祭	197
[クラブ活動]		
§ 1	本校クラブ活動のねらい	201
1	クラブ活動のねらい	201
2	クラブ活動	201
§ 2	中学校におけるクラブ活動	202
1	クラブ活動参加状況の移り変わり	202
2	クラブ活動の現状	204
§ 3	高校におけるクラブ活動	207
1	クラブ活動参加状況の移り変わり	207
2	クラブ活動実態調査	209
3	クラブ活動の研究発表	211

V 教科における中・高一貫教育の実践と課題

[国語科]

§ 1	本校国語科における中・高一貫教育	215
-----	------------------	-----

1	読書指導	215
2	表現指導	224
3	入門期の古典指導	228
§ 2	教育研究活動	230
1	教育研究会	230
2	近畿附属連盟中・高研究部会	232
3	全国附属連盟高等学校研究大会	233
4	大阪教育大学関係・その他	234
5	研究集録	234
§ 3	今後の課題	236
§ 4	書道・書写	237

[社会科]

§ 1	本校社会科における教育研究活動	241
1	教育研究会	241
2	近畿附属学校連盟中・高研究部会	244
3	全国附属連盟高等学校研究大会	244
4	その他	244
§ 2	地理実習	244
1	高工地理実習要項	244
2	実習レポート課題	245

[数学科]

§ 1	本校数学科における中・高一貫教育	251
§ 2	教育研究活動の概要	251
1	教育研究会	251
2	大阪教育大学数学会	253
3	全国附属連盟高校部会教育研究大会・近畿附属連盟中・高研究部会	254
§ 3	教育研究活動のあゆみ	255
1	教育研究会	255
2	大阪教育大学数学会	257
§ 4	今後の課題	259

[理科]

§ 1	理科教育	261
1	物理	261
2	化学	263
3	生物	264

4	地学	266
5	総合	269
§ 2	理科教育研究のあゆみ	272
§ 3	野外実習	274
1	地学実習	274
2	磯観察	281
§ 4	理科教育とクラブ活動	283
1	中学校	283
2	高等学校	284
§ 5	今後の課題	286

[音楽科]

§ 1	本校音楽科の指導方針及びカリキュラム	289
1	指導方針	289
2	カリキュラム	289
§ 2	中学校音楽会	290
1	音楽会のあゆみ	290
2	音楽会実施要項(昭和60年度プログラムより)	292
§ 3	教育研究活動	294
1	教育研究会	294
2	近畿附属連盟中・高研究部会	295
3	全国附属連盟高校部会教育研究会	295
4	研究集録	295
§ 4	教官の異動	295

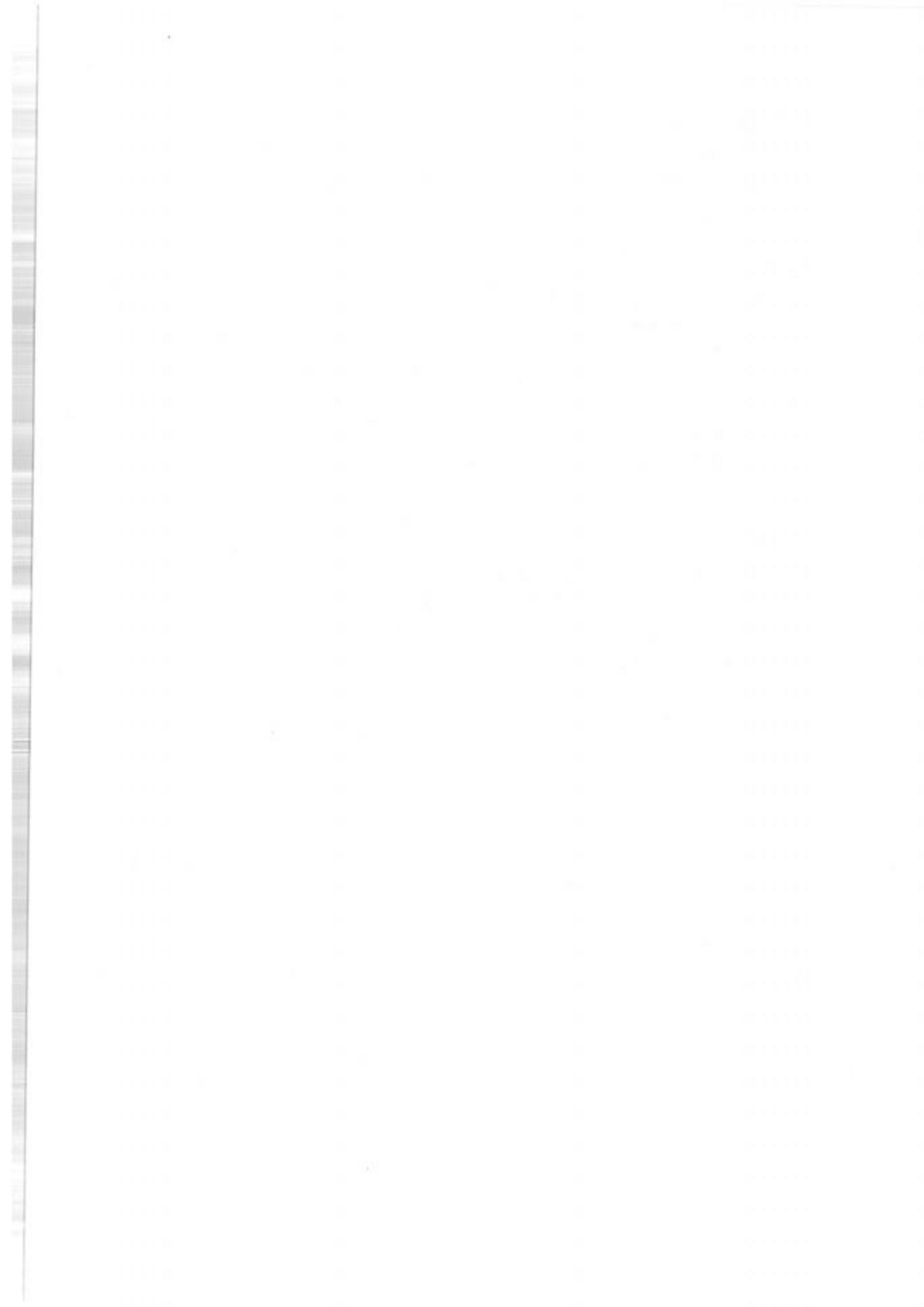
[美術科]

§ 1	本校美術科における中・高一貫教育	297
1	中・高の美術科教育カリキュラムの概要	297
§ 2	本校美術科教育研究のあゆみ	298
1	創立から昭和51年3月まで	298
2	昭和51年4月から55年8月まで	298
3	昭和55年9月から現在まで	300
§ 3	問題点と課題	301

[保健体育科]

§ 1	本校保健体育科における中・高一貫教育	303
1	保健体育科のねらい	303
2	中・高6ヶ年の課題	304

§ 2	教育研究活動	304
1	保健体育科研究活動のあゆみ	304
2	現在の研究	307
§ 3	今後の課題	309
[技術家庭科]		
§ 1	本校技術・家庭科における中・高一貫教育	311
1	技術・家庭科教育の目標と概観	311
2	本教科の内容	312
§ 2	実践	312
1	履修領域	312
2	領域別指導内容	313
3	研究発表・研究集録	323
§ 3	今後の課題	323
[英語科]		
§ 1	本校英語科における中・高一貫教育	325
§ 2	教育研究活動 — この10年の歩み —	326
§ 3	本校の英語科教育と生徒の諸活動	331
1	中学校英語暗誦大会と校外暗誦大会	331
2	実用英語検定テスト受験	331
3	高校生英作文コンテスト等への参加	332
4	海外留学	332
5	クラブ活動	332
§ 4	今後の課題	333
VI	展望	335



I 本校の性格と概要

II 本校の教育理念

III 本校の使命と研究活動

梁 梁 王 薛 謝 吳 劉 李 上

金 張 曹 鄭 何 呂 孫 中

陳 周 朱 楊 王 俞 謝 趙 彭 下

I 本校の性格と概要

§ 1 本校の性格

本校は、大阪教育大学教育学部に附属する中学校並びに高等学校で、教育基本法及び学校教育法に基づいて、一般普通教育並びに高等普通教育を行う。

また、これらの普通教育と共に、次のような特別の任務を持っている。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び現場の教育の実際に関する科学研究を行う研究学校としての任務
- ② 教育研究の結果一応到達した最善の理論を実践し、広く教育界の参考に供する実証学校としての任務
- ③ 教員養成機関として、大学学生の教育実習を行う実習学校としての任務
- ④ 他の諸学校との教育研究の連携と共に、現職教員の研修の一端を担う理職教育学校としての任務

§ 2 本校の教育方針

本校では、教育基本法及び学校教育法に基づき、

国家の繁栄と世界の平和・人類の幸福を希求し、各自の個性と能力を最大限に
発揮出来る人間に育てる

ことを根幹とし、次の各項を設定し、本校におけるすべての教育計画や教育活動の基本としている。

- ① 個人生活においては、
正義を愛し真理を探究する旺盛な求学心と透徹した判断力を持つこと
強固な意志と頑健な心身とをもって自主的・積極的な実践力を持つこと
豊かな感情を持つこと
- ② 家庭生活においては、
民主的な家庭の生活に協力し、長上を敬愛すること
- ③ 社会生活においては、
有為な社会の一員となるため、責任感、遵法、奉仕・協調の精神を養うこと
- ④ 職業生活においては、
現在及び将来の生活設計をなす能力をみがくこと

更に、全般について、自己の意見をはっきりと主張でき、皆が共に考え、行動でき、道理に合わないことを許さない人間に育てることを目標としている。

§ 3 本校の概要

本校は、昭和22年4月に、大阪天王寺（現・大阪市天王寺区南河堀町）に、大阪第一師範学校の附属天王寺中学校として併置されたのに始まる。

その後、昭和31年4月、大阪学芸大学に附属高等学校が設置され、以後、中・高一貫教育の附属天王寺中・高等学校として現在に至っている。

本校の現況の一端として、沿革と共に、施設及び卒業生徒数などの諸資料をここに挙げておく。

1 沿革略史

昭和22年4月の附属天王寺中学校開校より現在（昭和61年3月）までの沿革の概略を施設関係を中心に挙げておく。

- 昭和22. 4. 1 大阪第一師範学校に附属天王寺中学校併置
4. 22 附属天王寺中学校開校式 第1期生（116名）入学 3学級編成
- 昭和23. 3. 31 元第一師範学校男子部寄宿舎2棟を改修移転 独立の校舎を持つ
- 昭和24. 4. 10 元師範学校寄宿舎南棟1棟を改修 附属中学校の校舎となる
5. 31 法律第150号を以って国立学校設置法公布 大阪第一師範学校を廃して新しく大阪学芸大学が設置 校名を大阪学芸大学附属天王寺中学校と改称
- 昭和29. 11. 25 附中新校舎（鉄筋校舎）地鎮祭
- 昭和30. 4. 14 第1期工事竣工式（建坪106.17 延坪326.05）〔北館3階建〕
- 昭和31. 4. 1 国立学校施行令及び同施行規則改正 大阪学芸大学に附属高等学校設置（以下、高は高等学校を、中は中学校を示す）
天王寺校舎（大阪市天王寺区南河堀町43）、池田校舎（池田市城南町560）
高等学校新設に伴い中学校1学級ずつ学級減（第10期生より）
4. 16 高（天王寺校舎）第1期生（78名）入学 2学級編成
4. 30 第2期工事竣工式（建坪89.45 延坪277.67）
5. 3 附属高等学校開校式
- 昭和32. 4. 17 第3期工事竣工式（建坪56.55 延坪170.90）〔北館旧理科室など〕
- 昭和33. 4. 28 第4期工事竣工式（建坪87.20 延坪87.20）〔北館旧図書館など〕
- 昭和34. 5. 30 第5期工事竣工式（建坪41.64 延坪119.88）〔北館〕
- 昭和35. 6. 18 高・第1期工事竣工式（建坪160.62 延坪160.62）〔北館4階建増〕
- 昭和36. 4. 1 中学校・高等学校各学年1学級ずつ学級増を認められる
5. 25 高・第2期工事竣工式（建坪78.95 延坪78.95）〔北館4階〕
- 昭和37. 7. 10 高・第3期工事竣工式（建坪106.17 延坪106.17）〔北館4階〕
- 昭和38. 6. 5 高・第4期工事竣工式（建坪45.06 延坪180.25）〔東館4階建〕
- 昭和39. 3. 31 高・第5期工事竣工式（建坪100.88 延坪414.92）〔東館校長室、理科実験室〕
12. 15 通算第11期工事竣工式（建坪30.724 延坪92.172）〔東館2・3階渡り廊下 正門・囲障〕

昭和40. 4. 1 高等学校各学年1学級ずつ学級増を認められる

昭和42. 6. 1 学名変更に伴い大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校・大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎と改称

9. 30 通算第12期工事竣工式（建坪442.5 延坪1770.0）〔南館4階建、
屋上天体観測室、教科教育センター〕

昭和48. 4. 1 中学校各学年1学級ずつ学級増を認められる

2 校舎および各施設

本校の校舎は、昭和23年3月の元寄宿舎2棟改修移転、昭和24年4月の南棟1棟を改修した附属中学校の校舎から、高等学校の設置、学級数の増加などにより、通算12期の工事を行って現在に至っている。各施設は中・高で共用しており、昭和60年度現在の校舎各施設の広さを、次に挙げておく。（単位は㎡である。）

(1) 校舎

校 地	10,953.0
校 舎 延 面 積	5,972.54
運 動 場	3,699.7

(2) 校舎施設等

館	階	室名	面積(㎡)	館	階	室名	面積(㎡)
		第 1 応 接 室	27.8			中 学 校 教 官 室	94.5
		会 議 室	59.9			中 学 教 官 ロ ッ カ ー 室	22.8
		会 議 室	60.0			家 庭 科 教 室 (調 理)	96.5
		化 学 講 義 室	90.0			家 庭 科 教 室 (被 服)	68.0
		化 学 実 験 室	90.0			家 庭 科 研 究 室	16.9
		化 学 研 究 室	90.0			保 健 室	45.6
		第 2 応 接 室	18.0			第 2 保 健 室	22.8
		第 3 応 接 室	33.4			体 育 研 究 室	46.5
		生 物 講 義 室	90.0		1階	生 徒 会 室	22.8
		生 物 実 験 室	90.0			自 治 会 室	22.8
		生 物 研 究 室	90.0			印 刷 室	25.1
		数 学 科 研 究 室	33.4			1階女子ロッカー室	22.8
		第 4 応 接 室	18.0			宿 直 室	22.8
		物 理 講 義 室	90.0			校 務 員 室	22.8
		物 理 実 験 室	90.0			校 務 員 作 業 室	22.8
		物 理 研 究 室	90.0			第 1 物 品 格 納 庫	22.8
		技 術 第 1 教 室	72.3			第 2 物 品 格 納 庫	23.0
		技 術 第 2 教 室	76.1		2階	高 校 教 官 室	117.3
		技 術 研 究 室	36.5			視 聴 覚 室	96.5
		美 術 教 室	108.9			社 会 科 研 究 室	18.0
		美 術 研 究 室	43.0			英 語 科 研 究 室	21.5
		放 送 室	56.0		3階	書 道 研 究 室	22.8
		小 演 習 室	28.7			3階女子ロッカー室	94.5
		図 書 室	309.5			特 別 室	94.3
		図 書 整 理 室	61.9		4階	国 語 科 研 究 室	22.8
		教科教育研究センター	86.1			下 足 ロ ッ カ ー 室	82.5
		機 械 室	28.7			ク ラ ブ 室 (東・西)	291.3
		小 講 堂	275.6			体 育 ク ラ ブ 室・倉 庫	45.0
		地 学 講 堂	50.8			冷 暖 房 機 室	
		地 学 研 究 室	50.8			ポ ン プ 室	
		演 習 室	86.1			職 員 用 便 所	
		音 楽 教 室	116.5			生 徒 用 便 所	
		音 楽 研 究 室	22.8				

3 本校の教育課程

教育課程の改訂は戦後たびたび行われ、最近では、昭和52年の中学校の教育課程の改訂（昭和56年度から実施）、昭和53年の高等学校の教育課程の改訂（昭和57年度から学年進行をもって実施）がある。

本校では、教育課程改訂のつど、委員会を設け、本校の現状に合った教育課程を検討し、実施して来ている。次に、その実施状況等の概要を記しておく。

(1) 中学校

昭和52年7月23日に中学校学習指導要項の改訂があり、新しい教育課程の基準は昭和56年度から実施という告示があった。この改訂で大きく話題になったのは「ゆとりと充実」である。本校では、研究部を中心に、昭和52年から新教育課程の実施まで、「ゆとりと充実」について討論が継続して行われた。昭和56年度の教育課程は55年度と同じとし、56年度は、「本校に即した望ましい教育のあり方」を更に深く探り、中・高一貫の視点から新教育課程の編成をすることになった。そのため、昭和56年5月に、カリキュラム委員会が設置され、同年9月に「昭和57年度教育課程編成（案）」が出された。この案の編成は、次の基本方針のもとになされた。

- ① 本校（中・高一貫）の教育方針を尊重し、学校自由裁量（ゆとりと充実）の時間を行事前後に集中して学校生活を充実。
- ② 本校の責務として、実習・実験研究校という立場から、教育課程を編成・実施。

この案を基に、更に討議がなされ、昭和57年度から実施することになった。ところで、57年度は、年間の行事等に必要とした時間を調査し、58年度以降の教育課程への検討資料

とした。下の表はその調査結果で、()の時数は行事の事前・事後指導に当てた時数であり、計の欄は事前・事後指導を含む行事に要した時数の合計である。

また、57年度中の各教科の実授業時数の合計を出し、教育課程実施の実状を調べた。その結果、58年度以後も、上の教育課程を続けることになり、現在に至っている。

〔週間授業時間数(昭54年度～56年度)〕

教科	学年		
	1	2	3
国語	5	5	4
社会	4	4	5
数学	4	4.4	4
理科	4	4	4
音楽	2	2	1
美術	2	2	2
保健体育	3	3.6	4
技術家庭	3	2	2
外国語(英語)	4	4	5
道徳	1	1	1
特別活動	2	2	2
計	34	34	34

〔週間授業時数表(昭57年度～)〕

教科	学年		
	1	2	3
国語	5	5	4
社会	4	4	4
数学	4	5	4
理科	4	4	4
音楽	2	2	1
美術	2	2	2
保健体育	4	3	4
技術・家庭	2	2	3
英語	4	4	5
道徳	1	1	1
特活	2	2	2
計	34	34	34

昭57年度予定時間数 (56.9.14)			昭和57年度実施時間数														
			第1学年				第2学年				第3学年						
第1学年	第2学年	第3学年	教科	道徳	HR	その他	計	教科	道徳	HR	その他	計	教科	道徳	HR	その他	計
233	195	249	68	07	08	07	270	58	07	04	07	222	66	06	07	06	280

(2) 高等学校

新教育課程告示後、昭和55年7月教務部より、教育課程改善の提言があり、課程改善の必要性に伴い、その共通理解、本校の理念の再確認、生徒の実態把握を通して、新教育課程を作ることが確認された。次いで、教務、各科主任等を構成メンバーとしてカリキュラム委員会（教育課程委員会）が設けられ、その検討結果を順次教官会議に諮る形で進められた。

経過を略記すると次の通りである。

昭和55.12 必修クラブの取り扱いと、授業時数1週34時間以内とすることを確認。

昭和56.3.20 新教育課程表第1案提示。高3の2時間の取り扱い、中・高一貫の検討を続ける。

12.15新教育課程表決定。選択を社・理・英で2時間。高3の2時間については検討継続。

昭和57.5.2 高3の2時間の取り扱いについて提案あり。

「ゆとりの時間」とし、金曜日第5・6限を当て、時間割上は高3担任の持ち時間とする。

内容は自学自習、H・R、学年タイム、学級、個人面接、進路指導、補講、講演会等とする。

5.17 高3の2時間は「学年タイム」とし、内容は上記に従うものと決定。

昭和58.3.19 高3学年タイムは年間約20回。そのうち学年全体のH・Rを年間3回程度とし、修学旅行、進路指導に当てる。各月1回講演会（年間6回）他約10回を個人面接等に当てるものとする、と決定。

検討期間中、授業時間数を確保することによって教科にゆとりを持たせること、部活動を推奨すること等が確認された。

〔高等学校教育課程表（昭48年度～56年度）〕

教科		学年		I	II	III	計
国語	現代国語			3	2	2	7
	古典 I 乙			2	3		5
	古典 II					3	3
社会	倫理・社会					2	2
	政治・経済			2			2
	日本史					2(2)	3
	世界史				3	1(2)	3
	地理 B			2	1	(2)	3
数学	数学 I			6			6
	数学 II B				5		5
	数学 III					6	6
理科	物理 I			1	2		3
	化学 I			2	1		3
	生物 I			1	2		3
	地学 I			2	1		3
	物理 II					} 3(3)	} 3(3)
	化学 II						
	生物 II						
	地学 II						
保健体育	体育	男		3	4	4	11
		女		3	3	3	9
	保健			1	1		2
芸術	音楽 I	}	2				4
	美術 I						
	書道 I						
	音楽 II						
	美術 II	}	2				
	書道 II						
外国語	英語 B			5	5	6	16
家庭	家庭一般(女)				1	1	2
	ホームルーム			1	1	1	3
	クラブ活動			1	1	1	3
	計			34	34	31(5)	99(5)

(注) () は自由選択

[高等学校教育課程表 (昭57年度)]

(昭和55, 56年度入学生徒)

教科		学年	I	II	III	計
国語	現代国語		3	2	2	7
	古典 I 乙		2	3		5
	古典 II				3	3
社会	倫理・社会				2	2
	政治・経済		2			2
	日本史				2(2)	3
	世界史			3	(2)	3
	地理 B		2	1	(2)	3
数学	数学 I		6			6
	数学 II B			5		5
	数学 III				6	6
理科	物理 I		1	2		3
	化学 I		2	1		3
	生物 I		1	2		3
	地学 I		2	1		3
	物理 II				} 3(3)	} 3(3)
	化学 II					
	生物 II					
地学 II						
保健体育	体育	男	3	4	4	11
		女	3	3	3	9
	保健		1	1		2
芸術	音楽 I	}	2			4
	美術 I					
	書道 I					
	音楽 II	}	2			
	美術 II					
	書道 II					
外国語	英語 B		5	5	6	16
家庭	家庭一般(女)			1	1	2
	ホームルーム		1	1	1	3
	クラブ活動		1	1	1	3
	計		34	34	31(5)	99(5)

(注) () は自由選択

[昭和57年度入学生徒]

教科		学年	I	II	III	計
国語	国語 I		5			5
	国語 II			4		4
	現代文			1	2	3
	古典				3	3
社会	現代社会		2	2		4
	日本史				3	3
	世界史			1	3	4 (2)
	地理	2		1		3
	倫理				2	2
数学	数学 I		6			6
	代数・幾何			3		3
	基礎解析			3		3
	微分・積分				3	3
	確率・統計				2	2
理科	理科 I		6			6
	物理			} 6	} 2(2)	} 8(2)
	化学					
	生物					
	地学					
保健体育	体育	男	4	4	3	11
		女	3	3	3	9
	保健	1	1		2	
芸術	音楽 I	} 2				} 4
	美術 I					
	書道 I					
	音楽 II	} 2				
	美術 II					
	書道 II					
外国語	英語 I		5			5
	英語 II			3	2	5
	英語 II B			1	2	3 (2)
	英語 II C			1	2	3
家庭	家庭一般(女)		1	1		2
教科外	ホームルーム		1	1	1	3
	クラブ活動		1	1	1	3
	その他				2	2
計			35	35	35	105

(注) () は選択でいずれかの2単位を履修する。

[高等学校教育課程表 (昭58年度)]

(昭和56年度入学生徒)

教科		学年	I	II	III	計
国語	現代国語		3	2	2	7
	古典 I 乙		2	3		5
	古典 II				3	3
社会	倫理・社会				2	2
	政治・経済		2			2
	日本史				3(2)	3
	世界史			3	(2)	3
	地理 B		2	1	(2)	3
数学	数学 I		6			6
	数学 II B			5		5
	数学 III				6	6
理科	物理 I		1	2		3
	化学 I		2	1		3
	生物 I		1	2		3
	地学 I		2	1		3
	物理 III				3(3)	3(3)
	化学 II					
	生物 II					
	地学 II					
保健体育	体育	男	3	4	4	11
		女	3	3	3	9
	保健		1	1		2
芸術	音楽 I	}	2			4
	美術 I					
	書道 I					
	音楽 II	}	2			
	美術 II					
	書道 II					
外国語	英語 B		5	5	6	16
家庭	家庭一般(女)			1	1	2
	ホームルーム		1	1	1	3
	クラブ活動		1	1	1	3
	計		34	34	31(5)	99(5)

(注) () は自由選択

(昭和57, 58年度入学生徒)

教科		学年	I	II	III	計			
国 語	国 語 I		5			5			
	国 語 II			4		4			
	現 代 文			1	2	3			
	古 典				3	3			
社 会	現 代 社 会		2	2		4			
	日 本 史				3	3			
	世 界 史			1	3 (2)	4 (2)			
	地 理		2	1		3			
	倫 理				2	2			
数 学	数 学 I		6			6			
	代 数・幾 何			3		3			
	基 礎 解 析			3		3			
	微 分・積 分				3	3			
	確 率・統 計				2	2			
理 科	理 科 I		6			6			
	物 理			}	}	}			
	化 学						6	2(2)	8(2)
	生 物								
地 学									
保 健 体 育	体 育	男	4	4	3	11			
		女	3	3	3	9			
	保 健	1	1		2				
芸 術	音 楽 I	}	2			}			
	美 術 I								
	書 道 I								
	音 楽 II	}	2						
	美 術 II								
	書 道 II								
外 国 語	英 語 I		5			5			
	英 語 II			3	2	5			
	英 語 II B			1	2 (2)	3 (2)			
	英 語 II C			1	2	3			
家 庭	家庭一般(女)		1	1		2			
教 科 外	ホームルーム		1	1	1	3			
	クラブ活動		1	1	1	3			
	そ の 他				2	2			
計			35	35	35	105			

(注) () は選択でいずれかの2単位を履修する。

[高等学校教育課程表 (昭59年度~)]

教科		学年	I	II	III	計
国 語	国 語 I		5			5
	国 語 II			4		4
	現 代 文			1	2	3
	古 典				3	3
社 会	現 代 社 会		2	2		4
	日 本 史				3	3
	世 界 史			1	3 (2)	4 (2)
	地 理		2	1		3
	倫 理				2	2
数 学	数 学 I		6			6
	代 数・幾 何			3		3
	基 礎 解 析			3		3
	微 分・積 分				3	3
	確 率・統 計				2	2
理 科	理 科 I		6			6
	物 理			} 6	} 2(2)	} 8(2)
	化 学					
	生 物					
地 学						
保 健 体 育	体 育	男	4	4	3	11
		女	3	3	3	9
	保 健		1	1		2
芸 術	音 楽 I	} 2				} 4
	美 術 I					
	書 道 I					
	音 楽 II	} 2				
	美 術 II					
書 道 II						
外 国 語	英 語 I		5			5
	英 語 II			3	2	5
	英 語 II B			1	2 (2)	3 (2)
	英 語 II C			1	2	3
家 庭	家庭一般(女)		1	1		2
教 科 外	ホームルーム		1	1	1	3
	クラブ活動		1	1	1	3
	そ の 他				2	2
計			35	35	35	105

(注) () は選択でいずれかの2単位を履修する。

§ 4 本校の行事

本校の教育活動の概観を、校時及び年間行事等から記しておく。

(1) 校時

中学校、高等学校が同じ校舎・校庭で諸活動を行っており、1日の校時は、右の表のように、同じ時間帯になっている。土曜日は第4時までである。

本校では、特に朝礼は行っていないが、終礼では連絡事項の伝達をはじめ、その日1日の反省や学級内の諸問題について話し合われている。この終礼の運営は、担任の指導のもと、生徒の手で行われ、終礼の内容によっては、下校時刻まぎわまでになることがある。

なお、生徒の下校時刻について、中学校は、月曜日から金曜日の間は午後5時30分（冬期は午後5時）で、土曜日は通年午後5時である。また、高等学校は、午後6時（冬期は午後5時30分）を原則としており、運動系のクラブは日没を一応の目安とし、文化系クラブでも顧問の指導のもと、かなり遅くまで活動が出来る体制をとっている。

予 鈴	8 : 35
第1時	8 : 40～9 : 30
第2時	9 : 40～10 : 30
第3時	10 : 40～11 : 30
第4時	11 : 40～12 : 30
	(昼食・休憩)
予 鈴	13 : 15
第5時	13 : 20～14 : 10
第6時	14 : 20～15 : 10
終 礼	

(2) 年間行事

本校の年間の教育活動の概要は、年間行事一覧表にみる事が出来る。昭和60年度の学校行事一覧表をもとに、主な行事を次に記しておく。なお、各行事の詳細は、本研究集録P 49～P 213で述べてある。

学年 月	中 学 校			高 等 学 校		
	1	2	3	I	II	III
4	スポーツテスト			スポーツテスト		
5	身体計測・検診			身体計測・検診		
	合宿訓練	遠 足	修学旅行	合宿訓練	遠 足	修学旅行
6	三附中交歓会					
7	水泳初心者訓練			水泳初心者訓練		
		富士登山				
8	自由研究中間発表会					
9	自由研究発表会			附 高 祭		
10	体 育 大 会			体 育 大 会		
11	遠 足			遠 足		
	学 芸 会					
12	音 楽 会			音 楽 祭		
1				スキー講習会		
	耐寒訓練・マラソン大会			耐寒訓練・マラソン大会		
2	文化クラブ発表会・展示会			スケート講習会		
3				長距離徒歩(百軒)		

〔年間行事一覧表 (昭60年度)〕

月曜	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	月曜
日						1	日
月 1				1	運	2	月
火 2				2	会	3	火
水 3		1		3	健康相談	4	水
木 4		2	大掃除 評	4	中・期末テスト始 評	5	木
金 5		3	憲法記念日	5	高・期末テスト始	6	金
土		4		6	3	7	土
日 7		5	こどもの日	7	4	8	日
月 8	中・入学式	6	休 日	3	運	8	月
火 9	高・入学式	7	中3学診テスト 運・会	4	会	9	火
水 10	始業式 対面式	8	高1合宿訓練始	5		10	水
木 11	大掃除 評	9	中・身体計測・検診 評	6	大掃除 評	11	木
金 12	検尿	10	高・遠足	7		12	金
土 13	検尿	11	高1合宿訓練終	8		13	土
日 14		12		9		14	日
月 15	運	13	高3中間テスト始 PTA実行委 PTA分科委	10	(教育実習始) 運	15	月
火 16	会	14	中・中間テスト始 会	11	研	16	火
水 17	ツベルクリン接種	15	(近附連総会)	12		17	水
木 18	二次検尿 評	16	中・中間テスト終 高3中間テスト終 高・身体計測・検診	13	評	18	木
金 19	ツベルクリン測定 二次検尿	17	中・PTA総会	14	三附中交歓会	19	金
土 20	自治会立会済況会 PTA監査委 PTA実行委	18	高・PTA総会	15		20	土
日 21		19		16		21	日
月 22	自治会選挙 運	20	中2理科野外実習	17	運	22	月
火 23	研	21	運・会	18	会	23	火
水 24	X線検診・心電図 中・B.C.G.接種	22		19	中1日誌予注	24	水
木 25	高・スポーツテスト 評	23	中1合宿訓練始	20	小・中・高研究会	25	木
金 26	中・スポーツテスト	24	中2遠足 高1・2中間テスト始 高3修学旅行始	21		26	金
土 27	PTA総会 教育後援会総会	25	中1合宿訓練終	22	(教育実習終)	27	土
日 28		26		23		28	日
月 29	天皇誕生日	27	中3修学旅行発	24	運	29	月
火 30	運・会	28	高1・2中間テスト終	25	会	30	火
水		29		26	中3女子風疹予注	31	水
木		30		27	中・英語暗誦大会 評		木
金		31		28			金
土				29			土
日				30			日
月							月

月曜	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
日			1 中・学芸会				日
月			2 中・代休 高運				月
火	1 冬服着用 会		3 中運・会				火
水	2 高・体育大会		4 第2回インフル エンザ予防	1 元 日			水
木	3 評		5 評	2			木
金	4	1 開学記念日	6 高・期末テスト始	3			金
土	5	2	7 中・期末テスト始	4	1	1 高・期末テスト始	土
日	6 中・体育大会	3 文化の日	8	5 高・スキー発	2 中・入試	2	日
月	7 中・代休 高運	4 休 日	9 運	6	3 高運	3 中・期末テスト終 運	月
火	8 中運・会	5 運・会	10 会	7	4 高会	4 会	火
水	9	6 大掃除	11 中・期末テスト終 高・期末テスト終	8	5	5	水
木	10 体育の日 中・体育大会予備日	7 中・PTA総会	12 評	9	6	6 高・期末テスト終 評	木
金	11 生徒会立会演説会	8 高・PTA総会	13	10 高・スキー着	7	7 次年度生徒会 立会演説会	金
土	12 生徒会選挙	9	14	11 始業式 健康相談 大掃除 運・会	8	8 生徒会選挙	土
日	13	10	15	12	9	9	日
月	14 運	11 教育実習併修始 運・研・会	16 運	13 運	10 運	10 運	月
火	15 会	12	17 会	14 研	11 建国記念日	11 会	火
水	16	13 教育研究会	18	15 成人の日	12 会	12	水
木	17 大掃除 評	14 評	19 評	16 小・中・高研究部会 耐寒訓練始	13 評	13 評	木
金	18	15	20	17	14	14	金
土	19 教育実習終	16	21 中・音楽会	18	15 高・入試	15 中・卒業式	土
日	20	17	22	19	16	16	日
月	21 運	18 運	23 運	20 運	17 中運	17 運	月
火	22 研	19 会	24 終業式 運・会	21 耐寒訓練終 会	18 中会	18 中・学年委員会指名 高会	火
水	23	20 第1回インフル エンザ予防	25	22	19 中・文化クラブ発達会 中・文化クラブ展示会 高・スケート講習	19 高・学年委員会指名 中会	水
木	24 評	21 評	26 評	23 評	20 大掃除 評	20 終業式 運・会	木
金	25 高・中間テスト始 (教大協・高研)	22 教育実習併修終	27	24 中会	21	21 春分の日	金
土	26 中・中間テスト始 (教大協・高研)	23 勤労感謝の日	28	25	22	22	土
日	27	24	24	29	23	23	日
月	28 運	25 運	30	27 運	24 運	24 運	月
火	29 中・中間テスト終 高・中間テスト終	26 会	31	28 会	25 高・卒業式	25	火
水	30 PTA監査委 PTA実行委	27 高・スキー健康相談		29 マラソン大会	26 会	26	水
木	31 中・高・学年別遠足	28 評		30 大掃除 評	27 中・期末テスト始 評	27	木
金		29		31	28	28	金
土		30				29	土
日						30	日
月						31	月

5 本校の卒業生

本校の卒業生については、中学校の第1期生（124名）が昭和25年3月に、高等学校の第1期生（78名）が昭和34年2月に卒業している。それ以後、昭和60年度までの卒業生の総数は、中学校5,228名、高等学校4,462名である。

各年度毎の卒業生は、次の通りである。

卒業年度	中 学 校				高 等 学 校			
	期	男	女	計	期	男	女	計
昭24(25年卒)	1	73	51	124				
25(26年卒)	2	98	64	162				
26(27年卒)	3	104	67	171				
27(28年卒)	4	100	68	168				
28(29年卒)	5	95	57	152				
29(30年卒)	6	101	66	167				
30(31年卒)	7	109	47	156	(昭31.5.3附属高等学校開校)			
31(32年卒)	8	95	55	150				
32(33年卒)	9	100	59	159				
33(34年卒)	10	77	31	108	1	51	27	78
34(35年卒)	11	72	30	102	2	59	35	94
35(36年卒)	12	69	30	99	3	64	25	89
36(37年卒)	13	71	32	103	4	74	24	98
37(38年卒)	14	70	28	98	5	74	34	108
38(39年卒)	15	91	42	133	6	97	39	136
39(40年卒)	16	97	34	131	7	101	44	145
40(41年卒)	17	97	33	130	8	101	36	137
41(42年卒)	18	92	41	133	9	101	45	146
42(43年卒)	19	92	38	130	10	129	44	173
43(44年卒)	20	90	44	134	11	128	45	173
44(45年卒)	21	84	50	134	12	128	53	181
45(46年卒)	22	86	46	132	13	128	55	183
46(47年卒)	23	83	48	131	14	122	62	184
47(48年卒)	24	80	50	130	15	117	66	183
48(49年卒)	25	84	44	128	16	124	61	185
49(50年卒)	26	83	45	128	17	118	60	178
50(51年卒)	27	94	67	161	18	116	61	177
51(52年卒)	28	91	67	158	19	119	60	179
52(53年卒)	29	91	62	153	20	119	61	180
53(54年卒)	30	104	56	160	21	111	70	181

卒業年度	中 学 校				高 等 学 校			
	期	男	女	計	期	男	女	計
昭54(55年卒)	31	100	59	159	22	108	75	183
55(56年卒)	32	100	55	155	23	113	68	181
56(57年卒)	33	105	54	159	24	118	65	183
57(58年卒)	34	103	53	156	25	114	66	180
58(59年卒)	35	99	56	155	26	118	61	179
59(60年卒)	36	102	56	158	27	118	64	182
60(61年卒)	37	105	56	161	28	123	63	186

辻 退一
 櫻井 寛
 乾 東雄
 河野 文男
 田村 啓

「本校の教育理念とその実践」（「記念集録」）の序においてまず次の如く記されている。

昭和22年4月の附中創立は、かの戦後新教育制度の「6・3・3」制の制度化によるものである。従って我が校草創の教育は我が国戦後の歴史に沿うものである。

我が校の教育活動なかんづく教育研究は新教育即ち民主的教育の研究であり、我が国戦後教育の方針に副うものであることは当然のなりゆきといわねばならない。

そこで、順序として、我が国戦後教育の発足当初の沿革を概観して、それをどのように我が校が受け止めて来たか、教育活動として実際にどう具現して来たかを省みることから始めたいと思うのである。

昭和21年11月3日「日本国憲法」が公布され、この憲法に則って、翌22年3月31日に「教育基本法」が制定されたことは、周知のところである。

この教育基本法の性格について、当時の文部大臣高橋誠一郎氏は国会においてこの法案の提案理由として「この法案は教育の理念を宣言する意味で教育宣言である。あるいは教育憲章であるとも見られましょう。実質的には教育に関する根本法たる性格を持つものである。云々。」という趣旨のことを述べているのである。

因みに、我が校の創立以来の教育活動あるいは教育研究の実情はどうであったか。その教育研究の実際を教育研究のテーマを中心にして、次にその概要を記してみよう。

その概要は次の通りである。

昭和22年——（第一年次）「ホーム・ルームの揺籃期」

わずか3組の編成で、ほんとうの家庭的雰囲気の中に、師弟相依り相扶けて創業の第一歩を踏み出したのである。従って、一人一人が輝く存在として、学校生活を営み育成されて来たのである。

昭和23年——（第二年次）研究題目「ガイダンスと単元学習」

新教育運動の精神からして、新教育は即ちガイダンスにありと予見し、ガイダンスの研究に着手、その全領域について繰案し、これを直ちに実践したのである。特にホーム・ルーム、クラブ活動、生徒会、ケース・スタディ、キュムラティブ・レコード（ティスティング、行動記述や逸話記録の観察）等のガイダンス事務の研究実践へ力点を置いたのである。これらは、そのほとんどが「個人」の研究であり、その資料の整理であって、「個人」補導（指導）の歩みに外ならなかったのである。

昭和24年——（第三年次）研究題目「ガイダンスの組織と実践」

前年に引き続きガイダンスの実践に当たって、すべての教育活動が有機的に連関を保ち効果的な生徒補導（指導）が出来るように学校生活の組織化を図り、それらの一つ一つを研究すると共にガイダンスの技術を実際に測って研究したのである。即ち個人を知ることのテクニックや特別教育活動の指導の方法並びに問題のある生徒の補導（指導）の技術などについて研究したのである。同時にこの年初めて本格的にカリキュラムの構成について研究がなされたのである。

昭和25年——（第四年次）研究題目「ガイダンス計画の立案と展開」

題目の示すようにガイダンスの発展的な計画を立案しその実施により、進歩的な教育の前進を図った。この年ガイダンスカリキュラムとの関係を確認し、中心課程において、その両者がとけ込むよう工夫され、我が校の教育活動に一飛躍をもたらしたのである。

この中心課程において、特に個々の生徒の育成に心掛けるように工夫されたのである。

昭和26年——（第五年次）研究題目「中学校教育全体計画と実践」（付道徳教育）

我が校の教育活動全体の構造はここに確立し、学校の生活のすべてが合理的に進み、教育活動にむだが多くなく、整然とした、学校生活が営まれて効果を上げることが出来たのである。即ち学校生活のすべてを、日常課程、中心課程、基礎課程のもとに編成し、各連関を持って進展させるように研究し、計画を立てたのである。殊に中心課程ガイダンス、及びカリキュラムを実践するセンターとして独特の配慮がなされた。更にこの年には、人格完成の面において道徳教育を重視し、学校教育全般がこの観点に立って研究した。

昭和27年——（第六年次）研究題目「各教科の指導の実践」

前年度において一応学校の全体計画が出来、その後この計画に基づいて実施したのであるが、学力を一層向上させる必要から、各教科の指導の面に一工夫を凝らし、効果的な学習が出来ると共に、個人の諸能力の開発に努めたのである。

このような歩みを続けているうちに我が校としての教育目的が自ずから出来上って来たのである。即ち「再建すべき国家・民族の繁栄と人類の福祉増進に各自の個性と能力を通じて貢献する」というのであるが、巧みに我が校の教育活動の要点をついていると思われる。

昭和28年——（第七年次）研究題目「個人を育てる教育」

我が校創立以来6ヶ年の研究の歩みを概観すれば、直ちに明らかどころであるが、その間一貫して変わらずガイダンスの研究を続け、その真精神を実践することに努力を払って来ているのである。しかるに、ガイダンスの目指すところは「各個人をして自己の能力関心を理解させ、それらを出来る限り発展させ、それらを人生の目標に連結せしめて、最後には民主的社会機構における望ましい市民として、完全で成熟した自己指導を得さしめる」ことにあるから、徹底したガイダンスは、やはり個人の諸能力を開発し、自立できる円満な個人の完成を目指して、個人を育てることに帰結するのである。この故に我が校の教育の営みは絶えず個人を念頭に置き、その実態を把握し、個人に適應する教育補導（指導）をなさんとして、努力して来た苦闘の連続である。従って表題の「個人を育てる教育」の研究テーマは、我が校の教育の沿革に照らしても宿命的なものを持ち、必然性を具えているというべきである。そこでこのテーマのもとに、単に補導（指導）の立場だけでなく、教科課程の面からも広く検討し、出来る限り個人の全能力を伸ばして、それぞれが満足する教育を計画し、その実施を試みたのである。これは新教育を目指すものとして、当然の帰結であるが、なお我が校においては正に歴史的必然性に立つものといわねばならない。

昭和29年——（第八年次）研究題目「指導のための調査」

実際教育のうえでその第一ページは、いかにして生徒を知るかということであろう。教育の対象である生徒の実態を知ることが、教育活動の第一歩である。まして、我が校が「個人を育てる教育」を目指している観点からすれば、当然一人一人の実態を明らかにし、個々の興味関心を把握することから、日々の教育は始められるべきであろう。これを換言すると、いかにして個人の実態を把握し、個人差を明らかにすることが出来るかという問題は、「個人を育てる教育」を進展させるうえに必要欠くべからざる営みであるということが出来る。この意味において、「指導のための調査」は、そのもっとも

基礎的な資料を得るために実施される指導活動である。つまり、指導に際し、指導者が個々の生徒に適正な方向と円滑なる統御、合理的な補導（指導）を実施するために、個々の生徒の特質を理解し、その教育的経歴と発達の経過に関するすべての資料が整備せられたとき、初めて個人の特性は明らかとなり、具体的にして有効なる指導計画とその実践が可能となるのである。このような必要性から、組織的な教育調査の理論と調査方法の研究が進められた。

以上は、我が校創立以来8ケ年の研究の歩みを概観したものであるが、その間一貫してガイダンスの研究を続け、その帰結として到達した我が校の教育の在り方、つまり、理論と実際が「個人を育てる教育」というテーマを持って統轄されるに至ったことは、戦後の民主的教育の精神に正しく合致するものというべきであろう。このことは、我が校の教育活動を理解するうえに重要であるから、その煩をいとわず、その骨子だけを次に述べておくことにする。まず初めに述べた、教育に関する根本法たるかの教育基本法にうたわれている教育の目的にも「個人の尊厳を重んじ……」とか、あるいは「個人の価値を尊び……」などと個人を尊重することが明記してある。更に、さかのぼって憲法をみると「教育の使命は、この理想を実現し得る個人の完成充実を図ることである」と明示している。これによってみれば、我が国の教育の目指すところは、個人を尊び、真理と平和を希求する人間の育成にあることは明白なところである。即ち、民主国家の基礎をなすものは、個人の尊重であり、ひいては、平和な世界の招来である。特にそのうち基本をなすものは、個人の尊重である。従って、我が校が創立以来、新生日本の教育、新しい教育の方向を探求した帰結として、「個人を育てる教育」「一人一人を大切にす教育」に到達したことは、正しく新憲法の本質・教育基本法の指し示すところに合致したものであり、その正鵠を得たものということが出来るのである。我が校の教育研究の歩みが、新しい日本の教育の発展と共に歩んで進展し、しかも絶えず、その先導的役割を果たして来たという所以のものはここに存するのである。

§ 2 中・高一貫教育の概要

「個人を育てる教育」「一人一人を大切にす教育」という教育の基本理念を得るに至る経緯は§ 1で述べた通りである。ところで、昭和31年4月1日、大阪学芸大学に附属高等学校が創設された折、天王寺校舎では、既設の附属天王寺中学校の3ケ年と新設の高等学校の3ケ年を併せて中等教育の場とし、連続した6ケ年一貫教育を設立目的の大きな柱としたのである。

爾来30年間、今日に至るまで6ケ年一貫教育の方針は変わることなく、継続されて来たのであるが、その推移は決して一本調子のものではなく、いろいろと変遷を経て来た。その概略は次の通りである。

1 中・高一貫教育に関する沿革

昭和33年1月発行の中・高共同の研究集録第1集の中に「中・高一貫6ケ年教育について」というテーマで、次の内容の発表がある。以下その大要を記す。

(1) 新学制〔6・3・3〕の成立と経過

戦後まもなく、アメリカ教育使節団が来日した。戦後の我が国教育の改革は多くこの使節団の報告に負うところが大きであった。ただ新学制の〔6・3・3制〕が占領軍の軍政下でのアドバイスに基づくものであったかどうかは別として、この実施については、敗戦直後という異常な条件のもとで、わずか〔6・3年〕で敢行したために、多くの無理と、財政的裏付けの不十分な中での校舎建築に伴って、いろいろ悲惨な事件が起こったことも周知のところである。ともかく、〔6・3〕の新しい学制は日本に実施され、しかも短期間で実現したのである。このいわゆる〔6・3制〕は、戦前の複線型の教育体系を単線型の学校教育体系に変更すると共に、教育の機会均等、男女共学などを原則とした画期的なものであり、多くの長所を持つものである。しかしその反面、中等教育の〔3・3〕はあまりに短期間に異なる校種へ移行するため、教育上の諸々の連絡が悪く、また義務教育の完成を思うあまり、無理や、無駄が生ずるなど、これまたいろいろの欠点も少くないのである。

ところで、昭和26年日本が独立国として自立すると、果たせるかなこの教育の新制度についての論議がやかましくなったのである。そのうち、中央教育審議会の答申案によると「わが国の私学教育を振興させるためには、現行の学制の運営のままでは不十分であること、就中、中学の3年間と高校の3年間とを統合した6ヶ年一貫体制を整えることが急務という結論に達したこと」の報告が出されている。もっともこれについて激しい反対の立場に立つ意見もあるが、それとてもその運営について現在のままで十分であるというものでもない。

(2) 高校の創立と中等教育の一貫制の意義

我が附属学校は、昭和22年の新学制制定と同時に中学校が設立されたのであるが、昭和31年に至って待望の高等学校が創設されたのである。そのときの設立趣旨書によると「本校は学校教育法第四条の趣旨に則り、高等普通教育を施すのを目的とするとともに学芸大学の使命に鑑み、教育の実証的研究と教育実習の場としての特色を発揮し、6・3・3制度の一貫した学校教育を行うものである。」とある。そこで、一貫した学校教育ということについて考えるに当たって、まず学校教育が行われる基本的要素について考察することがそれを理解する上での近道と思われる。そこで便宜上その要素を抽出してみると、「教師」「生徒」「教育目的」「教育内容」「教育方法」「施設設備」の6要素に分けて考えることが出来る。特に学校教育の効果を上げるために考えられることは、これらの6つの要素をそれぞれ満足すべき状態に置くことである。即ち、教育目的については、我が国の教育に関する根本法たる教育基本法の目的を指向し、よく洗練された教育内容をもって、それらの目的と内容に最も適切な方法がとられ、熟達した専門の教師が、よりよく教育的に配慮された環境の下で、熱意と善意に満ちた教育活動がなされたならば、その教育効果は期して待つべきものがあるだろう。殊にここで強調されねばならぬことは、教育の効果を上げるためには、以上述べたことより (イ) 計画的で、(ロ) 合理性を持ち、(ハ) 継続して繰り返して行われる、ことが必要である。

2 中・高一貫教育の特色

(1) 教育目的の一貫性

次代の国民育成の教育の目的は一つでも、それに達するためには、学校独自の教育目的が設定されなくてはならない。そして教育活動が計画性を持つためには、まず第一にこの学校の教育目的が確立していることが大切である。更に教育が効果を上げるためには、一定の目的の下に、長く継続的に実施されることが必要である。殊に教育そのものである人間形成とか、その中核である円満なる人格の育成ということは、人間一生を通じて行われる大問題であるが、現行の学校教育制度のなかで、教育効果は6ヶ年一貫した継続教育の方が3ヶ年ずつのこまぎれよりも、教育効果という本質的な面からみて、はるかに有効であると思われる。

(2) 教育内容の組織化と合理性

教育活動をなす場合、なにを与えるかということは重要なことである。指導要領というのは、これらのことについてその基本線を示したのであるから、ここでも学校独自の教育内容が設定される必要がある。カリキュラムの編成、教育内容の組織化は、当面する生徒、教師の考え方、その他の条件によって決定されるものであるが、教育期間が短いということは、これらの実施に大変困難の度を深める。また、中学校の3ヶ年は一応義務教育の完成でもあり、高校進学への道を開くものであるから、カリキュラム編成の実際は中途半端なものになる恐れがある。そこで、中・高6ヶ年を通してカリキュラムが編成されるならば、継ぎ目のむだな時間の浪費と無理が省けて、生徒の発達に相応し、無理なく、また重複や空白の無い即ち合理的なカリキュラムの編成が出来るうえに、計画性のある教育活動がなされるというものである。

(3) 継続性による教育効果

いかなる合理的な方法をもってしても、それが線香花火のように一時的なものであるとその効果は期待出来ない。それが仮に単純な方法であっても永続的に行われたならば、ときに予想外な効果を上げることは、教育心理学の示すところである。例えば知育・体育において練習効果がいかに大きいかは実証済みであるが、継続した影響を与えることが学力・体力を増すうえにどんなに重要な要因であるかもこれまた周知のことである。

殊に、人格の陶冶において、日常の行為の習性化が一般にはその人の性格をつくり上げることを考えるとき、ここに一貫した教育目的の下で、合理的に計画された教育内容によって、6ヶ年間継続した教育活動が行われた場合、その効果の顕著なるものがあることは、今更多言を要しないところであろう。

(4) 個人を生かす教育

① 個人を知ること

教育の対象である生徒の実態を知らずして、教育することは、あたかも、診断しないで施薬する暴挙と異ならない。生徒を観察し、生徒の実態を調査し、診断してこそ、その実情に即した教育内容が組織され、教育の方法が考えられる。これが教育の常道というものである。

② 個人をみつめること

さて、中学校、高等学校で学ぶ生徒は、どんな生態を持っているであろうか。こ

の時期の生徒は、一言にしていえば、心身共に激変する時期にあるといえよう。非常な成長発育期に当たるため、絶えず不安動揺して、僅かな事象にも敏感に反応するときである。従って最も注意して指導されねばならないのである。この意味においても、生徒をよくみつめて、いかなることを欲求しているか、生徒の心情はどうか、十分観察して、その実情に即して適宜の処置が講ぜられることが肝要である。殊に生活補導（指導）に当たっては、教師の臨機の処置が適切であることが深く望まれるのである。

③ 個人差に応ずること

この時期の生徒はまた発達状況が個人によって著しく違う時期でもある。いつまでも子供のようなところがあるかと思えば、大人も及ばぬような成育の早いものもいるわけで、特に油断すると直ぐ学力の差が大きくなる時期でもある。体力において学力において、また人柄においてこの著しい相違は一体どうしたことであろう。即ち個人差の著しい原因を追求しておかねばならない。知能や性格、健康状況、興味や欲求、個人の素質、成長過程における環境や過去の経歴などはいち早く調査し日常の生活の状態をよく観察して十分な資料に基づいてその原因を探求し、個人差に応ずる適切な教育的処置がとられるとき個性は生かされ個人は円満な発育を遂げることが出来るのである。

④ 個人を愛護することと師弟愛

◎個人を知ること、◎個人をみつめること、◎個人差に応ずること、の教育は、そんなに簡単に出来得るものではない。長い年月と強い信条と根気と全員の協力なしでは到底望めないことがらである。即ち、個々の観察記録にしても、教育調査にしても、綿密な計画の下に根気強く継続して行われねばならないし、その判断も多くの資料を基にして、衆知を集めてなされることが望ましい。従ってこのようなことを実施するには、3ヶ年間の教育よりも6ヶ年間継続の教育の方が極めて好都合であることは直ちに首肯されることと思われる。中・高一貫体制のもと、6ヶ年継続した教育が進められるとき、より個人は的確に把握され、個人を知ることによって、ますます生徒への愛情は深まり、生徒の教師に対する信頼感を増し、「己を知るもの」として相互に愛情は交流して、教育の本質的な作用である全人格の相互作用により教育的効果は高められるのである。

我が校の創立以来追求してきた新しい教育の道は、民主的な教育であり、民主的教育の中核をなすものとして、「個人を育てる教育」に到達し得たのである。そして、中・高6ヶ年一貫教育を取り上げることによって、それが「一人一人を大切に教育」の実現にまことに打って付けの教育方法であること、並びにこれこそ教育の効果を高め、教育本来の目的を充足させるものであることが、ここにおいて意味付けられ理解されたことと思うのである。

要約すれば、我が校の教育の理念としては次の4項目にまとめることが出来る。

個人を育てる教育

我が校の創立以来、新しい教育の方向を探求したその帰結として、「個人を育てる教育」に到達したことは、前述の通りである。これは正に新憲法の本質や、教育基本法の目指すところと合致したものであり、また民主的教育の根本理念である個人の尊重を基

本とし、個性の伸長を図るところの一人一人を大切にす教育ということが出来よう。

中・高6ヶ年一貫教育

我が国の現行学校制度の中学校、高等学校の〔3・3〕の制度を中等教育期間の6ヶ年としておさえ、それを一貫した教育とする制度である。我が校は昭和31年の高校創立以来今日に至るまでこれを教育の大きな柱とし、この教育について実践し、いろいろの角度よりこれを考究して来たことは、上述の通りである。そして、この一貫教育が、教育の効果を高めるうえからも、また、一人一人を大切にす教育を生かす点からも、極めてよい方法であることを確信しているのである。

我が校の教育方針として実践すべき目標

- ① 正義を愛し、真理を探究する旺盛な究学心と透徹した判断力を持つこと。
- ② 強固な意志と頑健な心身をもって、自主的、積極的な実践力を持つこと。
- ③ 豊かな感情を持つこと。……………①②③は個人生活について
- ④ 民主的な家庭の生活に協力し、長上を敬愛すること。……家庭生活について
- ⑤ 社会の一員としての責任をわきまえ、遵法、奉仕、協調の精神を養うこと。……………社会生活について
- ⑥ 現在及び将来の生活設計をなす能力をみがくこと。……………職業生活、経済生活について

附属学校の特別使命

附属学校の任務としては、一般公立学校と同様に普通教育を施すと共に、特に、次の性格、使命を持つ。

- ① 教育について実験実証の場として研究学校の任務
- ② 教員養成機関として、そのうちの教育実地研究（教科教育の研究を含む）としての任務
- ③ 他校との教育研究の連携と共に現職教育の場としての任務
- ④ その他すべての教育問題について先導的試行をなし得る学校としての任務。

3 本校の教育方針（伝統的精神）

以上の実践と教育活動から必然的に生まれて来た我が校の伝統的精神、または校風というべきものについて次に述べる。

(1) 一人一人を大切に、個人の特性を伸ばす教育

教育における基本的要素は、教師と生徒である。この両者の触れ合いによって教育の営みは始められる。生徒の内なるもの、伸びゆく力を開発し、それを誘接指導しながら助長してゆくことが教育本来の姿である。つまり、教師と生徒の全人格的接触と相互の交流によって自から醸成されるものである。ここに重要なことは、この人間育成の具体像は、個々の人間を育成することで、他にかけがえない個々の人間の一人一人を大切にす、その持つ能力、特質を把握し、みがき育てていくことである。その具体的な実践の場としては、教室において、運動場で、あるいは校外で、あらゆる機会をとらえて個人を育てる試みがなされているのである。例えば、一斉教育の中においても、個別指導について工夫し、問題の取り上げ方、個人研究の奨励と援助、学友相互の切磋琢磨、助け合いなどによる長短の補完など、そして、ホーム・ルーム、クラブ活動、合宿、臨海、耐寒訓練、遠足等の教育活動の中で師弟同行を通して、個

人の持つ特性を生かし、個性豊かな人間を育成していく努力と工夫を重ねている。これは我が校の伝統的教育の一つである。

(2) 科学的で継続性を持つ教育

科学的とはこの場合、合理性を持つと同時にそれが緻密な計画性に裏付けられたものをいうのである。そしてそれを継続的に行うのであるが、それはとりもなおさず本校6ヶ年一貫教育の本質的なものを指しているのである。

これを箇条書にすると次のようになる。

- ① 中・高6ヶ年のカリキュラムの系統性
- ② 生活指導の目標の体系化と計画性
- ③ 中・高教官の協力体制の効用
- ④ 施設設備の合理的共同利用
- ⑤ 教材教具等の共同利用と研究

これらのことは、更に具体的には、次のようなことがらになるであろう。

- ① 個人を知り、適切な指導のための調査資料の共同活用
- ② 発達段階に即応した指導計画の立案
- ③ 中・高教育の専門的研究の交換並びに授業
- ④ 学校行事（遠足等）の6年間の計画配列
- ⑤ 研究室の共同経営による研究の交流
- ⑥ 年齢、発達の相違する生徒の協力と相互裨益

(3) 円満な人格を目指す全人教育

人間存在は、精神と身体とが統一された全一的行動体とてとらえることが出来る。この全一的行動体としての人間の意識は、伝統的心理学によれば、心情、意志、知性の三局面に分析出来る。この3つの局面を人間存在の三様態に対応させ、教育の面からとらえると、いわゆる、知育、徳育、体育として区分することが出来よう。この知育、徳育、体育の偏りのない三方面の教育のバランスのとれた教育がなされてこそ、心身共に調和のとれた円満な人間の育成が出来るものと信ずる。最近はとかく、教育が進学熱のため、ゆがめられ、入試準備のためにする教育等が横行する傾向にあり、本来あるべき教育がなされない憾みがある。我が校においては、草創の当初より教育基本法の目的に副って教育方針を立て、前述の実践すべき目標に従って専ら、知・徳・体の円満な発達を願って、いわゆる全人教育を目指してこれを研究実践して来たのである。知育の徹底化には、基礎学力を大切に、教養や学問は生涯のこととして、求知心を旺盛にし、研究態度の養成に努めて来たのである。交友関係を特に大切に、努めて情緒を豊かにするための教科を尊重し、クラブ活動や読書指導等を通じてその道徳的情操の涵養を心掛けて来たのである。また一方身体を鍛練することにも格段の努力を払って、全教官一致して各種体育的行事にも参画して来た。臨海訓練、耐寒訓練、マラソン大会、体育大会、クラブ活動、校外指導等、すべて師弟同行であり、率先垂範の教育活動を展開しているのである。まことに健全な心身の育成、円満な人格の涵養を目指す全人教育にこそ我が校の特色であるといえるものである。

(4) 自主性と創造性を育てる教育

教育とは、人間が人間として育成し、完成されていく、それを助成したり、協力し

てゆく営みであっても、また、人間の文化遺産を一つの世代から次の世代へと伝えていく手段であっても、その成長の姿は、一個の人間として独立した人格の所有者であり、自律の精神もしくは自主性を具えていることであろう。自主的とは、これを端的に言えば、自己の生存生活に関して、自分の考えを持ち、自分で処断し得ることで、生きて行くうえに、自分で計画し、それを実行する力を持っていることである。それが独立した個人の姿でもある。従って独立した個人として、集団や社会の中における自己の立場を自覚し、社会の連帯性のうえにおいて、進んで社会に参加貢献出来る人間でなくてはならない。

すべての人間は、その持つ資質も多種多様で各々の特色を持つものである。これを開発し、その伸びゆく力を助長し、個性豊かな人間を育成することが個人を育てる教育の本質であるが、このユニークな個々の力を発揮し、社会に参加して何かを生み出すことは、それだけ社会を豊かなものにし、文化文明の姿もバラエティーに富むのである。社会に参加する個人が個性を持ち、自主性を持つことは、この故に尊いことであり、個人の尊厳性を一層増すことにもなるのである。我が校の、一人一人を大切に、その特性を伸ばす教育もまたこの自主性と創造性を涵養し、やがてその力がそれぞれのところにおいて発揮されることを期待してのことである。現代社会において多くの情報を選択し処理し、自分の考えを持つことは、日常生活の中においても、立派に生きてゆくために大切なことである。また自分自身の力で、自己の心身の発達や伸長、深化させることは、学校教育の場で読書指導や、思考の訓練、そして友人と共同で数々の学校行事や生活の場で涵養されるものである。例えば、個人研究のまとめや発表に当たり、立案、調査、資料の収集整理等で個々の力は大きに養われる。そしてまたそこに創意工夫の場も生まれるのである。このような機会や場を我が校においては努めて提供し、師弟一体となって研究努力をしているのである。これらのことが意識的に教育計画の中に組み入れられていることが我が校の特色の一つである。

(5) 理想を追求する意欲的な人間を育てる教育

人類のあくなき進歩は、人間が考える力を持っているからである。人間の文化の創造も文明社会の形成も、すべて人間の思考力の所産である。しかも人間はたゆみなき向上意欲を持っているのである。即ち人間には夢があり理想があって、それをどこまでも追求してやまぬ活力を持っているのである。それを実現するために、技術も生まれ、道具も出来、学問、芸術の世界が開けていくのである。人間の原初的な発想や夢は、日常生活の衣食住の姿を変え、エネルギーの革命から、今日では月の世界にも到達するような高度の文明社会をもたらしたのである。また人間は言葉や文字の発明によって文化を積み重ねて来たが、これが今日人類の文化遺産として高度な文明社会をつくる原動力になっているのである。教育の目標が、文化遺産の継承と創造の力を養うことにあるとすれば、どこまでも理想や夢を追求する意欲を持つ人間の形成こそ教育の本質に叶うものということが出来よう。若者の特質は、情熱を持つことである。この情熱が大きな夢となり、またその純粹性と結び付きにおいて理想と化し、健康である限り、そのバイタリティは「何かなすあらん」とする意欲に燃えるのである。教育はこの理想を生み、燃える意欲に火を付けることではなからうか。次代を担う国民として、たくましく生き、充実した生活を送るためには、旺盛な理想追求とすべて

このことに積極的に取り組む意欲的な人間であってこそ初めて可能なのであって、そのような人間にこそ将来を託し得る。そのことが人間教育の根幹であると思われるのである。我が校のカリキュラムの実施やガイダンス計画の行動方針もすべての教育計画の根底に流れているのはこの理想追求と積極的に取り組む意欲を持つ人間を育てることにありとて過言ではなからう。

(6) 質実剛健と徹底した訓練をほどこす教育

文明文化の進歩に比例して人間は脆弱になっていくということは、一面それが必然性を持つが故に、余程の反省をしなければ、人類は滅亡の方向に拍車を加える結果となるであろう。教育の営みを考えると「人間の持つ多種多様の天賦の才能を、また、伸びんとする潜在力を刺激し、助長しこれを訓練することだ」とも言える。そこで大切なことは、伸びる力を正しい方向に伸ばすこと、しかもこれを繰り返して訓練して身に付けておくことである。例えば、知育においては、反復練習を、体育においては、根気強く繰り返し練習すると共に、ときに鍛練をすることを、徳育においては、日々の行為の繰り返しによって、これを習慣化し、品性として身に付け徳性を涵養することが必要である。とかく現代の文明社会においては、虚飾に流れ情弱に陥る傾向にあることは上述の通りである。この観点に立って、我が校は早くから何事によらず虚飾を排し、シンプルな生活態度を旨とし、百の理論よりも一つの実行を重んで、実践躬行することを奨励して来たのである。この見地から、各種の体育的行事において、歩くことの勧め、山に海にその鍛練の場を求め、臨海訓練、スキー訓練、各種スポーツ等が奨励・実施され、また日常の学習においては、それぞれの能力を引き出しそれを伸長する指導、ときにハードなトレーニングによってその可能性を試すことや、その能力・学力を高めることが意図的になされている。つまり心身を徹底して鍛えることが重視されているのである。その集積であろうか、我が校風としては、質実剛健の気風を尊び、徹底した訓練をほどこしても当然のこととしてこれを受け入れる健全な風が醸成され、しかも師弟同行の気風も定着しているのである。

(7) 自由の気風を持つ明るく伸び伸びとした教育

一般に先進国とも、文明社会ともいわれるその指標は、その国や社会にどれだけの自由があるかということではあるまいか。元来自由とは、何らかの束縛から解放されることだともいえよう。例えば、中世の社会の身分や階級からの解放もあれば、独裁政治や恐怖政治からの解放もある。視点を換えれば、貧窮からの解放、無知からの解放、言論統制からの解放なども挙げることが出来よう。しかしながらこれらのものに勝るとも劣らぬものは、内なる心の束縛からの自由であろう。これを宗教上からみれば、悟りを開くこととなり、自由自在の境地に達することが可能となるのである。しかし少なくとも哲学的な意味での自由は、時間と空間のモーメントにおいて認識され得るのである。さて、これらのことについての論議はしばらくおいて、前述の社会的な領域における自由について考えるとき、重要なことは、自由には、必ず規律を伴うことによって初めて現実のものとなることである。各人の自由は、その社会のルールを守ることによって保証されるのである。このことは、日々の家庭生活や学校生活などの実際の生活の中から理解され把持される性質のものである。幸いに我が校は6ヶ年一貫の中等教育という立場から、すべてにおいて、余裕を持つことが出来、従っ

て心にも余裕が生まれ、伸び伸びとした雰囲気のもとで学校生活が送れるのである。卒業生が我が校の思い出として語る言葉の中に出て来ることは、「我が校は、明るく伸び伸びとした雰囲気と自由を尊重する学校であった」ということである。つまり、自主性を重んじ、各人のやらんとなることが、いかに実施し易いところであったかを語るのである。これは我が校が創設の当初より生徒を中心とする教育を念願とし、その自発性を尊重したことによるものである。即ち、度々述べて来たところの一人一人を大切にす教育、個人を育てる教育をもとにした6ヶ年一貫教育が、斯く然らしめたものということが出来るであろう。

おわりに

本校の中・高一貫教育の理念を実際に即して述べると以上の如くである。その要は既に創立30年(中)・20年(高)の時期において確立されているものであるが、言うまでもなく中・高6ヶ年一貫教育の第一歩は昭和31年の高校開設にあり、その礎はそれに遡る中学校6年間の教育実践にある。草創期にまで深く思いを致す所以である。

この理念は、創立40年(中)・30年(高)を迎えた今日においては言うに及ばず、本校ある限りにおいて教育実践の確固たる指針たり得ることに疑念の余地はない。ここで改めて諸先達に深く敬意を表すると共に、この理念に違ふことなく勇往邁進することを銘記するものである。

辻 退一
櫻井 寛
乾 東雄
河野 文男
田村 啓

Ⅲ 本校の使命と研究活動

はじめに

本校は附属学校としての使命を帯びている。同時に、それに伴う研究機関を有している。ここでは、その使命と研究の概要を述べる。使命については既に前記念集録(『研究集録』第18集)に明記されており、特に付け加えるべきものはない。研究については主として前「記念集録」に続く10年間(昭和50年度～60年度)のものをまとめることにするが、その重みによっては10年以前のものも掲載する。以下第18集を基にまとめることとする。

§1 本校の使命

本校は、大阪教育大学教育学部に附属する中学校並びに高等学校で、教育基本法及び学校教育法に基づいて、一般普通教育並びに高等普通教育を行うと共に、次の各項を特別の任務としている。

1. 大学と一体となって、教育の理論及び現場の教育の実際に関する科学研究を行う。(研究学校)
2. 教育研究の結果一応到達した最善の理論を実験・実施して、広く教育界の参与に供する。(実証学校)
3. 大学学生の教育実習を行う。(実習学校)
4. 現職教員の研修の一端を担う。(現職教育学校)

現在の教員養成大学の附属学校の使命は、戦前の師範学校の附属学校の使命と簡単に比較することは出来ないが、戦後は、教員養成が各大学で行われ、教育職員免許法に規定するところの科目及び単位を履修しておれば、免許状取得の資格が与えられるようになった。また、一般の公私立学校の教育実践並びに学校研究のための組織が確立し、研究が年毎に盛んになると共に、各学校の施設・設備もしだいに充実して来た。

このようなことから、最近、地域や学校によっては、附属学校の使命が微妙に変化しつつあるところもあるが、本校においては、創立以来、上記の使命のもとに、全教官がその達成に努力して来た。

改めて述べるまでも無いが、大学の行う附属学校の教育実践を対象とする実験的・実証的研究に協力すると共に、附属学校においても、大学と協議のうえ、研究課題を設定し、意欲的に研究に取り組むことが使命とされている。そして、この研究成果は、研究会の開催、『研究集録』の刊行等を通じて、一般に公開することになっている。

また、教育関係の情報・資料を収集・整理・保存することによって、教育センターとしての役割を果たし、現職教育の機会と場を提供することを目指している。

教員養成大学の附属学校である以上、通常の学校教育活動のほか、教育実習校としての使命を有していることは言うまでもない。

(参考) 国立学校設置法施行規則「附属学校は、その附属学校が附属する国立大学又は学部における児童や生徒又は幼児の教育又は保育に関する研究に協力し、及び当該国立大学又は学部の計画に従い学生の教育実習の実施に当たるものとする。」

§ 2 本校の研究活動

国立大学附属学校は学校教育法に規定された任務のほかに、研究・実証学校、教育実習校、現職教育の一端を担っている。

従って本校における研究活動も上記の使命に基づいて進められ、研究活動の中心は毎年行う教育研究会である。研究部が推進役となり各教科の研究テーマに基づいて研究の成果を発表している。国語・社会・数学・理科・英語は2年に1回、その他の教科は4年に1回、研究発表をすることが原則となっている。また教科外については研究部が中心となって研究テーマを決め、部会を設けて研究を進めている。紙上発表の場としては毎年各教育機関に配布している『研究集録』があり、個人研究・共同研究を掲載している。このほか全国国立大学附属連盟高等学校部会研究大会、近畿国立大学附属学校連盟研究会に参加し、それぞれの分野において発表を行っている。

創立30周年、40周年を迎えるに当たり、中・高一貫教育の足跡をより明確にするため、今日までの研究活動の概観を記録しておきたい。

1 教育研究会

本校では、昭和23年12月12日開催の教育研究会を第1回とし、それ以後、校舎建築のために開けなかった昭和24年・29年・31年・32年・33年・34年を除いて、毎年必ず1回教育研究会を開いて来た。これは全国附属学校、大阪府下公私立中・高等学校を対象とするもので、各教科や領域の研究発表・提案・研究協議会・講演会等を持っている。

この教育研究会のテーマを見ると、戦後教育界で「ガイダンス」なる言葉が流行語のようになり、これが重視されたときには、「ガイダンスと単元学習」(昭和22年)をその研究会のテーマとし、生徒の個性の伸長が強く叫ばれたときには、「個人を育てる活動」(昭和28年)をテーマにし、[6・3・3制]についての論議が盛んに起こったときには「中・高6ヶ年一貫教育」(昭和35年)をそのテーマにしている。

各教科の発表内容にしても、教科書教材の限界について叫ばれ、体力と体格や、基礎学力の充実について論議されたときには、「表現教材開発の意義と可能性」(昭和42年美術科)や「体力の養成と学習指導」(昭和43年保健体育科)、「中学校段階における読解指導」(昭和44年英語科)について発表して来た。指導要領の改定が打ち出され、学習内容の精選が大きな問題になって来たときには、「中学校の新しい指導内容について」(昭和45年数学科)、「新指導要領における書くこと」(昭和46年国語科)、「国新指導要領の問題点」(昭和46年社会科)を取り上げて発表して来た。

このように、昭和50年までに23回にわたって行われた教育研究会では、あるときには、そのときどきの教育界の問題点を先取りし、またあるときには、現場の疑問について共に研究し、更にはまた、今後のあるべき姿を求めて来た。本校では、「理学的論理の組

み立てについて。特に中・高化学分野からみて」(昭和50年理科)に見られるように、中・高6ヶ年一貫教育を基本にすえて、各領域・各教科・各分野の研究を進めて来たことも特筆すべきことと言えるであろう。

今日で言うところのこの「教育研究会」は昭和51年以後も毎年開催され、いわば本校研究活動の中核ともなっている。特に各教科とも中・高の研究授業を公開し、生徒の実情に即した発表を続けていることと、本大学の教官を指導助言講師、講演講師として迎え、大所高所からの研究協議が定着して来たと言える。

本校創立以来、昭和30年度までは全体のテーマを決め、全教官がその研究に当たって来た。昭和31年4月1日をもって、大阪学芸大学に附属高等学校が設置され、中・高一貫した教育体制のもとに研究が続けられることになった。日本における中等教育はいかにあるべきかという大きな視点をふまえつつ、各教科が持つ研究テーマのもとに昭和32年以降研究が継続され、その成果を広く世に問うべく研究発表が行われ今日に至る。

今日では統一テーマは設けていないが、各教科の当面する研究主題に即して中・高一貫の教科指導を指向しているのが現状である。

教育研究会の占める位置の大きさに鑑み、前「記念集録」分も含めて今日までのものを一挙掲載する。(以下敬称略)

昭和23年度(第1回)〔ガイダンスと単元学習〕

国語・社会・数学・理科

講演：「ガイダンス」について(C.I.E.)アンダーソン

「新教育とガイダンスの技術」(附属中学校)後藤与一

昭和24年度(第2回)〔ガイダンス組織と実践〕

国語・社会・数学・理科・保健体育・職業・英語

発表：1. わが校の教育

2. (イ)わが校のカリキュラム (ロ)わが校のコア・カリキュラム

3. 特別教育活動 4. 測定と行動観察

5. 生活指導要録について 6. ケース・スタディー

昭和25年度(第3回)〔ガイダンス計画の立案と展開〕

国語・社会・数学・理科・職業家庭・保健体育・図画工作・英語

発表：1. 本校における教育全体計画とガイダンスとの関係

2. 本校における中心学習 3. 生徒指導要録について

4. 職業指導の望ましいありかた

5. 本校における生徒会活動について

講演：「近代学校の教育計画」

—ガイダンス・プログラムの編成法— 倉沢 剛

昭和26年度(第4回)〔中学校教育全体計画とその実践〕

国語・社会・数学・理科・音楽・図画工作・保健体育・職業家庭・英語

発表：1. 本校の教育課程について 2. 本校の生徒補導について

3. 本校の放送教育について 4. グループ・ガイダンスの方法

パネル・ディスカッション：教育課程と道德教育

講演：「中学校における道德教育」(文部省)太田周夫

昭和27年度（第5回）〔各教科の指導実践〕

国語・社会・数学・理科・音楽・図画工作・保健体育・職業家庭・英語

- 発表：1. わが校の教育運営 2. 聾学校における言語指導
3. わが校のカリキュラム地図
4. 学級経営の一側面 ホームルーム・タイムの指導

パネル・ディスカッション：「独立後の教育の在り方」

講演：「憲法の発展性」（国立国会図書館）金森徳次郎

昭和28年度（第6回）〔個人を育てる教育〕

国語・社会・数学・理科・保健体育・図画工作・職業家庭・英語

- 発表：1. 本校の教育全体計画と個人を育てる教育
2. 個人差の合理的評価と生徒補導
3. 指導のための教育調査 4. 学校放送の諸問題について

講演：「民主主義の教育」（日本育英会）前田多門

昭和29年度 校舎建築のため開催出来ず。

昭和30年度（第7回）〔中・高6ヶ年一貫教育〕

国語・社会・数学・理科・音楽・図画工作・保健体育・職業家庭・英語

- 発表：1. 本校教育全体計画と個人を育てる教育
2. 指導のための調査の意義と実際
3. 家庭学習の状態調査とその指導
4. ホーム・ルームにおける個人指導の一例
5. 読書指導の基礎

講演：「生活指導と教育評価について」（大阪学芸大学）後藤与一

「観る眼から育てる手へ」（大阪市教育研究所）白井 勇

昭和31年度～昭和34年度 校舎建築のため開催出来ず。

昭和35年度（第8回）〔中・高6ヶ年一貫教育〕

国語・社会・数学・理科・音楽・図画工作・保健体育・職業家庭・英語

- 発表：1. 中・高一貫教育の現状
2. 本校研究の歩みと生活指導

講演：「中・高教育の問題点」（大阪学芸大学）芝野庄太郎

「特別講演」（文部大臣）松田竹千代

昭和36年度（第9回）

社会科：歴史学習を中心として

理科：実験指導を中心として

保健体育科：柔道の学習内容をどのように指導するか

昭和37年度（第10回）

国語科：読解指導について

社会科：政経社学習の内容検討

数学科：中学校における論証の限界・二次関数・ベクトル指導についての実験
新指導要領と数学教育の現代化

英語科：授業の能率的なすすめ方

昭和38年度（第11回）

社会科：倫理・社会分野について

音楽科：創作学習を中心とした中学校音楽教育の諸問題

美術科：構想画指導のあり方

昭和39年度（第12回）

国語科：説明的な文章の読解 漢文構造の問題点

社会科：地誌学習の問題点

数学科：図形の論証指導について

理 科：物質とエネルギーの交代

英語科：中3・高1の関連一語法を中心として一

昭和40年度（第13回）

社会科：基本的事項の取扱いについて

理 科：発達段階に応ずる理科の学習指導

美術科：単色木版画の効果的な指導

昭和41年度（第14回）

国語科：中学校高学年の古典入門について

保健体育科：陸上競技の指導について

英語科：表現指導上の問題点

昭和42年度（第15回）

社会科：中学校における政経社学習の諸問題

理 科：物質の化学構造の指導について

美術科：表現教材開発の意義と可能性について

昭和43年度（第16回）

国語科：長文の読解をめぐって

社会科：政経社学習の諸問題

数学科：数概念の指導について

保健体育科：体力養成と学習指導

技術科：交流理論の取上げ方について

英語科：読解指導

昭和44年度（第17回）

社会科：学習と生徒の社会的問題意識との結合

理 科：探究の過程を重視するには

美術科：中・高における表現教材（描画、デザイン・色彩）の系譜

昭和45年度（第18回）

数学科：高等学校の新指導要領の問題点

英語科：読解指導について

保健体育科：体力と学習指導

昭和46年度（第19回）

国語科：新指導要領における書くこと（書写）の指導

社会科：高等学校新指導要領の問題点

理 科：生態系の研究指導
音楽科：音楽科教育における創造性への試み

昭和47年度（第20回）

数学科：高校新指導要領の問題点・その2
—新数学Ⅰの内容の取扱いについて—
英語科：Writing の指導について
技術・家庭科：（男子向き）木材加工の取り扱い方
（女子向き）技術・家庭科指導における問題点

昭和48年度（第21回）

国語科：古典指導における問題点
理 科：力学の指導について—中・高の関連を中心に—
保健体育科：効果的な学習指導

昭和49年度（第22回）

社会科：中・高社会科の再検討—第1回 地理的分野—
数学科：教材の精選—数Ⅰの内容について—
英語科：話し方の指導（中学校）
教室におけるリーダーの扱い方について（高等学校）
美術科：中学生の美意識と造形性について

昭和50年度（第23回）

国語科：小説教材の指導
理 科：理学的論理のくみ立てについて（中・高化学分野から見て）
音楽科：基礎領域における一考察とその発展性（歌唱）

昭和51年度（第24回）

社会科：中・高社会科の再検討—第2回 歴史的分野—
数学科：生徒の認識をふまえた数学的教育
英語科：Speaking 指導（中学校） 英作文の指導（高等学校）
保健体育科：効果的な学習指導
技術・家庭科：（男子向き）技術学習の個別化—ラジオ教材の定着をめざして—
（女子向き）被服学習の考察

昭和52年度（第25回）

国語科：中学・高校における読書指導
社会科：中・高社会科の再検討—第3回 歴史的分野—
理 科：都市における地域地質教材の取り扱い
美術科：新教材の開発

昭和53年度（第26回）

数学科：中・高一貫をめざして
—中・高生徒の数学に関する意識について—
英語科：読むことの指導

昭和54年度（第27回）

- 国語科：表現指導（作文）
- 社会科：中・高社会科の再検討－第4回 公民・政経分野－
- 保健体育科：意欲的に取り組ませるための学習過程の工夫

昭和55年度（第28回）

- 数学科：中・高6ヶ年一貫をめざして
－生徒の意識調査と教材編成の試案－
- 英語科：表現力の育成
- 技術・家庭科：男女共学における教材研究

昭和56年度（第29回）

- 国語科：表現領域の研究
- 社会科：中・高社会科の再検討－地理的分野－
- 理科：物理実験の指導について－中・高の関連を中心に－
- 音楽科：非欧米音楽を授業にとり入れ初めて
- 美術科：表現力を身に付けさせる基本論理とは何か

昭和58年度（第31回）

- 国語科：古典入門期の指導
- 社会科：地域教材の活用－中・高歴史（日本史）学習－
- 理科：つまずきを少なくする中・高化学分野指導の試み

昭和57年度（第30回）

- 数学科：教材の精選－授業の実際－
- 英語科：生徒の積極的参加を求めて
- 保健体育：意欲的に取り組ませるための学習過程の工夫

昭和59年度（第32回）

- 数学科：認識を高める授業
- 英語科：「読み」の指導

昭和60年度（第33回）

- 国語科：古典入門期の指導
- 社会科：中・高社会科の再検討
- 理科：雲粒と氷晶成長のその場観察及び気象教材の開発
- 美術科：表現力獲得の構想

2 「研究紀要」・「研究集録」

本校では、昭和23年から30年まで（その間29年を除く）「ガイダンス並に単元学習」「指導のための調査」に見られるように、各教科の枠を越えて、一つの大テーマのもとに全教官が力を結集して、「研究紀要」を7回に及んで出している。

昭和32年からは、「研究紀要」を改め、中・高合同で「研究集録」を出し、現在に至っている。教科に関するもの、図書館教育や生徒指導に関するものなど、いろいろな分野・角度の研究個人研究や共同研究の成果として集められている。そして、この「研究集録」は、発行するたびに、全国の附属学校・府下公立中・高等学校に配布するのを原則としている。

3 全国国立大学附属学校連盟研究会

全国国立大学附属学校連盟が昭和24年に創設されて以来、その校園長研修会・教頭研修会には、ほとんど毎回出席し、研究発表をしたり、提案をしたり、地区のまとめをしたりして、大いに貢献してきた。

そのおもなものだけをここに紹介してみると、毎年、近畿地区にある各附属学校の意見を基に、附属学校のあり方について研究し、昭和40年度以降は、附属学校にとって非常に大切な附属学校設置基準の取りまとめに力を尽くして来た。昭和45年には、近畿附属学校連盟の十年史を編集して、近畿地区附属学校連盟の基礎を確固たるものにし、昭和48年には、高等学校の教育課程の改定に関して具申もして来た。また、昭和45年の教頭研修会における「教科教育学樹立のために」のテーマでの発表や昭和49年の校園長会における「本校における中・高6ヶ年一貫教育について」と題する発表は、附属学校の今後のあり方を示すものとして注目を集めた。

昭和29年には高等学校部会が出来ている。この部会は研究協議に重点が置かれ附属高等学校の東京地区校と地方校とが輪番制で開催校となっているものだが、本校は、教科の部会だけでなく、生活指導部会あるいは特別部会で毎年研究発表をして今日に至っている。教科以外の発表について少し述べてみると、「生徒の学校生活の実態分析」(昭和46年)、「6ヶ年一貫教育について」(昭和49年)、「自治会行事のある断面-100km徒歩を通して-」(昭和49年)、「クラブ活動の現状分析と検討」(昭和50年)などは、記憶に新しいところである。昭和41年18月21日・22日の両日には、本校を会場として研究会が開かれ、数学部会、社会部会、生活指導部会において、その発表をした。

昭和51年度以降のものについては後に一括して掲げる。

4 全国国立大学附属学校連盟高校部会教育研究大会

全国国立大学附属学校連盟高校部会(略称全附連高校部会)は、昭和29年5月26日成立。当初は大学入試問題の検討、理科部会、生活指導部会による研究発表会を行っていたが、昭和34年より、毎年教育研究大会として、附属高校以外に、一般の高校にも研究を公開し、参加を求めることに決定した。昭和41年度は大阪学芸大学附属高等学校に於て第8回大会を開催した。毎回、生活指導部会、及び2教科を中心として発表して来た。

今日では「附属のあり方部会」が恒例のものとして設けられ、各校の情報交換、諸問題が取り上げられ、協議されている。

次に第1回大会以来の本校教官による発表を記載する。

昭和34年度第1回全附連高校部会教育研究大会(於東大附高)

生活指導:

昭和35年度第2回全附連高校部会教育研究大会(於奈良女子大附高)

社会:中・高社会科の学習内容の問題点

昭和36年度第3回全附連高校部会教育研究大会(於東京教育大駒場高)

英語:誤答調査に見る指導の問題点

昭和37年度第4回全附連高校部会教育研究大会(於金沢大附高)

保健体育科:精神衛生面より見た受験期における高校生の生活調査

英語:Contextによる文章の正しい理解

昭和38年度第5回全附連高校部会教育研究大会（於東京学芸大附高）

理科：エネルギー交代

保健体育科：精神衛生面より見た受験期における高校生の実態

昭和39年度第6回全附連高校部会教育研究大会（於広島大附高）

国語：現代国語「文学教材」についての一問題

理科：理科学習指導の問題点

昭和40年度第7回全附連高校部会教育研究大会（於お茶の水女子大附高）

国語：読解指導の一問題点

数学：論証指導 —集合と論理の指導について—

—新合代数と論理—

昭和41年度第8回全附連高校部会教育研究大会（於大阪教育大附属）※10月21日～22

日 本校にて開催

社会：倫社2年間の歩み

数学：論理指導に関する実験と問題点

生活指導：ホーム・ルーム活動と集団合宿訓練

昭和42年度第9回全附連高校部会教育研究大会（於東京教育大附高）

社会：歴史学習の問題点 —思考力を高めるために—

英語：多読との関連における精読指導

高校英語における多読指導 —問題点と実験報告—

生活指導：ホーム・ルーム活動と合宿訓練

昭和43年度第10回全附連高校部会教育研究大会（於京都教育大附属）

保健体育：体力養成と学習指導

美術：高一の段階における描画指導上の興味づけについて

英語：精読指導の問題点 —特に予習指導の面から—

生活指導：教科活動・特別教育活動・学校行事の有機的結合

昭和44年度第11回全附連高校部会教育研究大会（於東大附高）

理科：探求の過程を重視するには —地学下層分野において—

保健体育：高校生の修学旅行における疲労の一考察

美術：教材開発への提案

生活指導：ホーム・ルーム活動の分析 —本校12期生の成長の記録—

昭和45年度第12回全附連高校部会教育研究大会（於広島大附福山高）

理科：探求の過程を重視するには —地学上層・気象において—

生活指導：クラブ活動の現状分析と検討

昭和46年度第13回全附連高校部会教育研究大会（於東京教育大附属駒場高）

音楽：音楽Ⅰにおける諸問題

生活指導：生徒の学校生活の実態分析

昭和49年度第14回全附連高校部会教育研究大会（於名古屋大附高）

社会：附高生の社会意識と授業

昭和48年度第15回全附連高校部会教育研究大会（於東京大芸大附高）

英語：高Ⅰ教科書にあらわれたIdiomatic Expressionの指導上の問題点

- 昭和49年第16回全附連高校部会教育研究大会（於奈良女子大附高）
 保健体育：バレーボールの効果的指導 一意欲的にとりくませるための一
 英語：教室におけるリーダーの扱いについて
 生活指導：自治会行事のある断面 ー100km徒歩を通してー
 附属のあり方：6ヶ年一貫教育について ー本校における一貫教育の実状ー
- 昭和50年度第17回全附連高校部会教育研究大会（於お茶の水女子大附属）
 理科：中・高の関連について
 保健体育：倒立の一考察
 生活指導：クラブ活動の現状分析と検討 ーその2ー
- 昭和51年度第18回全附連高校部会教育研究大会（於金沢大附高）
 理科：中・高の生物教材の関連について 濱谷 巖，大仲政憲
 天体の運動について 浅野浅春，柴山元彦
 生活指導：上戸川合宿所の合宿活動について 田原悠紀男
- 昭和52年度第19回全附連高校部会教育研究大会（於東京教育大附高）
 国語：中・高を通しての読書指導
 数学：中・高一貫教材をめざして 横田稔良
 生活指導：100km徒歩 ー第2報ー 東元邦夫
- 昭和53年度第20回全附連高校部会教育研究大会（於広島大附高）
 社会：世界史授業の実践例 高木正喬
 数学：中・高一貫の教材をめざして 本間俊宏
 生活指導：学校行事編成の一断面 浦久保寿彦
- 昭和54年度第21回全附連高校部会教育研究大会（於東京大附高）
 生活指導：高I合宿について 横田稔良，東元邦夫
 あり方：本校における教育実習の現状と問題点 濱谷 巖
- 昭和55年度第22回全附連高校部会教育研究大会（於大教大附高）
 英語：英語の「読み方」 井畑公男
 保健体育：本校生徒の骨折経験者についての調査 楠本久美子
 生活指導：部活動の現状分析と検討 岩城一郎，高木正喬
 あり方：授業分析録画装置へのコンピューター導入とその利用 濱谷 巖
- 昭和56年度第23回全附連高校部会教育研究大会（於筑波大附駒場高）
 保健体育：肥満児の指導 田中 譲
 理科：主体的にとりくむ物理実験について 武田和生，辻 退一
 都市における地学 浅野浅春，柴山元彦
 生活指導：修学旅行 ー第3年次実施についてー 井畑公男
- 昭和57年度第24回全附連高校部会教育研究大会（於愛知教育大附高）
 国語：表現力の育成 ー文章指導ー 河野文男
 「私たちのテキスト〈漢文〉づくり」から 峰地右太郎
 理科：主体的に取り組む物理実験について 武田和生
 生活指導：長距離徒歩（100km徒歩） ー第3報ー 琢磨昌一
- 昭和58年度第25回全附連高校部会教育研究大会（於お茶の水女子大附高）

国語：想像力と表現力 —「麦打ち」をめぐる—	河野文男
数学：関数教育について —新課程数学Ⅰの関数指導より—	本間俊宏
生徒指導：高Ⅰ合宿における討論テーマの変遷	田中 譲, 柴山元彦
昭和59年度第26回全附属高校部会教育研究大会（於金沢大附高）	
数学：中学生が収集した統計資料についての考察	平林宏朗
社会：日本史における地域史授業の問題点	白土芳人
生徒指導：附高祭について	田原悠紀男
昭和60年度第27回全附属高校部会教育研究大会	
英語：英語入試問題作成について	千種基弘
社会：地域教材と世界史	高木正喬
生活指導：クラブ活動	琢磨昌一, 西谷 泉
あり方：教育実習について	本間俊宏, 浅野浅春
（教官名は発表者である）	

5 近畿附属学校連盟中・高研究部会

全国を9地区に分けた中の一つに当たる近畿地区には、近畿附属学校連盟という組織があるが、その第1回の研究総会は、昭和34年5月10日に本校で開かれた。幼・小・中・高の学校毎の教科に分かれ、全員参加のもとに、指導要領についての研究協議を行った。

昭和36年度からは、幼小部会・中高部会・特別部会の3つの部会に分かれ、そのそれぞれが、11、12、3の分科会から構成されているという分科会組織で研究が行われるようになって来た。中高部会について言うと、国語・社会・数学・理科・音楽・美術・保健・技術家庭男子・技術家庭女子・英語・特活・道徳の分科会に分かれ、会場は、分科会毎に附属学校持ち回りということで研究が行われるようになり、今日まで続いている。

特筆すべきものについては「教科」の記録において触れるものとする。

6 共同研究組織

本校の教官が大学の教官と一体となって研究を進めるための組織を、教科として持っているものの主なものには、次のようなものがある。

（これらの会では、大学の教官・附属の教官・旧教官をもって構成されている場合がそのほとんどである。）

○大阪教育大学国語教育研究会

昭和30年に設立され、国語教育の理論と実践について研究する会。事務局は、1年ずつ、附属天王寺・附属池田・附属平野で持ち回ることになっている。

○大阪教育大学社会科研究会

昭和38年に設立。各学期2～3回研究会を持ち、学習内容の系統化、生徒の認識の発達について研究している。事務局は大学。

○大阪教育大学数学会

大正13年に設立。教科の理論はもとより、教材の研究・指導法の開拓にも力を注ぎ、年1回対外的な研究会を持っている。また、学期毎に附属校持ち回りで例会を開いている。

○大阪教育大学英語教育研究会

昭和33年に設立。英語教育について、理論と実際の両面から研究する会で、月1回例会を持っている。本校に事務局を置く。

○大阪教育大学学内体育協議会

昭和47年に設立。授業研究を通して、体育科教科教育のより一層の研修、充実を図る会。年3回、附属校持ち回りで協議会を開いている。事務局を本校体育研究室に置く。

○大阪教育大学技術科懇談会

技術科が職業科と呼ばれた時代から引き継がれて来た研究会で、本校教官が常にその代表幹事となり、研究会・講演会等を開いている。

7 本校研究部の活動

(1) 研究部会

本校では研究部中心になって、幾つかの部会を設け、全教官がそれぞれの部会に属し、研究活動に当たるシステムをとり、部会の運営については次のようなことが決められている。

研究部会の運営は原則として中・高別個にする。但し必要に応じて合同の部会を持つことが出来る。

[中学校]

- (1) 決められたテーマのもとに全教官はいずれかの部会に入る。
- (2) 各研究部会は研究テーマに基づいて研究に当たる。
- (3) 各部会の活動について全体の集会で報告する。

[高等学校]

- (1) 校務分掌の各部はその責任において研究テーマに応じて研究を行う。
- (2) 研究テーマによっては全教官による共同研究とすることもある。
- (3) 研究部は全体の研究活動の調整を図る。

中学校、高等学校毎の研究部会及び研修会としては次のようなものがある。

[中学校]

昭和51年度～52年度は「どんな生徒に育てたいか」をテーマに4分科に分かれ、中学校の研究部会で話し合った。

昭和53年度～56年度の間は「ゆとりと充実（新教育課程）」について話し合いを続けた。この話し合いでは、附属中学校の考える「ゆとり」を互いに出し合い、共通理解出来る点を見つけ、附属中学校の教育活動の見直しをしようとしたものであった。特に、昭和55年の8月～56年の8月には一泊二日の教官合宿の機会を持ち、夜遅くまで、お互いの考えを出し合い、「本校に即した望ましい教育のあり方」を探ろうとしたのである。このような話し合いの中で、「ゆとりと充実」に対して、次のようなとらえ方をするようになった。

附属中学校におけるゆとりある学校生活とは、充実した成就感・達成感のある時間と体験の保障された学校生活である。

昭和57年度は8月に午後半日ではあったが、教科教育センターで話し合いの場を持った。そこでの話し合いは、昭和53年度以来話し合ってきたことがらの中で、実行に移せるものは各分掌で取り上げ検討し、実践に移すことになった。

昭和58年度～59年度は、「本校の教育」について話し合った。それは、中・高6ヶ年あるいは小・中・高12ヶ年の一貫教育を考え、附属中学校の位置や役割を明確にしていこうとするものであった。そのために、目の前にいる生徒の様変わりなども出し合い、生徒の実態把握から教師の生徒への関わり方などに検討を加えた。このテーマについては、一泊二日の合宿を2年続けて夏にもっている。そして、この話し合いは、昭和59年度から始まった中・高合同の研究部会へもつながっていくものであった。

[高等学校]

今までに設置された部会名の主なるものを次に挙げる。

「H・R活動」 「道徳・学級活動」 「特別教育活動」 「学校行事等」
「教育研究」 「教育実習」 「同和教育」 「学力評価」 「教育工学」
「生徒指導」 「教育課程」 「附属学校諸問題」

また、昭和57年1月16日～17日に合宿討議をもった。

これは、諸面で多様化する生徒の実態を把握し、教師側も適切な対応を求めようとしての研修会であり、同時に中・高一貫の実情を見直し、新たな指導方針を探ろうとしたものであった。

昭和30年代の初期に附属高校が創立されて以来、四半世紀が経過した。この間に社会情勢の推移と共に、附高生の気風・考え方・行動などの面にも、よかれあしかれ、大きな変化が現れて来た。一方、我々教師の側にも時代の変遷と共に、日常の教育と取り組む姿勢・考え方にも変化があることは否定出来ない。

高校創設と共に、既設の附中と連携して中等教育の場とし、今日まで「個人を育てる教育」を「6ヶ年一貫教育体制」のもとで行って来た。青年前期の生徒は心身共に激動の渦中にあると言っても過言ではない。この期間には絶えず不安、動揺が交錯し、ちょっとした事象にも敏感に反応するものである。生徒の実態をよく観察し、彼らはどのような考え方で学校生活・家庭生活等に参加しているのか、そのなかで何を求めているのか、どんな悩みを持っているのか、これらの実情を更なる的確に把握・分析し、実情に即した指導が行われなければならないことを我々一同、痛感している。

我々は今日まで教官会議・指導会議等の場で、生徒指導の諸問題について時期にふさわしい問題点を出し合って議論して来たのであるが、今回は会議の場所を校外に移し、一泊二日の日程で寝食を共にし、雰囲気を変えて研修会を持つ。

討論テーマ 「生徒の実態と附高教育のあり方」

研修会1日目は予備討議（グループ、高1、高2、高3、担任外A、B）、班別討議（4班）、2日目に、全体会議（全員）とまとめが行われた。討論内容は、「生徒の実態と教師側の対処の仕方」「中・高一貫体制の検討」等多岐にわたったが、その記録は「合宿討論の記録」として冊子にまとめた。

(2) 中・高合同教官研修

中・高の教官を対象として、講演を中心とした研修会を年間1～2回設けている。過去10年間のをまとめると次の通りである。講師欄()は当時の勤務職である。

年度	講 師	演 題
51	広藤 隆夫先生(本学教授、附中校長、附高校舎主任)	哲学について
52	澤田 義一先生(本附高副校長)	附属学校を語る (附属学校の概観とその展望)
53	上林 久雄先生(本学教授、附中校長、附高校舎主任)	現在の青年について
54	汲田 克夫先生(本学教授)	保健教育
55	福原 公雄先生(堺市立月州中学校長)	中学校における非行問題について
	高岡 輝夫先生(帝国女子高等学校副校長)	私学の特色、現状について
56	澤田 義一先生(本附高副校長)	附属30有年の歩みと今後の展望
57	(映画) 人間について(林 竹二氏の授業記録。「ビーバー」「狼に生てられた少年」)	
58	石井 完一郎先生(京都大学名誉教授、竜谷大学教授)	進路の選択をめぐって— (学生相談27年をかえりみて)
59	櫻井 寛先生(本附高副校長)	教育理念について
	服部 祥子先生(本大学教授)	中高生の精神状態— (ソ連・アメリカでの経験をふまえて)
60	中野 陸夫先生(本大学教授 同和教育センター)	部落差別とは、どのような差別か

上記以外で、海外研修の報告会を設けることもある。また昭和55年度 全附連高校部会(会場、本附中・高校舎)では次の講演が行われた。

『新教育課程の精神—高校教育を中心として—』

甲南女子大学学長 鯨坂 二夫先生

(3) 中・高研究部会

昭和59年度より中・高合同の研究部会が設けられた。中・高教官が7グループに分かれ、「生徒の現状把握とその指導」のテーマをもとに生徒の実情、指導上の問題点などが討議されている。

(4) 小・中・高研究部会

昭和53年度より、本学に属する天王寺小学校、天王寺中学校、高等学校天王寺校舎の共同研究会が開かれている。その目的、構成、活動の概要、及び各年度の研究主題をまとめておく。

目的—国立大学附属学校は、学校教育法に規定された任務のほかに、研究実証校、教育実習校、地方教育へ協力・貢献する使命を担っている。各附属学校ではこの使命に基づき研究活動が行われているが、従来各教科毎に行われていた小・中・高の研究活動を総合的に拡大発展させることによってよりよい指導方法を確立する必要がある。この研究部会は、それぞれの学校種別における児童・生徒の追跡調査による発達状況の把握と、その成果を教育活動に生かそうとするものである。

構成—次の系統を設ける。

言語系(国語・英語) 55年度より国語、英語に分離

社会系(社会・家庭) 53年度第2回部会より、社会、家庭に分離

算数・数学系

理科系
 体育系（保健・体育）
 芸術系（美術・図工・技術・音楽） 54年度より音楽を分離
 活動——年3回、各系の研究テーマに基づいて研究討議する。

既に発表されたもので次のものがある。

昭和56年 全国国立大学附属学校連盟高等学校部会

「肥満児の研究」

昭和55年・56年・57年 附属学校教育方法等改善研究発表協議会

「事故災害の分析と防止—効果的な保健体育学習」

研究テーマ一覧

系	53年度	54年度
言語(国・英)	「読む」ということ。言語活動の調査	言語活動の調査
社 会	小・中・高の教材内容について	憲法学習について
算数・数学	小・中・高一貫 改訂新指導要領 小学校授業研究と研究発表内容の検討	小・中・高の指導内容の関連について
理 科	中学を中心としての小・高の関連	(野外活動他、前年度の継続)
体 育	小・中・高の肥満児の追跡調査	
芸 術 (美・図・技)	遊びの中の表現の推移—発達段階を追って—	(前年度と同)
家 庭	小・中・高の系統性の研究	(前年度と同)
音 楽		器楽指導における小・中の系統

系	55年度	56年度
言語(国) (英)	「五色の鹿」をめぐる(小・中・高) 英語指導と教材内容の検討	「五色の鹿」の感想文を基にした授業への展開 基本文例集作成
社 会	日本史における人物の好き嫌いとその論拠	日本歴史上の人物に関する小・中・高生徒の 関心度(調査)
算数・数学	小・中・高一貫からみた生徒の認識について	小・中・高一貫からみた生徒の認識(実態調査)
理 科	人間の発達段階によって自然をどのように認 識していくのか	小・中・高生の自然概念の認識について
体 育	肥満児の指導	小・中・高を通じて教材の整理
芸術(美・図・技)	技能・図工・美術の関係	小・中・高一貫の美術教育について
家 庭	題材の系統的な扱い方	食物領域、小・中共通教材の扱い
音 楽	楽器指導における小・中・高の関連	小・中・高相互の授業研究

系	57年度	58年度
言語(国) (英)	小・中・高国語科指導目標の検討 興味を起こさせる授業	詩の授業・今後の課題 中・高一貫の英語指導
社 会	歴史上の人物調査	歴史上の人物についての追跡調査
算数・数学	小・中・高一貫からみた児童生徒の認識調査	数と式における小・中・高教材の関連と指導法
理 科	児童生徒の空間、立体感についての調査とその育成について	児童生徒の空間認識の発達について
体 育	小・中・高体育教材の一貫性について	小・中・高に一貫した体育のめざす方向
芸術(美・図・技)	表現の発達段階	小学校の目標・木彫の魅力について
家 庭	小・中共通題材の取り扱いについて	食物領域における小・中・高の関連性
音 楽	授業研究	今後の計画

系	59年度	60年度
言語(国) (英)	詩教材の発掘、作文指導実域報告 中・高の読解力指導	文法の扱い方 新指導要領による授業研究
社 会	小・中・高における歴史上の好きな人物、嫌いな人物の人物像	日本史上の人物に対する関心の調査
算数・数学	算数・数学教育について	算数・数学教育について
理 科	小・中・高の発達段階における自然認識	自然認識について発達段階を知る
体 育 (保 健)	近附連について 視力低下の防止について	小・中・高体育教材の一貫性について 視力低下の防止について
芸術(美・図・技)	小・中生の発達比較 生	研究テーマの検討
家 庭	研究テーマ検討	研究テーマの検討
音 楽	小・中授業相互見学、研究会について	小・中の研究授業

8 本校教官の個人研究及び研修

本校では、毎年、各教科、各領域毎に研究テーマを設定すると共に、各個人においても研究テーマを定め、研究部に提出することになっている。そして、原則として、少なくとも4年に1回は、その成果を本校の『研究集録』に発表し、広く批判を仰ぐことになっている。

また各個人は、自主的にそれぞれの教科、専門に関する研究会に入り、研究にいそしんでいる。それは「日本国語教育学会」、「日本地理学会」、「歴史地理教育協議会」、「日本数学教育学会」、「学校数学研究会」、「大阪府理化研究会」、「日本地学教育学会」……など、枚挙にいとまがない。特筆すべきものは、各教科において触れるものとする。

海外研修についても、学校としても奨励しており、それぞれの教官も進んで参加し、そこで得た広い知識、深い考え方を、それぞれの研究に生かすようにしている。昭和51年度以降、現在までに海外研修に参加したものは次の通りである。昭和50年度以前は前「記念研究集録第18集」に記してある。

平林宏朗	52.9.22~10.21	教育事情視察	アメリカ合衆国 フランス ベルギー・ドイツ連邦共和 国・スイス・連合王国
渡辺一保	52.8.3~53.8.31	英語科教育研究	アメリカ合衆国
東元邦夫	53.7.24~9.1	研修・欧文学資料収集	フランス・連合王国・ドイ ツ連邦共和国・オーストリ ア・ギリシャ・イタリア
本間俊宏	53.8.14~8.30	数学教育事情調査	連合王国・フィンランド・ ソビエト連邦・チェコスロ バキア・ドイツ連邦共和 国・フランス・オランダ
浅野浅春	54.8.2~8.20	地質研究	ケニア共和国・南アフリカ 共和国
柴山元彦	55.3.21~4.6	地質研究	ネパール・タイ
今倉 大	55.7.26~9.22	英語科教育研究	アメリカ合衆国・カナダ
松宮哲夫	55.10.8~11.6	教育事情視察	ペルー・ウルグアイ・アメ リカ合衆国・ブラジル・メ キシコ
武田和生	56.9.16~10.15	教育事情視察	アメリカ合衆国・オランダ フランス・連合王国
平林宏朗	59.8.15~8.31	教育事情視察	オーストラリア
田中孟邦	59.8.20~8.29	教育事情視察	オーストラリア
乾 東雄	59.8.20~8.29	教育事情視察	オーストラリア
西谷 泉	60.8.16~8.23	数学科教育研究	中華人民共和国
武田和生	60.8.11~8.24	地質研究	ノルウェー・スウェーデン フィンランド・フランス
柴山元彦	60.8.18~8.23	地質研究	台湾

むすび

以上が「本校の使命と研究」の概要であるが、これ以外にも本校が研究・実証学校としての使命を帯びることから大学教官との共同研究がある。また、現職教員の再教育の一端を担う現職教育学校としての使命から、現職教育の場としての位置付けもある。例えば、現職教育の場として、昭和47年に第21回全国国語教育研究協議会、昭和50年に日本数学教育学会第57回全国大会、昭和50年に大阪府理化指導資料研究会、昭和57年に全国国語教育学会関西集会等が開催されており、その他大小の研究会場となっている。

本校の研究活動の歩みについて昭和50年度までのまとめを前記念集録によって示すと次の通りである。

『本校の研究活動の歩みには2つの大きな流れがみられる。その一つは創立当初から昭和30年まで学校をあげて取り組まれた「ガイダンス」を中心とする教育研究と、附属高等学校設立から今日に至るまでの中・高一貫した教育はいかにあるべきかをふまえて各教科が中心になって取り組んで来た「学習内容・指導法の検討」の2つの流れである。

創立以来昭和30年までの研究においては真の民主主義教育は個人の自立性に立脚した個の指導、ケース・スタディ、キュムラティブ・レコード（テストング、行動記述や逸話記録の観察）等がガイダンス事務の研究実践にその重点を置いて指導のための調査を行い、個人差の実態を把握しつつ、個人を育てる教育を実践して来たのである。一方昭和31年以降は高等学校の併設に伴い過去の研究の歩みを進めると共に、中・高一貫した教育体制を組織化し発展させる観点から各教科別に教育課程の中学校・高等学校の関連を研究し、日本における中等教育はいかにあるべきかという大きな視点をふまえて今日に至っている。

これらの研究活動の歩みは終始、個人を育てることを念頭に置き、その実態を把握し、生徒個人の持つ能力・特性を最大限に発展させるには指導はいかにあるべきかの研究・検討の実践であったといえよう。今日、教育の多様化に伴い教育制度の検討・学習内容の精選などが論議されているなかで、我が校が教育の現代化にいかに対処していくかは重要な課題である。これらの課題に取り組むに当たっては従来の研究の成果をふまえて着実な日常の教育実践のなかで取り組んでいくことこそ研究実証校として進むべき道であると考えられる』

更に次の如く述べている。

『いま、日本の学校教育は一つの曲がり角に来ていると、よく言われる。社会における学校教育の役割の問題、教育の機会均等の問題、個人能力と適正の問題、学校制度の問題等、現在ほど多くの問題をかかえている時期は、過去においてなかったであろう。

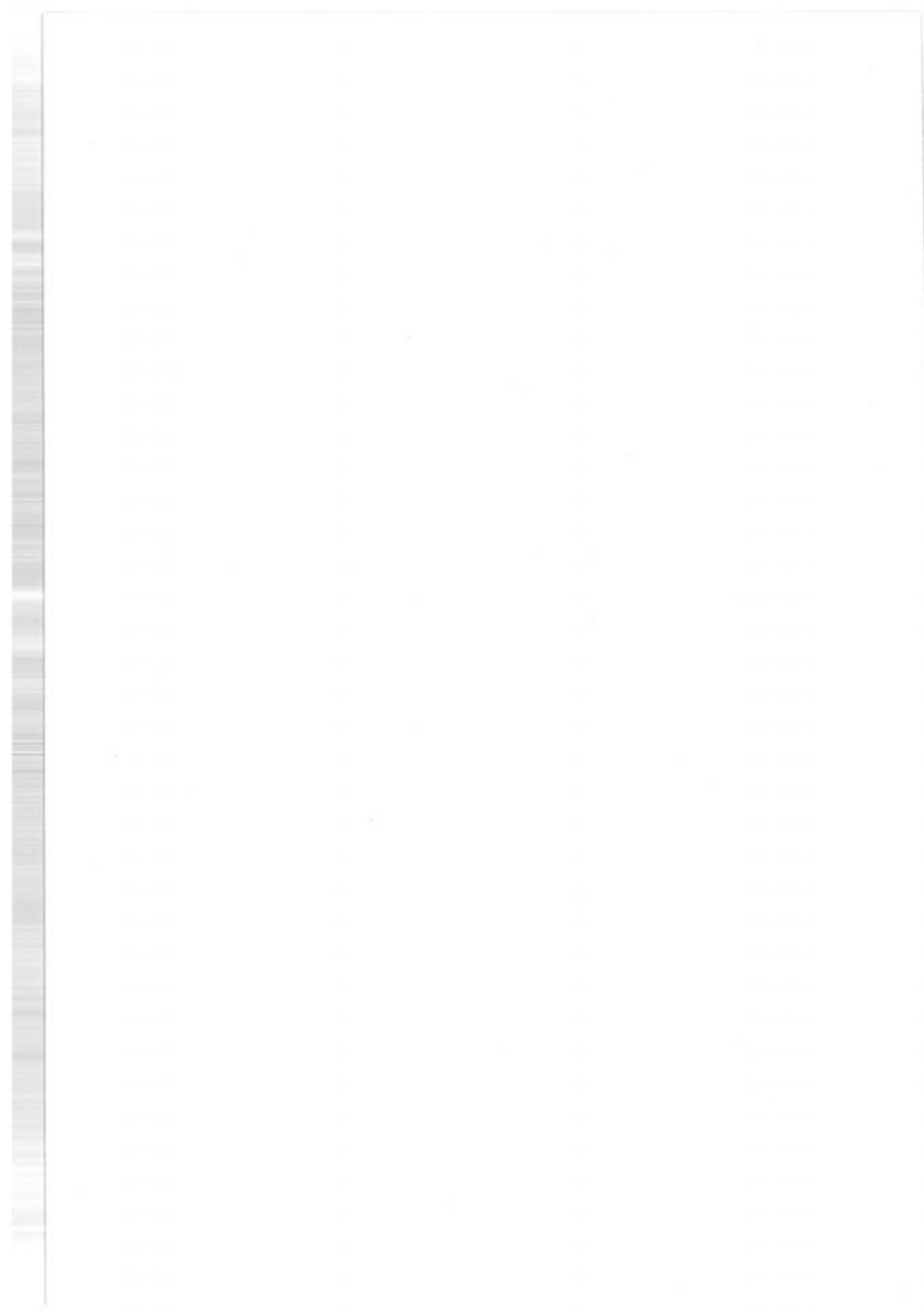
教員養成大学・学部の附属学校のあり方にしても、昭和44年の教育職員養成審議会の建議に見られるように、教育研究のあり方や教育実習の問題、大学と附属学校の連係の問題など、新しい角度から採り上げられつつある。今まで、附属学校の位置付けが法的にあいまいであった点も、教育関係学部附属学校設置基準の制定により明確になり、附属学校の果たす役割・使命が大きくクローズ・アップされて来たのも、周知の通りである。

この機にあたり、先輩諸氏が、たえず研鑽をつまれ、残してこられた足跡を振り返り、これを今後の研究の大きな糧として、新しい第一歩を踏み出すことは、意義のあることであり、また我々の使命でもある。戦後の恵まれない環境の中で、しかも少人数の教官でもって、生徒指導に当たると共に研究にいそしみ、今日の中・高一貫体制の基盤を築かれた先輩諸氏の、教育への使命感、研究に捧げられた情熱は、いかばかりであったろうか。

我々は附属学校の使命を深く理解し、中・高一貫教育のあるべき姿を求めて、いま新しい前進を開始しなければならない。それぞれの地域に教育研究所が設立され、教育研究の組織が生まれ、また、公・私立のそれぞれの学校の設備、研究組織が日々に充実しつつある今日、今まで以上に広い視野と深い洞察力を持って、社会の発展と学校教育のあり方を展望し、中・高教官が心を一つにして、日夜研究に励みたいものである。』

奇しくも前記のまとめは今日の課題のあり方を言い尽くしている。この先達の達観をもって銘としたい。

辻 退一
櫻井 寛
乾 東雄
河野 文男



Ⅳ 行事等における中・高一貫教育の実践と課題

[文化活動]

- § 1 文化活動の教育的意義
 - 1 本校の文化活動のねらい
 - 2 本校の文化活動
- § 2 中学校における文化活動
 - 1 学芸会・鑑賞会・講演会
 - 2 自由研究
 - 3 文化クラブ発表会・展示会
- § 3 高等学校における文化活動
 - 1 芸能鑑賞
 - 2 博物館見学
 - 3 講演
- § 4 図書館活動
 - 1 蔵書数の変化と利用状況の変化
 - 2 校内読書感想文コンクール
 - 3 図書委員会の活動
 - 4 図書館活動の課題
- § 5 今後の課題

[保健体育活動]

- § 1 保健行事
 - 1 保健行事の目標と概観
 - 2 スポーツテスト
- § 2 体育的行事
 - 1 体育大会
 - 2 臨海訓練
 - 3 耐寒訓練・マラソン大会
 - 4 遠足
 - 5 富士登山
 - 6 スキー訓練

[合宿訓練・修学旅行]

- § 1 合宿訓練
 - 1 中Ⅰ合宿訓練
 - 2 高Ⅰ合宿訓練
 - 3 附属ふるさと村
- § 2 修学旅行
 - 1 中Ⅲ修学旅行
 - 2 高Ⅲ修学旅行
 - 3 今後の課題

[生徒会・自治会]

- § 1 生徒会
 - 1 生徒議会
 - 2 三附中・交歓会
- § 2 自治会
 - 1 附高祭
 - 2 百軒徒歩
 - 3 音楽祭

[クラブ活動]

- § 1 本校クラブ活動のねらい
 - 1 クラブ活動のねらい
 - 2 クラブ活動
- § 2 中学校におけるクラブ活動
 - 1 クラブ活動参加状況の移り変わり
 - 2 クラブ活動の現状
- § 3 高校におけるクラブ活動
 - 1 クラブ活動参加状況の移り変わり
 - 2 クラブ活動実態調査
 - 3 クラブ活動の研究発表

文化活動

§ 1 文化活動の教育的意義

1 本校の文化活動のねらい

教科活動・教科外活動のいずれに関連するものであっても、その文化活動を通して豊かな充実した学校生活を経験させ、自律的、自主的な生活態度を養うと共に、民主的な社会及び国家の形成者として必要な資質の基礎を育てるためのものである。

このため、次の諸点を目標とする。

- ① 文化活動の中から、文化の担い手、文化の創造者としての基礎的な資質を養い、協力して共同生活の充実発展に尽くす態度を養う。
- ② 文化的遺産に触れ、文化的活動に参加することによって実践的に文化を認識し、広く公正に考え、判断し、かつ自発的・積極的に参加、実践してゆく能力の伸長を図る。
- ③ 文化活動に参加することによって共通の問題を知り、相互理解を深めてゆく中から個性を伸長すると共に、集団の規律を遵守し、人間としての望ましい生き方を自覚させ、将来の生活において自己を表現する能力を育てる。
- ④ 文化活動において平素の学習活動の成果を生かし、健全な趣味や豊かな情操を育て、余暇を有意義に生かす精神や態度の確立を図る。（「研究集録 第18条」より）

2 本校の文化活動

本校の文化活動は、大別次の2つの場合がある。

- ① 各教科・科目の活動に関連するもの
- ② 各教科以外の教育活動に関連するもの

①は各教科独自の活動であるが、②と有機的に関連していることが多い。②は、学校行事、生徒会及び自治会活動として行われる。

中学校では、自由研究発表会、学芸会、文化クラブ発表会、鑑賞会（音楽、演劇、映画、狂言等）があり、高校では、鑑賞会（演劇、能、歌舞伎、文楽、博物館見学等）、講演、附高祭、音楽祭がある。更に、図書館の利用も文化活動の大きな柱である。

中・高一貫しての文化活動という面からみると、中学校における学校行事としての学芸会、文化クラブ発表会、音楽会は、高校においては自治会活動の一環として附高祭、音楽祭に継承されている。

§ 2 中学校における文化活動

1 学芸会・鑑賞会・講演会

(1) 学芸会

学芸会、鑑賞会（映画鑑賞、観劇、音楽鑑賞会、講演会などを含む）は、中学校の文化活動の主要なものである。学芸会は、昭和23年2月14日（土）に芸能祭という名で事実上発足した。附中新聞第2号は、その様子を、次のように伝えている。「私達の盛り上がる熱と意気で開かれたはれの附中芸能祭は、2月14日、小人数ながら無事りっぱにすみました。附中開校第1回目の芸能祭、考えるとあまりにも不安が大き過ぎたという感じがふと、心の中に起こるのでした。決して見劣りのせぬりっぱなもの、と評してよいと思います。これというのも私達が組の為、否！附中の向上の為を思う心のたまものと言ってよいでしょう。しかし、私達は今もって反省しなければなりません。来年の芸能祭をより立派に、否！この附中をますます名に恥じない学校としてゆくために。」そこには、新しい学校が行事を作り上げていく際にみられる創造の喜びがみなぎっていた。

学芸会という名で行事化されたのは、昭和25年3月19日の第3回からである。生徒会主催で、実際の運営は生徒会文化部が行っている。3月実施ということもあって、卒業生との送別会の意味も加えられていた。内容は劇を中心として、バレエなどが上演され、PTAや教官の有志が出演している。昭和26年度の学芸会からは、開催の時期が2学期となり、附高創立後は、附高生が賛助出演したり、卒業生で音楽界に進んだ者が出演したりしている。昭和32年度からは、各クラス毎の劇が、各学年1つにまとめられ、新しく各学年の音楽発表を行うようになった。更に、昭和40年度からは、自由研究の発表も加えられた。

このような形での学芸会は、昭和43年度まで続いたが、昭和44年度には、全国的に起こった学園紛争によって、大学本部が封鎖され、大学講堂の使用が不可能になったので、会場を小講堂に移し、劇も今までの各学年1つから、各クラス単位で行われることになった。その後、学級増に伴う会場の手狭さや、配分時間の短縮などの理由から、昭和49年度からは自由研究の発表を、学芸会より分離させることになった。

ここ10年間の学芸会の歩みを振り返ってみると、昭和51年度からは、有志企画も廃止され、現在、行われているような各クラスによる演劇の競演のような形となった。各クラスの上演時間は、1、2年20分、3年30分で、生徒たちは、ホーム・ルームの時間や放課後を利用して、話し合いを通して計画をたて、



各クラスの特徴を出した劇づくりに取り組んでいる。生徒たちにとって、学芸会は、またとない企画力や行動力を発揮する場でもある。それだけに生徒の意気込みもさかんで、他の行事にみられない創意や工夫が、随所にうかがわれる。

次に、最近10年間の学芸会で、生徒によって、上演された劇の一覧表を掲げる。この表からも、うかがわれるように、生徒が取り上げた劇の内容は、名作古典的なもの

から、SFもの、社会問題を取り上げているもの、更には、生徒自身による創作ものなど多方面にわたっている。そこには、社会の動きに対する生徒たちの意識が敏感に反映していることをうかがうことができる。

学芸会が、生徒の人間形成の上で、どのような役割を果たしているかについては、

学年 年度	1 年	2 年	3 年
51	ペロ出しチヨンマ ベニスの商人 改心 処刑	青い鳥 夜明け 新二十四の瞳 ひげの天使	屋上の狂人 愛と死との戯れ 春琴抄 友情
52	チョコレート戦争 白雪姫 オズの魔法使い マッチ売りの少女	夕鶴 おらたちにや口はねえだ に 野菊の墓 思讐の彼方に	十二夜 シンデレラ 三年寝太郎 たけくらべ
53	貧乏神と福の神 桃島金太郎 ベニスの商人 無人島見聞録	グリーンズナイパー 父帰る 水戸黄門—古寺の一件— ガンバの冒険	吉備津の釜 さぶ 絶唱 サイラス・マーナー
54	真夏の夜の夢 くらがり峠 貧乏神と福の神 だれかがよこした小さな 手紙	赤いろうそくと人魚 野菊の墓 お月さんもも色 たけくらべ	シラノ・ド・ベルジュラック 石の微笑 おとうと HAMLET
55	いとしき友よ ほっぺん先生の日曜日 きれいな手 ベニスの商人	警察官と讃美歌 ジーナと五つの青いつぼ トムじいやの小屋 最後の一葉	人形の家 和解 なつかしのハイデルベル グ 春琴抄
56	ひずみ リア王 水戸黄門 竹取物語	車輪の下 小僧の神様 街の灯 真夏の夜の夢	ウエストサイド物語 未亡人 検察側の証人 誤解
57	地下47階 武士になった魚屋 靴 スペースモンキー	招かれざる客 判決 ～12人の怒れる男より～ そして誰もいなくなった 最後の一葉	初恋 果樹園のセレナーデ ひまわり 余波

学年 年度	1 年	2 年	3 年
58	赤ずきん 赤ずきん 赤ずきん 赤ずきん	黄色いアイリス 検察側の証人 友情 卒業	異邦人 人形の家 春琴抄 武器よさらば
59	ベニスの商人 不思議の国のアリス 走れメロス ジーナと五つの青いつぼ	素直な戦士たち ロミオとジュリエット 首飾り 賢者の贈り物	明日に向かって撃て 海と毒薬 悲しみよ、こんには ラスト・クリスマス
60	わたしだけの時間 — 中学生日記より — 二十年後 船乗りブクブクの冒険 未来版桃太郎	0にはもどれない 改心 空白の時間 父帰る	十二夜 レモン・ドロップ・キッド 私は貝になりたい THE KID

学芸会後に開かれる各学級の話し合いなどからも、知ることが出来る。また、数多くの生徒が卒業時に発行される文集や、学年修了後に作られた学年文集などで学芸会をテーマに取り上げる生徒が多い。それらにみられる幾つかを挙げてみると「学芸会のために、クラス全員が全力を尽くした。一生懸命に台本を書き、大道具を作り、小道具を工夫し衣装を考案した。そして、舞台を作り、照明、音響も加えて場面を作った。だが、やはりこの全員の努力が実るか実らないかは、私たちの舞台の上での演技で決まるだろうと思った。たった8人で果たしてどうやったら劇が成功するか、不安だったが、今となっては、自分では大成功だと思っている。声の強弱、手の動き、場所も意見を出し合い、1人をかこんで、両方から手を引っぱって動作を教え合うこともあり、手のひらの向きを上にするか下にするかで、討論したこともあるほど、皆、懸命に考えた末、出来た劇だったからだ。私たちは、助け合いながら、一つの“劇”を完成させた。この中で、クラス全員には、強い団結力が出来たと思う。」また、ある生徒は、「私も、これほど伸び伸びと、みんなを信頼して演技出来たことは、かつてない。これも、みんなが自分の受け持ちの仕事に、それぞれ真剣に、本当に真剣に取り組んで来た成果であろう。劇が終わったとき、私は満足感でいっぱいになった。精一杯がんばった喜び。みんなで力を合わせ、一つのものを作り上げた喜び。学芸会は、私に素晴らしい思い出をくれたのだ。」そこには、ものごとを創造した喜び、そして、ものごとが完成成就した時の喜びが満ちあふれているのを感じることが出来る。また、上級生の下級生に対する無言の指導と励ましもみられる。1年生は3年生の演技をみて「ほとんどの人がその人物になりきっているの、テレビなんかで見ると芝居ぐらいうまいものばかりだった。あれだけの演技をするには、沢山の打ち合わせや練習が必要だし、それからあれだけのセリフを覚えるのは、相当なものだと思う。おそらく、学芸会に必死になっている人でなければ決して出来ないと思う。自分たちも来年は気をひきしめて学芸会に臨もうと思う。」と文集に記している。

生徒の演技力については、ここ数年間で著しい向上がみられる。また、音響や照明

効果の面でも、創意工夫がみられる。しかし、その反面、劇のつまみ方が弱くなっているという声もあり、今後の活躍が期待されている。

(2) 鑑賞会・講演会

本校においては、生徒の豊かな情操と人間形成の上で役立つことを願って、機会を設けて、鑑賞会を実施している。中学校卒業時には、講師を招聘し、人生の節目である高校進学に当たって、新しい決意と覚悟を持たせるようにしている。過去10年間に実施したものを下に記録としてとどめておく。

- | | |
|-------------|-------------------------------------|
| 昭和51年5月4日 | 観劇「タルチュフ」 |
| 昭和51年7月12日 | 映画鑑賞「抵抗の詩」 |
| 昭和51年3月7日 | 卒業記念講演 保田喬氏「スポーツと私」 |
| 昭和52年7月11日 | 映画鑑賞「八甲田山死の彷徨」 |
| 昭和52年12月16日 | 狂言鑑賞「萩大名」「鬼清水」 |
| 昭和53年3月13日 | 卒業記念講演 原田輝雄氏「魚に魅せられて四半世紀」 |
| 昭和53年10月31日 | 観劇「おさよとカップ」 |
| 昭和54年2月15日 | 映画鑑賞「白き氷河の果てに」 |
| 昭和54年3月6日 | 卒業記念講演 安田博氏「未来への挑戦」 |
| 昭和54年9月7日 | 音楽鑑賞 京都市交響楽団 |
| 昭和54年10月29日 | 観劇「おろちの里」 |
| 昭和55年2月15日 | 映画鑑賞「天平の覚」 |
| 昭和55年3月5日 | 卒業記念講演 田子浦親方「私の青春」 |
| 昭和55年10月24日 | 映画鑑賞「太陽の子」 |
| 昭和55年10月30日 | 観劇「リア王」 |
| 昭和56年3月9日 | 卒業記念講演 釜本邦茂氏「サッカーにうちこんだ青春」 |
| 昭和57年2月15日 | 映画鑑賞「長江」 |
| 昭和57年3月8日 | 卒業記念講演 小島考治氏「バレーボールと私」 |
| 昭和58年2月15日 | 映画鑑賞「マタギ」 |
| 昭和58年3月7日 | 卒業記念講演 坂田好弘氏「私のラクビー人生」 |
| 昭和58年4月18日 | 観劇「頼 山陽」 |
| 昭和59年2月15日 | 映画鑑賞「ロングウエイ・ホーム」 |
| 昭和59年3月5日 | 卒業記念講演 森 浩一氏「私の考古学人生」 |
| 昭和59年12月17日 | 音楽鑑賞 邦楽 |
| 昭和60年2月15日 | 映画鑑賞「ロンリーウエイ」 |
| 昭和60年3月6日 | 卒業記念講演 梶谷信之氏「私の体操人生」 |
| 昭和60年7月9日 | 映画鑑賞「ウォーター・シップ・ダウンのうさぎたち」 |
| 昭和60年11月15日 | 民話教室 沼田曜一氏 |
| 昭和60年12月12日 | 講演 南 正文氏「私のおいたち」
(身障者の方々について考える) |
| 昭和61年2月15日 | 音楽鑑賞「わたほうしコンサート」 |

2 自由研究

夏休みにおける自由研究に対する取り組みは、附中創立以来の伝統的な企画として、今では、確たるものとなっている。1学期の中頃になれば、生徒・教師の間でテーマの選択についての話題が出て来る。しかし、例年のことながら、テーマの決定には生徒はもちろん教師にとっても頭の痛いところである。

テーマの決定と指導については、次のようになっている。

- ① 1年生は担任の指導でテーマを決定し、研究する。
- ② 2年生は担任の指導でテーマと指導教官を決定し、指導教官の指導で研究する。
- ③ 3年生は担任の指導でテーマを決定し、研究する。
(指導教官を選び指導を受けることも出来る。)

特に2年生については、6月下旬の数日、放課後に教科別に一斉指導日を設けて全教官が待機して相談を受けている。しかし最近の傾向として、あらかじめ自分のやりたいテーマを持って指導に臨むというより、その場で担当教官に白紙の状態では何をすればよいのかという生徒も、少なからず見受けられる。また、中学生のレベルではなし得ないようなテーマを掲げて我々教官を驚かせる生徒もいる。附中新聞第185号(昭和51年7月19日発行)の「有意義に送ろう40日」と題する記事の中に、「(前略)何といたっても夏休み最大の課題は自由研究である。(後略)」とあり、教官からのアドバイスとして、「自由研究のテーマとしてふさわしいのは、日常生活において、ふと疑問に思ったこと、感激したことについて、深く知りたいことがらでよいと思う。決して、大人の研究のまねごとをするのが優れた研究ではない。中学生の目を通してやりたいことをやるのが一番よいのではないだろうか。テーマが浮かんでこなかった人は、自分の生活のあり方を再検討すべき点が多いのではないだろうか。(後略)」とある。また、附中新聞第199号(昭和54年8月10日発行)には、自由研究担当教官の「楽しい自由研究を！」と題する記事の中に「自由研究テーマ一覧表が配られたとき、教官室で次のような感想があった。『このテーマ一覧を見ていると、まるで大学の卒業論文のテーマ一覧表のようだなあ。』この感想には私もまったく同感である。(後略)」とある。

生徒の選んだテーマの例については、次にその一部を挙げておく。

(自由研究テーマ一覧(昭和59年度)より))

1 A (38期生)

- | | |
|------|-------------------|
| 石原常仁 | 富田林寺内町について |
| 伊藤浩史 | 四天王寺のめだたない所について |
| 井上雅仁 | 電波 |
| 植田昌宏 | 基礎体力について |
| 上村治 | 夏の気象と夜の寝室の涼しさについて |
| 畦田昌宏 | すいみん時間と学習の効果 |

梅本大介	天気予報について
大西孝司	金閣寺と銀閣寺
尾上誉	大阪名物について
加藤進一郎	恩智の史跡について
神前幸造	ダンゴムシの観察
川上貴由	自分の町の歴史
川端匡	京阪間における輸送力戦争
木村俊仁	「城」について
黒石匡昭	国鉄環状線について
澤井宏和	シダ植物について
芝田豊通	人々の選ぶ自動車の色、形、特色、内容
段野光紹	いろいろな池のプランクトンについて
服部洋平	泉北ニュータウン対千里ニュータウン
尾藤基行	滝畑ダム
松尾哲	枚方の遺跡
眞鍋晃篤	「なんば」について
最上太郎	小山荘園付近の地図
森實裕基	防音効果について
山鳥忠宏	城について
吉田昌宏	うなぎについて
太田香織	大阪府盲人福祉センター
梶原以知子	藤井寺の古墳
菊地直子	天神祭り
小谷法子	植物の観察
巽裕子	奈良の伝統工業について
谷川麻夕子	童謡について
林靖子	庭に植えられた植物の調査
東尾聡子	藤井寺の古墳
古川富美子	自然による天気予報
松浦晃子	手話の研究
松田和美	絵馬について
村田真由美	非行について
与那嶺ユキ	百人一首の世界
和東栄美	運動と体のはたらき

3 A (36期生)

浅野豊	夏を涼しく過ごすために
飯田一哲	アイスクリームPART-Ⅱ
池田雅弘	ラジカセでのThe Best Sound
井場拓哉	ローラースケートの技術

今村方哉	Faces—顔について—
上田嘉紀	筋力UPノトレーニング
貴田昭臣	アイスクリーム
木下裕文	ローラースケートの技術
久保達也	大阪の鳥
甲野純正	Track and Field
駒谷剛志	ハングルと漢字
竹中敬一	音楽 (作音)
武樋孝明	文字
竹本剛司	調和のとれた旋律とハーモニー
田中宏和	大阪の鳥
田村忠宣	筋力UPノトレーニング
富永大介	近代オリンピックの意義
仲剛司	S. M. C. 最終目的に向けて
中井幹晴	海岸の変革
野崎潤	作音 (Digital Sound)
萩原史郎	From the New World of Computer Music
濱田吉之輔	ローラースケートの技術
藤木淳	数学の王道
古川善郎	大阪の鳥
村上勝人	サイクリング～ロングツーリング編～
村山宣義	大阪の鳥
乾真有美	救急車
菊地真理	盲導犬
木村麻子	怪奇現象
小西由華	セル画を描く
小林千恵	守口市と東大阪市の公共施設
関口千恵	中学校, 高等学校の教育
田中香織	怪奇現象
辻知里	人間の心理
中岡千聡	外来語
長谷川千晃	人間の心理
藤田美際	世の中の色について
三木千奈津	怪奇現象
安田真穂	人間の心理
山野文子	盲導犬

ところで、自由研究の取り組みについては先輩の意見も大いに参考にしようというところもある。附中新聞第194号（昭和53年8月17日発行）に、「自由研究をやりぬこう」と題して、附高生7名を迎えての座談会を載せている。その中である1人の発言に「や

ってしまってから結果が出ないということがあるので、テーマ決定の時からよほど慎重にしないとだめだと思います。そして、テーマを決める時に本当に面白そうなテーマは成功しやすいけれども、難しそうなテーマは失敗することが多いと思います。それとテーマは決定よりもかなり前から日常生活の中で捜しておいた方がよいと思います。」とある。また、座談会のまとめとして、「自由研究—とかく受け身になりがちな授業から離れる夏休みに、自分から進んで一つのことにはアタックしてみようというのが本来の意義といえよう。この行事も学校創立以来の伝統行事の一つであるが、32年を経た今、かすかな変貌を遂げつつあるように思われる。一つ言えることに、熱意のうすれが挙げられる。無論、全員を指しているわけではない。特に、2・3年生にこの傾向が時としてあらわれる。1年生は新しいことへの興味のためか、まだ生真面目さがある。2・3年の人達、少し昔を振り返ってみよう。確かに、つまらないテーマの追求に終わった人、計画性に無理があったなど、失敗は多かったかも知れない。しかし、やる気というものは少なからずあったはずだ。冒険にあこがれるだけの純粋さはあったはずだ。今、テーマ決定時の雰囲気にも「ダレ」が感じられる。—後略」と記している。

自由研究の中間発表は、昭和54年度から8月10日の登校日に行われている。それまでは8月17日に行われていたが、この時期はお盆による帰省の延長として在阪しない生徒が多く、クラスによっては数名の欠席者が出ることもあった。このようなことから、できるだけ支障の少ない時期、しかも夏休みの中間的な時期として検討した結果、8月10日に定着した。しかしこの時期についてもいろいろな弊害も指摘されている。例えば、多くの体育系クラブは7月末まで活動を行うので、十分な研究も行わないまま中間発表に臨んでしまう等である。実際、生徒の発表を聞いても、いわゆる中間発表になっていない者も多く見受けられる。1人の発表に与えられている時間は、約2～3分である。

2学期初めの2日間の午前中、計8時間を使って、クラス単位で発表会を開いている。発表時間は1人約10分である。これを踏まえて、各クラスから投票によって代表2名を選出し、学年全体で小講堂において全体発表会を開いている（学年によって少しの違いはある）。全体発表会の作品には、各クラスの代表だけあって、かなり内容のあるレベルの高いものもある。人の発表を聞き、その内容や発表の仕方から次年度に向けての参考になるものが多くあるようだ。

以上のような学年発表会に選出された者を考慮に入れ、研究に用いた各生徒のノートを各担任が読んだ上で、各学年から3～5名を選んで「自由研究」と題する冊子を作成している。中には発表方法のまずさから生徒達の注目を引かなかったものの、内容としては立派なものや、実験や調査のデータが豊富で考察も優れたものを中心に学年を担当する教官全員の話し合いにより、この冊子の代表者を決定している。この試みは、昭和51年度より始められた。「自由研究 第1集」の「創刊の辞」の中に、「—（前略）、ここに収録した論文の他にもそれに劣らず優秀な研究があり、審査の先生方を困らせた程であっ

自由研究

第 1 集

1 9 7 6

大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校

て、研究の層の厚さを感じさせられた。収録論文を熟読することにより、自由研究への意欲を燃やし、またそれらの研究を積み上げ、更に乗り越えていってもらいたいと望んでいる。」とあるように、附中生の自由研究への取り組みは、個人的差はあるにせよ、かなりレベルの高いものになって来ている。なお、この冊子は折に触れて他校へも配布しているが、中学生の自由研究としては大変立派なものであるとして、高い評価を受けている。なお、この冊子の巻末に、その年度の全校生のテーマ一覧も載せている。

〔自由研究第1集（昭和51年度）目次〕

	目	次	頁
①古墳について……………	吉	川 浩三郎 (30期生) …	4
②赤膚焼の歴史……………	世	耕 弘 成 (29期生) …	8
③名 ま え……………	森	田 啓 子 (29期生) …	12
④五万分の一地図について……………	田	中 一 二 三 (28期生)	
	林	憲 一 (28期生) …	16
⑤大阪の“サカ”はいつ“坂”から “阪”に変わったか……………	上	嶋 誠 (28期生)	
	山	崎 邦 夫 (28期生) …	21
⑥吉野山の植物……………	菊	岡 範 一 (30期生) …	24
⑦蚊取り線香について……………	藤	本 宏 隆 (30期生) …	27
⑧塩について……………	藤	沢 正 信 (30期生) …	31
⑨記憶能力について……………	山	中 伸 弥 (29期生) …	35
⑩クモの巣のはり方……………	粕	淵 順 子 (28期生) …	38
⑪アリはどのようにしてエサを見つけるか	岸	本 匡 司 (30期生) …	42
○自由研究一覧……………			46

次の表は、昭和51年から昭和60年までの10年間の自由研究のテーマを教科別に分類し、各年度における3学年全体の割合を示したものである。

〔教科別にみた自由研究のテーマの流れ（単位％）〕

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技家	英語
昭和51年	7.3	33.6	1.9	36.7	1.1	0.7	14.5	3.1	1.1
昭和52年	7.2	45.1	1.2	34.3	0.3	0.3	7.2	3.6	0.8
昭和53年	6.5	49.7	2.2	29.9	0.3	1.1	6.5	3.8	0
昭和54年	11.0	44.3	1.3	28.2	0.8	1.3	6.3	5.1	1.7
昭和55年	9.7	37.7	0.8	30.6	5.1	1.7	6.4	7.6	0.4
昭和56年	9.6	37.3	1.3	24.2	2.9	1.7	11.7	9.6	1.7
昭和57年	11.0	36.9	0.8	23.8	2.5	3.0	11.0	10.2	0.8
昭和58年	11.7	32.2	1.7	24.7	3.3	1.7	18.0	5.4	1.3
昭和59年	10.7	42.0	1.2	20.9	3.7	1.6	11.7	6.6	1.6
昭和60年	11.5	40.4	1.6	23.0	3.7	0.8	9.1	9.1	0.8

この表をみると、やはり、社会や理科的な内容が多く、この2分野で全体の6割～8割を占めている。分野別にみると、国語、音楽、保健体育、技術家庭的な内容が徐々に増える傾向にあるように思える。逆に、理科的内容が年と共に減少の傾向にあるようだ。この現象をどのように分析すればよいのか難しいところではあるが、一つ言えることは、最近の傾向として生徒達の興味の対象が多様化しているということではないだろうか。この傾向は生徒の個性が発揮されて来たということで、むしろ我々指導者として大切にしなければならないようにも考えられる。また、この教科別分類の作業を通して感じたことは、特に最近の傾向として、単にテーマ別をみる限りにおいて、単純に教科的分類が出来にくいということである。昭和55年頃までは、テーマをみてははっきりとこれはどの教科に関係したものであるという判断が簡単についた。この傾向も先に述べたように、生徒達の個性の発揮という見方はできないであろうか。また、このような傾向は今後ますます増えるようにも思える。興味の深いところである。(P.54〔自由研究テーマ一覧(昭和59年度)より〕を参照)

また、次の表は、36期生が1年・2年・3年へと学年が進むにつれてテーマが教科別にどのように変遷するかを示したものである。この表をみても、学年が進むにつれて生徒達の興味の対象が多様化していることがうかがえる。

〔36期生の3年間のテーマの流れ (単位%)〕

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技家	英語
1年	12.5	46.1	1.3	20.0	0	2.5	7.6	8.7	1.3
2年	16.4	20.0	5.0	20.0	3.8	2.5	15.0	15.0	2.5
3年	11.3	35.4	1.3	15.2	7.6	3.8	12.7	10.2	2.5

夏休みよりずっと以前から準備に取りかかり、40日以上も費やして行う自由研究を通して、生徒達は教科の学習だけからは得られない何かを体験しているものと思われる。附中創立以来継続されているこの伝統ある自由研究を、今後共、生徒と教官の協力によってますます発展させていくことを期待したい。

3 文化クラブ発表会・展示会

(1) 文化クラブ発表会・展示会

昭和41年3月11日(金)に、中学校で、文化クラブ発表会という名で発足した。文化クラブの活動の活性化をねらって、文化クラブの一年間の成果の発表の場を設けたのである。そして、文化クラブは、それぞれ、一年間、この発表に向けて、年間計画を立て、日々活動して来ている。

ところで、昭和44年度までは、全員が体育系クラブに加入し、一つだけ文化系クラブを選択することが出来ていたが、昭和45年度からは、一人一クラブ制になった。

そこで、昭和46年度からは、午前中発表会をし、午後、音楽会をすることになり、その間を展示会としていた。それが、昭和52年度まで続いた。この後、生徒の負担等から分離した。昭和54年度だけは、前年度から、発表会と展示会に分けたことから、音楽会を同じ日にした。

なお、期日を2月20日頃においているのは、卒業後の北館4階の高Ⅲ教室を展示会場にするためである。そのため、前日、展示会の準備が出来たし、当日、休み時間や放課後に、見学することが出来た。ところが、一度だけ、冬休みの活動のあと、発表会にすることで、活動もしやすいだろうと、昭和58年度は1月に実施した。その時、各クラブの展示会場も活動場所であることになった。その後、展示の都合で、各活動場所で行っている。

[展示会・発表会の移り変わり]

昭和40年度	41. 3. 11(金), 12(土)	文化クラブ発表会・展示会
昭和41年度	42. 3. 11(土)	文化クラブ発表会・展示会
昭和42年度	43. 2. 6(火), 7(水)	文化クラブ展示会 3. 9(土) 発表会
昭和43年度	44. 2. 22(土), 24(月)	文化クラブ展示会 3. 9(土) 発表会
昭和44年度	45. 2. 24(火), 25(水)	文化クラブ展示会 3. 7(土) 発表会
昭和45年度	46. 2. 23(火), 24(水)	文化クラブ展示会 3. 6(土) 発表会
昭和46年度	47. 2. 19(土)	文化クラブ発表会・展示会
昭和47年度	48. 2. 2(金)	文化クラブ発表会・展示会
昭和48年度	49. 2. 22(金)	文化クラブ発表会・展示会
昭和49年度	50. 2. 22(土)	文化クラブ発表会・展示会
昭和50年度	51. 2. 23(月)	文化クラブ発表会・展示会
昭和51年度	52. 2. 22(火)	文化クラブ発表会・展示会
昭和52年度	53. 3. 11(土)	文化クラブ発表会・展示会
昭和53年度	54. 2. 19(月)	文化クラブ展示会 2. 21(水) 発表会
昭和54年度	55. 2. 20(水)	文化クラブ展示会 2. 19(火) 発表会
昭和55年度	56. 2. 17(火), 18(水)	文化クラブ発表会・展示会
昭和56年度	57. 2. 19(金)	文化クラブ発表会・展示会
昭和57年度	58. 2. 18(金)	文化クラブ発表会・展示会
昭和58年度	59. 1. 21(土)	文化クラブ発表会・展示会
昭和59年度	60. 2. 19(火)	文化クラブ発表会・展示会
昭和60年度	61. 2. 19(水)	文化クラブ発表会・展示会

文化クラブ発表会・展示会の実施の概略は、次の昭和59年度のものとは変わらない。

〔文化クラブ発表会・展示会実施要項（昭和59年度）〕

昭和59年度 文化クラブ発表会・展示会

- 文化クラブの活動の一年間の成果を発表する。
- 発表や展示を、聞いたり鑑賞することにより、文化クラブを理解する。

日時…昭和60年2月19日（火）

◎発表会（大学講堂）

9：00 文化委員長あいさつ

9：05 社会科クラブ 35分

—大阪について—

1)大阪の苗字について

2)泉北ニュータウンの事故

3)今年一年の活動報告

（スライド）
（OHP）
（スクリーン）

9：40 英語クラブ 20分

劇「ねむり姫」（英語版）（照明、大道具）

<休憩> 10分

10：10 科学クラブ 40分

1)岩石中の金属について（化学班）

2)ベタについて（生物班）

3)冬の星座（地学班）

（スライド）
（OHP）
（スクリーン）

10：50 音楽クラブ 30分

1)愛のファンタジー

2)夢想花

3)INVICTA序曲

4)バージンブルー（アンコール曲）

11：20 講評 風間先生 10分

11：30 あとかたづけ、移動

< 昼 食 >

◎展示会（各展示室） 1：00～3：30

社会科クラブ 「知ってますか大阪」

視聴覚室

英語クラブ 1)タイプライターによる作品

特別室

2)英語の本（生徒自身で制作）

科学クラブ (化学) 個人研究・実験発表、 (生物) ベタ、土壌生物について (地学) 火成岩の特徴、性質 冬の星座	(化学実験室 生物実験室)
技術クラブ 1) アマチュア無線、マイコン 2) 鉄道模型	(技術第1教室 技術第2教室)
美術クラブ 個人作品発表会	美術室

・見学は個人単位で行い、絶対に展示物をいためないように。

◎終礼、清掃 3:30~
(あとかたづけは、その後各クラブで行う。)

◎下校 5:00

※準備

2月18日(月) 放課後会場準備とリハーサルを行う。

リハーサルの順序の確認、準備物等は各クラブで責任をもって行うこと。

また展示会会場の準備は、展示するクラブ員全員が当たり、発表会の準備については、次の表のように、生徒の係も決め、生徒全員で作り上げる行事になるようにしている。講評については、その年度の生徒指導部部長が当たっている。

[文化クラブ発表会・展示会分掌 (昭和59年度)]

分 掌	教 官	生 徒
会 長	下村	
総 務	中田, 西田, 風間	生徒会会長, 副会長
会 計	辻, 場本	生徒会会計, 当該クラブ会計
書 記	中村(英)	生徒会書記, 当該クラブ書記
進行・招集	藤村, 國方, 平田	文化委員長, 文化委員
会 場	富田, 中西, 高橋	テニス部, サッカー部
舞 台	西濱, 柳本	柔道部, 卓球部
規 律	乾	規律委員長, 規律委員
放 送	中村(潔), 岡	放送委員長, 放送委員
照 明	大仲, 武田	技術部
生徒指揮	金井	
救 護	成田	厚生委員長, 厚生委員
講 評	……風間先生	

(2)発表会・展示会のテーマ

発表会・展示会における各クラブのテーマを見ると、そのクラブの活動についての概略がうかがえる。

次に、過去10年間のテーマを挙げておく。

[文化クラブ発表会テーマ一覧]

空欄は発表なし、代わりに展示を行った。

年度	社会科学クラブ	科学クラブ	英語クラブ	音楽クラブ	数学クラブ	技術クラブ
50	大阪の古い建築について	一年間のまとめ	英語劇「赤ずきん」	演奏と合唱	統計	
51	和泉地方の歴史と地誌	化学→水素の発生 生物→ミミズの再生 地学→大阪の天気	劇「二十年後」 発表「海外アンケートの結果」	ボンセ・デ・レオン 「黒と雲と虹と」の テーマ イエスタディー		
52		化学→青写真 生物→ミミズの再生 地学→緯度と気温	英クラこの一年 空港訪問記 劇「真夏の夜の夢」	演奏	落体運動 その他	
53		地学→テーマ不明	テーマ不明 英語劇他	演奏	テーマ不明	
54		「神経系」 ～8mm映画～ 劇「それでも地球は動く」	英語劇 「あかづきちゃん」 空港訪問記	演奏		
55	「はぶらし」 大阪地場産業として 「京都の地形」	化学→石けんと洗剤 地学→いくつかの星座	人形劇 「THREE BEARS」 1年間の活動報告	ヘイジュード We are all alone 銀河鉄道 999メインテーマ		
56	「淀川」 「生駒山付近の古墳」	科学部とはどんな所か。	人形劇 「SNOW DROP」	バラの謝肉祭 MY WAY		
57	人物キャラクター史 大阪と 第2次世界大戦 活動報告	化学→ 生物→土壌動物について 地学→彗星について	ヘンゼルとグレーテル 活動報告	エンドレスラブ レット・イット・ビー オアッセイ		
58	デパートについて 考古学の現状	ミミズとイモリ		フォールリバー序曲 イエスタデーワンス モア ワイアーオールア ロン		アマチュア無線 マイコンについて
59	大阪について 大阪の苗字について 泉北ニュータウンの 事故 今年一年の活動報告	化学→岩石中の金属 について 生物→ベタ・土壌生 物について 地学→冬の星座	劇「おむり姫」 (英語版)	愛のファンタジー 夢想花 INVICTA序曲 バージンブルー (アンコール曲)		
60	社会科学クラブの活 動について 大阪と戦争 関西新空港	イオンの移動 ペグマタイトにつ いて こうぼ菌について スペクトルの撮影	OHPを使った 英語劇 「Belling the Cat」 「注文の多い 料理店」	インテルメッパオ No. 1 マイウェイ バンドのための 民話 アンコール曲		

[文化クラブ展示会テーマ一覧]

空欄は、展示をしないで発表に目標をおいて活動した年である。

年度	社会科クラブ	科学クラブ	技術クラブ	美術クラブ	英語クラブ	数学クラブ	書道クラブ
50		一年間のまとめ	作品の展示	作品の展示			作品展示
51		グループの発表	音響製品とエレクトロニクス工作及アマチュア無線関係	作品展示他		統計と確立実験	作品展示他
52	ため池の研究	一年間のまとめ	アマチュア無線作品展示	作品展示	海外アンケート		作品展示
53	テーマ不明	一年間のまとめ	アマチュア無線作品展示	作品展示	海外アンケート		作品展示
54	上野台地	身近な科学 一年の総まとめ	アマチュア無線作品展示 鉄道模型 エレクトロニクス	作品展示	海外アンケート タイプ etc.		
55		化学→個人研究発表、実験 地学→天体写真 惑星について	アマチュア無線 鉄道模型 エレクトロニクス 他	油絵、水彩画、クレパス画、デッサン他	海外アンケート 紙しばい 絵本他		
56	個人活動内容について	各班が活動してきた内容	アマチュア無線 鉄道模型 エレクトロニクス	油彩、水彩、七宝焼 デッサン	タイプライター 紙しばい 海外アンケート		
57	個人研究発表 土器・写真その他の 展示	化学→石・古写真他 生物→土壌動物について 地学→ピンホール＝ プラネタリウム コンピューター＝ プラネタリウム 他	マイコン アマチュア無線 鉄道模型 他	個人活動発表展示 七宝焼の方法他	創作絵本の教本 紙芝居 海外アンケート 記録 他		
58	古代の大阪 地名について	化学→個人研究 生物→ミミズとイ モリ 地学→プラネタリ ウム 個人活動	マイコン アマチュア無線 電子工作 鉄道模型	水彩 七宝焼 個人作品	空港インタビュー 個人活動		
59	知っていますか 大阪	化学→個人研究・ 実験発表 生物→ベタ・土壌 生物について 地学→大成行の特 徴性質、冬の星景	アマチュア無線 マイコン 鉄道模型	個人作品発表	タイプライターに よる作品 英語の本、(生徒自 身で製作)		
60		イオンの移動 ペグマタイトにつ いて こうば菌について スペクトルの撮影	展示(個人の制作) アマチュア無線の 実演 マイコン占い 鉄道模型実演	水彩画、油絵、 パステル画、 鉛筆画、切り絵、 七宝焼、木炭画、 趣味のもの各自一 点ずつ	アートタイピング 空港インタビュー のまとめ 本(英語)学校の 地図など(個人で 制作したもの)		

(注)、昭和54年度から、数学クラブ、書道クラブは休部している。

(3)文化クラブ発表会・展示会の反省会を踏まえて

昭和55年度の反省会では、見学の時間を取ったことは、クラブ員の自覚のためにも、生徒達の興味の喚起のためにも有効であったということが挙げられている。この年は、午後1時から3時まで展示鑑賞時間を設けた。各学年毎に、見学順路を設定し、会場の流れはスムーズであったが、1年生では、もっとゆっくり見たいという意見もあった。

期日については、色々と反省会の都度、次年度に生かしている。昭和58年度の1月実施は、冬休みに集中してやったことが発表・展示会へ向けてやれるということであった。ところが、耐寒訓練と重なり、健康面、早朝クラブで問題があるということで、また、2月にもどった。

昭和58年度から発表会で張り出し舞台を設けた。そのため、発表の舞台が広くなり、やりやすいとのことであった。特に、音楽クラブにとって良かった。

準備時間不足を解決するために、前日に時間を設けたりしているが、今、なおかつ直前でないと展示会場が作れないために、各クラブで、その時点になると追われている。そのため会場での展示方法にも限界があるようである。

以上のようなことが、反省会の都度挙げられ、次年度に生かしている。

§ 3 高等学校における文化活動

1 芸能鑑賞

高等学校では、文化行事の一環として、図書部主催による観劇を昭和51年度から、定期的に行ってきた。この行事は演劇だけにこだわらず、音楽鑑賞会を考えたこともあったが、これまでのところ、生徒が日ごろ触れる機会の少ない、我が国の古典芸能(能、狂言、歌舞伎、文楽)が中心となっている。

昭和51年度から昭和60年度までの演目は次の通りである。

51. 5. 4 「タルチュフ」(関西芸術座・大阪府青少年会館文化ホール)
ただしこれは、いわゆる「観劇」の行事としてではなく、附中30周年、附高20周年創立記念行事の中で行われたものである。
51. 9. 25 「江戸城総攻」(新制作座・毎日ホール)
52. 6. 29 歌舞伎鑑賞教室「葛の花」(関西歌舞伎グループ・厚生年金会館)
52. 11. 22 歌舞伎一般公演「仮名手本忠臣蔵」(関西歌舞伎グループ・中座)
53. 6. 9 文楽教室「曾根崎心中」(朝日座)
54. 6. 11 歌舞伎鑑賞教室「俊寛」(関西歌舞伎グループ・厚生年金会館)
55. 6. 20 狂言教室「末広がり」「棒しばり」(茂山狂言会・本学講堂)
56. 6. 18 文楽教室「新口村」(厚生年金会館)
57. 6. 30 学生能楽鑑賞会・狂言「魚説経」、仕舞「大江山」、能楽「巴」
(大阪能楽会館)
58. 6. 8 歌舞伎鑑賞教室「双蝶々曲輪日記・引窓の段」
(関西歌舞伎グループ・厚生年金会館)
59. 6. 13 狂言教室「萩大名」「棒しばり」(茂山狂言会・本学講堂)
60. 6. 12 文楽教室「新口村」(国立文楽劇場)

古典芸能は、生徒にとってさまざまな面で難解であるだけでなく、ややもすれば退屈しがちなため、国語科が中心となって、授業時間内に事前指導を行い、鑑賞の助けとしている。

この行事は、今後も継続して行れることと思うが、演劇や古典芸能だけではなく、音楽や舞踊など、ふさわしいものがあれば、どんどん取り上げていき、博物館見学と合わせて、生徒の芸術的関心を高め、視野を広げ、多くの楽しみを持たせるようにしたいものである。

2 博物館見学

菊薫る秋の一日、生徒個人では平素あまり体験できない博物館などについて、文化的素養を求めて、見学を実施している。この行事は昭和53年度以来8回を数えるにいたった。生徒は各年度毎に定められた複数の博物館の中から、自由を選んで見学することになっている。今日までに見学の対象となった博物館と、その時どきの特別展示などの主要な内容は次の通りである（順序不同）。なお数字は見学を実施した年度を示す。

国立民族学博物館 (53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60)

京都国立博物館 (53涅槃図の名作と刀装, 54バリ・キメ博物館東洋美術の秘宝と高津コレクション, 55, 57)

奈良国立博物館 (53織物とその技術, 54, 55)

奈良県立民俗博物館 (53, 54寺院と年中行事, 55寺院と年中行事)

天理大学附属天理参考館 (53, 54, 55)

大阪市立美術館 (57北京故宮博物院展, 60シルクロードの遺宝展)

京都市美術館 (59ウィーン美術史美術館展, 60富岡鉄斎展)

神戸市立南蛮美術館 (55)

兵庫県立近代美術館 (55ボナール展)

大和文華館 (55)

平城宮跡資料館 (55)

神戸市立博物館 (57海のシルクロード・東山魁夷展)

大阪市立東洋陶磁美術館 (57)

大阪城博物館 (58秦兵馬俑展など)

逸翁美術館 (58)

伝統工芸京都博覧会 (59)

みさき公園 (56中国恐竜展)

3 講演

本校において行われる講演には、研究部主催の教官対象の講演、教育研究会での各教科の講演、PTA学年集会等での保護者対象の講演、中学校3年生対象の卒業講演、附高祭での講演など定期・不定期の講演があるが、ここでは、昭和57年度入学生からの教育課程で高校3年に学年タイム（金曜日、5・6時限）が新設され、その中で実施された講演について述べる。

(1) 昭和59年度（高27期生対象）の学年タイムにおける講演

① 昭和59年5月18日 「一臨床医としての日々」

講師 岩垣博巳氏 (岡山大学医学部第一外科研究生, 高14期)

臨床医の立場からは、肉体は精神のあやつり人形である。50代に癌にかかったとき、20代、30代に愛の対象を喪失したことによるといわれている。また、大学へは自分から望んで行くものである。親やまわりの期待の投映であっては大学へは進学出来ず、wantの精神がいる。生徒はしばらくwantという言葉をよく口にした。

② 昭和59年6月22日 「雪の結晶の研究あれこれ」

講師 山下 晃氏 (大阪教育大学教授, 気象学)

大学における基礎研究は、一つのことを突破すれば、あとは道が開けるものであり、未知のことは無限にあると語り、ちょっとしたアイデアから雪の結晶を作ることが出来た。また、大学の基礎研究には優れた人に来て欲しいということで、基礎学力 (英語・理科・数学)、行動力 (熱意・体力・議論)、着想力 (好奇心・アイデア) を要求し、生徒は何が大学で求められているかを知ったようである。

③ 昭和59年9月28日 「高校生 心の健康・体の健康」

講師 吉田 脩二氏 (大阪府立中宮病院医師, 思春期精神衛生医学)

思春期外来医の立場よりの話。子どもが母親から離れるのは3才-4才。その頃、父親が自覚され、母親と違って権力がある。父母と子どもの間に三角関係が生ずる。父親を乗り越えられないという現象もみられる。子どもの自立の時期は、父親は、45才から55才で、仕事熱心であり、社会的地位も得られる。一方、母親は、容姿の衰えに気付く頃であり、家庭での曲り角に当たる。子どもは、同一性の獲得の時期であり、全能感にあふれている。この全能感を高めるためには、規制は八分目にし、逃げ道を作ること。そして、愛と信頼を持つことが大切である。生徒は人間というものを考えるようになった。

④ 昭和59年10月19日 「大学、職業、人生」

講師 織田 稔氏 (大阪教育大学教授, 英語学)

人生を振り返ると、人生の軌跡には、表面構造と深層構造がある。同期生は、同じ様な人生を送っているものである。人生の本質とは何かを考え、心のつながりを大切にしたい。しみじみとした味わい深い話に、生徒は感銘を受けていた。

⑤ 昭和59年11月30日 「Why Japan Needs English?」

講師 Miss. Julie Thuras (附中英語科講師)

英語による講演。ミネソタで生まれ、カリフォルニアで学んだ。スウェーデン系。生いたち、学生時代、日本での生活などの話。生徒は、講演後、英語で質問した。生徒に分かる英語での話しぶりであった。

(2) 昭和60年度 (高28期生対象) の学年タイムにおける講演

① 昭和60年7月21日 「新聞記者として生きて」

講師 吉井秀一氏 (毎日新聞社堺支局長, 高7期)

早稲田大学時代に入会した「早稲田精神昂揚会」における活動と経験が人間形成に大いに影響した。例えば、危機状態の森林に植林に行った時の地域と人々との触れ合い、また米俵を背負って自炊と野宿の旅に出かけた時の体験等は一生忘れることの出来ないものである。新聞記者としては、家庭問題、特に離婚問題についての取材を通して、女性が自立という意識をきちんと持ち始めていることが分かり、ま

た、二度と戦争を起こさないよう、特集記事等により読者に訴えている。

② 昭和60年11月15日 「文学的関心とは」

講師 谷本慎介氏（神戸大学講師、高11期）

私の高校時代の家庭環境の変化が自分の精神形成に大きな影響を与えた。すなわち、懐疑精神がこの時に芽生えたようである。この懐疑精神は一生を通じての基本精神になり、今、ニーチェの研究をしている。人は単なる軽薄な理想主義に落ち入らず、今現実にある自分を社会との関係において見つめなおし、疑わなければならない。この様な懐疑精神があればこそ未来への発展へとつながると思う。この様な過程で精神的危機に出会うかもしれない。これを乗り越えるのに文学は大きな助けとなってくれるであろう。

高校3年の学年タイムにおける講演は始まって2年目であるが、意義深いものであり、それだけに人選に苦勞するが、各界で活躍している卒業生などを招くことにより、今後も継続されるものと思われる。

§ 4 図書館の活動

学校施設において「学校図書館は重要なものである」という認識は、学校創設以来一貫して変わっていない。学校図書館の位置付けも、学校の歴史と共にその重さを増してきている。我が校の掲げる“個人を育てる教育”の目標に沿い、生徒の自主的・自発的態度の育成、よりよい学習生活と読書生活の形成、学習の個別化と個性の伸長、発達段階に応じた資料・情報の提供とその利用の指導、視聴覚教育の推進、一般的教養の育成などをねらいとし、多くの先輩教官の努力により、図書館の活動の継続・発展がなされて来たのである。

現在の図書館（南館2階）は、昭和43年にスタートしたものである。蔵書数の増加と共に発展して来た。昭和36年に図書部が独立し、図書館の活動を推進して来た。現在においても図書部が中心となり、司書2名の指導を得て運営している。また、国語科の助力に負うところも大きい。

1 蔵書数の変化と利用状況の変化

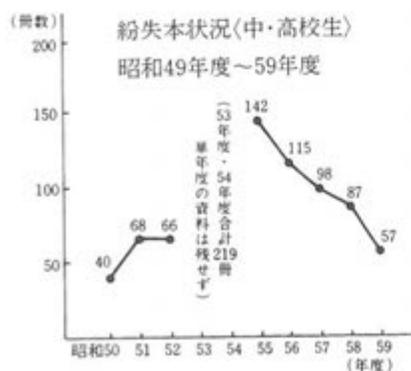
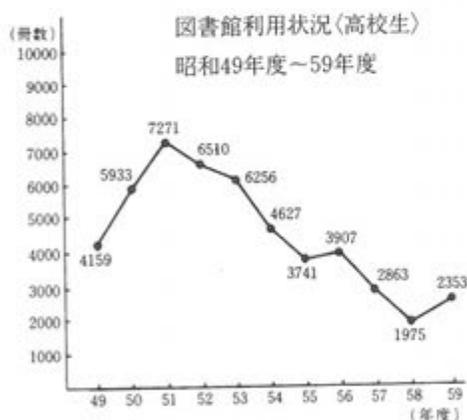
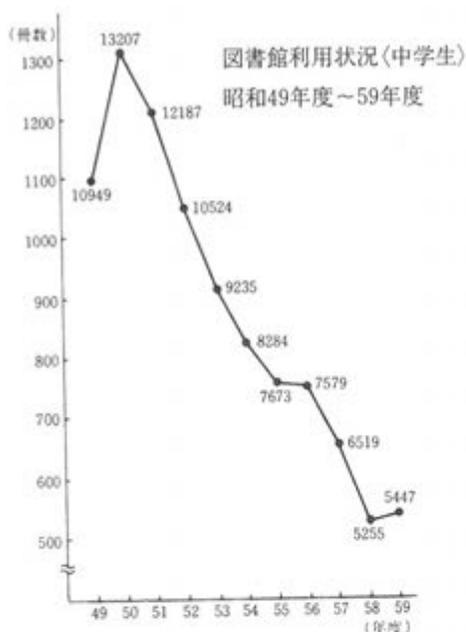
(1)蔵書数の変化

年 度		38	46	52	59	基 準	
蔵 書 数 (冊)		6,701	12,739	19,123	24,361	中学校	高 校
分 類 (蔵書比率%)	0. 総 記	9	6	6	7	7	8
	1. 哲学・宗教	8	5	6	5	3	5
	2. 歴史・地理	15	15	16	16	14	13
	3. 社会科学	11	10	7	9	10	10
	4. 自然科学	12	14	15	14	15	15
	5. 工学・工業	3	4	3	4	5	5
	6. 産 業	3	2	2	2	5	5
	7. 芸術・スポーツ	5	8	8	8	7	7
	8. 語 学	4	4	3	3	6	7
	9. 文 学	30	32	34	32	28	25

(2)利用状況の変化

図書館は、単に書物を提供する場としてあるだけでなく、活動の一環として読書指導や図書館そのものの利用の仕方の指導なども行う。また、近年はカセットデッキ等も図書館に設置され、「耳で聴く」文学作品の紹介及び利用法のPRも同時に行っている。中学校1年生では、4月当初の国語の授業を図書館で行っている。「図書館ガイド」を配布したあと、利用の仕方を指導したり、図書委員の仕事の説明をしたり、生徒に自由に書物を選ばせて読書をさせ、図書館に親しませるという指導を行って来ている。また、その後も国語の授業を図書館で行うこともあり、「生徒が図書館に親しむように」ということをねらいとして実施している。高等学校においても、折に触れて利用指導を行うが、附高図書委員会が作成する高校生用「図書館ガイド」が高校生に対する図書館ガイダンスとなっており、この冊子の役割は大きい。毎年1冊、発行され、四月初配布されている。

最近の中学生、高校生は本を読まなくなっている。このことは附中生、附高生についても言える。附中生は昭和50年をピークに、附高生は昭和51年をピークに、図書館の本の貸出冊数が激減している。ここ2、3年が底と考えられるが、果たしてこの冊数が今後上昇していくのであろうか。もちろん「文庫本時代」に突入している現在、生徒達は、本を借りずに「買って読んでいる」のかもしれない。その冊数についてのデータはないのであるが、おそらくその冊数を加算したとしても、過去の附中



生、附高生の方が、読書量が多かったと考えられる。高校生が、なぜ本を読まなくなったか…。この一因は、おそらく「共通一次」の実施にあると考えられる。「共通一次テスト」というものが、高校生の読書生活を低下させたということが上記の利用状況の推移から予想出来る。また、時代が視聴覚化の流れにあり、「ゆっくり読書する」というムードが失われつつあるようにも思われる。これらの状況の中で、図書館利用の指導及び読書指導は今後いかにあるべきか、本校の大きな課題の一つなのである。

次に、紛失本について。現代の子供は物を大切にしなくなったと言われているが、本校の紛失本の調査記録は統計表から分かるように、昭和53年ごろから昭和57年までは年間100冊を超えるか、それに近い。しかし、昭和59年は57冊という数に減り昭和50年ごろにもどったと考えられる。しかし、昭和50年ごろの貸出冊数を考えると、現在の紛失率は高く、やはり「物を大切にしていない」ということが言える。貸出冊数が増え、紛失本が減るという状態を、学校図書館の理想だと仮定するならば、この10年の歴史は悲しむべき事実を物語っている。この歴史を繰り返さないために教官全員で努力していきたい。

2 校内読書感想文コンクール

読書感想文の指導は、日常は国語科で行うものであるが、夏休みを利用して図書部と国語科が協力し「校内読書感想文コンクール」を行ってきた。これは、主に中学校が中心で、「青少年読書感想文全国コンクール」(主催 全国学校図書館協議会・毎日新聞社)に参加することを前提として行われるものである。近年は、大阪府代表に選ばれることも多くなり、全国大会において優秀な賞を授与される生徒も出ている(昭和58年度・全国図書館協議会会長賞など)。高等学校では、400字詰原稿用紙5枚以内という制限など、指導上幾つかの問題を感じ、参加希望者を募る程度にとどめている。

3 図書委員会の活動

中学校生徒会・高等学校自治会の活動の一つとして各クラスより男女各1名の図書委員が選出され、中学校図書委員会・高等学校図書委員会を構成している。この構成はここ10年変わっていない。中学、高校の縦のつながりは十分とはいえないが、協力し合い、それぞれにその特色を出して活動している。

中学校図書委員会の日常活動には、図書の貸出しと中学生への広報活動がある。前者の仕事は図書委員全員が交替でこの任に当たっている。後者については、週1回の図書委員会を話し合いの場とし、広報方法の工夫など検討しつつ活動している。例えば、図書委員会新聞の記事として、図書委員が推薦する本の紹介や感想文を載せたりしている。また、クラス別読書量調査や学級文庫の整理・拡充にも力を入れている。地味ではあるが、価値ある活動といえるだろう。

高等学校図書委員会では、日常の活動として新着図書の紹介、各クラスの委員が交替で書物を選び、その内容・読後感をまとめた図書紹介を印刷配布し、読書・鑑賞を広く勤めている。

年間を通じての活動としては、「附高図書新聞」と冊子「歳星」の発行がある。図書新聞は年間2回発行されていたが現在は年1回程度になっている。昭和44年7月19日発

行の創刊号から数えて現在18号になっている。

近年は「歳星」の発行が活発で、約10年間で47号出している。

以上のような日常活動、年間活動に加えて高校生用「図書館ガイド」を作り、新年度、新1年生に配布されている。手作りの冊子と言えるもので、約60ページのガリ版本である。昭和48年2月に創刊され、毎年新しい「図書館ガイド」が作られている。これは、図書館を有効かつ正しく利用出来るようにという意図で作られているもので、図書館を利用する者にとって便利な冊子である。

第1号以来、改良が加えられ、ページ数も増えた。図書委員会の大切な仕事の一つとして、自発的・意欲的に取り組まれており、他校からも高く評価されている。

高等学校図書委員会は、以上のような活動を通じて附高生の読書環境の向上と共に読書内容、読書量の向上を目指しているのである。

4 図書館活動の課題

学校図書館の教育に果たす役割は重大であり、本校図書館も蔵書数など増加しつつ、改善拡張されて来た。しかし、問題点も多い。落ちついてじっくり読もうとしない生徒の増加、ものごとをゆっくり味わおうとしない時代背景、深



〔「図書館ガイド」目次〕

も く じ (1985年4月9日発行)

1. はじめに	1
2. 図書館の案内	4
平面図、時間、蔵書数など	
3. 図書館利用規則	7
図書館のマナー、貸し出し・返却のシステムなど	
4. 特別図書と複製版	11
5. 分類・目録	15
各分野についての紹介、説明	
6. I文庫	31
7. 中学生用図書・大型図書・文庫・新書・辞書	35
8. カセット利用法	45
9. 談話室・整理室	49
10. 日本十進分類表	55
11. 図書館の資料	57
12. 近効図書館紹介	59
13. おわりに	61

く考えるということをしなくなっている生徒群など、図書館活動の本質的な問題点をかかえている現在である。附中生、附高生が、10年前も今も読む比率が高い分野は2（歴史・地理）・4（自然科学）・9（文学）である。本校の傾向は大きく変わっていないと言える。だが、10年前ごろにおいては「哲学書」を読む生徒が多くはいなかったにしろ、何人かはいたのである。現在はそういう本は誰も借り出していないようである。（貸し出しカードの日付より考えられる。）また、文学書においても、いわゆる「文学全集」に載る小説はあまり読まれずに、マスコミによって話題にされる本が多く読まれている。こうした現状の中で「中学生日記」だけは10年前も今も附中生のベストセラー的な本であり続けている。「見る本」が増加しつつある時代の流れの中で、いかに「活字」に親しませ、その大切さを見失わないように生徒を指導していくか、これは図書館活動にとっても大きな課題であるという認識を共通理解として研究し努力しなければならないと思うのである。

なお、この10年間に、学校への寄贈が何点かあった。その中で、附中30期・附高24期の八木健造君の御遺族、附中34期の伊東絹代さんの御遺族など、在学中に不幸にして亡くなられた生徒の御遺族からの寄贈は図書館の設備、蔵書などに活用させていただいている。八木君の御遺族からの寄贈はLL設備となり、生徒がいつでも利用出来るようになっていく。また伊東さんの御遺族からの寄贈は「I文庫」という図書館内に特設コーナーを作り、「生きる」というテーマを中心とした本が並べられている。「I」は「あい」と発音され、伊東さんの姓から名付けられたものである。なお、「I文庫」の図書は現在も図書委員会と教員とが協力して選定し加えられていっている。

§ 5 今後の課題

文化活動の全般を通して感ぜられることは、図書館の書物の利用状況の低下にみられるごとく、生徒にどれだけの文化意識、知的好奇心があるかということである。

中学校の自由研究、文化クラブ発表会・展示会、学会会などの生徒の実践活動において、一部の生徒の文化創造レベルは高いものの、総体としてはレベルは下降気味である。これら中学校での経験の質的發展として、高校では自治会主催の附高祭、音楽祭における生徒の自主的な文化の創造へ継承される。いわゆる附高文化の創造である。近年は、TV等マスメディアの影響により、その模倣あるいは手間と暇をかけない大衆受けする安易なものになりさがっている。しかし、時間と労力をかけた文化の創造は一部ではなされている。むしろ、大半は、自分達は文化活動をしている、文化を創造しているという意識はなく、ただ与えられたものを消化するだけであり、その一方では皆にうけるものをということだけになってしまっている。

質の高い文化活動なり文化の創造を生徒に求め、実践させるには、本ものの文化に触れさせることにより、生徒の知的好奇心をかきたてる必要がある。鑑賞、講演等の中・高六年間の見通しの上で、各教科等の協力を得て、積極的に進める必要がある。とくに鑑賞では鑑賞の手引きなどの事前指導を行い、無目的に時間つぶしの鑑賞にならないよう、生徒が目的を持って鑑賞するようにしむけることが重要である。また、鑑賞を通して、生徒の

生き方、文化への関心、文化の創造などがどう変わったかを考察する研究姿勢もいるであろう。生徒が真の文化に接することにより、知的好奇心はかきたてられ、そのことは図書館の利用の活性化にもかかわるものと考えられる。

大仲 政憲
中村 英治
中村 潔
西田 光男
奥 啓一
西谷 泉
濱谷 巖
東元 邦夫
平林 宏朗
本間 俊宏
和田垣 究

保健体育活動

§ 1 保健行事

1 保健行事の目標と概観

(1) 目標

保健行事は、生徒の健康・学校の環境状態を正確に把握し、疾病の早期発見と迅速な処置と疾病予防を行い、生徒の健康の保持増進を図るための保健指導、環境保健を充実させて、教育活動が円滑に行われるよう実施するものである。

(2) 概観

① 定期健康診断

健康診断を疾病異常の早期発見や疾病予防の手段としてだけでなく、健康増進の基盤となる情報収集の手段としても位置付けている。そこで、健康管理上、必要と考えられる検査はより多く実施し、適正な診断結果から総合判定まで短期間で行い、保健者に生徒の健康についての正しい認識と協力を求め、生徒自らも健康管理出来る能力を養わせている。

昭和40年ごろでは珍しかった尿検査や心電図検査も法令の制定よりも早く定期健康診断に取り入れ、また、昭和57年の結核検診の法令改定も不十分と考え独自の検診形態を実施している。

② 臨時健康診断

行事を実施する前に行い、生徒・保護者に健康上の問題を正しく認識させ、問題解決のための手段を講じ、生徒自ら進んでその手段を全う出来るよう支援し、学校行事の適正な運営を図っている。

③ 予防接種

昭和52年度の予防接種法改正により従来の予防接種を厚生省の指導の下に次のように改めた。

- ア 日本脳炎予防接種 中学1年生の希望者に接種し他学年の接種を廃止した。
- イ 風疹予防接種 昭和52年度から中学3年生の女子の希望者に接種することになった。
- ウ インフルエンザ予防接種 52年12月の流行で学級閉鎖をしたため53年度から希望者に接種することになった。

④ 環境衛生

校舎内外を清潔に保ち、換気、採光、照明、体温を適切に行い、飲料水・ごみの処理・便所を衛生的に管理し、学習能率を向上させ、豊かな情操を育成している。

⑤ スポーツテスト

各自が自分の体力に関心を持ち、また特徴を理解し、体力向上と運動生活の改善を図るよう努力させている。

⑥ 安全

校外での安全指導として自転車・単車等の通学を禁止し、校内では施設・設備用具等の定期的な点検を行い、適正な安全管理能力の育成を図っている。

昭和57年には運動生活の向上と安全のため、運動場の大改修が行われ、外傷者が減ったが、一方、わずかな外圧でも骨折する生徒が一般化し、学校健康会の受給者が同年から増え始めている。

⑦ 生徒の傷病状況・健康状態

50年度から59年度までの10年間の生徒の傷病状況・健康状態について表にまとめた。

(ア) 保健室年間利用者数

保健室を利用する生徒の数は、56年度まで増える一方であった。特に運動場での外傷が同年度頭初から急に増加したため、安全対策として、57年度の夏期休暇中に附属運動場の大改修工事が行われた。改修後は外傷者が減っている。

年度	校種 人数 性別	中 学 校		高 校		年度	校種 人数 性別	中 学 校		高 校	
		男	女	男	女			男	女	男	女
50	総 数	1,050	1,281	1,032	595	55	総 数	1,440	1,075	939	609
	1日当り	4.5	5.5	4.4	2.5		1日当り	6.4	4.8	4.0	2.6
51	総 数	1,223	1,124	1,184	780	56	総 数	1,157	1,001	994	661
	1日当り	5.3	4.8	5.1	3.3		1日当り	5.1	4.4	4.2	2.8
52	総 数	1,160	886	1,145	924	57	総 数	899	771	979	599
	1日当り	5.4	4.1	5.0	4.0		1日当り	4.1	3.5	4.2	2.6
53	総 数	1,258	976	964	785	58	総 数	1,046	681	765	534
	1日当り	5.6	4.4	4.2	3.4		1日当り	5.1	3.3	3.6	2.5
54	総 数	1,405	965	1,069	1,019	59	総 数	818	861	543	468
	1日当り	6.3	4.3	4.6	4.4		1日当り	3.6	3.8	2.3	2.0

(イ) 学校安全会 (57年7月に学校健康会と改称される)

学校安全会が発足して間もないころ、重症を負うほどの傷病者もなく、学校安全会に申請する件数もごくわずかであった。ところが、53年ごろからわずかな外圧でも骨折する生徒や、簡単に負傷する生徒が増えだし、学校安全会の申請件数も急に増えだしている。

年度	校種 性別 人数	中 学 生				高 校 島				治療費が500円以上要した傷病者に 給付された。
		男 子		女 子		男 子		女 子		
		件 数	発生率	件 数	発生率	件 数	発生率	件 数	発生率	
38	3	1.0	0	0	2	0.6	0	0	41年度から高校が 1学級ずつ増える。	
39	1	0.3	0	0	1	0.3	0	0		
40	2	0.7	0	0	3	0.8	0	0		
41	6	2.1	0	0	16	4.3	1	0.7		
42	5	1.8	0	0	13	3.3	1	0.6		
43	2	0.7	5	3.4	13	3.3	3	1.8		

校種 性別 年度	中 学 生				高 校 生				
	男 子		女 子		男 子		女 子		
	件 数	発生率	件 数	発生率	件 数	発生率	件 数	発生率	
44	9	3.4	3	2.0	10	2.6	0	0	48年度から中学校 が1学級ずつ増え る。
45	20	7.9	1	0.6	31	8.3	9	4.8	
46	35	18.5	4	2.7	47	12.7	7	3.6	
47	31	12.3	12	8.5	37	10.1	4	2.1	
48	27	10.2	8	5.0	64	17.7	1	0.5	
49	16	18.1	6	3.3	32	9.0	5	2.7	
50	29	10.3	8	4.0	33	9.2	11	6.0	
51	27	9.4	8	4.3	38	10.8	4	2.0	
52	24	8.0	2	1.1	42	12.3	8	3.8	
53	40	12.9	12	6.9	41	12.3	11	5.1	
54	20	6.5	4	2.3	34	10.0	5	2.4	
55	19	6.1	3	1.8	32	9.2	5	2.4	
56	20	6.4	6	3.6	24	6.8	2	1.0	
57	24	7.8	3	7.8	40	11.3	6	3.0	
58	38	12.3	15	8.9	37	10.3	3	1.5	
59	41	13.0	13	7.7	51	14.2	12	6.1	

(ウ) 発育状況

中学校に入学したころの体格と高校3年生の時の体格を表にした。

本校生徒の特徴は、足が長く、ほっそりした体格である。附中34期生（56年度時）附高27期生（59年度時）は、身長・胸囲ともに全国平均値を下回る体格であったが、他の期は全国平均値よりも高い。

校種 項目 性別 年度	中 学 1 年 生 平 均 値								高 校 3 年 生 平 均 値							
	身 長		体 重		胸 囲		座 高		身 長		体 重		胸 囲		座 高	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
50	152.1	152.5	42.6	43.3	73.4	74.9	79.8	81.6	172.3	158.2	58.5	48.9	83.2	78.5	87.9	83.4
51	153.1	152.8	40.8	42.9	73.4	75.0	80.6	81.6	169.7	158.0	59.4	50.8	85.2	79.7	88.6	83.5
52	152.3	152.4	42.7	43.4	71.4	72.5	79.8	80.9	170.3	157.9	62.9	50.9	83.3	80.7	89.7	84.0
53	151.1	153.2	42.8	43.8	70.2	74.4	79.8	79.8	170.8	158.6	62.2	52.4	85.8	81.4	90.5	84.6
54	150.0	152.4	42.1	43.7	73.7	74.2	76.5	79.4	170.0	158.6	61.4	52.5	86.5	82.5	89.2	83.8
55	145.2	153.5	42.6	44.6	70.2	75.1	78.3	82.0	175.8	158.6	61.0	51.2	82.8	80.8	88.1	83.5
56	144.9	151.2	43.7	42.7	71.5	76.0	61.2	80.6	170.8	159.1	60.8	53.1	84.8	80.6	88.5	84.8
57	153.3	151.5	43.8	42.4	72.9	73.5	80.2	80.8	171.5	158.0	62.2	49.7	84.5	79.2	89.5	83.8
58	144.9	153.1	42.4	45.4	71.3	75.9	76.9	81.7	170.5	159.9	61.1	51.0	84.0	81.3	96.2	86.0
59	147.7	153.9	42.1	45.5	71.7	75.5	78.2	81.8	169.1	159.2	62.0	53.4	83.7	81.5	89.8	84.5
60	152.0	153.7	43.5	43.7	69.8	74.6	79.7	82.3	171.4	159.3	62.6	52.5	82.7	79.6	90.3	85.2

(エ) 健康状態

本校の生徒の健康状態は、他の学校と比較すると結核・心疾患・腎疾患・その他の内科的疾患のり患者が少なく、う歯・近視・鼻炎のり患者が多い。特に近視者の被患率は全国の被患率よりも高く、近視予防対策の指導を行っている。視力0.9以下の生徒と鼻炎のり患者について10年間をまとめた。

年 度	科 目 校 種 数 性 別	視力 0.9以下				鼻 炎			
		中 学		高 校		中 学		高 校	
		男	女	男	女	男	女	男	女
50	り患者数	152	76	224	95	23	10	28	4
	被患率	54.2	38.3	63.0	52.1	8.2	5.0	7.8	2.1
51	り患者数	154	111	213	116	7	7	8	8
	被患率	54.0	60.0	61.0	60.0	2.4	3.7	2.2	4.1
52	り患者数	173	105	223	121	15	7	12	5
	被患率	58.0	59.0	66.0	58.0	5.0	4	3.5	2.4
53	り患者数	163	99	227	139	14	4	15	1
	被患率	54.0	61.0	68.1	64.0	4.5	2.3	4.5	0.4
54	り患者数	141	82	227	151	19	4	16	4
	被患率	46.0	48.0	68.0	73.0	6.1	2.3	4.7	1.9
55	り患者数	145	77	233	120	38	21	8	4
	被患率	47.0	46.0	67.0	59.7	12.3	12.7	2.3	1.9
56	り患者数	152	82	216	114	20	5	3	0
	被患率	50.1	50.0	61.3	57.8	6.4	2.3	0.8	0
57	り患者数	167	113	185	117	10	5	10	3
	被患率	54.7	68.0	52.5	59.6	3.2	3.0	2.8	1.5
58	り患者数	158	90	184	112	16	3	4	0
	被患率	51.2	53.5	51.2	58.0	5.1	1.7	1.1	0
59	り患者数	143	96	220	109	58	17	0	0
	被患率	45.5	57.1	61.6	56.4	18.4	10.1	0	0
60	り患者数	163	93	212	119	18	3	3	0
	被患率	51.4	55.4	58.8	62.3	5.7	1.7	0.8	0

2 スポーツテスト

(1) スポーツテストの目的

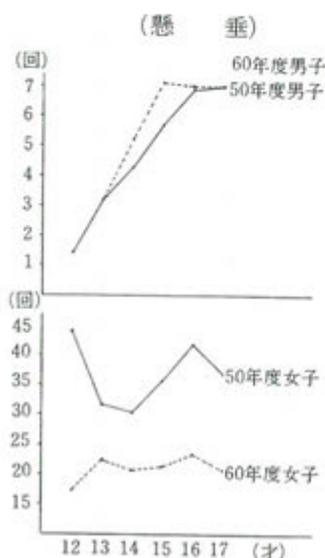
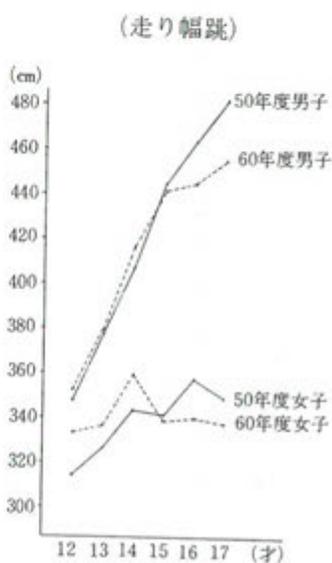
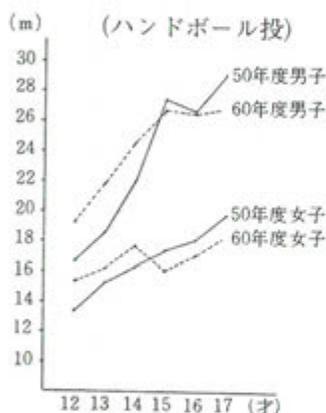
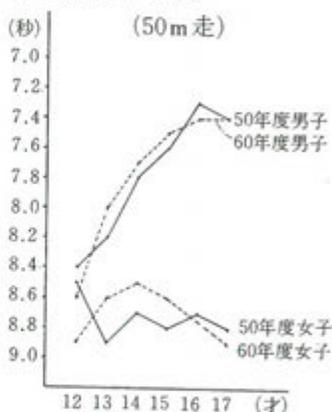
- ① 各自の体力に関する関心を高め、その向上に努力させる。
- ② 各自の体力の特徴を知って、運動生活の改善を図るよう努力させる。

以上のような目的で、毎年4月下旬及び5月上旬に時期を一定にして測定を実施している。そして、その結果を一人一人の生徒に自己診断出来るように個人表を作成し自分の劣っている運動能力、体力について理解させ、今後の1年間の努力目標とさせている。

(2) 昭和50年度と昭和60年度のスポーツテストの比較

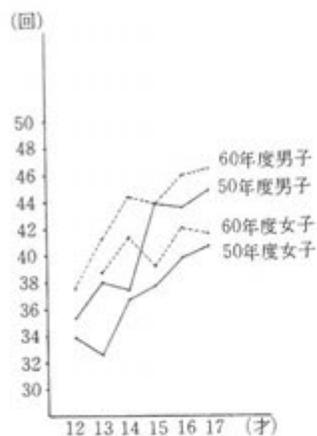
昭和50年度と60年度のスポーツテストの結果を、年齢別(学年別)、男女別に集計し平均値を算出し、グラフにしたのが以下の表である。

[運動能力テスト]

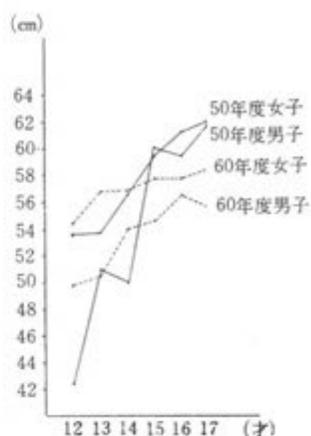


[体力診断テスト]

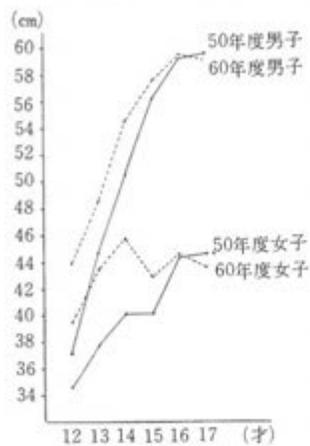
(反復横とび)



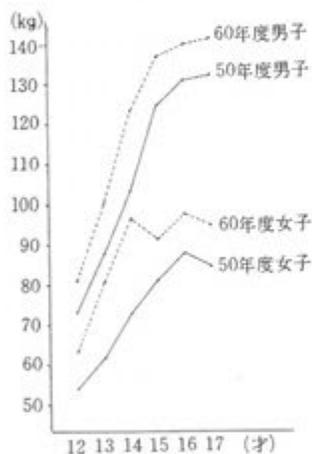
(伏臥上体そらし)



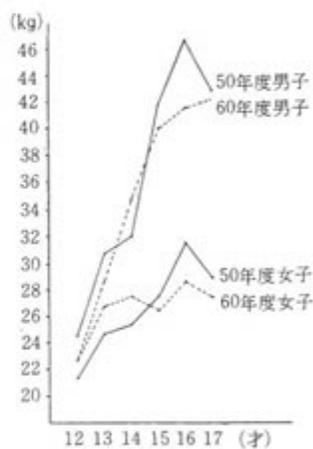
(垂直とび)



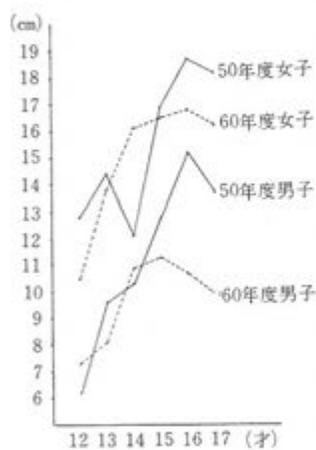
(背筋力)



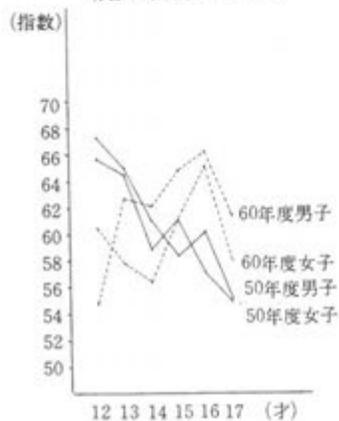
(握力)



(立位体前屈)



(踏み台昇降運動)



§ 2 体育的行事

体育的行事は、本校における教育活動の重要な柱であって、生徒の心身の健全な発達を企図し、学校生活の充実と発展を目指し、加えて楽しく、豊かな潤いのある生活を形成するため、創立以来、今日まで活発に行ってきた。いろいろな体育活動の推進と実行による成果として、質実剛健な気風の涵養、運動生活、運動経験の拡大充実、教師と生徒、生徒相互の人間関係の向上がみられたことは当然のことであり、伝統と校風を形成するための核として、原動力としての役割りを果たしている。各行事の概観を次に示す。

1 体育大会

- 目 標
1. 日ごろの体育の成果を発表し、心身の健全な発達を図り運動する楽しさを味わわせる。
 2. 集団行動を通じて自主性、企画性、協調性を養い、フェアプレイの精神を高めると共に各個人に最善の努力をさせる。
 3. 学校教育に対する家庭の理解と認識を高める。

(1) 春季体育大会実施記録 (中学)

年 度	実施年月日	会 場	内 容	備 考
昭和26年度	昭和26年5月18日	中西青島総合競技場	球技大会 (学年別、学級対抗試合)	<ul style="list-style-type: none"> ・28年より800mリレーを追加 ・32年大会…創立10周年記念大会 ・中学校全生徒がいずれかの体育クラブに加入することが原則となり、クラブ活動の意味で球技大会を廃止し、クラブ活動を主体とした大会に改める。 ・34年～39年高校との合同大会 (高校は球技大会) ・36年より、体操クラブ誕生 ・38年より、野球クラブ、バドミントンクラブ解放 ・中学校生徒の体育クラブへの加入は自由参加となり、体育クラブに加入していない者もあるため、クラブ活動を主体とすることが出来ず元の球技大会の形式にもどる。 ・40年より中・高校の大会を分離、高校は大阪府立体育館にて球技大会を実施。 ・テニス部員の増加により、42年度よりテニスを行うようになった。 ・48年度より、クラブ員以外参加しにくいという理由によりテニスをなくすことになった。 ・50年度より、春に三附中交歓会、春季体育大会が重複し、生徒の疲労等を考慮した結果、行事の精選をする必要性に迫られ、中止という運びになり現在に至っている。
27	27. 6. 11	*	実施種目 実施学年	
28	28. 6. 5	*	野球 (28年よりソフトボール) 1年 2年 3年	
29	29. 5. 27	*	バスケットボール 2年 3年	
30	30. 5. 26	*	バレー・ボール 2年 3年	
31	31. 5. 24木	*	ドッチ・ボール 1年	
32	32. 6. 21金	*	テ ニ ス 1年 2年 3年	
33	33. 6. 20金	*	体育クラブ別校内試合	
34	34. 6. 17水	*	実施クラブ名	
35	35. 6. 14火	*	陸上競技クラブ 野 球 ク ラ ブ バスケットボールクラブ バレーボールクラブ サッカークラブ	
36	36. 6. 19月	大学運動場 中高校運動場	テニスクラブ バドミントンクラブ 柔 道 ク ラ ブ 剣 道 ク ラ ブ 体 操 ク ラ ブ (36年より)	
37	37. 5. 24木	*		
38	38. 5. 24金	*	総力リレー	
39	39. 5. 22金	*	球技大会 (学年別、学級対抗試合)	
40	40. 金	*	実施種目 実施学年	
41	41. 6. 3金	*	ソフトボール バスケットボール バレーボール ドッチボール	
42	42. 6. 9金	大学附属運動場 体育館	1年 2年 3年 2年 3年 2年 3年 1年	
43	43. 6. 7金	*	柔 道 2年 3年	
44	44. 5. 16金	*	実施種目 実施学年	
45	45. 5. 15金	*	ソフトボール バスケットボール バレーボール ドッチボール	
46	46. 金	*	1年 2年 3年 1年 2年 3年 1年	
47	47. 5. 12金	*	サ ッ カ ー 2年 3年	
48	48. 5. 11金	*	テ ニ ス 2年 3年	
49	49. 5. 10金	*	柔 道 2年 3年	

48年度より、1年生のソフトボールを廃止し、ボートボールを実施する。また、2, 3年生のテニスを廃止することになった。

(2) 秋季体育大会 (中学)

〔中・高合同大会の実施記録〕

年度	回数	実施年月日	会場	内 容		備 考	
昭和24	1	昭和24年10月30日(日)	大学運動場	合同体操、徒競走(学年別学級対抗)		・開学記念大会	
	25	25. 10. 30 (日)	附中新運動場	主な実施種目		・校舎、運動場落成記念大会	
	26	26. 10. 21 (日)	附中運動場	入場行進	柔道、假装行列 徒手体操(1年) 卒業生演技追加	・入場行進午後の初めに実施	
	27	27. 10. 12 (日)	附中運動場	合同体操			
	28	28. 10. 11 (日)	附中運動場		柔道廃止		
	29	29. 10. 3 (日)	附中運動場		校外班別リレー追加		
	30	30. 10. 9 (日)	大学運動場	スタンプ(2年)			
	31	31. 10. 14 (日)	大学運動場	ダンス(女子)	校外班別リレー 招待リレー廃止	・高等学校設立にとも ない、中学校・高校 合同体育大会となる。 (31年~39年)	
	32	32. 10. 13 (日)	大学運動場	職員演技	模範演技廃止		
	33	33. 10. 5 (日)	大学運動場	P・T・A演技	假装行列廃止職員演 技、P・T・A演技合併		
	34	34. 10. 4 (日)	大学運動場	模範演技(大学生)			
	35	35. 10. 2 (日)	大学運動場	招待リレー			
	36	36. 10. 8 (日)	大学運動場		中・高連絡クラス対抗 紅白リレー追加		
	37	37. 10. 7 (日)	大学運動場		球技(バレーボ ール・バスケット ボール)追加 レクリエーショ ン演技廃止		・競技種目追加のため中・高 会場を分ける中学校、午前 球技、午後徒競走、団体演 技、高校午前徒競走、招待 演技、午後球技
	38	38. 10. 6 (日)	大学運動場				・中・高会場合併
	39	39. 10. 4 (日)	大学運動場				
	40	40. 10. 3 (日)	大学運動場		体育クラブ演技・器 械運動(3年)追加 レクリエーション演 技復活球技廃止		・中学校、高等学校の大会を 分る、中学校の大会市立 高野球場で陸上競技大会 実施、中学校単独の大会 となる。
	41	41. 9. 25(日) 41. 10. 9(日)	大学運動場				

〔中学校単独大会後の実施記録〕

年度	回数	実施年月日	会場	主な実施種目	備 考
昭和41	18	昭和41年10月9日(日)	大学運動場	団体演技	中学校単独大会となる。
	42	42. 10. 1 (日)	大学運動場	大行進	
	43	43. 10. 29 (日)	大学運動場	合同体操	50m走廃止
	44	44. 10. 5 (日)	大学運動場	ダンス	
	45	45. 10. 4 (日)	大学運動場	スタンプ	80mハードル追加
	46	46. 10. 3 (日)	大学運動場	学年自由演技	
	47	47. 10. 1 (日)	大学運動場	クラブ演技	スタンプ中止 クラブ演技廃止
	48	48. 10. 10 (日)	大学運動場	生徒会企画	ダンス中止、ABC対抗リレー中止 生徒会企画追加、応援合戦
	49	49. 10. 6 (日)	大学運動場	フォークダンス	生徒会企画 応援合戦
	50	50. 10. 10 (日)	大学運動場	徒競走	ダンス再開、ABC対抗リレー再開 生徒会企画フォースダンス
	51	51. 10. 3 (日)	大学運動場	100m	
	52	52. 10. 2 (日)	大学運動場	200m	
	53	53. 10. 1 (日)	大学運動場	400m	
	54	54. 10. 7 (日)	大学運動場	80mハードル	生徒会企画 風船わり
	55	55. 10. 5 (日)	大学運動場	1500m	生徒会企画 玉入れ
	56	56. 10. 4 (日)	大学運動場	500mリレー	
	57	57. 10. 3 (日)	大学運動場	総力リレー	
	58	58. 10. 2 (日)	大学運動場	ABC, ABCDリレー	
	59	59. 10. 7 (日)	大学運動場	50m	ダンス廃止、生徒会企画なし
	60	60. 10. 6 (日)	大学運動場	その他	生徒会企画なし
	61		大学運動場	P・T・A演技	フォークダンス、生徒会企画廃止

[新記録 (中学単独大会以後)]

種目	50m		
性別	女		
学年	3	2	1
41	7秒6 江口江美子(S29)		
42	7秒6 江口江美子		



種目	100m						200m					
	男			女			男			女		
学年	3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1
41	12秒5 西本 博美 (S33)	12秒8 藤井 清美	13秒4 吉田隆三郎 (S40)	15秒2 上村美佐子 (S36)	15秒4 池内 陽子	14秒8 野村登志子	26秒1 矢倉 義久 (S39)	23秒7 畑屋 俊彦	29秒8 小幡 喜嗣	24秒3 赤崎 容子	34秒1 天野由美子	34秒0 鈴木 喜子
42		*	*	*	14秒8 野村登志子				27秒5 中西 源夫		31秒5 吉川 勇代	
43	12秒1 池上 博雅	*	*	*	*	14秒4 竹村 佳子	*	27秒7 高井 和彦	*	31秒0 野村登志子	*	31秒4 島 美智子
44	*	*	*	*	14秒6 藤原 千里	*	*	26秒8 辻 康之	*	*	30秒7 島 美智子	*
45	*	*	*	14秒6 藤原 千里	14秒5 北川 晴代	*	26秒1 辻 康之 矢倉 義久	*	27秒2 西 慎一	29秒9 島 美智子	*	*
46	*	*	*	14秒2 北川 晴代	14秒1 山中佳以子	*	*	*	*	*	30秒5 佐藤 一恵	*
47	*	12秒7 白川 正道	*	13秒7 山中佳以子	*	*	*	*	*	*	*	*
48	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	29秒7 金田 知子
49	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	29秒4 金田 知子	*
50	*	*	*	*	*	*	26秒0 入野 昭介	*	*	29秒3 金田 知子	*	*
51	*	*	*	*	*	14秒4 竹村 佳子 岩井万希子	*	26秒8 辻 康之 辻岡 光一	*	*	*	*
52	*	*	*	*	*	*	*	26秒0 正田 文裕	*	*	*	*
53	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
54	*	*	*	*	*	*	25秒5 小林 亮	*	*	*	*	*
55	*	*	*	*	*	14秒4 竹村 佳子 岩井万希子 岡村由美子	*	*	*	*	*	*
56	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
57	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
58	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
59	*		13秒4 吉田隆三郎 鶴谷 尚信	*	*	*	*	*	*	*	*	*
60		12秒4 鶴谷 尚信	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

種目	400m			1500m			80 m H			
	男			男			男		女	
	3	2	1	3	2	1	3	2	3	2
41	60秒0 福浜 寿男 (S36)	63秒0 飯田 潤	64秒8 川崎 俊弘	4分53秒3 性野川谷成之 (S35)	5分15秒0 吉田健三郎	5分38秒0 榎本 匡慶				
42			..							
43	58秒9 川井 優	61秒4 京井 克	..	4分53秒2 北 克則	4分56秒7 関本 圭	5分25秒0 西野 精治				
44	58秒0 京井 克	*	..	4分52秒 関本 圭	*	*				
45	*	*	*	4分51秒6 高瀬 宏彰	4分50秒8 富田 大介	5分22秒4 榎井 克規	13秒2 新田 豪 山口 英之	13秒0 東 彰雅 岡村 哲也	14秒6 竹村 佳子	16秒4 藤田 マリ
46	*	*	*	*	*	*	12秒4 岡村 哲也	*	*	15秒8 近藤 綾子
47	*	*	*	*	*	5分14秒5 上敷留正俊	*	*	*	*
48	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
49	*	*	*	*	*	5分9秒2 菅井 教夫	*	*	*	14秒6 磯上千恵子
50	*	*	*	*	4分45秒8 菅井 教夫	*	*	*	14秒1 磯上千恵子	*
51	*	*	*	4分48秒6 菅井 教夫	*	*	*	*	*	*
52	*	*	*	4分48秒4 泉岡 利雄	*	*	*	*	*	*
53	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
54	*	*	*	*	*	*	*	12秒8 関本 達也	*	*
55	*	60秒2 安東 茂祝	*	4分47秒6 坂口 元一	*	*	12秒3 関本 達哉	*	*	*
56	*	*	*	4分46秒9 沢田 直之	*	*	12秒3 関本 達也 竹中 健	*	*	*
57	*	*	*	*	4分45秒5 井本 貴之	5分6秒3 甲野 純正	*	12秒5 高橋 大二	*	46秒6 磯上千恵子 津田圭以子
58	*	*	*	4分36秒6 井本 貴之	*	*	*	*	*	*
59	*	*	*	*	*	*	*	*	14秒4 鎌田 裕子	*
60	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

種目	500m R					
	男			女		
	3	2	1	3	2	1
60	64秒8 木村 康雄 岡田 良平 小野 隆文 土居下充洋	67秒9 松倉 功治 高木 啓輔 眞鍋 晃篤 鶴谷 尚信	74秒5 淵側 友晴 桑名 智寛 岡 慎也 川口 健	78秒2 岐保 博子 宮川さおり 吉川恵美子 濱田 有紀	79秒2 山根 雅美 大川 玲子 岡田 珠恵 深江 麻起	79秒1 上林真理子 志賀 美苗 高橋 朋子 研橋 玲子

種目	A B C D 対抗R		
年度	1分49秒2		
60	河田 淑子 西浦 学	上田 美里 津村 和寿	中森 美和 長澤 大輔



昭和60年度 秋季体育大会準備日程

月	日	曜日	行 事 名	内 容
9	3	火	教 官 会 議	準備日程案 特別練習日程決定 演技計画決定 教官事務分掌決定 プログラム決定
	7	土	体育委員会	演技計画発表 生徒事務分掌案作成・決定
	11	水	生 徒 議 会	指導教官発表 大会査員選出
	13	金	体育大会各係長任命	任命式（生徒集会）
	14	土	体育査員会	各係員選出打ち合わせ 大会準備進行打ち合わせ
			選手名簿用紙配布	
	21	土	選手名簿提出 各係別打ち合わせ会	体育委員がまとめて係教官に提出 指導教官と係生徒打ち合わせ
27	金	特別練習（第1回）	会場整備・徒競走・大行進・体操（午後）	
10	30	月	特別練習（第2回）	大行進・学年演技練習・総力リレー・体操（午後）
	3	木	特別練習（予備日）	
	4	金	体育委員会	大会準備最終打ち合わせ
			各係別打ち合わせ会	大会当日の細部打ち合わせ
	5	土	大 会 準 備	準備完了
	6	日	体 育 大 会	当 日
	10	木	予 備 日	



（表紙のデザインは生徒の作品である。）

昭和60年度 秋季体育大会演技計画

種 目	参加者 (数字は各クラス的人数)						備 考	
	男 子			女 子				
	3年	2年	1年	3年	2年	1年		
団体演技	大 行 進	全			全			学年・学級別 4列縦隊 女子前 3・2・1年の順
	合 同 体 操	全			全			ラジオ体操 第2
	学 年 企 画	全			全			学級対抗の場合総得点50点を配分 演技15分以内
徒 競 走	100m走	8	8	10	6	6	8	1.徒競走には、1人1種目に必ず出場しなければならない。 2.2種目出場する場合はリレーを兼ねる。 3.競走は学年別に行ない順位を決定する。 4.1500m走は、全員同時にスタートするが順位は学年別とする。 5.リレーは各クラス2チーム(1チーム4名)とする 6.2・3年男女の障害走は、ハードル走とする。 7.得点 個人レース 1位8点 2位7点……8位1点 但し1500m走 1位8点 2位7点 3位6点 4・5位5点 6・7位4点 8・9位3点 10・11位2点 12位1点 リレー 1位 16点 2位14点……8位2点 8.総力リレー 各クラス2チーム1周を3人で走る。 得点 1位24点 2位21点……8位3点。 9.ABCD対抗リレー チームの編成は学年通しのクラス別とする 各学年男女1名6人とする。 得点 1位12点 2位9点……4位3点
	200m走	6	6	6	2	2	4	
	400m走	2	2	4				
	1500m走	3	3	3				
	80mハードル走	4	4		4	4		
	500mリレー	8	8	8	8	8	8	
	総力リレー	全	全	全	全	全	全	
PTA演技	1	1	1	1	1	1		
フォークダンス								

日 時……昭和60年10月6日(日) 午前9時15分～3時45分
雨天の場合10月10日(木)

場 所……大学運動場

競技方法……学年別・学級対抗, 学年通しの学級対抗とする。

表 彰……各学年別1位, 全学年クラス別総合1位, 新記録樹立者を表彰する。

服 装……特別の指示を受けた者を除き, 教科体育時に使用しているものを着用する。

クラスカラー…A組(赤) B組(白) C組(青) D組(黄)

注 意……○生徒は必ず規定の種目に出場すること。もし, 病気その他の理由により出場出来ない場合は、担当教官に届け、指示を受けること。
○練習や準備を行う場合は、必ず担当教官の許可を受け安全に気をつけて行うこと、また用具の整理に心掛け、登下校の時間は厳守すること。

備 考

開会式

1. 開会のことば
2. 校歌斉唱
3. 学校長挨拶
4. 生徒代表宣誓

大行進

1. 大行進
2. 学長挨拶
3. PTA会長挨拶
4. 応援歌斉唱

閉会式

1. 成績発表
2. 表 彰
3. 講 評
4. 万才三唱
5. 閉会のことば

昭和60年度 秋季体育大会 プログラム

午 前 の 部				午 後 の 部			
No.	演 技 種 目	出 場 者	時 間	No.	演 技 種 目	出 場 者	時 間
開 会 式			9:15	大 行 進			13:00
1. 開会のことば 3. 学校長挨拶				1. 学長挨拶 3. 応援歌斉唱			
2. 校歌斉唱 4. 生徒代表宣誓				2. PTA会長挨拶			
演 技	1	合同体操	全学年男女	9:25			
	2	100m競走	全学年男女選手	9:40	10	ABCD対抗リレー	全学年男女選手 13:25
	3	1年団体演技	1年男女	10:00	11	2年団体演技	2年男女 13:35
	4	2年総力リレー	2年男女	10:20	12	1年総力リレー	1年男女 13:50
	5	400m競走	全学年男選手	10:35	13	3年総力リレー	3年男女 14:05
	6	1500m競走	全学年女選手	10:50	14	PTA演技	保護者、職員 14:20
	7	3年団体演技	3年男女	11:10	15	500mリレー	全学年男女選手 14:40
	8	200m競走	全学年男女選手	11:25	16	全体企画 フォークダンス	全 員 15:00
	9	ハードル競走	2・3年男女選手	11:45			
休 憩			12:00	閉 会 式			15:30
昼 食				1. 成績発表 4. 万歳三唱			
				2. 表 彰 5. 開会のことば			
				3. 講 評			

中体育大会プログラム表紙（デザインは生徒の作品である。）



中体育大会プログラム表紙



(3) 春季体育大会 (高校)

回	年度	実施月日	場 所	主 要 内 容	備 考
1	31	5月24日	学 校 内	<ul style="list-style-type: none"> ○ソフトボール ○バレーボール ○バスケットボール 	※昭和34年度～昭和39年度までは、中学校と合同開催
2	32	6月21日	同 上		
3	33	6月20日	同 上		
4	34	6月17日	中モズ競技場		
5	35	6月14日	同 上		
6	36	6月19日	学 校 内		
7	37	5月24日	同 上		
8	38	5月24日	同 上上		
9	39	5月22日	同 上上		
10	40	5月6日	府立体育館	<ul style="list-style-type: none"> ○バレーボール ○バスケットボール ○柔 道 開 会 式 閉 会 式 1. 整列点呼 1. 成績発表 2. 校舎主任訓辞 2. 表 彰 3. 競技上の注意 3. 講 評 4. 応援歌 5. 準備運動	※昭和50年度より、柔道を除く
11	41	6月24日	同 上		
12	42	6月15日	同 上		
13	43	6月20日	同 上		
14	44	5月12日	同 上		
15	45	5月7日	同 上		
16	46	5月7日	同 上		
17	47	5月8日	同 上		
18	48	5月9日	同 上		
19	48	6月14日	同 上		
20	50	6月11日	同 上		
21	51	5月7日	同 上		
22	52	5月17日	同 上		

※春季体育大会中止の理由

52年度の新学期に入って、前年度から教官会議で提案されていた、全ての学校行事の見直しという観点から、行事検討委員会が設けられた。なかでも特に修学旅行の変更についての行事委員会の話題のなかで、5月の行事（スポーツテスト、身体計測、高1合宿、春体、修学旅行等）について議論がなされた。高1合宿、春体について、公共施設を利用するため本校が理想とする日程がうまくとれない。新学期早々、もう少し落ちついた環境で学習させたい。(春体は放課後及び昼休みを利用して、予選を行っている)。高1合宿のための委員活動が不十分になる(放課後予選のため時間が取りにくい)等々の意見があり、春体そのものの意義は認めながらも、学校運営上、春体廃止が教官会議で決定された。

(4) 秋季体育大会 (高校)

回	年度	実施月日	場 所	主 な 内 容	備 考
1	31	10月14日	学 校 内	陸上競技(トラック) 団体競技 個人競技 女子ダンス	※昭和31年度～39年度までは 中学との合同大会
2	32	10月13日	同 上		
3	33	10月5日	同 上		
4	34	10月4日	同 上		
5	35	10月2日	同 上		
6	36	10月8日	同 上		
7	37	10月7日	同 上	〈午前〉陸上競技(走), 団体競技, 個人競技, 女子ダンス 〈午後〉バレーボール, スケットボール	※40年度から、高校独自の大会となる。
8	38	10月6日	同 上		
9	39	10月4日	同 上	陸上競技(走)・団体競技・個人競技・女子 ダンス, 球技(バレーボール, スケットボール)	
10	40	10月4日	長居陸上競技場	トラック競技	
11	41	10月3日	同 上		
12	42	10月2日	同 上		
13	43	9月24日	同 上		
14	44	9月29日	同 上		
15	45	9月28日	同 上		
16	46	9月22日	同 上	100m走 200m走 400m走 1500m走 80m H走 1500m障害 400m R走 総力リレー	
17	47	9月25日	同 上	フィールド競技	※50・51年度大会は、長居競 技場改装の為変更。
18	48	10月3日	同 上		
19	49	11月14日	同 上		
20	50	10月17日	万国博記念公園 陸上競技場		
21	51	10月1日	同 上	走 幅 跳 三段跳 (男子) 走 高 跳 砲丸投	※55年度大会は長居競技場使 用日程うまくとれず変更。 ※56年度より、女子100m H が80m Hに変更。
22	52	10月25日	長居陸上競技場		
23	53	10月7日	同 上		
24	54	10月2日	同 上		
25	55	10月2日	万国博記念公園 陸上競技場		
26	56	10月20日	長居陸上競技場		
27	57	10月6日	同 上		
28	58	10月13日	同 上		
29	59	10月11日	同 上		
30	60	10月2日	同 上		

秋季体育大会新記録表 (高校)

(男 子)

種目 年度	100 m 走	200 m 走	400 m 走	1500 m 走	80m H 走	100 m H走	1500 m 障害走	400 m R	走幅跳	三段跳	走高跳	砲丸投	2000 m 競走
40	11" 8 山田 正夫 (30)	25" 9 山田 忠治	57" 5 西本 博美 (35)	4' 49" 5 亀屋 健司	12" 1 飯田 勉		5' 07" 8 岡口 清	49" 3 片芝・丹治 片芝 賢二	5m85	12m37 時 豊之	1m70 飯田 勉	12m64 宮脇 悦郎	
41	11" 8 藤田 正広	25" 5 大井 明雄 矢倉 義久	56" 1 藤田 治					48" 5 矢倉・藤江 石橋・藤田	6m10 木村 治兵	12m42 矢倉 義久		13m32 片山 正徳	
42		24" 6 田村 和男		4' 46" 8 北浦 謙一	12" 0 堀畑 裕一				6m28 藤田 政幸				
43	11" 6 藤井 清和	24" 5 内村 勉		4' 37" 5 岡 圭	11" 8 堀畑 裕一								
44		24" 2 池上 博輝			11" 5 元田 暢人					12m46 元田 暢人	1m71 木村 義人		
45							5' 06" 2 関本 宏			12m69 元田 暢人	1m72 高木 正人		
46							5' 00" 0 関本 宏	84" 4 吉次・吉村 江見・池上			1m85 吉村 盛善		12' 29" 関本 泰司
47						14" 5 吉次 良師	4' 54" 8 富田 大介						
48				4' 23" 8 関本 力	14" 4 吉次 良師								12' 13" 9 津国 清隆
49						14" 2 岡村 哲也	4' 45" 1 富田 大介						11' 31" 8 富田 大介
50	11" 6 白川 正通							48" 4 安藤・堀 瀬部・白川					
51	11" 6 西田 裕志	24" 0 保田 謙前	56" 0 藤原 章裕			14" 1 堀内 敏彦		46" 8 島田・安藤 白川・瀬部					
52			55" 6 金原 克也					46" 7 吉崎五月女 天野・西田					
53						13" 5 堀 謙一郎						13m72 三浦 信幸	
54	11" 6 境 信輔		53" 0 泉岡 利雄							12m99 田中一二三			10' 47" 7 笹井 教夫
55		24" 0 小林 亮											
56	11" 5 藤田 幸久							46" 6 藤日井・小林 藤田・若林	6m34 多屋 貞一				
57				4' 22" 1 石田卓太郎							1m95 西村 豊彦		
58				4' 19" 8 上堂 文也									10' 44" 2 上堂 文也
59		23" 8 上坂 恵一					4' 44" 0 上堂 文也						
60			53" 0 上坂 恵市	4' 15" 7 岸本 貴之									

(注) 1. 昭和47年度より、80mハードルが100mハードルに変更。

2. 昭和46年度より競歩2000mを加える。

(女 子)

種目 年度	100 m 走	200 m 走	80 m H 走	100 m H 走	400 m R	走 幅 跳	走 高 跳	砲 丸 投	1000 m 競 歩
40	14" 7 浜口 久代	33" 2 平井佳代子	16" 7 尾崎みや子		60" 8 石黒・高橋 浜口・榎田	4 m09 新堂 育子	1 m36 藤本 博子	9 m16 坂田 留美	
41		32" 9 辻本 咲子	16" 6 舟川 千秋		58" 1 吉村・二木 鉄谷・山本	4 m34 浜口 久代		9 m33 坂口 京子	
42		30" 4 吉村 房子	15" 4 熊谷満幸子						
43								10m64 井上 和代	
44	14" 4 坪井 祥		14" 4 田中美智子					11m65 井上 和代	
45			13" 9 堀畑 淳子		57" 7 堀畑・辻田 杉本・上野	4 m93 上野 好永			
46		30" 00 杉本 淳子					1 m43 堀畑 淳子		6' 39" 0 辻仲千佳子
47				18" 8 藤田 マリ					6' 34" 0 土師 加寿
48	13" 3 山本佳以子	29" 8 前川あおい		17" 6 藤田 マリ	56" 6 小林・北川 石川・前川				
49		29" 8 山本佳以子		17" 4 藤田 マリ	56" 5 赤井・佐藤 松浦・山本				
50		28" 1 山本佳以子							
51									
52					55" 8 三輪・磯上 白井・金田				6' 22" 0 小野 道子
53									
54				17" 0 森田 啓子					
55									
56									
57									
58									
59			13" 8 宮浦 円 藤原 晴子						
60			13" 5 藤原 晴子						

- (注) 1. 昭和47年度～昭和55年度までは100mハードルを実施。80mハードルはなし。
2. 昭和46年度より競歩1000mを加える。

昭和40年度（第10回）秋季体育大会実施要項

1. 日 時 昭和40年10月4日(月) 8時40分集合完了(運動服), 出席点呼
2. 場 所 長居陸上競技場(阪和線「鶴ヶ丘」駅下車)
3. 競技方法 ○学年別クラス対抗及び学年を通してのA・B・C・D対抗とする。
4. 種目その他

種 目	各組よりの出場人数						出 場 規 定	得 点	
	1男	2男	3男	1女	2女	3女			
トラック種目	100m	16	12	12	10	10	8	① 全生徒は, ・リレーを除くトラック競技の中の1種目 ・総力リレー ・フィールド競技の中の1種目の3種目に必ず出場する。 ② 1人の生徒は4種目まで出来る。	決勝競技の 1位=8点 2位=7点 …… 8位に1点 但し、リレーは 1位=30点 2位=25点 …… 6位=5点
	200m	12	8	12	4	4	4		
	400m	8	6	4					
	1500m	10	6	4					
	80mハードル	12	12	12	8	8	6		
	1500障害	8	6	6					
	400mリレー	4	4	4	4	4	4		
総力リレー	2チーム	2チーム	2チーム	2チーム	2チーム	2チーム			
フィールド種目	走幅跳	18	15	15	8	8	6	とする	
	三段跳	18	10	10					
	走高跳	12	10	10	6	6	6		
	砲丸投	18	15	15	8	8	6		

- | | |
|--|---|
| 開会式 ① 入場行進
② 国旗・校旗掲揚
③ 校舎主任あいさつ
④ 生徒代表宣誓
⑤ 競技上の注意
⑥ 応援歌
⑦ 合同体操 | 閉会式 ① 成績発表
② 表彰
③ 講評
④ 国旗・校旗降納 |
|--|---|

5. 表 彰
 - ・団体優勝には、優勝旗を授与する。
 - ・学年別優勝者には、賞状を授与する。
6. その他
 - ・競技に参加出来ない者は、医師の診断書を提出し、審判を行う。
 - ・服装……体育の服装に出場のときは半パンツとする。
紅白ハチ巻を使用。
 - ・スパイクの使用禁止。

昭和40年度（第10回）秋季体育大会プログラム

8時40分	集合完了（運動服），出席点呼
8：50	入場行進、開会式
9：20	(1 全) 総力リレー
9：30	(2 男) 1500m決勝（1組） (3全) フィールド競技
10：10	(1・2 男) 400m予選（6組）
10：25	(1・2・3 男) 200m予選（10組）
10：40	(1・2・3 男女) 100m予選（22組）
11：00	(1・2・3 男女) 80mハードル予選（18組）
11：20	(1 男) 1500m決勝（1組） (2全) フィールド競技
12：00	(1・2・3 男) 1500m障害決勝（3組）
12：30	昼 食
1：10	(3 全) 総力リレー
1：20	(2 全) 総力リレー
1：30	(3 男) 1500m決勝（1組） (1全) フィールド競技
2：20	(1・2 男) 400m決勝（2組）
2：30	(1・2・3 男女) 200m決勝（6組）
2：45	(1・2・3 男女) 100m決勝（6組）
3：00	(1・2・3 男女) 80mハードル決勝（6組）
3：20	(1・2・3 男女) 400mリレー決勝（6組）
3：40	閉会式

高体育大会プログラム表紙
昭和51年度



昭和59年度 秋季体育大会



昭和60年度（第30回）秋季体育大会実施要項

- 1 日 時 昭和60年10月2日（水）8：40（集合）～16：30（解散）
- 2 場 所 大阪長居陸上競技場（阪和線「鶴ヶ丘」又は地下鉄「長居」駅下車）
- 3 競技方法 ☆学年別クラス対抗及び全学年を通してA・B・C・D対抗とする。
☆各競技は、学年別に行う。
- 4 種目及び出場人数

種目	人数	各クラスの出場人数		出場規定	得点
		男子	女子		
ト ラ ッ ク	100m	3名以上	2名以上	(1) 全生徒は ◆400mリレーを除くトラック 競技のうち1種目 ◆フィールド競技の1種目 ◆総力リレー 上記3種目に、必ず出場する こと。 (2) 400mリレー競技は(1)の種目 以外に出場することができる。	後日・別紙で報告する。
	100m H	3名以上			
	80m H		3名以上		
	200m	3名以上	2名以上		
	400m	3名以上			
	1500m	3名以上			
フ ィ ー ルド	1500m障害	3名以上			
	400mリレー	2チーム	2チーム		
ク エ ス ト	総力リレー	2チーム	2チーム		
	競歩	希望者	希望者		
	走幅跳	3～10名	2～7名		
	走高跳	3～6名	2名以上		
フ ィ ー ルド	三段跳	3名以上			
	砲丸投	3～10名	2～7名		

- 5 表彰 ABCD対抗優勝には、優勝旗を授与する。
学年別クラス対抗優勝学級には、賞状を授与する。
学年別種目優勝者には、賞状を授与する。
大会新記録樹立者には、賞状とメダルを授与する。
- 6 その他 服装 体育の服装で、帽子のかわりにハチ巻を使用する。
競技に出場する時は、半パンツを使用する。
スパイクシューズの使用は禁止し、運動靴を使用する。
見学者 健康上の都合で、選手として参加できない者は、愛護教諭の指示を受け、体育教官に申し出て、適当な指示を受けること。
小雨決行 6時30分現在で決行かどうかを決定する。

昭和60年度（第30回）秋季体育大会プログラム

昭和60年度（第30回）体育大会プログラム

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

- 8：40 集 合（出席点呼、諸連絡）〔競技場外に集合〕
- 9：00 開 門（それぞれ決められた場所で更衣する。）
- 9：15 開 会 式 (1) 校舎主任あいさつ
(2) 生徒代表宣誓（自治会会長）
(3) 競技上の注意（生徒審判長）
(4) 準備体操（自治会体育委員長）
- 9：40 100m走予選 (2・1・3女；2・1・3男)
- 10：30 400m走予選 (2・1・3男)
- 10：45 200m走予選 (2・3女；1・3男) 9：50
- 11：00 80mハードル走予選 (2・1・3女)
- 11：15 100mハードル走予選 (2・1・3男) フィールド競技（1全）
- 11：30 1500m障害走決勝 (2男)
- 11：40 1500m障害走決勝 (3男) 11：40
- 11：50 1500m障害走決勝 (1男) フィールド競技（2全）

〈 昼 食 〉

(11：00～1：00の間に出場時刻に合わせて適宜ませること。)

- 12：00 総力リレー (3全)
- 12：20 総力リレー (1全)
- 12：40 1500m走決勝 (3男)
- 12：50 400m走決勝 (1・2・3男)
- 1：05 200m走決勝 (1・2・3女；1・2・3男)
- 1：20 100m走決勝 (1・2・3女；1・2・3男)
- 1：40 80mハードル走決勝 (1・2・3女) 1：40
- 1：55 100mハードル走決勝 (1・2・3男) フィールド競技（3全）
- 2：15 総力リレー (2全)
- 2：35 1500m走決勝 (1男)
- 2：45 1500m走決勝 (2男)
- 3：00 400mリレー決勝 (教 官)
- 3：15 400mリレー決勝 (1・2・3女；1・2・3男)
- 3：40 競 歩 (1・2・3男女希望者)
- 4：00 閉 会 式 (1) 成績発表（個人）
(2) 成績発表（団体）
(3) 講 評
(4) 応 援 歌
- 5：00 解 散

高体育大会プログラム表紙一覧



2 臨海訓練

臨海訓練はプールにおける水泳指導と関連して実施することにより、いっそう効果を高め、意義の深い行事になることは明白なことである。しかし残念ながら、本校においては創立以来、現在（昭和58年3月）に至るまで、諸般の事情からプール施設がなく、その早急な設置を待望している現状である。従って本校での臨海訓練は夏季に海浜を利用し、生徒の健康の維持増進を図り、水泳指導、遠泳指導、生活指導などの特別の教育計画を立てることによって実施して来たのである。

なかでも遠泳指導は泳ぎの持久力を付け、海になれると共に、疲労、寒さ、心理的単調感、恐怖心など、自分の体力、気力の限界に挑戦して、これを乗り越える頑強な精神力を養うに最も重要な核としてとらえ、3km（150分）の遠泳を実施して来た。

また、訓練期間中は各種の泳法の指導は勿論のこと、「一に監督、二に指導」といって安全管理には特に留意し、事故防止に万全の態勢をとり、教育効果を上げて来ている。なお、昭和38年からは夏季休暇中に大阪プールを2日間借り切り、飛び込み講習並びに水泳テストを実施し訓練の効果と結実を高らしめている。この大阪プールでの練習は当初において、一流選手が競技し、あまたの記録を樹立した場所でもあったこととて、生徒達は大変感激したものである。

次に臨海訓練の目的、実施状況、日課表、指導計画についてのあらましを示す。

(1) 臨海訓練（中学）

目 的

1. 水泳の技能を高め、心身を鍛練すると共に、安全に身を処する能力を養う。
2. 集団生活を通じて自主的生活態度を養い社会性を身に付けさせる。

実施記録

年度	実施年月日	宿泊数	訓練場	宿泊所
22	22年7月15日～20日	5泊6日	和歌山県加太町海岸	大阪屋旅館
23	23年7月19日～23日	4泊5日	京都府天ノ橋立海岸	対橋楼、幾世勤七館
24	24年7月20日～23日	3泊4日	三重県二見ヶ浦海岸	浜千代館、麻野館、松新館
25	25年7月21日～23日	2泊3日	兵庫県洲本大浜海岸	松栄館
26	26年7月20日～23日	3泊4日	泉佐野市羽倉崎海岸	羽倉崎水園
27	27年7月21日～24日	3泊4日	京都府天ノ橋立海岸	対橋楼、幾世勤七館
28	28年7月21日～24日	3泊4日	兵庫県洲本大浜海岸	三熊館
29	29年7月26日～29日	3泊4日	三重県二見ヶ浦海岸	松嶋館、紅葉館
30	30年7月21日～24日	3泊4日	京都府天ノ橋立海岸	対橋楼、幾世勤七館
31	31年7月23日～26日	3泊4日	兵庫県洲本大浜海岸	三熊館
32	32年7月18日～21日	3泊4日	京都府天ノ橋立海岸	対橋楼、幾世勤七館
33	33年7月16日～19日	3泊4日	兵庫県洲本大浜海岸	三熊館
34	34年7月20日～23日	3泊4日	兵庫県洲本大浜海岸	三熊館
35	35年7月19日～22日	3泊4日	兵庫県洲本大浜海岸	三熊館
36	36年7月18日～21日	3泊4日	兵庫県洲本大浜海岸	三熊館
37	37年7月17日～20日	3泊4日	兵庫県洲本大浜海岸	三熊館、楽有荘
38	38年7月21日～24日	3泊4日	和歌山県白良浜海岸	三楽荘
39	39年7月17日～20日	3泊4日	福井県美浜久々子海岸	スエヒロ館
40	40年7月18日～21日	3泊4日	福井県美浜久々子海岸	スエヒロ館
41	41年7月18日～21日	3泊4日	福井県美浜久々子海岸	スエヒロ館
42	42年7月17日～20日	3泊4日	兵庫県洲本大浜海岸	三熊館
43	43年7月17日～20日	3泊4日	兵庫県洲本大浜海岸	三熊館（洲本で赤痢発生のため中止）
44	44年7月16日～19日	3泊4日	和歌山県白浜江津良浜海岸	迎賓閣
45	各年度			
58	7月16日～19日	3泊4日	和歌山県白浜江津良浜海岸	迎賓閣

昭和58年度臨海訓練日程表 1983. 7. 16 (土) ~ 7. 19 (火)

大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校

時刻	日	7月16日 (土)	17日 (日)	18日 (月)	19日 (火)
6:30			起床	起床	起床
7:00					
7:30			朝礼	朝礼	朝礼
8:00		(中1全) (中3全)	朝食	朝食	朝食
		8:40 集合完了	8:40 集合	集合	集合
9:00		9:00 出発 (くろしお4号)			
		9:10 集合完了 9:30 出発 (くろしお6号)	水泳訓練	水泳訓練	水泳訓練
10:00		11:32			10:40 (移動)
11:00	07	白浜着	(移動)	(移動)	入浴 (1年→3年)
11:30	50	宿舎着	11:32 白浜着 12:10 宿舎着	入浴 (3年→1年)	11:45 12:15 昼食
12:30			昼食	昼食	(中1全) (中2全)
13:00		昼食・休憩	午睡	13:10 集合 (遊泳場) 14:00 出発	13:45 集合 14:20 宿舎発
14:10		集合	集合	午睡 集合	14:15 集合
14:30					14:40 集合 15:08 白浜発 (くろしお3号)
		水泳訓練	水泳訓練	水泳訓練	15:47 白浜発 (くろしお5号)
16:30		(移動)	(移動)	(移動)	
17:00					17:17 天王寺着
18:20		入浴 (3年→1年)	入浴 (1年→3年)	入浴 (3年→1年)	解散
18:40		休憩	休憩	休憩	18:05 天王寺着 解散
19:20		夕食	夕食	夕食	
21:00		休憩・自由時間	休憩・自由時間	休憩・自由時間	
21:30		夕礼	夕礼	夕礼	
		就寝	就寝	就寝	

(2) 臨海訓練 (高校)

目 的

1. 水泳の技能を高め、心身を鍛練すると共に安全に身を処する能力を養う。
2. 集団生活を通じて自主的生活態度を養い、社会性を身に付けさせる。
3. 泳ぎの持久力を付け、海になれると共に疲労、寒さ、恐怖心など自分の体力気力の限界に挑戦してこれを乗り越える精神力を養う。

実施記録

回	年度	実施期日	場 所 (宿 舎)	参 加 生 徒	引率教官	生徒参加 費 用
1	31	7月23～26日	淡路島洲本市大浜海岸 (三熊館)	高1全員 (中学全員と合同)	全教官	2,100
2	32	7月18～21日	京都府天ノ橋立海岸 (松影楼)	高1全員、高2希望者 (中学全員と合同)	全教官	2,100
3	33	7月25～28日	淡路島一宮町江井 (寒伝館)		全教官	2,500
4	34	7月20～23日	淡路島洲本市大浜海岸 (三熊館)	高1全員、高2希望者 (中学全員と合同)	全教官	2,600
5	35	7月19～22日	同 上	同 上	全教官	2,600
6	36	7月18～21日	同 上	同 上	全教官	2,600
7	37	7月17～20日	同 上	高1全員 (中学全員と合同)	全教官	2,900
8	38	7月21～24日	和歌山県白浜温泉白良浜 (三楽荘)	同 上	全教官	3,900
9	39	7月20～23日	福井県三方郡美浜町久々子海岸 (スエヒロ館)	高1全員	全教官	4,300
10	40	7月21～24日	同 上	高1全員	全教官	5,800
11	41	7月21～24日	同 上	高1全員	全教官	5,800
12	42	7月23～26日	淡路島洲本市大浜海岸 (淡交ホテル)	高1全員	全教官	5,800
13	43	7月22～25日	同 上	淡路島全域で集団赤痢発生のた め中止		5,800
14	44	7月20～23日	和歌山県日高郡由良町衣奈海岸 (黒島館、日栄別館)	高1全員	全教官	5,800
15	45	7月20～23日	同 上	高1全員	全教官	6,500
16	46	7月20～23日	和歌山県那智郡勝浦町浜ノ宮 (浜ノ宮グランドホテル)	高1生徒学年合宿後、集団赤痢 発生のため中止	実施要項等計画する 以前に中止決定	
17	47	7月20～23日 (実施7月21、22日)	同 上	台風のため現地まで行ったが1 日で中止	全教官	9,600
18	48	7月20～23日	同 上	台風のため中止		11,000
19	49	7月21～24日	鳥取県気高郡浜村温泉浜村海岸 (旅館たつもと)	高1全員	全教官	13,600
20	50	7月21～24日	同 上	高1全員	全教官	17,000

回	年度	実施期日	場 所 (宿 泊)	参 加 生 徒	引率教官	生徒参加 費 用
21	51	7月21～24日	鳥取県気高郡浜村温泉浜村海岸 (旅館 たつもと)	高1全員	全教官	22,500
22	52	7月21～24日	同 上	高1全員	全教官	24,500
23	53	7月21～24日	同 上	高1全員	全教官	26,000
24	54	7月21～24日	三重県度会郡池の浦、池の浦海岸 (ホテル、池の浦ビラ)	高1全員	全教官	31,000
25	55	7月21～24日	同 上	高1全員	全教官	32,400
26	56	7月21～24日	同 上	高1全員	全教官	34,300
27	57	7月21～24日	同 上	高1全員	全教官	35,800
28	58	7月22～24日	同 上	高1全員	全教官	36,500
29	59	中	止	実施計画・立案したが中止		
30	60	中	止			

水泳訓練実施上の留意事項 (これは中・高とも共通した留意事項である。)

水泳指導の重点—— 1 に監督 2 に指導

1. 水泳訓練開始の際は各班毎に名簿順に旗の前に整列する。
2. 人員点呼は入水、離水毎に班指導教官自ら行う。
(班長に代行させてはいけない)
班員の異状の有無を速かに総指揮係に連絡する。
3. 班指導教官不在の時は、その班は入水させない。
4. 班指導教官は、入水の場合その班の先頭に立って入水し、班員はこれに従う。離水の場合は班員の離水を見とどけてから最後に離水する。
5. 水泳指導は各班員の能力を考慮して、各班毎に班指導教官が行う。
(各班の技術指導は水泳訓練指導計画表に従って体育教官が行う)
6. 班指導教官は出席カードを記入し、水泳訓練期間中保管する。
7. テストを受ける者は、班指導教官の許可を得て出席カードをそのテスト前に体育科教官に提出すること。
8. 班指導教官はテストによる人員移動について特に留意する。
9. 遠泳に際しては、体育科教官以外に班指導教官の援助を仰ぐ。この為班指導教官不在の班は臨時に他の班指導教官が合併して指導する。
10. 教官の許可なくして、生徒の入水は厳禁する。
練習時間外に特別練習を行う時は、体育科教官に連絡し、許可を得て後班指導教官の指導のもとに行う。
11. 水泳訓練は総指揮係の指示する場所で行い、それ以外の場所で水泳してはいけない。
ただし、遠泳の場所は別に定める。

昭和50年度（第20期生）臨海訓練日課表

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

時刻	月日	7月21日 (月)	7月22日 (火)	7月23日 (水)	7月24日 (木)
6:00					
7:00			30分 起床 (朝食)	起床 (朝食)	起床 (朝食)
8:00		30分 大阪駅中央コンコース北より集合 大阪駅発			8:30
9:00		まつかぜ1号 (特急)	(水泳)	(水泳)	(水泳)
10:00					10:15
11:00		30分 車中昼食	30分		
12:00		10分 鳥取駅着 25分 鳥取駅発 52分 浜村駅着	(入浴)	(入浴)	11:45 浜村駅前集合 12:04 浜村駅発 12:36 鳥取駅着 12:44 ♪ 発
13:00			30分 (昼食) (昼寝)	(昼食) (昼寝)	まつかぜ1号 (特急)
14:00					
15:00		40分 浜集合完了	30分		
16:00		(水泳)	(水泳)	(水泳)	
17:00					17:00 大阪駅着 17:20 解散 (大阪駅中央コンコース)
18:00		(入浴)	(入浴)	(入浴)	(全員「まつかぜ1号」に 乗車できない場合) 92名は
19:00		(夕食)	(夕食)	(夕食)	12:45 浜村駅前集合 13:04 浜村駅発 13:30 鳥取駅発 13:54 ♪ 発 (みさき2号) (急行)
20:00		自由時間	自由時間	自由時間	18:50 大阪駅着 19:00 解散
21:00					
22:00		30分 夕礼 就寝	夕礼 就寝	夕礼 就寝	
23:00					

昭和57年度（第27期生）臨海訓練日課表

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

7月21日（水）		7月22日（木）		7月23日（金）		7月24日（土）	
		6:15	起床	6:15	起床	6:15	起床
		6:30	朝礼	6:30	朝礼	6:30	朝礼
		7:00		7:00		7:00	
		7:30	(朝食)	7:30	(朝食)	7:30	(朝食)
8:50	近鉄「上本町駅」 1階コンコース 集合						〔荷物を管理してそれぞれ指示のあった場所に移動してから水泳訓練に出かけること〕
8:30	上本町駅⑤(近鉄特急)						
		9:00		9:00		9:00	
			〈水泳訓練〉		〈水泳訓練〉		〈水泳訓練〉
10:53	近鉄「鳥羽強」⑤						
11:10	近鉄「鳥羽駅」⑤(バス)						閉校式
11:30	宿舎「池の浦ビル」⑤ (昼食・休憩)	11:30		11:30		11:30	後かたづけ
13:45	宿舎前 集合 (徒歩)	12:30	(昼食)	12:30	(昼食)	12:45	
14:00	開校式	13:00		13:00		13:10	(昼食)
14:30	〈水泳訓練〉			13:15	遠泳参加者集合(浜へ)	13:50	宿舎前 集合
		14:30	〈水泳訓練〉	14:00	遠泳出発	14:00	宿舎出発(バス)
17:00	(入浴)			14:30	〈水泳訓練〉 (遠泳)	14:20	近鉄「鳥羽駅」⑤
		17:00	(入浴)	16:30	遠泳到着	14:37	近鉄「鳥羽駅」⑤ (近鉄特急)
19:00	(夕食)	19:00	(夕食)	17:00	(入浴)	16:42	近鉄「上本町駅」⑤
19:45		19:45				17:00	近鉄「上本町駅」 1階コンコース解散
			(遠泳参加申し込み) 〔8:00～8:45〕 (遠泳参加申し込み者は 医師の診断を必ず受け てから申し込み書を提出 する)	20:00	【救助法講習会】 (遠泳合格者で明日 の救助法を受ける希 望等のある者) (水泳カード持参)		
21:30	夕礼	21:30	夕礼	21:30	夕礼		
22:00	就寝・消灯	22:00	就寝・消灯	22:00	就寝・消灯		

水泳能力表
昭和40年度

級別	テスト種目	級別	テスト種目
7級	距離10m(泳法自由)	2級	距離100m(泳法自由)
6級	距離50m(泳法自由)		背泳 20m
5級	距離100m(泳法自由)		潜行 20m
	平泳 10m	クロール50m	
	クロール10m	前 飛	
4級	距離300m(泳法自由)	1級	距離300m(泳法自由)
	横泳 10m		背泳・平泳・クロール (300個人メドレー)
	直 飛		救 助 法
	スタート飛込	特級 (三種目中)	自由型100m (男) 1分22秒 (女) 1分37秒
3級	距離500m(泳法自由)		平 泳100m (男) 1分37秒 (女) 1分52秒
	潜行 10m		背 泳100m (男) 1分32秒 (女) 1分47秒
	平 飛		
	立泳30秒		

昭和50年度

級別	テスト種目	級別	テスト種目
7級	距離10m(泳法自由)	2級	距離100m(泳法自由)
6級	距離50m(泳法自由)		クロール50m
5級	距離100m(泳法自由)		背泳 50m
	クロールまたは背泳 10m	潜行 男子25m 女子20m	
	スタート飛込	前飛込	
4級	距離300m(泳法自由)	1級	距離3000m(泳法自由)
	平泳 10m		300m個人メドレー (背泳・平泳・クロール) 男子 8分30秒 女子 9分30秒
	潜行 10m		救助法
	直飛込		特級 (三種目中)
3級	距離500m(泳法自由)	平泳100m 男子 1分45秒 女子 2分00秒	
	横泳 10m	背泳100m 男子 1分40秒 女子 1分55秒	
	立泳 30秒		
	順下(平飛込)		

昭和57年度

中 1 年				中 2 年				中 3 年				高 1 年				氏 名		
組		番		組		番		組		番		組		番				
級別	テスト種目	合格印	級別	テスト種目	合格印	級別	テスト種目	合格印	級別	テスト種目	合格印	級別	テスト種目	合格印				
合 格 表	6級	距離10m(泳法自由)		2級	距離1000m(泳法自由)		2級	横泳泳法		1級	距離3000m(泳法自由)		特級 (三種目中)	自由型 100m 男子 1分30秒 女子 1分45秒				
	6級	距離50m(泳法自由)		5級	距離100m(泳法自由)			背泳 50m			300m個人メドレー (背泳・平泳・クロール) 男子 8分30秒- 女子 9分30秒			平泳 100m 男子 1分45秒 女子 2分00秒		3級	背泳 100m 男子 1分40秒 女子 1分55秒	
	5級	クロール泳法			潜行男子25m, 女子20m			救助法			3級	立泳30秒			3級		順下	
		スタート飛込			前飛込													
		距離300m(泳法自由)																
	4級	平泳泳法		4級	潜行 10m		4級	直飛込		4級	距離500m		4級	背泳泳法				
		クロール50m																
		立泳30秒																
		順下																

水泳訓練巡回指導計画 (昭和50年度)

日(期)	入水時間	指導教官	矢 田	浦 久 保	風 間	西 浜
7月 24日 卯	午後 3:00 ↓ 5:00	15分				
		30分	⑫クロール・背泳	④フクロ泳(スタート飛込)	⑪横泳(立泳・順下)	⑬平泳・潜行
		30分	⑧横泳(立泳・順下)	④フクロ泳(スタート飛込)	⑨横泳(立泳・順下)	⑭平泳・潜行
		30分		⑫横泳(立泳・順下)	⑬平泳・潜行	④フクロ泳(スタート飛込)
22日 戌	午前 9:00 ↓ 11:30	15分				
		30分	③メドレー法	⑤クロール・背泳	⑥クロール・背泳	⑦横泳(立泳・順下)
		30分	⑬平泳(スタート飛込)	⑭平泳・潜行(直飛込)	②メドレー泳法	④クロール・背泳
		30分	①クロール・平泳・背泳		⑩横泳(立泳・直飛込)	⑮平泳・潜行(直飛込)
	午後 2:30 ↓ 5:00	15分				
		30分				
		30分	300m, 500 (テスト)	300m, 500m (テスト)	300m, 500m (テスト)	300m, 500 (テスト)
		30分				
23日 癸	午前 9:30 ↓ 11:30	15分				
		30分	遠 泳	遠 泳	遠 泳	遠 泳
		30分				
		30分				
	30分					
	午後 2:30 ↓ 5:00	15分				
		30分	①タイム測定(平、背)	⑩横泳(クロール・背泳)	⑪横泳(クロール・背泳)	⑭横泳(立泳・直飛込)
		30分	⑧横泳(クロール)	①平泳・潜行(直飛込)	⑨横泳(クロール・背泳)	⑮横泳(立泳・直飛込)
30分		③メドレータイム測定		⑥潜行(前飛込・メドレー)	⑦横泳(クロール・背泳)	
24日 癸	午前 8:30 ↓ 10:15	15分			②メドレータイム測定	
		20分	救助法 (1級受験希望者)	⑤潜行(前飛込・メドレー)		④潜行(前飛込・メドレー)
		20分				
		20分				
20分						

昭和57年度(第27期生)臨海訓練班別指導資料

大阪教育大学附属高等学校天王寺校会

班名	級	人数	班長氏名	班指導教官名	泳力距離	主に練習すべき種目		
1	特・1	男 10	亀岡 京二	北 講師	3 キ ロ メ ー ト ル 遠 泳 合 格	特級種目		
2	2	男 11	川本 雅彦	駒井講師		個人メドレー・特級種目		
3	2・3・4	男 11	土井 健司	※宮内講師		個人メドレー・特級種目		
4	特1・2・3	女 10	渡辺 有希	東元教官		個人メドレー・特級種目		
5	2・3	女 8	岩見佳代子	◎武田教官		個人メドレー・特級種目		
6	3	男 11	高森 信岳	※木村講師		潜行・個人メドレー・特級種目		
7	3・4・5・6	男 10	柴田 哲生	河野教官		クロール50m・背泳50m・潜行・個人メドレー		
8	3・4	女 11	水谷はゆみ	綱 教		クロール50m・背泳50m・潜行・個人メドレー		
9	3・6	男 11	宮田 泰裕	柴山教官		クロール50m・背泳50m・潜行・個人メドレー		
10	4・5	男 7	巽 宣夫	※幡生講師		横泳・立泳・クロール・背泳・潜行		
11	4・6	男 8	田中 一郎	※市川講師		横泳・クロール・背泳・潜行		
12	4・5・6	男 8	近藤 信哉	※中桐講師		立泳・クロール・背泳・潜行		
13	4	女 7	東田美幸子	◎平林教官		横泳・立泳・クロール・背泳・潜行		
14	4・6	女 8	中野門洋子	横田教官		平泳・横泳・立泳・クロール・背泳		
15	5・6	男 8	南 銀次郎	瑤磨教官	1000m	長 距 離 泳 力 を 身 に つ け る (平泳)	平 泳 ・ の 泳 法 を 身 に つ け る (クロール・ 横泳)	種 目 5 級 4 級 3 級 2 級 1 級 特 級
16	2・3・4・6	8	竹中 健	高木教官	合格			
17	3・4・5・6	8	金口 真理	田原教官	500m合格			
18	仮5・仮6	男 8	山本克克平	井野口教官	泳力距離 未定			
19	仮5・仮6	男 8	溝手 弘一	井畑教官				
20	仮5・仮6	女 10	小西 美保	千種教官				
兼渡				楠本教官				

昭和57年度(第27期生)臨海訓練班別練習計画表

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

日 曜 日 班	21日(水)						22日(木)						23日(金)						24日(土)								
	午後			午前			午後			午前			午後			午前			午後			午前			午後		
	10分	25分	25分	10分	25分	25分	10分	25分	25分	10分	25分	25分	10分	25分	25分	10分	25分	25分	10分	25分	25分	10分	25分	25分	10分	25分	25分
1	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
2	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
3	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
4	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
5	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
6	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
7	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
8	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
9	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
10	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
11	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
12	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
13	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
14	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
15	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
16	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
17	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
18	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
19	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳
20	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳	平泳

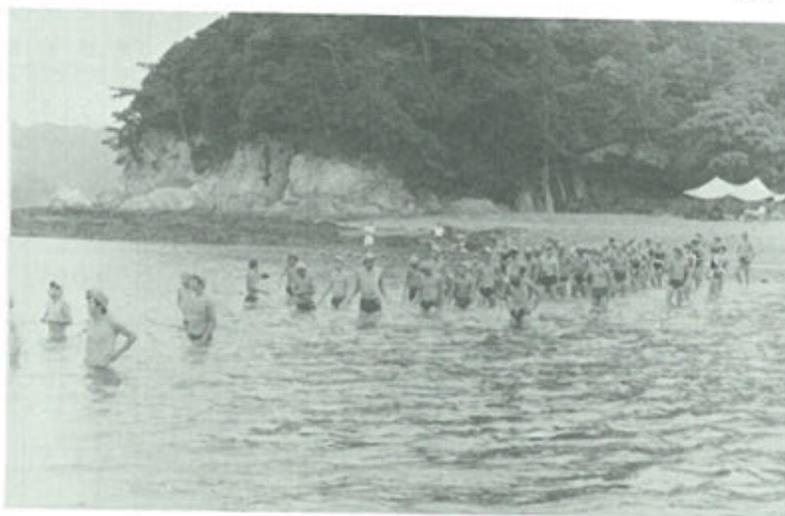
*午前・午後の部で最初に10分の予備入水の時間をとるが、これはからだを水になれさせる為の入水である。あまり速くに行ったりはげしく泳いだりしないこと。

昭和57年度（第27期生）臨海訓練実施要項（大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎）

1. 日 時 昭和57年7月21日（水）～24日（土）3泊4日
2. 場 所 三重県度会郡池の浦 池の浦海水浴場
3. 宿 舎 「池の浦ピラ」電話 059643-2501
4. 参 加 者 高1生徒全員
5. 費 用 35,800円(交通費・宿泊費・用具費・船費・医療費・プール代等)
6. 日 程

7月21日（水）	8：20	近鉄上本町駅1階コンコース集合	
	8：50	上本町駅発	
	10：53	鳥羽駅着	
	11：10	鳥羽駅発（バス）	
	11：30	宿舎着「池の浦ピラ」	
	13：45	宿舎前集合	
	14：00	開校式	
	14：30	水泳訓練	
7月22日（木）	午前・午後		} 水泳訓練
7月23日（金）	午前・午後（遠泳）		
7月24日（土）	午前・（11：30終了）		
	13：50	宿舎前集合	
	14：00	宿舎発（バス）	
	14：20	鳥羽駅着	
	14：37	鳥羽駅発	
	16：43	上本町駅着	
	17：00	上本町駅1階コンコース解散	
7. 携 行 品
 - ◎水泳用品(水泳着・水泳帽・バスタオル・ビーチサンダル・
白い帯—女子のみ等)
 - ◎昼食(21日) ◎水筒 ◎筆記用具 ◎洗面用具 ◎着がえ
 - ◎ねまき ◎洗たくばさみ ◎常備薬 ◎その他
8. とびこみ講習会 8月31日（火）12：00～16：30 大阪プール（希望者のみ）
上級テスト受験者は必ず受講のこと。
9. 泳力テスト 9月1日（水）9：00～12：00（全員）
300m・500m・遠泳は現地で行う。

以上



昭和57年度 臨海訓練（高校）

昭和57年度 水泳とび込み講習会実施要項

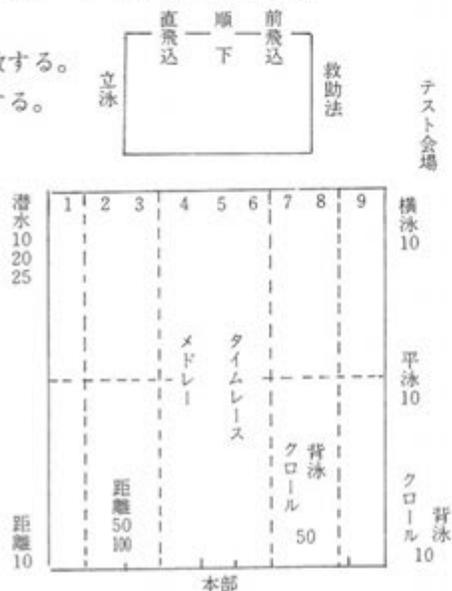
1. 日 時 昭和57年 8月31日 (火)
2. 場 所 大阪プール
3. 集 合 大阪プール正面入口
午前 8時50分……中 1
午後 12時30分……中 2・3・高 1
4. 参 加 者 中 1・2・3 高 1 (参加希望者)
5. 参 加 費 200円, 現地にて徴収, 別にロッカー代50円が必要です。
6. 指 導 者 本校教官
7. そ の 他 泳力カード持参のこと。

昭和57年度 泳力テスト実施要項

1. 日 時 昭和57年 9月1日 (水) 集合 8時30分
2. 場 所 大阪プール (環状線・天満駅下車・扇町公園内)
3. 方 法

	テ ス ト 係									
	教官 A	B	C	D	E	浦久保	田 中	風 間	西 浜	
9:20	距 離 10m	潜 行 10m	背 ク ロ ー ル 泳 10m	個 人 メ ド レ ー ス	立 泳	直 飛 込 ・ 順 下 ・ 前 飛 込	ス タ ー ト 飛 込 ・ 横 泳	横 泳	平 泳	
	50m	20m(女)	50m	救 助 法						
12:00	100m	25m(男)								

4. 注 意
- ① 泳力テストは, 全生徒が必ず出席する。泳げぬ者は見学する。
 - ② 受験資格は, 距離の合格している級までとする。
(例) 遠泳合格者 2級まで, 100m合格者 5級まで
 - ③ 集合は水着にかえ, タオルと水泳カードをもって集合する。
 - ④ 雨天の場合でも決行する。
 - ⑤ テストが終わったものは各自解散する。
 - ⑥ 解散時に本部へカードを提出する。
 - ⑦ ロッカー代50円が必要です。



3 耐寒訓練・マラソン大会

目 標 寒さに負けない強い心身を鍛練する。

(1) 耐寒訓練

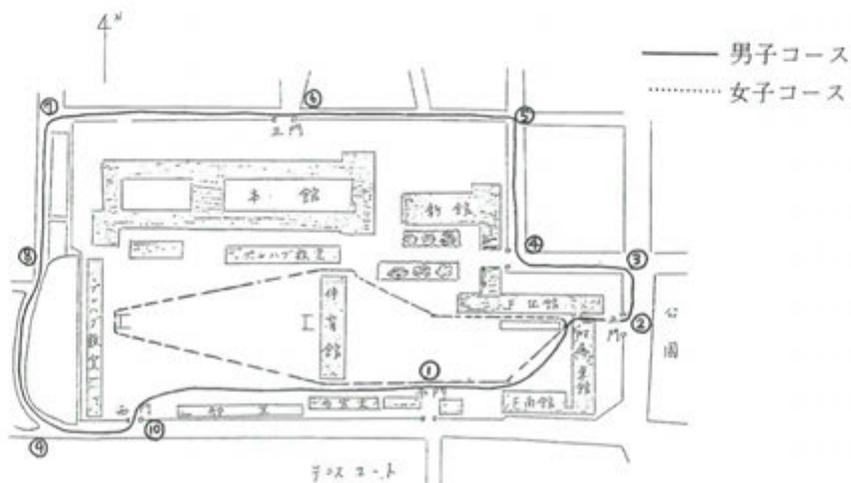
昭和60年度 耐寒訓練実施要項

大阪教育大学附属天王寺中・高等学校

1. 実施期日 • 昭和61年1月16日(木)~18日(土), 20日(月), 21日(火)の5日間。
2. 集合時間 • 7時30分集合(各学級出席番号順に, 附属高台運動場)
• 更衣の時間を考慮して, 早めに登校すること。
3. 実施学年 • 中1・中2・中3・高1・高2全生徒。
4. 服 装 • 体育学習時の服装(走るときは, 軽装。タオル持参)
• 手袋の使用禁止(特に使用しなければならない者については, 体育教官の許可を受けること。)
5. 健康相談 • 1月11日(土) 11時00分より, 保健室で実施する。
• 健康のすぐれない者は, 必ず健康相談を受け, 指示に従うこと。
• 健康相談日以後, 見学が必要となった場合は, 養護教諭に相談し指示に従うこと。
6. その他 • 小雨決行
• 遅刻をしないように, 注意すること。
• 朝食は, 必ずとってくること。
• 早めに就寝し, 休養を充分にとっておくこと。

耐寒訓練コース図並びに監視一覧表

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
16日(木)	浦久保	國方	金井	井野口	浅野	乾	井畑	西浜	田中	風間
17日(金)	田中	濱谷	高木	井野口	西谷	冨田	中西	西浜	浦久保	風間
18日(土)	西浜	西田	中村潔	井野口	平田	中村英	高橋	浦久保	田中	風間
20日(月)	田中	濱谷	金藤	井野口	岡	大仲	東元	西浜	浦久保	風間
21日(火)	風間	琢磨	柳本	井野口	柴山	場本	武田薫	西浜	田中	浦久保



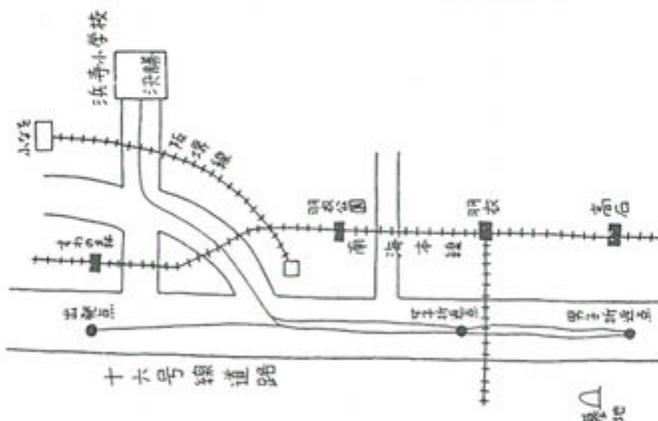
(2) 校内マラソン大会 (中学・高校)

回	年度	実施年月日	実施場所	主な内容	備考	
1	24	25. 2. 12	浜寺小学校→小栗街道→16号線道路 →高石町(墓地前)(折り返し)→浜寺小学校	男子 7km	※昭和24年度～昭和30年度までは、中学1年、2年、3年のみで実施	
2	25	26. 1. 28		女子 5km		
3	26	27. 1. 27				
4	27	28. 1. 24				
5	28	29. 2. 13	附属中→大学正門前→天王寺駅前立橋→鉄道病院前 →附属中運動場			
6	29	30. 1. 23	国分(国豊橋) ↔ 青谷	男子 4km, 女子 3.3km		※昭和31年度より高校1年生が参加 ※昭和32年度より高校2年生が参加
7	30	31. 1. 29	同上	男子 5.2km, 女子 3.2km		
8	31	32. 1. 27	同上	同上		
9	32	33. 1. 28	同上	同上		
10	33	34. 1. 28	瓜破(高野大橋) ↔ 大正橋	不明		
11	34	35. 1. 29	大和川周辺 大正橋→大井橋→ 明治橋→大正橋	男子 7.4km, 女子 4.2km		
12	35	36. 1. 27		同上		
13	36	37. 1. 24		同上		
14	37	38. 1. 25		同上		
15	38	39. 1. 29	大和川周辺 大正橋→河内橋→ 明治橋→大正橋	男子 7.6km, 女子 4.8km	※昭和39年度より中・高男子の走距離を分ける。	
16	39	40. 1. 30		高校男子 9.2km		
				中学男子 7.2km		
				中・高女子 4.1km		
17	40	41. 1. 26	長居競技場公認競歩コース	高校男子 10km 中学男子 7km 中・高女子 4km	※34回はインフルエンザ流行のため中学校中止 ※35回は大雪のため中止 ※36回より決勝を競技場内スタンド前に移す。	
18	41	各年 1・24 { 1・29 の間の1日 をあてる。	同上	同上		
37	60					

第3回マラソン大会実施要項(昭和25年度)

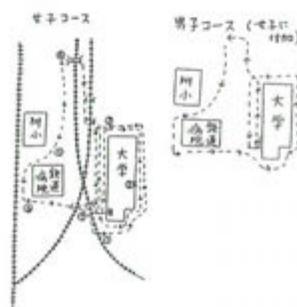
1. 実施要項

- とき 1月27日(日)但し8時現在大雨の場合は2月3日(日)に延期。小雨決行
- 集合 午前8時50分 浜寺小学校(南海線すわのもり下車, 阪堺線ふなを下車)
- | | | |
|-------|--------------|--|
| 9:00 | 出席点検 | ○表彰 |
| 9:05 | 校長訓辞 | ×学級対抗の部 |
| | 諸注意 | 240人走ったとした場合1着を240点として逆算したもの, 合計をもってこの級の得点とし, 第3位まで表彰する。 |
| 9:20 | 脱衣・準備体操 | |
| 10:00 | 女子出発 | ×個人対抗の部 |
| | 1年より20秒おきに出る | 先着順男子30名, 女子20名に賞品 |
| 10:15 | 男子出発 | その中先着男女10名に対して表彰状を与える |
| | 1年より20秒おきに出る | ・着男女各5人に対しては記録を記して一般に公開する。 |
| 11:30 | 昼食 | |
| 12:00 | 表彰式 | |
| 12:30 | 解散 | |
- 諸注意
- ① 折返点には氏名を記した荷札に必ず印を入れてもらうこと。ない場合は無効とする。
 - ② 級担任に, 生徒の健康状態には十分に注意して動き異常のある生徒は応援及び役員に当たらしめること。要養護の生徒は走ってはならない。



第5回マラソン大会実施要項(昭和28年度)

- 日時 昭和29年2月13日(土)
- 8分40分 整列, 出席点検, 諸注意(普通の服装のまま)
- 9時10分 更衣(マラソンの出来る服装に)
- 9時20分 準備運動
- 9時50分 走者人員点検
- 10時00分 女子出発
- 10時10分 男子出発
- 11時30分 集合(普通の服装)成績発表, 表賞, 諸注意
- 12時00分 解散
- 集合場所 附中運動場



第7回マラソン大会実施要項 (昭和30年度)

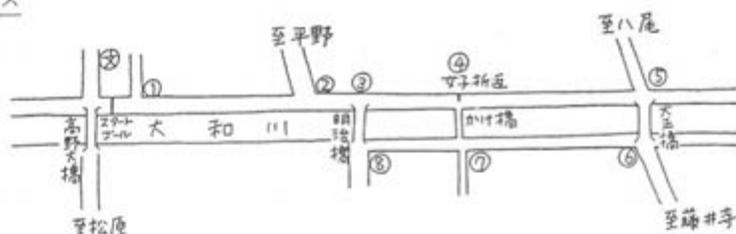
- と き……昭和31年1月29日(日) 午前9時集合
午後3時頃解散予定
- 予 定……9:00 近鉄南大阪線藤井寺駅前(南出口)集合
出席調査(アベノ橋8:30発が最終, 急行利用のこと)
- 9:10 諸注意
9:20 徒歩出発(下図参照, 歩く距離約2里)
11:20 国分町武田塾着。諸注意
11:50 昼 食
13:00 武田塾校舎集合(体操の服装) マラソンの心得。準備体操。
13:30 男子マラソン出発(約4000メートル)
13:40 女子マラソン出発(約3200メートル)
14:10 マラソン終了
14:40 後始末。集合。表彰。
15:00 解 散。



第10回校内マラソン大会実施要項 (昭和33年度)

- 日 時 昭和34年1月28日(水) 午前8時40分～午後1時30分
- 8:40 校庭集合
9:00 学校出発(貸切りバス)
9:30 瓜破中学校着(準備運動・諸注意)
10:10 男子マラソン出発
10:11 女子マラソン出発
11:00 マラソン終了
11:30 瓜破中学校出発(貸切りバス)
12:00 学校着, 昼食
1:20 表 彰

コース



参加者 高校1年生全員，中学校全員
但し次の者は審判補助員とする

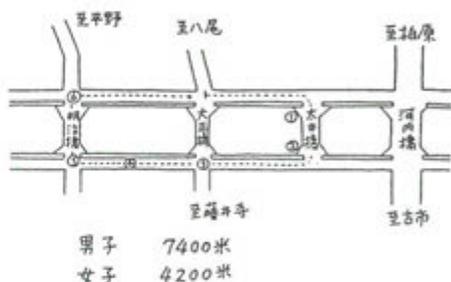
- (1) 1月27日(月)正午までに医者診断書を提出したもの
- (2) 昨年11月以降の陽転者及び要注意者

競技方法

- 男女別，学年別，個人競技とする。
- スタートは高校，中学3年，2年，1年の順とし10秒間かくに出発する。
- 折返し点で必ずカードをもらって決勝点まで持ち帰ること。
カードの無い時は未完走者とする。
- 道路は左側通行とする，(但し明治橋→大正橋は右側通行とする)

第11回校内マラソン大会実施要項(昭和34年度)

日 時	昭和35年1月29日(金)午前8時40分～午後1時30分	
8:40	校庭集合(準備運動，諸注意)	10:21 女子マラソン出発
9:20	学校出発(貸切りバス)	11:10 マラソン終了
10:00	大正橋北詰着(各自準備運動コース説明)	11:30 大正橋北詰出発(貸切りバス)
10:20	男子マラソン出発	12:10 学校着(学年別順位決定)
		12:30 解 散



参加者
高校1年生，2年生全員，中学校全員
但し走れない者は，審判補助員とする。

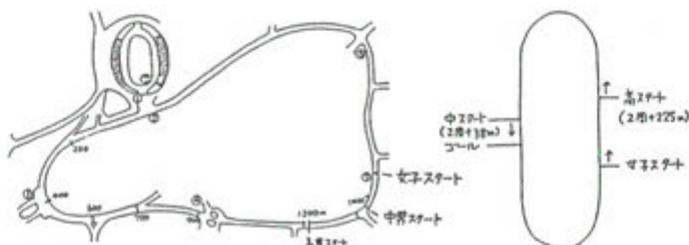
競技方法

- 男女別，学年別，個人競技とする。
- スタートは，中学男子出発後10秒して
高校男子出発とする。
- 女子は全員同時に出発する
- 道路は左側通行とする

第17回校内マラソン大会実施要項(昭和40年度)

日 時	昭和41年1月26日(水)9時00分～13時00分	
9:00	長居競技場集合(点呼・開会式)	11:40 競技終了
9:30	女子 出 発	11:50 昼 食
9:40	中学男子 出 発	12:30 閉 会 式
10:30	高校男子 出 発	

コ ー ス 長居競技場 15km競歩コース(1周 2,813m)



第26回校内マラソン大会実施要項 (昭和49年度)

日 時 昭和50年1月24日 (金) 9時00分～12時00分

日 程 9:00 長居競技場集合 (点呼・開会式)

9:40 中・高女子出発

9:50 中学男子出発

10:20 高校男子出発

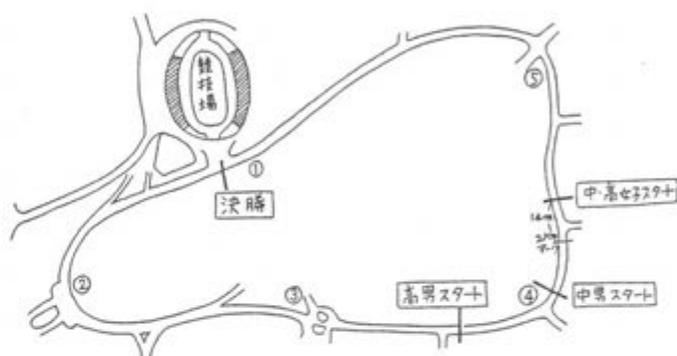
11:20 競技終了

11:30 昼 食

12:00 閉会式

(雨天の場合は、8時30分までに授業と大会の両方の準備をして学校に集合)

コース 長居競技場 15km競歩コース (1周 2,813m)



参加者 中学生全員 高校1, 2年生全員 (走れない者は、補助役員)

競走距離 中・高・女子 4000m (1187m + 1周)

中・男子 7000m (1374m + 2周)

高・男子 10000m (1561m + 3周)

競技方法 ・中・高別・男女別の個人競技とする。

・コースは舗装路を走る

・決勝点では、着順カードを渡す

この順位は、高男 中男 女子別の順位で学年別の順位は、後日連絡する。



第36回 マラソン大会実施要項 (昭和59年度)

1. 日 時 昭和60年1月30日(水) 8時40分～12時00分
2. 日 程 8時40分 長居競技場南門前集合 (出席点呼、開会式、諸連絡)
9時15分 中・高女子南門前集合 (準備運動)
9時25分 中・高男子南門前集合 (準備運動)
9時40分 中・高女子スタート
9時50分 中・男子スタート
10時00分 高・男子スタート
11時00分 競技終了
3. 実施学年 中1・中2・中3・高1・高2 全生徒
4. 走る距離 中・高女子 4km (1周+1187m)
男子 7km (2周+1374m)
高 男子 10km (3周+1561m)
5. 大会新記録 10km (高・男子) 34分32秒 石田孝太郎 (57年度)
7km (中・男子) 23分47秒 笹本 教夫 (51年度)
4km (中高女子) 15分45秒 岡本 光代 (55年度)
6. 教官役割 (敬称略)
 - ☆ 総責任者 (下村)
 - ☆ 会計 (浦久保・風間)
 - ☆ 審判長 (風間)
 - ☆ 生徒指揮 (田中)
 - ☆ 準備運動 (駒井・楠本)
 - ☆ 表彰係 (武田和)
- ☆ 決勝審判員 [全体] (風間)
 - 高男子 横田
 - 中男子 岡
- ☆ 高3授業関係係 (千種・平村・本間・岩城)
- ☆ 監察員 [全体] (田中) (大仲)
 - 4km (高木・藤原・中村潔・平田・金井・柳本)
 - 7km (辻)
 - 10km (奥・網・東元・浅野)
- ☆ 途中監察員
 - 1 (田原) 2 (河野) 3 (中西) 4 (和田垣) 5 (井畑) 6 (園方) 7 (中村英)
 - 8 (高橋) 9 (柴山) 10 (瑛磨) 11 (嶋本) 12 (武田薫) 13 (越智)

7. 実施方法 ☆ コースは下記の競歩コースを走る。
☆ 中・高別、男女別の個人競走とする。
☆ ゴールでは、着順カードを渡す。(順位は、学年別、男女別に後日連絡する。)
8. コース 長居競技場 15km競歩コース (1周281.3m)



9. 諸注意
 - ★ 持参品 体育の服装、タオル、ゴミ袋(自分で出したごみは自分で持ち帰る)
 - ★ 服装 体育時の服装で、なるべく軽装。中学生は赤、高校生は白のハチマキを着用。
 - ★ 更衣 競技場内の指定されたロッカールームで更衣する。
 - ★ 当日、見学者として認める者は、学校医及び養護教諭より禁止された者、または当日、見学者が必要となり、見学者用紙を提出した者。
 - ★ 競技中に身体の調子が悪くなった時には、直ちに近くの教員や、走っている教員及び生徒に連絡すること。連絡を受けた先達は、途中監視の先生に連絡すること。よくてよい。) し、『着順カード箱』に提出すること。
 - ★ マラソン後は、各自で整理運動を行い、汗をよくふいて直ちに更衣すること。
 - ★ 当日、見学者の見込みの者は、1月28日(月)12時50分に体育研究室に集合すること。

マラソン大会記録表

年 度	10 km	7 km	4 km
40	37' 38" 洞口 進		
41	37' 05" 雷本 寿嗣	26' 48" 北 克則	17' 08" 野村登志子
42	37' 05" 関関 宏宏	26' 38" 北 克則	16' 33" 辻本 慶子
43	35' 56" 関 宏	◇	◇
44	◇	25' 02" 阿南 孝也	◇
45	◇	◇	16' 14" 安部ゆかり
46	◇	◇	◇
47	35' 44" 関本 力	◇	◇
48	34' 42" 関 繁	◇	◇
49	◇	◇	◇
50	◇	◇	◇
51	◇	23' 47" 笹井 教夫	◇
52	◇	◇	◇
53	◇	◇	◇
54	◇	◇	◇
55	◇	◇	15' 45" 岡本 光代
56	◇	◇	◇
57	34' 37" 石田享太郎	◇	◇
58	◇	◇	◇
59	33' 24" 井本 貴之 33' 33" 林 幸治	◇	◇



4 遠足

遠足は体育行事の中でも最も楽しいものの一つであり、本校創立以来、文字通り「遠い道を歩くこと」を重視し、遠足の経験によって「歩くことの大切さ」や、生徒相互のまた教師との人間的触れ合いと理解をもたらすよい場であるとして実践して来ている。年間を通じて、春・秋の2回行い、教育計画の中に明確に位置付けている。なお、目的、実施方法、目的地などについては以下に示す通りである。

目 的

1. 歩くことによって、健康的で明るい心身の発達を図る。
2. 集団行動、公衆道徳について望ましい体験を得させる。
3. 校外の自然や文化財に接することにより、生徒の経験を豊かにする。

(中学校)

○各年度実施計画

全 校 遠 足	新入生歓迎遠足として毎年春4月中に実施(昭和50年度より廃止)
学年別遠足(春)	3年生の修学旅行中に1, 2年のみ春に実施(昭和53年度より中1合宿訓練実施のため, 2年生のみ実施)
学年別遠足(秋)	1, 2, 3年各学年ごとに秋に実施(昭和30年以前は学級別に実施)

○候補地(下の候補地より一カ所を選択して実施) (昭和39年度以前)

全 校 遠 足	竜田法隆寺, 枚岡生駒山, 和歌浦	
学 年 別 遠 足	1 年	奈良, 仁川, 信太山和泉, 磐船
	2 年	飯盛山, 六甲山, 天野山金剛寺, 宇治
	3 年	笠置, 再度公園, 吉野山, 嵐山嵯峨野



(昭和41年度以後)

全 校 遠 足	枚岡生駒山, 二上山, 吉野山	
学 年 別 遠 足	1 年	奈良, 仁川, 楠毗庵観心寺, 磐船, 壺坂寺高取城跡
	2 年	飯盛山, 六甲山, 竜田法隆寺, 宇治, 金剛葛城山
	3 年	笠置山, 再度公園, 嵐山嵯峨野, 南光寺山延命寺, 泉南飯盛山

昭和48年度より新コースを開拓中。

昭和50年度より全校遠足を廃止。

○具 体 例

	35 期 生	36 期 生	37 期 生
1 年 秋	南光寺山延命寺	矢 田 丘 陵	生 駒 縦 走
2 年 春	岩 湧 山	岩 城 山	金 剛 葛 城 山
2 年 秋	笠 置・布目川	六 甲・YMCA	笠 置・布目川
3 年 秋	金 剛 葛 城 山	六甲東おたふく山	・ 仁 川・甲 山



(高等学校)

実施計画

○昭和31年～40年

春(4月～5月) — 新入生歓迎全校遠足 秋(10月～11月) — 学年別遠足

○昭和41年～60年

春(4月～5月) — 学年別遠足 秋(10月～11月) — 学年別遠足

※1. 全校遠足は交通事情、生徒数、目的地等の関係から昭和41年度より学年別遠足に変更した。

2. 1年生の春の遠足は、昭和41年度より合宿訓練中に現地で行っている。

歩行距離

各学年とも15～20km

目的地 (次の候補地から一カ所を選択して実施)

○昭和31年～40年

法隆寺・薬師寺、多奈川・加太、多武峯、六甲山、金剛山、八幡洞ヶ岐、京都東山南部二上山、甲陽園・芦屋、観心寺、比叡山、奈良西ノ京、中山寺、宝塚、堺・百舌鳥、

○昭和41年～52年

1 年	多武峯、六甲山、金剛山、比良蓬萊山、岩湧山、大文字山、音羽山
2 年	側川溪、鞍馬花背峠、青山高原、京都西山、比叡山、天王山、甲陽園・芦屋、竜王山、上ノ太子・弘川寺
3 年	生駒鳴川峠、奈良西ノ京、中山寺・宝塚、高雄・清滝、京都東山、京都、紀泉高原

○昭和53年～59年(候補地を追加する。)

2年 貝ヶ平山、鳥見山

○昭和60年～ (候補地を追加する。) ※新コース開拓中

1年 砂川 2年 紀泉アルプス 3年 飯盛山

具体例

	(27期生)	(28期生)
1 年 秋	橿原神宮～石舞台～談山神社～桜井	桜井～山ノ辺の道～天理
2 年 春	大山崎～長岡天神	山中溪～六十谷
2 年 秋	星田～磐船～飯盛山～四条綴	笠置～童仙房～大河原
3 年 春	道場～鎌倉峽～道場	元山上口～鳴川峠～暗闇峠
3 年 秋	京都散策	京都散策

5 富士登山

○登山訓練 実施記録

年 度	実施年月日	宿泊数	目的地	参 加 生 徒	引率教官
昭和25年度	昭和25年7月27日 ～ 31日	4泊5日	富士山		
26	昭和26年7月31日 ～ 8月4日	4泊5日	富士山		
27	昭和27年7月31日 ～ 8月4日	4泊5日	富士山	中1,2,3年希望者 50名 { 男47名 女 3名	5名
28	昭和28年 大雨のため中止		白馬岳		
29	29年8月5日 ～ 10日	5泊6日	富士山 富士五湖		
30	30年8月5日 ～ 9日	4泊5日	乗鞍岳 高地	中1,2年希望者 63名 { 男61名 女 2名	6名
31	31年8月3日 ～ 8日	5泊6日	富士山 富士五湖	中1,2,3年希望者 90名 { 男75名 女15名	6名
32	32年8月3日 ～ 7日	4泊5日	乗鞍岳 高地	中1,2年希望者 88名 { 男80名 女 8名	6名
33	33年8月3日 ～ 8日	5泊6日	富士山 富士五湖	中1,2年希望者 59名 { 男49名 女17名	5名
34	34年8月3日 ～ 8日	5泊6日	富士山 富士五湖	中2希望者 57名 { 男40名 女17名	5名
35	35年8月3日 ～ 8日	5泊6日	富士山 富士五湖	中2希望者 52名 { 男36名 女16名	5名
36	36年8月3日 ～ 8日	5泊6日	富士山 富士五湖	中2希望者 75名 { 男56名 女19名	6名
37	37年8月3日 ～ 8日	5泊6日	富士山 富士五湖	中2希望者 103名 { 男76名 女27名	7名
38	38年8月3日 ～ 8日	5泊6日	富士山 富士五湖	中2希望者 109名 { 男90名 女19名	9名
39	39年7月28日 ～ 31日	3泊4日	富士山 富士五湖	中2希望者 115名 { 男89名 女26名	9名
40	40年7月28日 ～ 31日	3泊4日	富士山 富士五湖	中2希望者 106名 { 男79名 女27名	9名
41	41年7月28日 ～ 31日	3泊4日	富士山 富士五湖	中2希望者 118名 { 男82名 女36名	10名

○富士登山日程表 (41年の例)

7月28日 7:30	大阪駅中央団体改札口集合	14:30	出 発 (貸切りバス)
8:30	大阪駅 発 (急行第一には)	17:00	富士山新5合目 着
14:18	富士駅 着	10	〃 発
		50	富士山新6合休泊所着:徒歩 0.8km 40分 宿泊
7月29日 6:30	富士山新6合休泊所	発	徒歩1.6km90分 荷物を預ける
9:00	富士山8合目	〃	
20	〃	発	徒歩2.0km 120分 昼食, 最高峰登頂 徒歩2.0km 60分
12:00	山 頂	着	
13:00	〃	発	
15:00	8合目	〃	徒歩0.5km 40分 宿泊
30	〃	発	
16:30	御殿場 7合目休泊所	着	

7月30日

4:00 起床 御来光
 6:00 休泊所 発 } 徒歩 6.5km 90分
 9:00 御殿場口新2合目 着 }
 9:15 〃 発 (貸切りバス)
 11:40 御殿場→山中湖(休けい)→河口湖 着 昼食
 12:30 河口湖 発 紅葉台→氷穴→白糸の滝
 15:30 富士宮 浅間神社 着
 16:00 〃 発
 17:30 沼津→伊豆長岡 着 宿泊

7月31日

7:30 伊豆長岡発 } (貸切りバス)
 8:20 沼津駅 着 }
 9:06 〃 発 }
 16:26 米原駅 着 } (のりかえ)
 17:09 〃 発 }
 19:21 大阪駅 着
 19:30 大阪駅中央団体改札口 解散

年 度	実施年月日	宿泊数	目的地	参 加 生 徒	引率教官
42	昭和42年7月28日 ～ 31日	3泊4日	富士山 富士五湖	中2希望者 121名 } 男85名 女36名	8名

41,42年度の富士登山からの帰阪列車は、沼津発9時06分、途中米原での乗り換えを入れて、大阪着19時21分の普通列車。延々10時間の旅行でお尻が痛くなったことを記憶している。

43年度より、帰阪時には新幹線を利用することが出来るようになり、日程を1日短縮した。

年 度	実施年月日	宿泊数	目的地	参 加 生 徒	引率教官
43	昭和43年7月30日 ～ 8月1日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 131名 } 男82名 女49名	8名

43年度日程表

7月30日

8:30 大阪駅発 (急行第一なにわ)
 14:19 富士駅着
 17:00 富士山新5合目着 (貸切りバス)
 18:00 新6合目着 (男子宿泊)
 19:00 新7合目着 (女子宿泊)

8月1日

6:00 石室出発
 9:00 御殿場口2合目着
 11:50 河口湖着 (昼食)
 17:34 静岡駅発 (こだま131号)
 20:05 新大阪駅着

7月31日

6:30 石室出発
 12:00 富士山頂着
 16:00 御殿場口7合目着 (日ノ出館, 宿泊)

44年度より往復とも新幹線を利用。初日に新7合目まで登り宿泊。

2日目山頂をきわめた後、一気に御殿場口2合目まで砂走りを走り、河口湖で一泊。山小屋での宿泊を1日することにした。この日程は現在の富士登山の日程の基本となっている。

年 度	実施年月日	宿泊数	目的地	参 加 生 徒	引率教官
44	昭和44年7月28日 ～ 30日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 125名 } 男82名 女43名	9名

44年度日程表

7月28日

8:25 新大阪発 (こだま112号)
 11:03 静岡駅着 (のりかえ)
 12:14 富士駅着
 15:20 富士山新5合目着
 17:20 新7合目着 (夕食、宿泊)

7月29日

6:00 石室出発
 10:00 富士山頂着
 15:00 御殿場口2合目着
 18:30 河口湖着 (宿泊)

7月30日

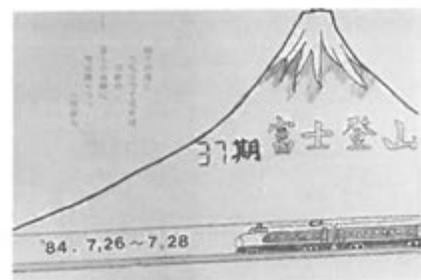
8:00 河口湖発 五湖めぐり
 15:00 静岡駅着
 15:40 静岡駅発 (こだま393号)
 18:25 新大阪駅着

年 度	実施年月日	宿泊数	目的地	参 加 生 徒	引率教官
45	昭和45年7月28日 ～ 30日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 124名 {男79名 女45名}	10名
46	昭和46年7月28日 ～ 30日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 112名 {男76名 女36名}	11名

46年より新幹線三島駅富士山新五合目へ。

年 度	実施年月日	宿泊数	目的地	参 加 生 徒	引率教官
47	昭和47年7月26日 ～ 28日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 122名 {男 78名 女 44名}	10名
48	◇ 48年7月26日 ～ 28日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 126名 {男 81名 女 45名}	9名
49	◇ 49年7月29日 ～ 31日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 153名 {男 92名 女 62名}	13名
50	◇ 50年7月29日 ～ 31日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 159名 {男 91名 女 68名}	12名
51	◇ 51年7月29日 ～ 31日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 152名 {男 107名 女 45名}	13名
52	◇ 52年7月28日 ～ 30日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 158名 {男 106名 女 52名}	13名
53	◇ 53年7月27日 ～ 29日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 162名 {男 111名 女 51名}	13名
54	◇ 54年7月26日 ～ 28日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 156名 {男 105名 女 51名}	13名
55	◇ 55年7月28日 ～ 30日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 160名 {男 108名 女 52名}	13名
56	◇ 56年7月28日 ～ 30日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 157名 {男 106名 女 51名}	13名
57	◇ 57年7月28日 ～ 30日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 157名 {男 106名 女 51名}	13名
58	中 止				
59	◇ 59年7月26日 ～ 28日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 156名 {男 106名 女 50名}	14名
60	◇ 60年7月29日 ～ 31日	2泊3日	富士山 富士五湖	中2希望者 157名 {男 107名 女 50名}	14名

富士登山の栞





山小屋にて



剣ガ峰にて



宝永山にて

6 スキー訓練

正しいスキーの技術や知識を身に付けさせ、併せて社会的態度や、健康安全に対する態度を学ばせるといった教育的効果を期待して行っているものである。本校がこの行事を実施し始めた当時は、スキーそのものが上流社会の特定な人達のスポーツであったため時代に先行した行事であり、大そうめずらしいものであった。創立した昭和31年度～33年度の間は中学校と合同で、高校1年生の希望者を対象に実施していた。以後は高校1年生の希望者のみの行事として実施していたが、スキーの一般化と普及、2年生の保護者の要望等々により、昭和47年度より、高校1年生、2年生の希望者を対象に実施することになり、現在（昭和60年度）に至っている。実施の概要については以下に示す通りである。

目標

1. 大自然に接しながら心身を鍛練し、健康の増進を図る。
2. 望ましい団体生活を通じて社会性の向上を図る。
3. スキー技術の習得、向上と併せて安全の習慣を身に付ける。

実施記録

回	年度	実施期日	場 所 (宿舎)	生徒参加者数	引 率 教 官 名	費 用
1	31	32年1月 5～10日	新潟県妙高池之平スキー場 (第1ホテル小林旅館)	高1年希望者 (男=9 女=4)	馬場・辻江・佐崎・保田 川野・鳥井・新堂・森口	3,000
2	32	33年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=15 女=8)	辻江・野村・保田・福原 川野・田村・高岡・新堂・森口	3,100
3	33	34年1月 5～10日	同 上	高1年希望者 (男=7 女=3)	辻江・保田・佐崎・田村 森口・鈴木	3,500
4	34	35年1月 5～10日	同 上	高1年希望者 (男=17 女=8)	新堂・保田・武田久 笹田	4,200
5	35	36年1月 4～9日	同 上		列車不通により中止	4,500
6	36	37年1月 4～9日	同 上	高1年希望者 (男=16 女=11)	保田・武田・笹田	5,500
7	37	38年1月 4～9日	長野県白馬村細野八方尾根 スキー場 (缶明館)	高1年希望者 (男=43 女=24)	保田・山口・武田久 武田和・岡田・上野	5,200
8	38	39年1月 5～10日	同 上	高1年希望者 (男=71 女=27)	保田・矢田・中谷・山崎・岡田 久島・笹田・芳賀・武田	5,800
9	39	40年1月 5～10日	同 上	高1年希望者 (男=66 女=16)	保田・矢田・中谷・森・山口 武田・芳賀・岡田・笹田・横田	7,200
10	40	41年1月 5～10日	新潟県妙高赤倉スキー場 (後 楽 荘)	高1年希望者 (男=57 女=27)	保田・矢田・中谷・山口 岡田・芳賀・武田・浅野	8,700
11	41	42年1月 5～10日	同 上	高1年希望者 (男=67 女=27)	保田・矢田・中谷・風間・高岡 片山・笹田・芳賀・浅野	8,850

回	年度	実施期日	場 所 (宿舎)	生徒参加者数	引 率 教 官 名	費 用
12	42	43年1月 5～10日	新潟県妙高赤倉スキー場 (後 楽 荘)	高1年希望者 (男=52 女=29)	保田・矢田・中谷・風間 岡森・浅野・石川・芳賀	8,850
13	43	44年1月 5～10日	同 上	高1年希望者 (男=32 女=33)	保田・矢田・中谷・風間 桜井・浅野・網	9,200
14	44	45年1月 5～10日	同 上	高1年希望者 (男=49 女=27)	保田・矢田・中谷・風間 山口・平林・横田・津崎	9,600
15	45	46年1月 5～10日	同 上	高1年希望者 (男=44 女=34)	保田・矢田・中谷・風間 奥・本間・芳賀	9,700
16	46	47年1月 5～10日	同 上	高1年希望者 (男=46 女=32)	矢田・中谷・風間・西浜 武田・石川・高木・逸見	11,200
17	47	48年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=41 女=26)	矢田・浦久保・風間 西浜・浅野・高木	11,200
18	48	49年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=32 女=19)	矢田・浦久保・風間 西浜・横田・田原	13,500
19	49	50年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=52 女=34)	矢田・浦久保・風間・西浜・浅野 本間・岩城・東元・上林	18,500
20	50	51年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=44 女=18)	矢田・浦久保・風間・西浜 河野・岩城	23,500
21	51	52年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=29 女=21)	矢田・浦久保・風間 西浜・浅野	27,000
22	52	53年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=46 女=24)	矢田・浦久保・風間・西浜 横田・高木	28,500
23	53	54年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=49 女=37)	矢田・浦久保・風間・西浜 河野・田原・井畑・上林	30,500
24	54	55年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=63 女=15)	矢田・浦久保・風間・西浜 本間・河野・岩城・琢磨	31,500
25	55	56年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=54 女=43)	浦久保・田中・風間・西浜 奥・浅野・高木・岩城・北	33,100
26	56	57年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=55 女=23)	浦久保・田中・風間・西浜 浅野・田原・高木・上林	35,500
27	57	58年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=65 女=37)	浦久保・田中・風間・西浜・千種 横田・田原・高木・井野口・井畑・北崎	36,500
28	58	59年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=47 女=41)	浦久保・田中・風間・西浜・ 横田・琢磨・上林	38,000
29	59	60年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=29 女=45)	浦久保・田中・風間・西浜 網・浅野・下村・楠本崎	38,700
30	60	61年1月 5～10日	同 上	高1・2年希望者 (男=45 女=36)	浦久保・田中・風間・西浜・武田 河野・高木・柴山・鎌田崎	39,300

(昭和28年度～昭和30年度は中学校実施、昭和31年度～昭和33年度は中学校と合同実施、それ以後は高校のみ)

昭和30年度 スキー旅行計画要項

場 所	新潟県妙高池の平スキー場
日 程	昭和31年1月4日 大阪駅発 20:12 (普通列車) ＊ 5日 田口駅着 10:16 午後練習 ＊ 6日 7日 午前・午後練習 ＊ 8日 午前練習 田口駅発 16:43 (普通列車) ＊ 9日 大阪駅着 7:50
費 用	3,000円 [交通費 900円 宿泊費 1,900円(食費, 米代, チップ等を含む) 雑費 200円(コーチ代, ワックス代等), 尚この外に貸スキー (1日 80円) 貸靴 (1日80円) は, 借用者各自負担]
携行品	○学生服でもよい。アノラック又はジャンパー, 毛糸のセーター等, 服地はサ ージ又は, ギャバジンがよい。ズボン下 (着換も) ○毛糸のシャツ, 下着の交換, 長目の手袋, 毛糸の靴下, 普通の靴下各2足 ○朝食 (1食分), 水筒, 紫外線よけ色眼鏡, 洗面具, チリ紙, タオル2枚, 簡単な娯楽品 (トランプ等), 帽子 (出来れば耳のかくれるもの)
締 切	11月19日(土)厳守して下さい。
方 法	学級担任の承認を得て, 第1回納金 1,500円を申込書を添え事務所に提出す こと, (全額 3,000円納入してもよい) 第2回納金 1,500円は12月10日迄に納入すること。

昭和40年度 指導計画表

第 1 日	第 3 日
スキー用具の説明	不整地滑降 (直, 斜滑降)
スキーのもち方, おき方	斜滑降
スキーの着脱法	横すべり
ストックのもち方	ブフルーク
歩き方	ブフルークボーゲン
方向転換	シュテムボーゲン
登り方	山回りクリスチャニヤ
ころび方, おき方	
直滑降	第 4 日
スタートのしかた	前日までの各技術を反復練習する。
第 2 日	能力に応じて, 谷回りクリスチャニヤ
前日の復習	ウエーデルン
直滑降・斜滑降	その他
方向転換	
不整地滑降	

昭和50年度（第20回）スキー訓練募集要項

1. 場 所 新潟県中頸郡妙高高原町赤倉 赤倉スキー場
2. 宿 泊 所 ホテル後楽荘（電話02258-7-2120）
3. 日 程 昭和51年1月5日（月）～1月10日（土）
 - 5日 集合時刻 21時15分 大阪駅中央団体集合所
大阪駅発21時46分 乗車列車「ちくま2号」
 - 6日 早朝 妙高高原駅着7時46分（貸切バスで赤倉へ）
午後
 - 7日 午前・午後 } スキー練習
 - 8日 午前・午後 }
 - 9日 午前 }
後楽荘発 16時00分（貸切バスで長野駅へ）
長野駅発 22時40分「ちくま3号」
 - 10日 早朝 大阪駅着 6時55分 解散 7時00分
4. 実施学年 高1・高2 希望者
5. 募集人員 80名
6. 費 用 23,500円（交通費、宿泊費、その他）
7. 申 込 み 費用納入締切 12月1日（月）
但し、申込み順により定員になり次第締切る。
申込み後、不参加の場合、連帯負担金（バス代、その他）として、
3,500円徴収しますから、あらかじめご了承ください。
8. そ の 他 ○身体検査、12月4日（木）3時10分から保健室で行う。
○諸連絡日時、12月16日（火）テスト終了後
9. 服装・携行品
 - 上着はキルティング・アノラック・セーター等
 - ズボンは、スキーズボン
 - 帽子は、耳のかくれるもの
 - 着換は、ズボン下、下着類、普通のくつ下2足
 - スキー用具（無い者は、現地で借り得る）
 - 手ぶくろ、毛糸のくつ下、サングラス、ゴーグル
 - 日用品（チリ紙、タオル2本、洗面用具、メモ帳、筆記用具）
 - 弁当2食（6日の朝、昼：但し昼食は、ホテルの食堂を利用してもよい）
 - 小遣は、5,000円程度、予備金 3,000円、帰りの夕食代 500円程度
（スキーを借りる人は、別に 7,000円程度必要）
 - 常用薬品類・安全ピンのついた名札（3個）・洗たくばさみの名札（3個）
 - 背番号（学校で準備する）

昭和50年度 スキー訓練日程表

大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎

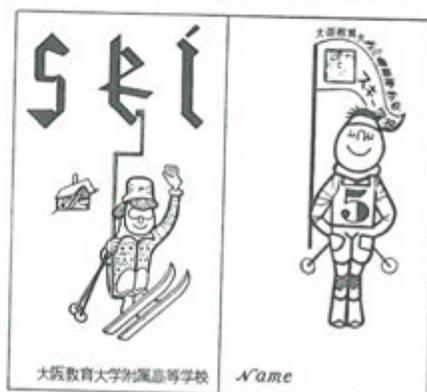
6日 (火)	7日 (水)	時間	8日 (木)	9日 (金)
5日 (月)				
21時15分 集合				
21時46分 大阪駅発 (ちくま2号)	— 〈起 床〉 —	6:30	— 〈起 床〉 —	— 〈起 床〉 —
— 6:28 長野駅着 —	— 〈朝 食〉 —	7:30	— 〈朝 食〉 —	— 〈朝 食〉 —
— 7:07 長野駅発 —	— 〈集 合〉 —	9:00	— 〈集 合〉 —	— 〈集 合〉 —
— 7:46 妙高高原駅着 —	(班別)		(班別)	(班別)
— 8:40 赤倉(後楽荘)着 —	練 習		練 習	練 習
(仮眠)				
	— 〈終 り〉 —	11:30	— 〈終 り〉 —	
— 〈起床, 昼食〉 —	— 〈昼 食〉 —	12:30	— 〈昼 食〉 —	— 〈終 り〉 —
— 1:00 準備 —				— 1:00 〈昼食〉 —
— 〈集 合〉 —	— 〈集 合〉 —	2:00	— 〈集 合〉 —	
(班別)	(班別)		(班別)	
練 習	練 習		練 習	— 4:00 —
				〈旅館前集合〉
— 〈終 り〉 —	— 〈終 り〉 —	5:00	— 〈終 り〉 —	— 5:32 妙高高原駅発 —
— 〈夕 食〉 —	— 〈夕 食〉 —	6:00	— 〈夕 食〉 —	— 6:26 長野駅着 —
自由時間	自由時間		自由時間	自由時間
				— 10:00 長野駅前 集合 —
— 〈外出門限〉 —	— 〈外出門限〉 —	9:00	— 〈外出門限〉 —	— 10:40 長野駅発 (ちくま3号) —
— 〈夕 礼〉 —	— 〈夕 礼〉 —	9:30	— 〈夕 礼〉 —	
— 〈消燈就寝〉 —	— 〈消燈就寝〉 —	10:00	— 〈消燈就寝〉 —	10日
				— 6:55〈大阪駅着〉 —
				— 7:00〈解 散〉 —
安らかにおやすみなさい	明日にそなえてグッスリ眠ろう		最後の晩だ、でも明日があるよ	明後日から楽しい学校がはじまるよ

昭和60年度（第30回）スキー訓練 募集要項

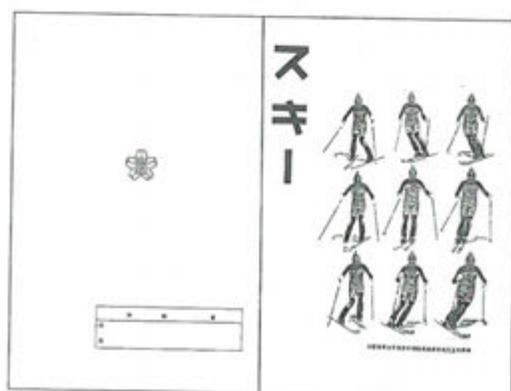
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

- 1 日 時 昭和61年1月5日（日）～10日（金） 5泊6日
- 2 場 所 新潟県妙高々原 赤倉温泉スキー場
- 3 宿 舎 [ホテル後楽荘] 電話 02558-7-2120
〔〒949-21 新潟県妙高々原町34-1〕
- 4 日 程

1月5日	21:10	大阪駅中央コンコース 集合	
	21:43	大阪駅発 乗車列車【ちくま1号】	
1月6日	5:24	長野駅着	5:40 長野駅発
	6:34	妙高々原駅着	（貸切バスで赤倉へ）
	午後		
1月7日	午前	・ 午後	} スキー訓練
1月8日	午前	・ 午後	
1月9日	午前		
	16:00	「ホテル後楽荘」発（貸切バス）	
	17:40	妙高々原駅発	18:23 長野駅着
	23:26	長野駅発 乗車列車【ちくま2号】	
1月10日	8:27	大阪駅着	8:40 解散
- 5 募集学年 高1 高2 希望者
- 6 募集人員 80名
- 7 費用 39,300円（交通費、宿泊費、等）
- 8 申込み方法 申込み締切 11月26日（火）
（申込み書に必要事項を記入し、費用を添えて、事務室に申込んで下さい。
但し、申込みは、定員になり次第締切ります。申込み後不参加の場合、連帯負担金として、4,000円徴収しますので、あらかじめ御了承下さい。）
- 9 携行品・スキー服装等について
 - ★上着……キルティング、アノラック等
 - ★ズボン……スキーズボン
 - ★スキー用手袋
 - ★スキー用くつ下（2足）
 - ★帽子……耳のかくれるもの
 - ★サングラス、ゴーグル
 - ★スキー用具一式（ない者は、現地で借りうる）
 - ★日用品（タオル、洗面用具一式、常備薬、名札のついた洗濯ばさみ）
 - ★メモ帳
 - ★筆記用具
 - ★しおり
 - ★弁当（6日の朝・昼用2食）
 - ★小遣い（食事代、リフト代、おやつ等）
 - ★スキー一式を借りる人は、別に5,000円程度必要
 - ★ゼッケン（学校で準備）
- スキー健康相談日 11月30日（土）12時40分から保健室で行います。
- スキー訓練最終説明会 12月11日（水）テスト終了後



テキスト表紙 テキスト裏表紙
(昭和40年度～昭和52年度)



テキスト裏表紙 テキスト表紙
(昭和53年度～昭和60年度)

第30回（昭和60年度）スキー訓練実施要項

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

〔I〕実施期日 昭和61年1月5日(日)～10日(金)

〔II〕場 所 新潟県妙高高原町赤倉温泉
スキー場

〔III〕宿泊所 「ホテル後楽荘」
(02558-7-2120)

〔IV〕日 程

1月5日(日) 21時10分 大阪駅中央コンコース集合
21時43分 大阪駅発「ちくま1号」

6日(月) 5時24分 長野駅着
5時40分 長野駅発
6時34分 妙高高原駅着
(バスで宿舎へ)
午前中仮眠
2時00分 開講式・スキー訓練

7日(火) } スキー訓練
8日(水) }

9日(木) 午前中 スキー訓練
16時00分 宿舎発
(バスで妙高高原駅へ)
17時40分 妙高高原駅発
18時23分 長野駅着(自由行動)
23時26分 長野駅発「ちくま2号」

10日(金) 8時27分 大阪駅着
8時40分 大阪駅中央出口前で解散

〔VI〕班編成表

(男子45名：女子36名：合計81名)

班	指導教官	ゼ ッ ケ ン 番 号														合 計
		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	

班	1	田 中 教 官											11	名
		石田敬悟	菅幹生	古川善郎	村上篤矢	植田剛司	米田英生	小川直子	小林千恵	巽園子	乾真有美	早石理江子		

班	2	西 浜 教 官											12	名
		木下裕文	柴英隆	中井幹晴	梁井秀規	重柄孝	久保達也	柴田恵利	唐澤聡	中津正晴	藤山二郎	菅田秀章		

班	3	風 間 教 官											10	名
		㉓ 木村麻子	㉔ 辻知里	㉕ 上原昌代	㉖ 大原香織	㉗ 榎本幸子	㉘ 森田剛史	㉙ 北田充	㉚ 北田聖路	㉛ 福井章	㉜ 西村昌浩			

班	4	浦 久 保 教 官											9	名
		㉑ 北村美奈子	㉒ 八木優子	㉓ 菊地真理	㉔ 田中貴子	㉕ 星野理香	㉖ 磯波美和子	㉗ 小坂真理子	㉘ 小西由華	㉙ 藤田亜紀子				

班	5	鎌 田 講 師											11	名
		43 貴田理臣	44 竹中敬一	45 仲剛司	46 野村雅彦	47 田中宏和	48 伊川正人	49 杉野章生	50 霧浦正宏	51 太田主悟	52 竹本伸久	53 井川正行		

班	6	高 木 教 官											11	名
		54 富永大介	55 田中栄次	56 木戸口晋	57 武橋孝明	58 山口直久	59 三谷治夫	60 小川俊博	61 高田雅司	62 藤本佳克	63 川野隆一	64 森川智司		

班	7	柴 山 教 官											8	名
		㉑ 榎川直子	㉒ 近東亜紀子	㉓ 橋本文子	㉔ 中岡千聡	㉕ 碓谷英子	㉖ 安田真穂	㉗ 小松原昌子	㉘ 大和由希子					

班	8	河 野 教 官											9	名
		㉑ 粉川範子	㉒ 村田法子	㉓ 長谷川千晃	㉔ 佐々木香織	㉕ 岡本純子	㉖ 山野文子	㉗ 田中尚子	㉘ 益澤佳子	㉙ 長谷川充子				

〔V〕引卒教官役割

- 総責任者 武田 教務主任
- 総 務 浦久保 教 官
- 生徒指導 田 中 教 官
- 輸 送 係 風 間 教 官
- 宿舎生活係 河 野 教 官
- 高 木 教 官
- 柴 山 教 官
- 用 具 係 西 浜 教 官
- 鎌 田 講 師
- 教 護 係 体 育 科 教 官
- 技 術 指 導 右記の班別表による。

○印 女子

第30回（昭和60年度）スキー訓練日程表

6日 (月)	7日 (火)	時間	8日 (水)	9日 (木)
<u>5日 (日)</u>				
21:10 大阪駅集合 21:43 大阪駅発 〔ちくま1号〕	〈起床〉	7:00	〈起床〉	〈起床〉
5:24 長野駅着 5:40 長野駅発	〈朝食〉	7:30	〈朝食〉	〈朝食〉
6:34 妙高高原駅着 7:30 〔後楽荘〕着 〔貸スキー準備〕	〈集合〉 (班別 集合)	9:00	〈集合〉 (班別 集合)	(荷物・別部屋移動) 9:30 〈集合〉 (班別 集合)
(仮 眠)	<u>練習</u>		<u>練習</u>	<u>練習</u>
	〈終了〉	11:30	〈終了〉	
〈起床・昼食〉	〈昼食〉	12:30	〈昼食〉	
〈集合〉 〈開講式〉 (全体集合)	〈集合〉 (班別 集合)	2:00	〈集合〉 (班別 集合)	1:20 〈終了〉 1:30 〈閉講式〉 1:40 〈昼食〉
<u>練習</u>	<u>練習</u>		<u>練習</u>	整理・整頓
〈終了〉 〈夕食〉	〈終了〉	4:45	〈終了〉	4:00 宿舎出発 4:30 バス停出発
〈夕食〉	〈夕食〉	5:30	〈夕食〉	5:40 妙高駅出発 6:23 長野駅着
自由時間	自由時間		自由時間	自由時間
〈外出・門限〉	〈外出・門限〉	9:00	〈外出・門限〉	11:00 集合 11:26 長野駅発 〔ちくま2号〕
〈夕礼〉	〈夕礼〉	9:30	〈夕礼〉 荷物整理	<u>10日 (金)</u>
〈消燈・就寝〉	〈消燈・就寝〉	10:00	〈消燈・就寝〉	8:27 大阪駅着 8:40 解散

スキー訓練、指導計画表 (昭和50年度～昭和60年度)

日時	級	初 級 (初心者)	中 級 (経験者・短)	上 級 (経験者・長)
第一日 (6日)	午	▲初歩動作 スキーのもち方、おき方 スキーの着脱 ストックの握り方 ころび方、おき方	▲基本技術 直滑降 伸ばし・ブルーク 曲げ・ブルーク	▲基本技術 直滑降 ブルーク (伸び・曲げ) ブルーク・ボーゲン
	後	歩行、踏みかえ 推進滑走 登行 方向変換		
第二日 (7日)	午	▲基本技術 直滑降 伸ばし・ブルーク 曲げ・ブルーク	ブルーク・ボーゲン 斜滑降 横すべり 山まわり (浅)	斜滑降 横すべり 山まわり (浅) シュテムギルランデ ブルーク・ターン
	後	直滑降< 伸ばしブルーク 曲げブルーク ブルーク・ボーゲン (浅)	シュテムギルランデ ブルーク・ターン シュテム・ターン 山まわり (深)	シュテム・ターン 山まわり (深) 谷開きターン パラレル・ターン ウェーデルン
第三日 (8日)	午	ブルーク・ボーゲン (深) 斜滑降	谷開きターン パラレルターン	▲発展技術 ・ピボット・ターン { シュテム・ターン { パラレル・ターン { ウェーデルン ・ジャンプターン { ジャンプギルランデ { パラレルターン { ウェーデルン
	後	ブルーク・ボーゲン連続	ウェーデルン	・ステップターン { スケーティング { ステップ 不整地滑降 ゲレンデ・シュブルンク
第四日 (9日)	午	既習技術の総合練習	総合滑降 既習技術の総合練習	総合滑降 既習技術の総合練習

成田五穂子・西浜 士朗・平田 達彦・井野口弘治
浦久保寿彦・金藤 行雄・楠本久美子

合宿訓練・修学旅行

§1 合宿訓練

1 中1合宿訓練

60年度も、5月23日(木)～25日(土)に、国立曾爾少年自然の家を中心に曾爾高原で中1合宿訓練が実施された。入学式から1ヶ月半程、まだまだ制服姿も板につかない時期に迎える大きな行事とあって、イメージづくりにかなりの時間が掛けられる。60年度で8回目、附属中学校の歴史の中にあってはまた新しい行事ということになる。

昭和52年の第1回、31期生の合宿訓練へさかのぼってみると、

目的 中学生としての自覚を持つ。

①友との交わりを深める。

②集団生活を通して中学生生活の規律を身に付ける。

実施の期間 昭和52年5月23日(月)～5月25日(水)

宿泊場所 大阪YMCA六甲研修センター

参加者 第1学年(31期生)生徒 162名(男子102名 女子60名)

というように実施された。学年担当者が発表され、どんな生徒に育てるかの学年準備の話し合いをするなかで、合宿訓練話が持ち上がり、教官会議に提案された。上記の目的にあるような、中学生としての自覚を早い時点で持たせたい。そのためには、中学校といふところはこんなところだということを集散的に講話したり、考えさせる時間、場を持つことが望ましいということであった。この年からさかのぼること4年、昭和48年4月に第1学年(27期)から1学級増が認められ、1学年4クラスとなった。4クラス時代に入って、生徒掌握という点で3クラス時代との違いを教官一人一人が感じ始めていた。生徒増に伴い生徒間の交流の様子にも変化が出て来て、1年間共に生活しながらもお互いに未知の部分が多く、名前すら知らないという生徒も出て来た。また以前から附属小学校からの生徒と一般入試によって入学してくる生徒との間のへだたりをうめるのに時間が掛かり過ぎて教官も生徒もかなりの精神的な負担を感じていたことなどもあって、賛同者も多くあった。

一方、高等学校にはすでに合宿訓練が高1に実施されているなかで、中学校にも同じような性格を持つ行事を加えることに異議を申し立てる者もあった。賛否両論かわされるなかで、本年1度実施してみよう、次年度以後、続けるということは前提としないということを出発した。ただ、生徒の指導の中核にかかわる行事であるという性格上、目標設定には生徒指導部もかかわった方がよいであろうということをつけ加え、実施案についての方は学年に任される形で決定した。そして出された計画案は次のようなものであった。

〔昭和52年度 中一合宿訓練 計画案(S52・4・26)〕

1. 合宿訓練の目的 中学生としての自覚を持たせる。

①望ましい仲間づくりを指向させる。

②集団生活を通して中学生の規律を確立させる。

2. 実施の期間 昭和52年5月23日(月)～5月25日(水)

3. 集合・解散の時刻と場所

集合：5月23日(月)午前9時 大阪梅田 紀伊国屋書店前

(阪急梅田駅下1階 新阪急ホテル側)

解散：5月25日(水)午後4時30分ごろ 上記同所

4. 場所・宿泊所 大阪YMCA六甲研修センター

657-01 神戸市灘区六甲山町北六甲875 Ⅸ (078) 891-0050

5. 費用——1万1千円

交通費	阪 急 (4割引)	往復	192円
	ケーブル (4割引)	往復	420円

計 612円

宿泊費 (1泊2食付)	3400円×2 = 6800円	施設使用料	600円
昼食費	600円×2 = 1200円	予備費	788円

6. 日程とコース

時	5/23 (月)	5/24 (火)	5/25 (水)
6		起 床	起 床
7		朝 礼	朝 礼
8		朝 食	朝 食
9	集 合	ディスカッション (テーマ……集団行動 について)	教官による話
10	阪急梅田駅 阪急六甲駅 六甲ケーブル土橋駅 六甲ケーブル山上駅	野外活動 (目的地……)	合宿生活のまとめ (作文・話し合い)
11			
12	昼食(弁当)	昼食(弁当)	昼 食
1	オリエンテーション ねらいの明確化等	○フォークダンス ○歌	清掃整理 — 宿 舎 発 — 六甲ケーブル山上駅 六甲ケーブル土橋駅 阪急六甲駅 阪急梅田駅
2	施設探訪		
3		自由時間	
4	グループ活動① (計画・準備)		解 散
5	入浴・整理	入浴・整理	
6	夕 食	夕 食	
7	グループ活動② (発表)	学級企画 (リクレーション)	
8	一寸劇等		
9	夕 礼	夕 礼	
10	就寝準備 — 消 灯 —	就寝準備 — 消 灯 —	

計画案についての討議がなされ、集団生活のあり方や時間的な厳しさを教官の手をどこまで出しながら指導するのがよいか、また、基本的な生活習慣を知らないの、食事の仕方や掃除、整理整頓、話し合いのエチケットなどかなりのことを指導する必要があるのではないか、など、中学生としての自覚を持たせるためにという目的が全員の認めることとなった。グループ活動①②、野外活動と多過ぎるのではない、あるいは少し楽し過ぎる企画ではないかという意見も出され、実施に当たっては直接の指導に当たる学年に任せられることとなり、幾つかの修正を加えながらの実施となった。

実施後の報告も次年からどう扱うかのこともあるので、詳細にわたり報告、反省がなされた。施設の面ではホール・研修室など十分であり、食事や入浴も予定の時間内に終わらせるだけの余裕があり、まずまずであり、幾つかの活動がスムーズに進行させられた。名前と顔がほぼ覚えられた時点での実施で、友達を知るという目標は十分に達せられた。行動を通して集団を考えたり、行動様式は覚えたが、集団の本質の思考は出来る状態にまで至らなかった。スケジュールの点では、つなぎの時間の設定が無かったことが問題であった。以上のことを受け継ぐべき合宿委員会（辻、藤村、今倉、大仲、乾）が発足した。委員会の仕事としては、目的（不変的・普遍的なもの）——高校との関連、場所の手配、時期、費用等の検討ということであった。委員が分担して、他校（主として附属校）における1年生合宿の実施状況のアンケート、公営施設、寺、休暇村などの資料収集を行う一方、数回の委員会を開き目的の検討を行った。そして、約半年のまとめとして委員会報告がなされ、全教官の賛同を得て、第2回の実施へとスムーズな中1合宿の流れが生まれた。

〔合宿委員会報告〕

合宿委員会報告 1978. 3. 7

1. 目的 中学生としての自覚を持たせるために次のことを押さえる
 - ①基本的な生活習慣
 - ②仲間づくり
 （具体的な文章化は学年でする）
2. 期日 昭和53年5月22日（月）～5月24日（水）2泊3日
3. 場所 和歌山県立白崎少年自然の家
和歌山県日高郡由良町大字大引961
TEL. 07386-5-2351-2
4. 参加者 本校中学1年生全員
5. 輸送 往路5/22（月） 天王寺 御坊バス→現地
10.30 紀州5号→12.09
復路5/24（木） 現地 バス→湯浅 天王寺
13.18 きのくに5号→14.44
14.56 きのくに8号→16.29
 - バスの手配は自然の家に依頼可能（中紀バス）
湯浅→現地 40人乗1.2万円（1977年12月現在）
和歌山→現地 4万円（1時間30分）
6. プログラム 下見の結果をもとに学年中心に立案する。
7. 下見 学年と委員会で期日（1泊2日）を決める。

8. その他 54年度以降の実施についての下準備は生活指導部とする。

5/25 (木) の1年生の授業については学年で検討する。

—合宿委員会下見 (12月6日) 報告— 1980.12.16

白崎少年自然の家は、小高い山の中にあつて、宿舎の周辺は緑に包まれ、眺望は眼下に海がひらけ、自然環境において申し分なく、干潮時には十九島にわたることも出来、白崎の石灰岩の採掘跡はかなりの広さを持ち、野外活動場所として最適であり、自由に使用出来ることも合宿の好条件の一つとして考えられた。そして32期生の合宿は前年実施のものを参考にし、地の利を生かし、磯観察などを活動に組み入れて実施の運びとなった。

【中1合宿訓練実施要項 (昭和53年度)】

1. 目的 中学生としての自覚を持つ
基本的な生活習慣を身に付け、仲間をよく知る
2. 日時 昭和52年5月22日 (月) ~ 5月24日 (水) 2泊3日
3. 場所 和歌山県立白崎少年自然の家
和歌山県日高郡由良町大字大引961
TEL (07386) 5-2351
4. 参加者 第1学年 (32期生) 全員
5. 引率者 副校長他5名

日程

日	5月22日(月)	5月23日(火)	5月24日(水)
6		起 床	起 床
7		朝 礼	朝 礼
8		朝 食	朝 食
9		清 掃	清 掃
10	集会 天皇杯1:4 天皇杯 10:30発 1(紀州5号)	グループ活動 討議2	整 理 グループ 学 級 全 体(教官)
11	開 演 12:09着 1(バス)	野 外 活 動 ・ハイキング (昼 食)	昼 食
12	演 講 入 所 開演式 オリエンテーション	・フォークダンス ・会 話 ・ハンドクラフト ・磯観察	午 後 ホ ム ー ジ 休 息 午 食
13	係 打 合 せ	※1c.	集 会 1(バス)
14	グループ活動 討議1	自 由 時 間	集 会 14:56発 1(きのくに8号)
15	夕 入 浴	ク 入 浴	天皇杯 16:29着 解散 天皇杯14:45
16	夕 入 浴	ク 入 浴	
17	夕 入 浴	ク 入 浴	
18	夕 入 浴	ク 入 浴	
19	夕 入 浴	ク 入 浴	
20	夕 入 浴	ク 入 浴	
21	夕 入 浴	ク 入 浴	
22	夕 入 浴	ク 入 浴	

附近見取図



イ 交通案内

- ア 国鉄紀勢本線紀伊由良駅下車
- イ 中紀バス小引行終点下車 徒歩3km
- ウ 中紀バス、白崎行バス大引下車 徒歩3.7km

中1 合宿訓練候補地——合宿委員会下見(12月6日)報告——

1980.12.16

施設名称 場所	宿泊室	研修室	食堂	風呂	利用人員	交通	プログラムの 自由度	誓切	申し込み	備考
和歌山県立 白崎少年 自然の家	8名×25=200 リーダー室 2名×1 4名×1	研修室 50名×2 100名×1 プレイブラザ	120名	25名 25名	206名	紀勢本線 天王寺—御坊 100分 バス 御坊—自然の家 30分			14日前までに	使用料 食費(3食)
和歌山県日高郡 由良町大安大引 961-1 Tel. 07386-5-2351	○8名×13=104 6名×2=12 4名×1=1 和8名×3=18 和14名×1=14 本館15室 和40(雑)	○研修室 60名×4 大ホール 160~200名	○ △ 160名 25名 15名	1 ○ 2 ○ 3 ○	○本館・別館 192名 (最大235名)	○緊急 梅田—六甲 バス 阪急六甲—センター20 20分	○自由	△	○6ヶ月前~	緊急 御坊 ◎2400円 ◎2300円
神戸市灘区 六甲山北六甲875 Tel. 078-891-0050	○8名×32=256 4名×8=32	△研修室 150名×1 60名×1 50名×1 オリエンテーション室 120名 プレイホール 200名	○ 200名	1 ○ 2 ○ 3 ○	△ 300名 (最大312名)	△近鉄大阪線 上六—名張(特)55分 バス(定)430円 名張—太良路 45分 徒歩 3km 22500円 バス(貸切)1台22,500 名張—自然の家 30分	○朝の重い (入所者全員) ラジオ体操(1) 団体紹介	×	△	利用可能な日 4/16 5/30 5/28(小学生136名) 外~ X X X X X X ◎無料 ◎1200円 緊急 名張市
国立 曾爾少年 自然の家	△5名×18=90 和10名×6=60	○研修室 120名 和40名×2 ホール建設中	○ △ 150名 10名 15名	1 ○ 2 △ 3 ○	○ 150名	△関西線 天王寺—拓殖 95分 バス 拓殖—センター下 徒歩 2km	○朝の重い (時間的なこと は自由)	○	○60日前 ~7日前	◎230円 ◎1250円~1300円 1250
大阪府立 伊賀野少年 野外活動センター	8名×22=176 4名×3=12	研修室 50名×2 集會室 170名 大型ロッヂ 50名	170名	20名 20名	184名	近鉄大阪線 上六—榎原 バス 榎原—吐山 20分 徒歩10分	事前指導あり		県内産生	◎500円 ◎950円
奈良県立 伊賀野山地区 Tel. 05954-5-2380	8名×22=176 4名×3=12	研修室 50名×2 集會室 170名 大型ロッヂ 50名	170名	20名 20名	184名	近鉄大阪線 上六—榎原 バス 榎原—吐山 20分 徒歩10分	事前指導あり		県内産生	◎500円 ◎950円
奈良県立 伊賀野山地区 伊賀野山地区 野外活動センター Tel. 07438-2-0508	8名×22=176 4名×3=12	研修室 50名×2 集會室 170名 大型ロッヂ 50名	170名	20名 20名	184名	近鉄大阪線 上六—榎原 バス 榎原—吐山 20分 徒歩10分	事前指導あり		県内産生	◎500円 ◎950円

この白崎少年自然の家での合宿訓練は、33、34期生までの3回を実施した。各期ともに日程は32期生に準じるもので、活動の討議①②は、テーマを人権ということや、中学校生活とはなど小グループ、学級、学年全体というように出来るだけ多くの生徒が意見を出し、友達がどんな考えを持っているのかを知るとてもよい機会となった。現地での討議だけでは深まるだけの時間的余裕がないことから、学校での学活時の事前討論などを重ねて、各生徒が心に十分な準備が持てるよう努めたことでかなりの成果をみたと思われる。また毎年ほぼ同時期の実施ということや、計画がよく検討されたものであることもあってか、施設側のスケジュールへの介入は最小限としていただけたことは合宿を続ける上でとても有難いことであった。しかしながら、施設面で食事、入浴を2班に分けてやらねばならないことによる時間的なことや入浴後すぐの食事、またその逆の健康上のこと、更に、白崎の広場が使用不可能となったことによる野外活動の実施場所など幾つかの問題をかかえ、白崎以上の環境の施設は無いものかということで検討を余儀なくされ、再び合宿委員会（中田、風間、大仲、乾）が発足した。近畿に散在する幾つかの施設を宿泊室、研修室、ホール、食堂、利用人員などの規模の面、プログラムの自由度の面などを資料収集によって検討を重ね、本年までの実施場所を含めて5つのものにしほり、下見を行った。その結果、国立曾爾少年自然の家が最適であるということで会議に報告がなされた。

昭和56年度、35期生から本年の39期生までの5回をこの地で実施することになった。場所を変えてもプログラムの内容には大きな変化はなく、野外活動が、オリエンテーリング、遠足という形式にとってかわった。曾爾高原の中にあつて、宿舍のすぐ裏手に亀山峠から二本ボソ、俱留尊山というハイキングコースも整備され、前方は鎧岳、興岳、屏風岩がのぞめるという自然環境において申し分のない地である。この施設も起床、朝のつどい、夕べのつどい、消灯まで大まかなスケジュールの中で、プログラムの調整は必要となる。

収容人員からいって、単独使用が不可能で、ホール、集会室、宿泊棟、食堂など同宿となる他団体と事前あるいは当日の朝夕に打ち合せをしなければならない。幸い本年まで、いつも運よく譲っていただけたことで、本校のプログラムはほとんど100%の消化率を上げて来た。合宿の目的にどのようなステップをふんでせまってきたのか、又合宿を終えて、学校生活の中で生かされているのかということの一端として、本年、39期生の活動の討論に焦点を当ててみよう。行事前のゆとりの時間や学活、終礼時等を使って準備を進め、生活の見直しをさせた。何が私達の目指す附中生活の中で大切な問題かを行きつ戻りつ話し合いを重ねて、1人でも多くの生徒が意見を出せるようにグループ討論の場を多く持たせた。

〔昭和60年度中学校39期生合宿訓練計画より〕

1. 討論の意義 (1)39期生として、よりよい附中生活を過ごすための支柱となる生活目標を考え、今後の生活に生かしていくため。
(2)討論を通じて友の意見をしっかりと聞き、また意見をぶつけ合うことによってお互に理解し合い、向上していくため。
2. テーマ 『39期生が実践していく生活目標とはどのようなものであるべきか。』

——「私たちの生活目標」を創り上げよう——

3. 議長団 ・学級企画係 A 2名 B 2名 C 2名 D 2名
(係) (係長1名 ※サポートとして各学級の生活班班長, 副班長)

4. 実施計画

(1)予備討論について

- ①予備討論Ⅰ 5/10(金)H.R. 於小講堂(1:00~1:20)→各教室(1:20~2:10)

司会…学級企画係 記録…書記

ア 討論の意義・今後の計画の説明(於小講堂, 平田教官) (20分)

イ. 各学級で, 39期の目指す理想的な附中生像, 附中生活形態について意見を出し合い, クラスとしてまとめてみる。(学級討論の形態……学級全体会) (50分)

ウ. 討論終了後, 議長団で各学級の意見を検討・整理し, 次回の討論の準備を行う。

- ②予備討論Ⅱ 5/17(金)H.R. 於各教室(1:20~2:10)

司会…学級企画係, 生活班班長 記録…書記, 生活班副班長

ア. 前回考えた「39期生を目指す附中生活」と現在の各学級の現状とを比較し, 問題点, 改善点を挙げる。

イ. 各生活班討論(30分)→学級での報告(20分)

ウ. 討論の終了後, 議長団で各学級の意見を検討・整理し, 全体会での報告の準備を行う。

- ③予備討論Ⅲ 5/20(日)道徳 於小講堂(1:10~2:10) (60分)

司会…議長団(学級企画係, 係長を中心とする)。書記…議長団

ア. 各クラスより学級企画係が予備討論の経過報告を行う。 (40分)

イ. 質疑応答ののち, 合宿討論の計画, 方向性を確認する。 (20分)

(2)合宿討論について

- ①活動Ⅱ [学級・グループ討論](学級単位)5/23(木) (90分)

司会…学級企画係, 班長 書記…書記, 副班長

班別討論(35分)→学級討論(35分)→まとめ(20分)

- ②活動Ⅳ [全体討論](39期生全体)5/24(金) (90分)

司会…2名 書記…2名

学級・グループ討論の報告(40分)→質疑応答・意見交換(30分)

(学級企画係)

→まとめ・「39期生 生活目標」原案作り (20分)

- ③活動Ⅴ [まとめの討論](39期生全体)5/25(土) (90分)

司会…2名 書記…2名

「39期生 生活目標」を決議

現地でのまとめの討論時間ではまとまった生活目標を出すまでに至らず, 合宿後学校で, 2時間の全体討論の中で下記の生活目標を決議するに至った。

〔39期生 生活目標〕

39期生 生活目標

私達39期生は、仲間として互いに協力し、明るく健康的で充実した附中生活を送るために次のような生活目標を決議する。

1. 授業について
 - (1)忘れものをしない
 - (2)提出日を守る
 - (3)人の意見をよく聞き、自分の意見を積極的に言う
2. 学年・学級生活について
 - (1)公共物を大切にす
 - (2)自分の行動に責任を持つ
 - (3)けじめをつける
 - (4)決めたことは守る
3. 友人関係について
 - (1)人には優しく、自分には厳しくする
 - (2)友達の良いところを見付け、伸ばし、合い悪いところは直し合う
4. 清掃について
 - (1)分担を決め、手際よく掃除する
 - (2)掃除用具を正しく扱う
5. 時間について
 - (1)集合や登下校の時刻を守る
 - (2)5分前精神を身に付ける
 - (3)時間を有効に使う
6. 礼儀について
 - (1)あいさつをきちんとする
 - (2)その場に応じた態度をとり、正しい言葉づかいをする

<付加条件>

39期生全員が今後の附中生活の中で、この『39期生、生活目標』を実践していくために、学級委員を含む4名からなる「生活向上委員」を各学級に置く。

毎日の生活をこの目標にてらし、各生徒が反省すると共に、クラスで今週の重点目標はこれにしようということ呼び掛けている。38期生も合宿において「合宿決議」を出し生活委員を置き、互いに生活を見直す場を持つようとしている。

ところで、合宿訓練を終えて、その反省・評価について、昭和60年度(39期生)は、次のような合宿の目標達成の自己評価をし、反省の資料とした。自己評価の全体傾向と教官側の評価とを、自己評価項目と共に挙げておく。

〔39期生中1合宿訓練(目標達成度・自己評価)の項目及び集計結果〕

I. 合宿訓練の目的の確認

今回の合宿訓練の大きな目的は、「中学生としての自覚を持つ」であった。

その具体的目的として掲げられた3つの項目を書け。

- ①仲間をよく知る。

- ②基本的な生活習慣を身に付ける。
 ③39期生としての生活目標を持つ。

	全問正解	2問正解	1問正解	正答なし
人数	50	53	32	20
%	32	36	20	12

II. 目標達成度の自己評価

次の各分野の目標について、A（よくできた）・B（普通）・C（あまりできなかった）の記号で自己評価せよ。また、右の余白にその事項に関する自分の感想や反省を書きなさい。

(1)生活面での自己評価

(評価)	生徒の評価			教官の評価			
	A	B	C	A	B	C	
①常に時間を意識して遅れずに行動できたか？	人数	66	82	7	0	2	3
	%	43	53	4	0	40	60
②先生、友達や合宿中に会った人々に気持ちよくあいさつできたか？	人数	61	79	15	1	4	0
	%	39	51	10	20	80	0
③集合したら、私語をやめて列を整え、先生や係の友達に注目できたか？	人数	23	86	46	0	0	5
	%	15	55	30	0	0	100
④各活動に必要なものを忘れずに持参できたか？	人数	130	20	5	2	3	0
	%	84	13	3	40	60	0
⑤室内で自分の荷物の整理やベッドメイキングをきちんとできたか？	人数	72	65	18	0	1	4
	%	46	42	12	0	20	80
⑥部屋や宿泊棟の清掃をすすんで行なったか？	人数	28	95	32	0	4	1
	%	18	61	21	0	80	20
⑦食事では、好き嫌いをせずに残さず食べたか？	人数	51	66	38	1	3	1
	%	33	43	24	20	60	20
⑧食事の後片付けはきちんとできたか？	人数	133	19	3	5	0	0
	%	86	12	2	100	0	0
⑨あとに入る人のことを考えて、正しいマナーで入浴できたか？ (タオルを湯につけない・脱衣場をぬらさない・洗面器の片づけ等)	人数	79	62	14	4	1	0
	%	51	40	9	80	20	0
⑩就寝時刻を守り、消灯後は疲れた友達のことを考え、また翌日の活動に備えて静かに休んだか？	人数	31	67	57	1	4	0
	%	20	43	37	20	80	0

(2)オリエンテーリング・遠足での自己評価

		A	B	C	A	B	C
①自然に親しめたか、また自然の厳しさを学べたか？	人数	117	34	4	4	1	0
	%	75	22	3	80	20	0
②自分の出したゴミは残さず持ちかえたか？	人数	128	26	1	3	2	0
	%	82	17	1	60	40	0
③生活班というグループ活動で、分裂せず、まとまって行動できたか？	人数	49	30	76	0	0	5
	%	32	19	49	0	0	100
④地図やシルバコンパスを、指導された通り有効に活用できたか？	人数	6	49	100	0	0	5
	%	4	32	64	0	0	100
⑤事前指導の時に指示されたポイントを通り、予定通りにもどることができたか？	人数	17	28	110	0	0	5
	%	11	18	71	0	0	100

(3) 討論（班・学級/全体/まとめの各討論）での自己評価

		A	B	C	A	B	C
①真剣な態度で各討論に参加できたか？	人数	51	90	15	2	3	0
	%	33	57	10	40	60	0
②友達の意見をしっかりと聞けたか？	人数	87	68	1	1	3	1
	%	55	44	1	20	60	20
③討論の要点を整理して行事ノートにメモできたか？	人数	67	78	10	1	4	0
	%	44	50	6	20	80	0
④自分なりの考えを持てたか？	人数	77	66	13	0	4	1
	%	50	42	8	0	80	20
⑤自分の考えを積極的に挙手して発表できたか？	人数	16	19	121	0	2	3
	%	10	12	78	0	40	60

(4) 友人関係での自己評価

		A	B	C	A	B	C
①クラスの友達の名前と顔は完全に覚えてか？	人数	108	48	0	4	1	0
	%	69	31	0	80	20	0
②合宿訓練中に、他のクラスにも友達ができたか？	人数	92	41	22	2	3	0
	%	60	26	14	40	60	0
③合宿訓練を通じて、今まで気付かなかった友達のすばらしい面を発見することができたか？	人数	57	64	34	0	5	0
	%	37	41	22	0	100	0
④友達に迷惑をかけたり、いやな思いをさせずに3日間過ごすことができたか？	人数	47	90	18	1	2	2
	%	30	58	12	20	40	40
⑤友達に対して、何か良いことをしてあげることができたか？ (係の仕事も含めて考えてよろしい)	人数	47	74	34	0	3	2
	%	30	48	22	0	60	40

(5) 「まとめ」としての自己評価

		A	B	C	A	B	C
		①合宿訓練中「中学生としての自覚」ある行動がとれたか？	人数	12	111	32	0
	%	8	71	21	0	60	40
②合宿訓練を通じて、自分が今後意識的に努力すべき点を見つけることができたか？	人数	91	55	9	2	2	1
	%	59	35	6	40	40	20
③合宿訓練の成果や反省点をこれからの生活に生かして行こうという強い気持ちを持つことができたか？	人数	93	58	4	1	2	2
	%	60	37	3	20	40	40

Ⅲ. 自分にとっての最大の収穫

合宿訓練を通じて学んだことの中で、最も強く印象づけられたことについて書きなさい。

中学校合宿訓練が入学当初の生徒に、中学校生活をどう過ごそうかという決意を持たすためには、意義のある行事として定着し、プログラムも多少の変更はあっても大すじのところは初年度から受け継がれて来てそれなりの効果が認められている。

今後は、本校単独で利用出来るような施設が現在のものに近い条件で得られるならば、また新しい方向が生まれてくる可能性も期待出来る。

2 高1合宿訓練

高校1年生に対して行われてきた合宿訓練は昭和40年度の第10期生に始まる。当時は高校1年生に対して合宿訓練を行っていた学校はほとんどなかったと思う。それが18年後の昭和57年には大阪の府立高校のはほぼ半数の67校で、何らかの形で合宿訓練が行われるようになったという記録がある。(府立高等学校「ホームルームの改善・新入生宿泊オリエンテーション、校内研修」推進資料 昭和58年3月 大阪府教育委員会)

もっとも、新入生に対する合宿訓練の内容や、その目的とするところは学校によってかなり違ってはいるようであるが、教育界の流れの中で本校の合宿訓練がその先導的な役割を果たしたことを否定することは出来ないであろう。

この10年間合宿訓練行事についてみると、合宿地の変更以外はほとんど大きな変化は無いので研究集録第18集 (P. 136~P. 153) の合宿訓練の項と重なる部分もあるが、本校の合宿訓練の目的、合宿地の変遷と今年度の合宿の記録をまとめておく。

(1) 合宿訓練の目的

「自分で責任を持って考え、判断し、行動する」ということは言うのは易しいが、大変に難しいことである。このことはある年令から一挙に出来るようになるというものではないことは当然のことであるし、どの程度出来るかという個人差も大きくある。それにしても最近の新入生をみるとその自主性の足りなさが目立つようになったということが教官の間でよく話題になった。自主性のある生徒に対しては特に本校の教育方針が適しているが、それが無い生徒にとってよい結果は期待しにくい。高校には「これこれをしてはいけない」という規則はほとんど無い。一方で、中学校までのように教師から「このようにやりなさい」という指示を受けることも少くなる。その

ことは、自分が責任を持って積極的にやっていけば好きなように出来る自由さがあることでもある。そのような高校に入学した生徒にとっては、自分は高校生になったんだ、何事にも自主性を発揮して当たっていかなければならないんだという自覚がより必要になる。教師にとっては、自主性についてあまりにも差のある生徒の個人個人をよく把握しておかなければ適切な対応も出来ないし、放任主義と同じになる危険がある。また、高校に入学した早い時期にはやる気も持たせやすいし、高校生になったという節目から自主性を強調して伸ばそうとすることが大切であるという考え方が底辺にあって、この合宿訓練の企画が生まれて来た。

昭和40年3月2日の教官会議に「新入生に対する集団生活指導に関する件」として、発想が述べられ、趣旨の中で合宿訓練が提案されることになった。

(発想) 補導に関する教官会議における話し合いに基づいて

1. 正しい意味での自主的な生活態度を養うことが必要
2. 生徒をもっとよく知らねばならぬ
3. 生徒としての立場を正しく理解させ向上への意欲を育てることが大切

(趣旨) 以上話し合われたことを具体化するため

1. 生活を共にすることにより担任教官が生徒をより積極的に把握し
2. 生徒自身も己を知り友人・教官をより深く理解し高校生として集団生活のあり方を学び向上のきっかけをつかむため、合宿生活をさせたい。

このような発想・趣旨に基づいて立案された初回の合宿訓練の生徒や保護者に対する説明のとき、その目的が次のようにまとめられた。

(目的)

- a. 高校生活を「個人の自主性と責任感に基づいた集団生活」として把握し、合宿訓練によってこの立場を実践的に認識させる。
- b. 共同生活を通じて生徒相互の理解を深め、また、教官との触れ合いを密にする。

第2回目の合宿訓練実施要項のプリントからは、これら2つの目的a、bの最後にそれぞれ次のような簡潔な言葉が付けられた。

- a. (自主と責任)
- b. (ヒューマン・リレーション)

第2回目以来この2つの目的はほとんど字句を変えずに、合宿訓練実施要項の冒頭を飾っている。ただし、第11回からはこれら2つの目的a、bに第3の目的cが付け加わった。目的cの内容は11、12、14、15回と順に次のように変わり現在に至っている。

(11回) 集団生活を通じて、基本的生活習慣を身に付けさせる。(基本的生活習慣)

(12回) 討論や生活を通じ、各自の既成観念を捨てて全てを新鮮な目で見つめ直し、新しい学校生活をスタートさせる。

(14回) 討論や生活のなかで全てを新鮮な目で見つめ直し、新しい学校生活の出発にする。

(15回) 討論や生活のなかで全てを見つめ直し、新しい学校生活の出発にする。
(新鮮な気持)

これらの3項目 a, b, c が現在も合宿訓練の目的として続いている。

この3つの幅のある目的に関連して、合宿訓練の経験を通して出てきた具体的、直接的なねらいを拾い上げてみると次のようなものになるであろう。

1. 一般入学生と連絡進学生との融和。
2. 友を深く知る。
3. 深く討論することの重要性と楽しさを体験する。
4. 自分の将来を真剣に考え、高校生活の抱負を固める。
5. 偉大な自然に接しながら、人間性を豊かにする。
6. 教官を身近な存在と感じられるようになる。
7. リーダーシップを養成する。
8. 自分達で計画・実行していくことの難しさを体験する。
9. 集団生活の中で規則の必要性和限界性を考えてみる。
10. 教官の側が、生徒の実態をよく把握する。

(2) 合宿訓練地の変遷とその理由

<白馬> 第1, 2, 3, 4, 8回(第10, 11, 12, 13, 17期生)

長野県北安曇郡白馬村切久保

岳園荘, 切久保館(雷鳥荘), さす正館, 久寿利屋, 駒草荘, (宮田荘)

<吉野> 第5, 6, 7回(第14, 15, 16期生)

和歌山県吉野郡吉野町吉野山

東南院, 喜蔵院

<能勢> 第9, 11, 12, 13回(第18, 20, 21, 22期生)

大阪府豊能郡能勢町宿野北摂高原

大阪府総合青少年野外活動センター

<都祁> 第10回(第19期生)

奈良県山辺郡都祁村大字吐山2040番地

奈良県立青少年野外活動センター

<鉢伏> 第14, 15, 16, 17, 18, 19回(第23, 24, 25, 26, 27, 28期生)

兵庫県養父郡関宮町鉢伏高原

白樺館, 青い鳥, 角野山荘, 谷常(15, 16, 17, 18回), やまなみ(15, 16回)

かわらや(17, 19回), グリーンロッジ(18回)

やまとよ, ヴィ銀嶺, 大福山荘, 山水館(19回)

<ハチ北> 第20, 21回(第29, 30期生)

兵庫県美方郡村岡町大笹ハチ北高原

マセンジョー, あさひ, 青い鳥, まつみや, 野間

第1回の合宿訓練が終って、第2回目の候補地として、近江八幡国民休暇村、御在所山ユース・ホテル、富士山麓国立中央青年の家、蛭ヶ野高原、蒜山高原の实地調査がなされたが、総合的にみて白馬に劣るということで、ここに4回続くことになる。

①白馬での合宿を中止した理由

- 物価、運賃の高騰により合宿費用が高くなって来た。
- 白馬が次第に観光地化して来た。
- 本校の合宿時期に同地へ他の修学旅行団が入ることになった。
- 往きの夜行列車で疲労が残る。
- 往復に時間が掛かり過ぎる（20時間以上）。

上のような点から、昭和43年に乗鞍高原、吉野山、能勢が実地調査された。その結果、乗鞍、能勢は施設の規模、規制、交通費の面で吉野に劣り、吉野は自然環境としてもよいということで、第5、6、7回と吉野で実施された。第7回の合宿終了後に参加生徒の中から赤痢疑似患者の集団発生事件が起こったため、第8回の合宿はとりあえず白馬へ戻すことになった。吉野が中止になった直接の原因はこの事件であったのであるが、実施した経験に基づいて、次のような不満が出ていた。

② 吉野での合宿を中止した理由

- 広場が狭くて少ない。
- 観光地のおいが強過ぎる。
- 自然環境に感動の要素がない。
- 両宿舎（数百米離れた宿坊に分宿）が少し離れ過ぎていて不便。
- 遅くまで話す生徒がいて、教官が寺に対して気を遣う。

第9回目からの合宿地として、第8回の時に踏み切れなかった能勢と、新たに木曾の御岳の実地調査（浅野・田原）をした。これと白馬を併せて検討した結果、能勢に移ることになった。

③ 白馬を中止、能勢に変更する理由

- | | |
|----|---|
| 白馬 | •お客さんのようになって、生活の細部にまでわたる自主的に行うに不十分。 |
| | •レジャー化していて、それに注意を奪われ、自主的活動の妨げになる。 |
| | •クラス活動にふさわしい施設、白馬と違った自然環境。 |
| 能勢 | •2つの区域を独占出来る。各ロッジに分かれるのでグループ活動にふさわしい。 |
| | •費用が少なくてすむ。 |
| | •心配していた指導員の干渉はなく、合宿の運営に支障をきたすことはない。 |
| | •生徒の管理はしにくくなるが、反面、積極的に生徒に接触する姿勢が教官に要求される。 |

第10回だけが奈良県立青少年野外活動センターに移ったのは能勢の同施設で食中毒が発生したため、水道施設改良工事で使用不可となったための臨時的な変更である。

④ 能勢で合宿を中止した理由

- 本校の希望する時期に施設を確保することが難しい。
- ロッジ形式の宿舎が閉鎖的で困る。一つ屋根の下で宿泊し、管理せずに掌握したい。
- センターの規則、指導員に気を遣う。
- ロッジは10名単位であるが、これは討論するための単位としては多過ぎる。
- 教官側が話し合う（畳の）部屋がない。

- 上下のサイトに二分されてしまう。
- もう少し雄大な自然が欲しい。

能勢が利用しにくいということで、次の合宿地が求められていた。この頃、近畿のスキー場では冬と夏は客があるが春秋は客がなく、ほとんど自由に利用できる状態であることが分かり、神鍋・万場・氷の山・鉢伏・ハチ北の实地調査（田原、浦久保）を行った。この報告を受けて、昭和52年11月19・20日と生徒指導部中心（網・田原・浦久保・浅野・東元・石見・横田）に下見を兼ねて鉢伏高原に合宿し、新しい合宿の姿を求めて討論をした。19日はほとんど夜を徹して、合宿の目的、昔の生徒と現在の生徒の実態の変化、教師の姿勢等について話し合った。そんな議論の中から、宿舎を5つに分けることが非常に大切なことであるという結論に至った。これも参考になると思うので、ここに短く記録しておく。

「合宿の目的は各人が自分を取り繕っていたのでは決して達せられない。各個人が裸になってこそ、その目的の効果を上げることが可能なのである。寝食を共にする合宿はそれが各自の姿を赤裸々にするのに最も有効な形態だからこそするのである。生徒が自己を曝け出さなければならないのなら、その生徒に接する担任も自己の人間性を率直に出してぶつかり合わなければならないのは当然であろう。その際、隣の担任と一緒にでは、歩調を揃えたり、気を遣ったりする場面が多く、教師的になりやすい。従って、各担任が自分の個性を十分発揮しながらこの行事を行っていくためにはどうしても学級毎に分宿することが必要である。しかし、女子は少数でもあり男女の問題もあるので宿舎を一つ別にまとめ、活動の時点で各クラスに帰る形式がよい。」

⑤ 鉢伏で合宿を中止した理由

- 本校の希望する日の確保が難しくなった。（大きな定員の宿舎にもかかわらず、5つに分宿する形態）
- 鉢伏に合宿に来る学校が増加し、高原で他校生と一緒にになってしまう。

鉢伏にもあまり歓迎されなくなり、新しくマキノ・箱館山・伊吹（琢磨・田中）、神鍋・ハチ北（田中・田原）、洞川（網・浦久保・田原）を实地調査した。その結果に基づいて現在はハチ北で合宿訓練が続いている。

(3) 合宿訓練の記録——第21回（昭和60年度）

①高1（第30期生）合宿訓練実施要項

1. 目 的
 - (1) 高校生活を「個人の自主性と責任感に基づいた集団生活」として把握し、合宿訓練によってこの立場を認識する。（自主と責任）
 - (2) 共同生活を通じて生徒相互の理解を深め、また教官との触れ合いを密にする。（ヒューマン・リレイション）
 - (3) 討論や生活の中で全てを見つめ直し、新しい学校生活の出発にする。（新鮮な気持）
2. 日 時

出発	5月8日（水）8時30分	学校集合	9時出発
帰着	5月11日（土）13時	現地出発	17時30分頃学校帰着
			解散
3. 引率教官

下村校舎主任	桜井副校長
生徒指導部	千種 田原

学 年 越智 河野 高木 柴山 井畑

4. 宿 舎 兵庫県美方郡村岡町大笹 ハチ北高原

マセンジョー 田 測 薫 女子全員 合宿訓練本部 Ⅱ
07969-6-0236

ロッジあさひ 西村 栄三 1 A男子 Ⅱ 07969-6-0245

ロッジ青い鳥 西村 徹 1 B男子 Ⅱ 07969-6-0605

ロッジまつみや西村 利一 1 C男子 Ⅱ 07969-6-0303

ロッジ野間 田 測 登久代 1 D男子 Ⅱ 07969-6-0718

5. 持 物 往復は制服制帽, 山歩きの出来る服装, 靴 (山歩き用を含めて2足あると便利), 雨具, 着替え (下着), 防寒着 (セーター類), 水筒, ナップザック, 軍手, 洗面具, 筆記用具, 懐中電燈, 食器 (皿・スプーン), 各自に必要な医薬品, 弁当 (8日の昼食), 指定図書

6. 費 用 18,000円

7. 現地での日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
5/8 (水)				集出 合発				←バス→	昼食	入舎式	H.R.	入浴	夕食	討 論			夕就 札寝
5/9 (木)	起床	洗面 清掃	朝礼	朝食	討 論	山 歩 き (弁当)					入浴	夕食	討 論			夕就 札寝	
5/10 (金)	起床	洗面 清掃	朝礼	朝食	討 論	飯盒炊さん				討 論	入浴	夕食	生徒行事			夕就 札寝	
5/11 (土)	起床	洗面 清掃	朝礼	朝食	H.R.	昼食	宿舎 整理	出 発	←徒歩→	バス	→	学解 校着					

② 第21回高1合宿訓練の経過

4月5～6日 下見(田原, 柴山, 井畑)

4月10日 始業式, 合宿委員選出, 学年担任打ち合わせ。

4月13日 第1回合宿委員会(合宿委員長選出), 以後計7回持つ。

4月18日 指定図書選定(岩波新書「私の読書」)

4月19日 学年と生活指導部合同会議(合宿の原案決定)

4月23日 教官会議に合宿の実施要項を付けて提案, 承認。

4月26日 高1生徒全員に対し, オリエンテーションで合宿訓練の説明。

5月8～11日 合宿実施, 2日目と3日目の昼の行事入れ替え, 参加者183名欠席なし。

- 5月13日 生徒全員に感想文を書かせる。
 6月7日 高1学年担任での反省会。
 6月14日 高1学年担任と生活指導部合同の反省会。

③ 生徒の合宿訓練の係

- 合宿委員（合宿全般にわたり企画、決定、合宿訓練の菜も作成（各組男女1名選出）
 食事係（食事に関する世話、進行、指示、各組男女各1名）
 入浴係（入浴割当、進行、各組男女各1名）
 遺失物係（遺失物の保管、返却、各組男女各1名）
 体操係（朝礼時にラジオ体操を指揮、各組男女各1名）
 写真係（合宿中のスナップ、記念写真を撮る。各組1～2名）
 歌集係（歌集の作成、希望者、結果は1名のみ）

④ 下見で留意した点

- ・全員の集合出来る場所（雨天時と晴天時）
- ・5月初めの泊まり客の有無
- ・食事の程度と5宿舍の統一
- ・山歩きのコース、所要時間、案内の有無
- ・費用
- ・最寄りの医療機関の場所、時間、科
- ・キャンプファイヤー、飯盒炊さんの場所、必要なものの有無
- ・5月初めの現地の気温
- ・危険な場所の有無

⑤ 合宿委員会（計7回の主な内容）

- ・合宿委員に目的の説明をし、日程案の中の生徒行事の企画、討論テーマを考えるよう指示
- ・各クラスの合宿委員はアンケートによって討論テーマと生徒行事の内容を決定
- ・討論班の編成
- ・部屋割の編成
- ・菜の作成
- ・合宿生活上の指示（宿舍のテレビ、自動販売器の使用禁止、他は特別な禁止事項なし）

⑥ 討論テーマ

- ・将来についてどう考えているか。
- ・現在どのようにしているか。（勉強、クラブ）
- ・愛。
- ・今後どのようにすべきか。

上の4つを日程の4回の討論の中で話し合う予定とする。

⑦ 生徒行事

学年全体の行事としてはオリエンテーリングとフォークダンスを計画、クラス単位のものでは、クラスで10名程度の係を決めて、室内ゲームや肝だめしをやる

⑧ 反省会のまとめ

・討論

班によって差が大きく、討論になった班と雑談に終わってしまった班もある。討論のテーマは話しやすいものなので、内容が深いとはいえないが、「自分をさらけ出した」、「相手がよく分かった」などという感想がある。中学時代は討論をしたことが無かった者が多いので、討論時間を2時間半位にし、回数も現在の4回より多くとり、6～7人の班編成で、メンバーを変化させずにじっくりと話をさせたい。指定図書は利用出来た班もある。

・飯盒炊さん

第2日目、第3日目とも晴れる予報なので、飯盒炊さんを先に行う方が討論がしやすくなるだろうということで、プログラムを入れ替えて実行。結果はあまり効果は感じられず。一般入学生に対しては効果があったようだ。この行事は無くてもよかったと思う。

・オリエンテーリング

7つのコースを作り、それぞれに3つのメッセージ(なぜなぜ)を並べ、最後にゴールに到達するように合宿委員が作った。この準備に委員が多く時間をとられた。これをやるなら山歩きと結び付けて実行出来そう。その場合、教官が準備する方がよい。当日ポイントを真面目に辿らなかった班がみられた。

・フォーク・ダンス

中学時代にあまりやったことがなく、うまく出来なかったようだ。

・山歩き

鉢伏山を登るだけなので、昼食を含めて3時間で歩けるコース、登らなかった者7名。

・クラス行事

各クラスとも活発で大いに楽しんでいた。

・まとめ

全体的にみると、遊びが多過ぎた感があり、もう少し、しまりのある合宿でありたい。担任としては、生徒の実態の観察がよく出来た。30期生はおとなしいが、子供っぽさが強く、大変よくしゃべる。キャンプ・ファイヤーが今年は簡単に無くなったのは問題だという意見があった。合宿の日程と場所については今年について特に問題は無かった。

(4) むすび

合宿訓練の難しさはいろいろあるが、経験的に言えば次の点が特に難しいように思う。一つは教師と個人の立場の難しさ、もう一つは自主性を付ける方法の難しさである。前者では教師も一人の人間として対等の立場で話し合い、触れ合う必要があり、一方では指導する立場に立たなければならない。後者は自主性というものが一朝一夕にして効果を現すものでもなく、誰にも同じ方法で効果が出るものでもないものなので、正直言って、どう指導するのがよいのか分からないというほどに難しいことになる。

しかしながら、これまでの合宿の中で、合宿の目的に応じてくれたという感触の得られた生徒もかなりいたことは事実である。次の一人の感想文を借りて、この合宿の項のむす

びとしたい。

〔合宿の思い出〕

ごくありきたりの言葉でしか言えないけれど本当に私にとって強烈な思い出を残してくれたものだった。行く前、心はずんでいたけれど、たいした期待をしてなかったのも、今から考えればすごく不思議に思う。

討論——今まで、こんなにマジメで、こんなに楽しく、考えさせてくれたものは無かった。決めてた議題から、何べんも何べんも横道にそれながら、話は発展していった。学校では恥ずかしくてなかなか言い出せなかったことも、あそこでは、素直に口に出すことが出来た。男女が合同で、今まで知らない子同志でグループを作ったことも成功の一つだったと思う。男子の考え方は、すごくさっぱりして現実的だと感じた。外部から入って来た子から見た内部生のとらえ方を聞いた時は、すごく心が動いた。今まで九年間、附小、附中という階段を登って来た私自身、今まで考えたことのなかった言葉が、次々胸にささった。歯がゆく、痛い所を突かれたという感じで、すごくとまどってしまった。

「附中生は、エリート意識が強過ぎる。ある程度以上の³はめ、をはずそうとしない。環境的に恵まれた子が、そういう目で世の中を見てるので何も分かっていない。」
すごく的を突いてると思った。なぜか、すごく悲しかった。それを目の前で言っている自分と同じ年の友達が、メッチャこわく見えた。

自分が歩いてきた生活は、いったい何だったんだろう。すごく考えた。今でもちゃんとした答えは出ていない。でも、附小・附中と歩んだ（他の人から甘いと見られる生活）を決して後悔していない。私は、私なりにいっしょうけんめい生きて来たから。

その他、人と人の付き合い方、男女が付き合うということ、今の私たちの生活、初恋の思い出、生きるということ、運命とは何か、ハンス（車輪の下）の生き方をどう思うか——今まで話したことの無い、（いや、話したかったけど、話せなかった色々なこと）をいっしょうけんめい話したことは、すごくうれしく、悲しく、楽しかった。

そして。実際、本当に友達をもう一度考え直すことが出来た（まだまだ、ほんの少しだと思うけど……）と思っている。みんな、私に比べたら、本当にしっかりした意見を持つてるなあとも思った。将来のことだって、今この高校へ通っているということについても。

色々な面で、本当に本当に、この合宿は、私を目覚めさせてくれたと思う。そして（負けずぎらいな私ですので……）みんなと同程度になれるよう、もっと物事を真剣に責任持って考えられるよう、いっぱい色々なことを経験したいと思う。

本当にためになった4日間だった。

3 附高ふるさと村（和歌山県周参見町上戸川地区）

昭和47年（1972年）7月、通称「上戸川合宿所」は始まった。それ以来5年間、17期生、18期生、19期生、20期生、21期生たちによって、春休み、夏休み、冬休みの長期休暇を利用して、クラス合宿、クラブ合宿、同好有志合宿などで使用されて来たが、昭和52年3月をもって、上戸川合宿所の幕を下ろさなければならないことになった。周参見町と寝屋川市との姉妹都市契約が成立し、附高に代わって寝屋川市が使用することになったのである。突然のことでもあり、誠に残念であったが、致し方の無いことであった。

開設以来5年間が経過し、当初に考えられたこの合宿所の理念・理想が、生徒達の利用状態の中から風化し初め、もう一度、初心に立ち返って考え直してみるべきであるという反省が求められた時期のことであった。

合宿所の後片付けと周参町役場への挨拶のため、浦久保、田原、卒業生の鈴木、奥村(19期生)の4人が周参見町を訪れ、「上戸川合宿所」での最後の一夜を過ごすことになった。5年間お世話になった堀さんや山本さんたちも集まってくれて、附高の先生や生徒たちを懐かしく語ってくれたことを、早や9年が過ぎ去った今、ある愛惜の念をもって思い出さざるを得ない。

以下に、昭和51年10月、金沢で行われた全附連での発表「上戸川合宿所での合宿活動について」を参照して、要点を以下に記しておくことにしたい。

(1) 上戸川合宿所の成立経過

毎年5月の初旬、新高1に対して行われる学年合宿において、この合宿に持たれている目的・夢などが場所的な問題で充分満足出来ない状態になっていた折、和歌山県下の過疎地域で廃村や廃校を「ふるさと村」と名付けて、都市との提携による利用を考えているという情報に接し、昭和47年5月4日、横田の運転する車で、浅野と田原が和歌山県庁を訪れ、その概要の説明を受けて現地調査を行うことから始まった。その結果、周参町上戸川地区にある廃校「上戸川小学校」が新高1の学年合宿の場所として考えられることになった。

しかし、200名を擁する学年合宿の場所としては、食事のこと、寝具のこと、風呂のことなど困難な問題が多くあり、その問題を解決するためには相当額の費用が必要となってくることなどもあって、結局は、学年合宿の場所として取り上げられることにはならなかった。しかし、白馬のような雄大さはないにしても、まさに都会と隔絶した谷の深い奥山の閑静な美しさ、地域の人たちの素朴な温かさ、大阪からの交通の便などが考慮され、40～50人程度の人数で使用可能な合宿所にすることが、教官会議で承認された。そして、当時の補導部長であった久島が中心となって、周参見と折衝を行い、昭和47年7月1日、周参見町長 有田良二氏と大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎校舎主任 斉藤洋との間に「ふるさと村使用契約書」が取り交わされ、正式に附高の「上戸川合宿所」が成立した。

(2) 合宿所として使用するために考えられたこと

この合宿所が成立する頃、授業における意欲のなさ、活気のなさ、夢や理想のなさ、責任感のなさ、自主性、協調性、連帯感のなさ、リーダーシップのなさなど生徒の現状についてよくボヤかれていた。そのような生徒の状況は、同時にまた教師の側にも重なり合ってくるころのものでもあった。教師の指導性の重要さが言われ、そのためには教師がもっと生徒の中に入り、生徒の実体をよく知ることの必要性が言われた。上戸川合宿所の合宿活動にそのような問題意識を含ませて考えられたことも当然のことであった。当初、この合宿活動に4つのことが考えられ、期待されていた。

- (A) 人間の手の加わっていない素朴な美しい自然に接したり、その地域の人々の都会にはない生活様態を知ることにより、これまでとは異った角度から新たに自分や自分の周囲を見つめたり、社会に目を向けたり、自然のよさを知り自然を大切に

にする心遣いを持てる契機が生まれる。

- (B) 上戸川合宿所の不便さのため、上戸川での合宿生活は生徒達にとって未体験の仕事がある。食事の準備・後片付けはすべて自分達でしなければならない。献立、買出し、カマによる飯炊き、タキギ集め、残飯の処理、食器の用意など。付近には店屋は無いので必要なものはすべて8 km離れた町まで買い出しに行かなければならない。長く泊まれば泊まる程、食事だけでも、その準備と後仕末は大変なものである。観光地など宿泊施設のある所なら、自分の好きなことだけに目を向けておけばよいであろうが、ここではそういう訳にはゆかない。このようななかでの合宿活動は、計画性が要求され、リーダーシップ、協調性などが必須の要件となる。また、きれいごとだけでは済まなくなってくるので、本物の個人が露呈し、厳しい衝突も起こってくることも予想される。これらのことを通じてお互いに鍛え合うことが出来る可能性が大いにある。
- (C) 肉体的労働活動をする。上戸川地区で農作業を手伝うことや休耕田を借りて自分で何か作物を育てることを考える。
- (D) 合宿活動での教師の役割はどのようなものになるのだろうか。寝食を共にした生活合宿では人間個人としての密な接触が、いやが上にも生まれてくる。一人の人間としてのありかたの方がより多く問題となるこのような合宿生活では、学校における先生と生徒という関係だけでは対応出来ないものがあるから、かなりやっかいでしんどいこともあるだろうが、そこに教師の具体的な指導性を発揮する場面があるとも言えるであろう。上戸川合宿所での合宿活動は、教師の生徒に対する積極的な指導の姿勢を基礎にした上に成り立たせるのだとも言える。このことは非常に重要なことであるが、同時に危具の持たれることでもある。

(3) 上戸川合宿所の利用

上戸川合宿所を生徒が利用出来るのは、夏休み、冬休み、春休みの長期休暇時に限られることになる。利用形態は、クラス合宿、クラブ合宿、同好有志の合宿という形で行われている。その他、卒業生の使用も幾つかあった。

クラス合宿………夏 19クラス 冬 1クラス 春 23クラス

クラブ合宿………夏 8クラブ 冬 0クラブ 春 14クラブ

有志 合宿………夏 10団体 冬 5団体 春 6団体

クラス合宿合計43クラスで1105人が利用。クラブ合宿合計20クラブで198人。有志合宿合計21団体224人。利用者延べ1578人であった。

以下の5年間の年度別利用状況を表にまとめておく。

		夏 休 み			冬 休 み			春 休 み			合計人数
		団体数	人 数	合計人数	団体数	人 数	合計人数	団体数	人 数	合計人数	
47年度	クラス	0			0			2	51		134
	クラブ	2	26	26	0		7	4	37	101	
	有志	0			1	7		1	13		
48年度	クラス	5	172		0			2	54		294
	クラブ	0		190	0		5	4	54	99	
	有志	1	18		1	5		0			
49年度	クラス	6	163		1	26		5	136		405
	クラブ	1	12	194	0		34	2	23	177	
	有志	1	21		1	8		2	18		
50年度	クラス	5	146		0			9	183		420
	クラブ	1	7	196	0		3	2	23	221	
	有志	3	43		1	3		1	15		
51年度	クラス	3	43		0			5	131		325
	クラブ	4	51	135	0		6	2	27	184	
	有志	5	44		1	6		2	26		
合 計		37	741		5	55		43	782		1,578

(4) まとめ

最後に、クラス合宿の場合の1事例を示してまとめにする。

昭和47年度春休み 高1 (17期生)

- ・合宿の目的 ①共同生活を営むことによって責任を感じ、やり遂げる喜びを感じる。
- ②このクラスの一年間を振り返っていろいろ考える。
- ・参加人数35人、付添教官2人、2泊3日(3月21日～3月23日)
- ・費用(1人当り)約2,300円
- ・日課表

6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	天王寺発	周参見着	買 い 物	徒歩		上戸川着		夕食準備・夕食					話し合い				就 寝
起床	朝食		レクリエーション	昼食		ハイキング		夕食準備・夕食					話し合い				就 寝
起床	朝食		自由	後片付け		上戸川発 徒歩		周参見発					解散				

- ・3月22日 食事献立

朝食……飯、インスタントみそ汁、各自のかんづめ

昼食……パン(バター、ジャム)、紅茶、ソーセージ・チーズ

夕食……炊き込みごはん、おすいもの

この時の生徒の感想文で次のように書かれている。「集団における個人を考えてみ

る、という目標を掲げて、個人としてもそれぞれ何か期待してやって来た。スケジュールで最も長く時間をとった討論は、誰かがしゃべっている間より沈黙の方が長いときもあったが、2日目の夜、つまり最後の夜のこのクラスとして顔を合わせて話をするのも今日限りという時、話題としては何となくまとまりがなかった。というよりいつもと違った難しいことのように思われた。話す人も大体決まっていたが、それでも普段は何も言わない人も口をはさんでいたし、一つの意見に対して激しいやりとりがあった。内容はどうであれ大変よかったと思うのである。

食事の用意などで結局やるのは女子とほんの一部の男子であるが、それが当たり前としても、今は共同生活をしているのだから少し考えなければならぬと思う。何人かが集まって来るんじゃないで、このクラス1クラスという単位で、しかも2泊3日という合宿をするということは、計画することも実行することも実に変なことである。計画を進めていく途中で様々な問題、単に金銭的、時間的なことだけでなく、個人の心、精神的なことまではとても手に負えないという問題があって、同じ年代の人がその集団を率いて行くことの難しさがよく解かったと思う。最初の夜、消灯時間後は絶対に寝ると決めていたのに責任者自身その後集まって遅くまで起きていたという事態も起こった(討論がうまくいかなかったので責任者が集まって遅くまで話し合ったらしい)。その事に対する皆んなの意見を聞いたり、また討論中の話を聞いたりしていると、いろいろと失敗を思い知らされ、悔いは残ったけれど、この合宿中皆んなが何か得たと思うのである。とにかくこんなことが書きたくなったのである。

研究発表冊子のしめくりとして、発表者は、5年を経過した時点で、生徒の使用の仕方、合宿そのものに対する生徒の考え方、教官の指導性に強い疑問を投げ掛け、上戸川合宿所における合宿活動の継続に否定的な見解を示している。しかし、「上戸川合宿所はどのような使い方をしても、それを使ったものを悪くさせることは決してない」と結ばれており、教官一人一人が日々心を新たに、よいものを求めて事にのぞむ以外にないということになるだろう。

§ 2 修学旅行

1 中3 修学旅行

中学校の修学旅行は第24期(昭和47年度)以来、乗鞍を中心とする基地方式となり、一度も欠ける事なく現在に至っている。修学旅行の出発点は「自然に親しみ、かつ自然から学びとろう」・「よりよい集団生活を体験しよう」ということであり、毎年、修学旅行の目的を教官・生徒と共に考え、手づくりの修学旅行を目指し、現在に至っている。以下、第28期生(昭和51年度)から第37期生(昭和60年度)の10年間を概観する。

(1) 第28期生から第37期生の修学旅行の活動内容

次に第28期生と第37期生の修学旅行日程を比較してみたい。

〔第28期生の修学旅行日程（昭和51年5月31日～6月5日）〕

時 日	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
5/31(日)			50 集合	30 大発 車	名古屋 (しなの5号)				25 45 松本 駅	20 乗 車	松高 原	整理、 入浴	夕 食	30 移 動	30 自 由	夕 就 寝	消 燈
6/1(火)	30 起 床	30 朝 礼	30 朝 食	30 準 備	飯ごう炊さん (一の瀬野営場)			30 後 始 末	30 野 外 活 動 (1) (テーマ活動)		整理、 入浴	夕 食	30 学 級 企 画 (主人紹介)		夕 就 寝	消 燈	
6/2(水)	30 起 床	30 朝 礼	30 朝 食	30 準 備	野 外 活 動 (2) (テーマ活動)			植 林 作 業		整理、 入浴	夕 食	30 キ ャ ン プ ・ フ ァ イ ャ ー		夕 就 寝	消 燈		
6/3(木)	30 起 床	30 朝 礼	30 朝 食	30 準 備	指 定 野 外 活 動			30 昼 食	30 野 外 活 動 (3) (テーマ活動)		整理、 入浴	夕 食	30 自 由 時 間		夕 就 寝	消 燈	
6/4(金)	30 起 床	30 朝 礼	30 朝 食	30 出 発 準 備	上 高 地	バス		上 高 地	野 外 活 動		整理、 入浴	夕 食	30 自 由 時 間		夕 就 寝	消 燈	
6/5(土)	30 起 床	30 朝 礼	30 朝 食	30 準 備	出 発	バス	松 本	松 本	松 本	松 本	51 松 本 発	49 松 高 原	15 松 高 原	40 新 大 阪	解 散		

〔第37期生の修学旅行日程（昭和60年5月27日～6月1日）〕

時 日	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
5/27(日)			40 集 合	30 新 大 阪 発	35 ひ かり 349号	00 名 古 屋 駅	(特)しなの9号		17 40 松 本 駅	50 バス	30 松 高 原	整理、 入浴	附 近 散 策	夕 食	オリエンテーション		夕 就 寝
5/28(月)	30 起 床	30 朝 礼	30 朝 食	30 準 備	野 外 活 動 I (オリエンテーリング)					整理、 入浴	夕 食	学 級 企 画		夕 就 寝	消 燈		
5/29(火)	30 起 床	30 朝 礼	30 朝 食	30 準 備	野 外 活 動 II (テーマ活動)					整理、 入浴	夕 食	中 間 発 表 会	夕 就 寝	消 燈			
5/30(水)	30 起 床	30 朝 礼	30 朝 食	30 準 備	植 林 作 業		00 飯 ご う 炊 さ ん			整理、 入浴	夕 食	30 移 動	キ ャ ン プ ・ フ ァ イ ャ ー	30 移 動	夕 就 寝	消 燈	
5/31(木)	30 起 床	30 朝 礼	30 朝 食	30 準 備	野 外 活 動 III (学年ハイキング)		00 野 外 活 動 IV (テーマ活動)			整理、 入浴	野 外 夕 食	自 由	00 ま あ の 荘	夕 就 寝	消 燈		
6/1(金)	30 起 床	30 朝 礼	30 朝 食	30 準 備	清 涼 掃	バス	松 本	57 し なの 8号	22 44 名 古 屋 駅	50 ひ かり 143号	30 大 阪 駅	解 散					

以上2つの修学旅行日程を見比べると、活動内容に大きな変化はない。基本的な活動として、①オリエンテーション（講師を招き、乗鞍の歴史、観光地としての発展等、現地に学ぶ方向付けを目的とする。）②植林作業（自然保護の実践を目的とする。）③飯盒炊さん・キャンプファイヤー（友を知り、友と親しむことを目的とする。）④オリエンテーション（第29期生より実践、自分達の活動場所を知ることが目的とする。）⑤テーマ活動（土地の人々との交流を図り、人と人との心の触れ合いを大切に、自分で調べる姿勢を養うことを目的とする。）⑥学年ハイキング（第32期生まで上高地へのハイキングもされていたが第33期生より乗鞍での雪滑りになっている。）の6つの活動がなされている。これらの活動にはそれぞれの学年において、検討され実施さ

れている内容である。次に第37期生が活動内容を決定するために実施した過程を説明する。

第37期生においては、今までの修学旅行を見直すという目的で、卒業生200名を任意抽出し、アンケート調査を実施した。(回収率は35%、70名であった。)以下にアンケート集計を報告する。

〔アンケート集計〕

1. 活動内容

活動内容	印象に残った	おもしろかった	おもしろくなかった
オリエンテーリング	12 (人)	34 (人)	1 (人)
オリエンテーション	12	5	14
飯盒炊さん	7	38	3
植 林	8	5	21
テーマ活動	26	38	9
キャンプファイヤー	25	39	3
学年ハイキング	8	23	3

2. 修学旅行の意義

友人を見直す	38 (人)
自 然	17
思い出	11
自己を見つめる	8
テーマ活動	6
何かを感じる	5
土地との触れ合い	1
集団生活の総決算	1

上記の修学旅行アンケートを基に決定された修学旅行の目的は「大自然の中で仲間との連帯を図り、いろいろな事に感動する。」であった。この目的に合った活動内容を選び、日程のゆるす範囲で選んだ活動内容が、オリエンテーション・オリエンテーリング・テーマ活動・植林作業・飯盒炊さん・キャンプファイヤー・学年ハイキングであった。

(2)テーマ活動

修学旅行において、沢山の活動の中で、生徒が自主的・創造的に動いているが、特にテーマ活動において、「自然に親しみ、土地の人々との心の交流」を大切にしている姿が目につく。生徒を幾つかのグループに分け、各グループ毎にテーマを決め修学旅行中だけでなく、修学旅行前、修学旅行後、多くの時間を掛けて、準備し、まとめている。以下にテーマ活動のテーマ一覧表を示しておく。

〔第28期生テーマ一覧〕

1) 社会科系研究グループ	2) 理科系研究グループ	3) 文学芸術系グループ
乗鞍高原のつけものについて	乗鞍の地質調査	八ミリ映画の作成
乗鞍・番所における ³ そばの研究		乗鞍かきあるき(絵・詩)
乗鞍の農業と農家の生活	乗鞍高原の木の植生について	
乗鞍と大阪の生活を比べて	乗鞍の植生	自 然
	乗鞍の植物について	乗鞍の自然のスケッチ
番所と生活(建築様式)	小大野川の自然	
乗鞍高原の探索地図の製作		花のスケッチと分布
乗鞍探索地図	植物の分布	
乗鞍の人々をたずねて	乗鞍の自然	
信州の生活の知恵	乗鞍の植物と野鳥	
信州そばの研究	乗鞍の植生	

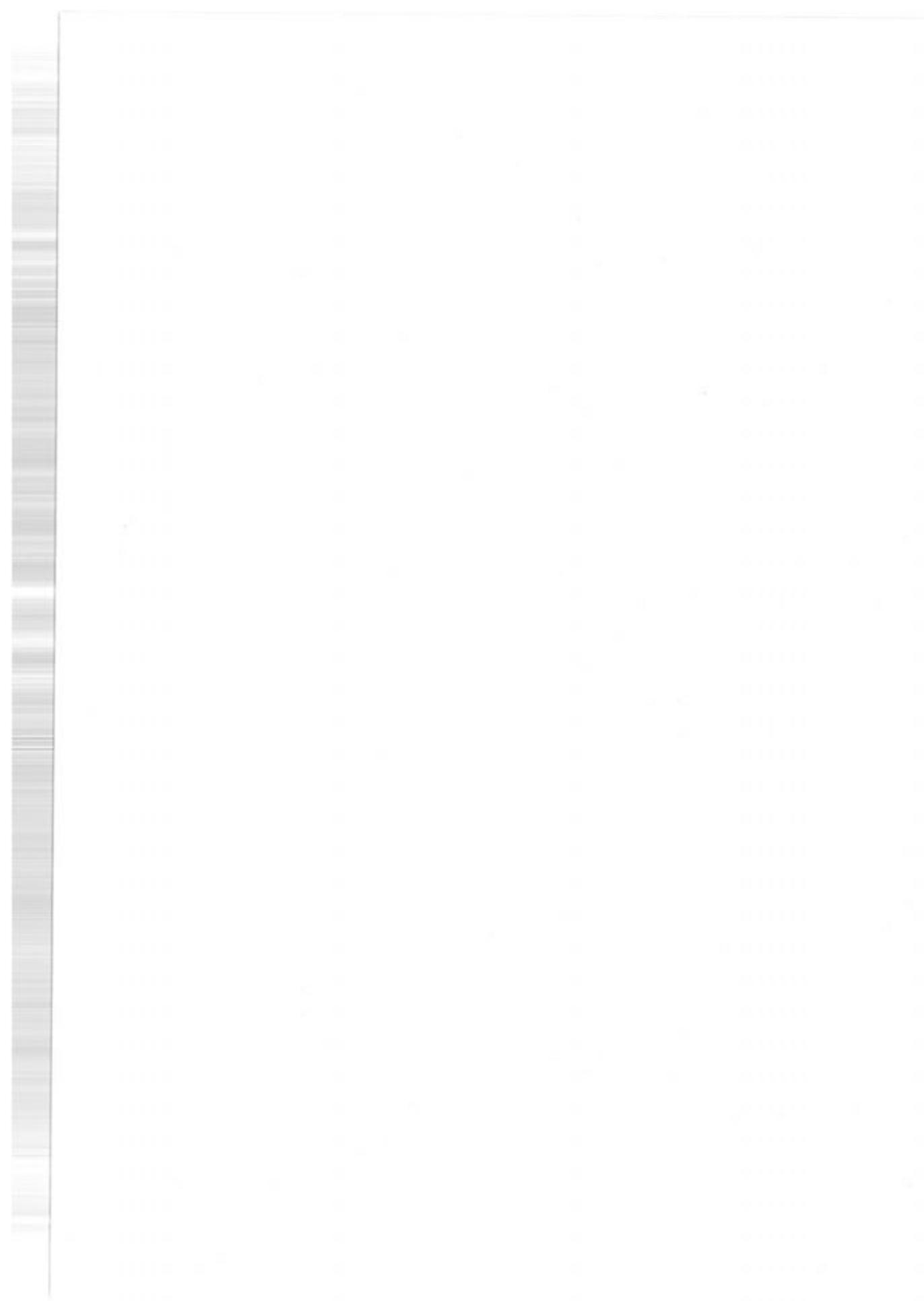
〔37期生テーマ一覧〕

I 乗鞍に触れる	II 乗鞍に学ぶ	III 乗鞍に味わう
◇乗鞍の人々のくらしと考え方	◇観光開発と自然保護	◇大自然、乗鞍に飛んだ四人の天使
◇乗鞍の生活様式	◇乗鞍の農業	◇乗鞍の ³ そばについて
◇観光地に生きる乗鞍の人々	◇乗鞍の農業とその事業転換	◇アウトドア・ライフについて
◇乗鞍の人々の生活	◇乗鞍の交通について	◇地名について
◇乗鞍の家	◇乗鞍の水	◇乗鞍の自然と人々 ~伝説から~
◇乗鞍の民宿	◇乗鞍の川の地形について	◇乗鞍の話題
◇乗鞍の道	◇川の魚と動物と昆虫	◇日本の言語をふりかえる (大自然と言語)
◇乗鞍の祭と行事	◇鳥について	◇乗鞍のガイドブック
◇大阪の子供と乗鞍の子供 (遊び方のちがい)	◇乗鞍の自然	◇乗鞍の美を未来に
◇乗鞍の子供と大阪の子供の 運動能力のちがい	◇乗鞍高原における湿原について	
	◇乗鞍の自然分布図~草花と木~	
	◇乗鞍の道に落ちているゴミ	

各期各々に特徴あるテーマ活動を続けている。このテーマ活動の成果として現在使用している「乗鞍高原」の地図がある。(次頁に示す)、これは第27期生のテーマ活動の一つである「地図の作成」を基にしている。この地図のおかげで、第29期よりオリエンテーリングが実施出来るようになっている。

(3)今後の課題

第28期生と第37期生の修学旅行の比較を書いて来た。活動内容等について、大きな変化はないが、環境等については大きく変化している。乗鞍高原も観光地化し、旅館



民宿等が200軒を越すようになり、スキー場のリフト建設も進んでいる。また、乗鞍高原で修学旅行を実施する学校も増えている。今後、「自然に浸り、自然に親しむ」という出発点を大切にしながら、我々に出来る「自然と人間との共存」という立場にたち、手づくりの修学旅行を作り上げていく努力が必要であると考え。

2 高Ⅲ修学旅行

本校の修学旅行を実施する目的を「学校要覧」の文で再確認してみると次の三点となる。

- ①自然・文化・経済・産業・政治等の重要地を直接見聞することによって、教材学習や特別活動を拡充する。
- ②健康・安全・集団行動・道徳などについて望ましい体験を得させる。
- ③師弟や学友が生活を共にすることによってよい思い出を作り、学校生活の印象を豊かにする。この三大目標を掲げながら、各期毎の特色を盛り込んだ修学旅行を行って来た。

過去の修学旅行の実施期と目的地をみてみると次の通りである。

1～4期生：7月末～8月上旬、即ち、夏休み中に12日間を費やして、北海道方面へ出掛けている。大体、急行「日本海」を使って函館に入り、洞爺湖→昭和新山→登別→白老アイヌ部落→札幌→層雲峡→阿寒湖→摩周湖→美幌峠→原生花園からオホーツク海を見て→浅虫温泉、というコースを辿った。

5～8期生：5月末～6月中旬の12日間を費やして実施した。目的地はほとんどが、東北の十和田湖を入れて、北海道は道東網走方面まで、1～4期生と同じように、出掛けている。

9～13期生：6月中・下旬の10日間を費やして実施。これは新幹線と寝台車を使用したための短縮であった。目的地は1～4期生とほとんど変わらない所へ出掛けている。

14～22期生：5月下旬～6月初めの10日間を費やして実施。目的地に変更があり、前半が東北地方で、後半が道南に限定され、初めて本格的な「自由散策」が活動に加わった。大体、新幹線・特急寝台で盛岡へ行き、八幡平・十和田湖→奥入瀬散策・十和田高原→萱野高原・(青函連絡船)・恵山岬→大沼公園・昭和新山・支笏湖→自由散策→登別→特急寝台車・新幹線、というコースであった。(これらについては「研究集録」第18集に詳述されているので、その項を参考にされたい。)

ところで、この10年間の修学旅行を振り返ってみると、1980年に実施した23期生の修学旅行では大きな変化があった。即ち、従来の修学旅行は2年生の時に行われていたのであるが、この年から3年春に改められたのである。この変更については、全附連高等学校部会の教育研究大会第20回、第23回大会で、生徒指導部の浦久保・白土、そして井畑がそれぞれ詳細な報告資料を作成し、発表しているので、詳しくはそれらを参照されたい。従って、ここでは、そこに至った経過を確認し、その意味を主に考えてみることにする。

(1) 修学旅行委員会設置の経緯

大学入試制度で共通一次テストが採用されてからの高校教育の内容は大きく変わった。とりわけ修学旅行の場合は実施期が早まったり、内容縮小の変更が多い。本校の変更はそうした時流に倣うようなものであった。この発端は1977年2月8日の教官会議にあった。この会議で次年度の高1合宿日程の審議がなされた時、提案日程の是非論議が学期初めの学校行事の多さに留まらず、年間を通じての学校行事の再検討が必要であるとの内容に変

質し、特別委員会設置の検討の必要が提案された。即ち、高1合宿訓練と高2修学旅行が重なる問題点から論議が始まったのであるが、春季体育大会等の諸行事が接近している事などの指摘があり、各行事実施前の生徒指導が徹底しないそれまで数年間の反省が各教官に思い出された。そしてまた、文化的行事の停滞ぶりや文化系クラブの消極化などの問題も思い起こされる中で、学校行事全体の見直しの必要性が確認され、教務部と生徒指導部に特別委員会設置の検討が委託された。

3月1日の教官会議で教務部より次なる提案がなされた。

①特別委員会として学校行事委員会（仮称）を設置する。②新年度校務分掌委嘱の時点から発足する。③構成は、教務・健康教育・図書・生徒指導・研究各部から各1名、その他希望者1～2名、最大限6～7名とする。④但し、部長ばかりが集まるようなことにならないように、例えば、教務部なら行事の係とかのようになる。

以上四点を骨子とする原案が承認され、委員選出が各部に依頼された。

3月19日の教官会議で行事委員会の委員原案が提案され、審議・検討の結果、原案の一部を修正して、次の構成委員に決まった。

千種、網、浦久保、河野、篠原、白土、田原、矢田を正委員として、オブザーバーとして教務主任桜井が同席する。

この行事委員会は10月31日の教官会議で中間報告を行った。そこでは、6回の会合によって各行事を検討してきた事が報告され、その結果、修学旅行改善案が提案された。主なる理由としては、費用がかかり過ぎる、また、現行の東北・道南案は天候に良否が左右され過ぎるのと、移動距離が長く基地方式のような行動の余裕が持ちにくい、等が挙げられた。

なお、委員会の討論では、中・高6ヶ年一貫体制の中で修学旅行を考えた時、自然の中で何かを得ていく、という本校の現在のあり方は十分効果を上げていないのではないか、との問題点が指摘されていた。というのは、中1の合宿訓練、中1・3と高1の臨海訓練、中2の富士登山、中3の乗鞍への修学旅行、高1のハチ高原での合宿訓練、そして、全員ではないが希望者による赤倉でのスキー訓練等の行事の延長上では、生徒の「乗鞍への修学旅行で自然は満喫しました。あそこは最高です。」という言葉が問題を含んでいるとはいえ、教師の側には強く意識されていたのである。つまり、お膳立てされて楽しんで来た生徒は、高校では合宿訓練等でまず失敗ばかりを重ねて、高2になっても未だ自治会行事ですら満足に実行出来る自信が付いていないのだから、当然な事とは言え、修学旅行を楽しむ力は付いていないのである。その他にも、自然中心で社会的見聞の視点が欠如している、とか、最近の旅行ブームの中では、生徒の行動の小グループ化などを考えると、昔のような一生の思い出となるような修学旅行は成立しにくいのではないか、等々の問題点も指摘されていた。更に、修学旅行廃止の意見もあったが、改善案を検討する中で、その問題を話し合ったらよいという事で、委員会は次のような改善案をまとめた。即ち、①基地方式を増やすゆとりがある。②個人選択の幅が広い。③全員に見せたいところがある。④団体でないで見学の機会がない。⑤費用が現行より安くなる、という特色があるとして、山陽・北九州案、東北案、中九州案の3案が叩き台として提案される事になった。

これに対し教官会議では、(質)北海道方面への検討も可能か。(答)可能です。(質)時期の検討は十分なされましたか。(答)十分したとはいえませんが、等若干の質疑応答がなされて、改善案検討の提案が了承された。

これを受けて1977年12月20日の教官会議でこの提案が審議される事になった。ところが、簡単な改善案提案理由の説明から審議に入ったが、叩き台となるはずの改善案の審議とはならず、修学旅行を廃止しない理由についての質問に始まって、1977（昭和52）年度の修学旅行の体験とその数年前からの体験から、修学旅行を行う必然性をめぐる討論となってしまった。

主要な発言を会議録から採ってみる。

「現在の生徒の異性問題に関する意識からすると、修学旅行に生徒を連れていくのは疑問である。」等の発言に対し、「教育は学校のみならず学校での教育というものがあるわけで、修学旅行のような場で教えるべきものも重視しなければならない。こうした共同生活を通じて、生徒と教師が意思疎通をはかる事が大事である。とはいえ、現状ではいろいろな事から、所期の目的があいまいになって来ているので、修学旅行の精神を検討する事は意義がある。」とか、「今年（1977年度）の修学旅行に行った実感は、しんどい思いをしながら遊び人の面倒をみてきたという馬鹿らしさを初めて感じた淋しさは事実であるが、指導出来る点もあるので、（修学旅行は継続したい。）確実な原案を出してもらった方が、討論しやすいのでそうして欲しい。」という発言が続いた。

こうした討論の進行の背景には次のような問題があった事を考えねばならない。即ち、生徒の行動判断能力の幼稚化に伴う生徒の数々の不祥事の個別指導ばかりか、生徒の退学処分という最悪事態を回避すべく最後の努力を重ねていた教師側が消耗しかかっていた事があったのである。

本校の生徒指導の目標は自主性と責任感の育成に置かれている。それは、中学校までは、…はすべきである、とか、…してはいけない、との指針を与えて指導するが、高校では、それが本物になっているかどうかの試練の場として、生徒を指針から解放し、あるがままの状態にして、小さな失敗も大きな失敗も教し、本物となるように個別指導して来た。ところが、我々教師側の個別指導のあり方が、旧習に慣れ親しみ、生徒の微妙な変化に即応出来ていなかったためか、あるいは「軽薄短小」という言葉に象徴される社会風潮の影響のためか、それとも生徒や家庭の環境や価値観の変化のためか、タガが緩んだ如く生徒の日常生活上の不祥事が多かったのである。

それもあって、会議は、行事委員会の一委員の「行事委員会では、学校行事全体の検討に充分時間を掛ける必要があるので、修学旅行だけを集中的に討議し、原案を出す能力がないと思う。修学旅行については早急に解決しなければならない事情もあるので、特別委員会を設けるしかないと思う」との発言から、沢山の意見が出尽くしたところで、多数をもって次の様な結論を下した。

修学旅行委員会を設置し、存廃についての原案を作成し、修学旅行実施の場合は具体案を提出することとする。委員については立候補者を募り、人数によっては教務主任が調整することとする。

そして、その日の内に7名が申し出て、直ちに委員会活動を開始した。委員は、浅野・浦久保・河野・柴山・白土・高木・田原の7名であった。

(2) 修学旅行委員会の活動と原案、そして教官会議の採決

委員会は、従来通り2年生春に修学旅行を実施するとすれば、存廃の結論を2月末迄に

出さなければならない時間的制約を持っていた。この条件下の委員会の活動について、浦久保・白土報告文は、「このため耐寒訓練・入学試験といった行事に忙殺されながら精神的に委員会を開いた」と記しているが、思い出してみると確かに大変な取り組みであった。

最初に委員会は修学旅行の存廃について討論をしたが、結論は初めから分かっていた。何故なら、各委員は前記会議の内容に危機感をもって、修学旅行の存続を考えた者ばかりが立候補し、委員会を構成していたからである。おそらく、7名が7名なりに、ヴェテラン教師の問題提起に答えようとしていたのであろう。察するに、修学旅行を廃止する等の考えはなく、いかに修学旅行を存続させるかのために、自分の理想の思いを考えたのであろう。とまれ、存続で合意し、現状の修学旅行の問題点の分析と克服策の検討に移る事になった。

生徒の「幼稚化」に伴う不祥事の頻発の原因分析が徹底的に行われた。その結論の主なるものは次の様な点であった。

1. 附高生のほとんどが、地域の¹あそび、世界から早く離れてしまい、教育熱心な家庭方針の下に育って来たためか、口は達者だが実行力が伴わず、また、²ガキ大将、の世界をくぐり抜けていないために相互信頼関係の樹立法を自然に身に付けて来ていないし、相互批判の仕方も身に付けて来ていない。そして、中学校までの行事では教師の指導がゆき届き過ぎているためか、生徒の自主性と責任感が期待する程には、十分身に付いていない。
2. 2年生の春は自治会執行部の選挙と、それに続く附高祭の準備のための討論が始まり、それに修学旅行の準備が割り込むようになって、修学旅行に対する十分な話し合いをしないで出発してしまう。このため教官が旅行先で生徒の世話に追われることもある。
3. 別の言い方をすれば、我々の希望は分別をわきまえた³大人、としての生徒を期待しているのに2年生の春では高校生活の半分しか経験していないから、とても⁴大人、になっていない。それが一番大きいのではないか、ということになって来た。

等であった。

そこで、当然の事であるが、附高生が学校行事等を通してどの様に成長しているかを点検することになった。そして、教師が期待する生徒の自主性と責任感はいつ頃身に付くようになっているかの判断をする事となった。その結果、クラス内での討論の仕方、掃除のありかた、附高祭での学級企画の内容、音楽祭での準備・練習・発表等々を比較した時、自治会活動や学校行事でやはり責任ある中心的な活動を経験したあとの3年生の落ち着きが我々教師側の期待するものに近いものになっているという結論となった。この結論は、共通一次テスト実施という大学入試制度の変更に伴う教育現場の動揺期であっただけに、教師側の理想のみを追求するだけではだめな事は各委員には十分意識されていた。そこで改めて修学旅行の意義というものを本校の教育理念と絡めて再検討し直す必要が痛感されたので、委員会の各委員が各自の考えをまとめて、レポートとして提出し、それを検討する事で、明文化された、しっかりしたものを作る事になった。

結果としては、受験指導、入試と多忙な中で全員がレポート作りに励んだが、時間的に間にあった4名のレポートをふまえて討論が重ねられた。(レポートに関しては、長くな

るので省略するが、浦久保・白土報告書を参照されたい。)その結果、1978(昭和58)年2月28日の会議での中間報告を経て、3月7日の教官会議で審議するための原案が作られたのである。討議資料として提出されたものは次の通りである。

討議資料 I

1. 修学旅行の存廃について。

- ◎修学旅行は高校生にとって必要かつ不可欠なものではない。
- ◎だからといって廃止してしまったらという意見には同意できない。
- ◎いな、むしろ残しておきたい何かが修学旅行にはある。

その何かとは?→日常の学校生活は予定されたスケジュールの繰り返しであるのに対し、修学旅行の日程は予定されていても出発から帰着までの生活は一回しか経験しないものであり、しかも新しい体験であるだけに、日常生活では得られない夢があり、発見があり、感動があるだろう。これを大事にすることは本校舎の教育方針とも合致する。

2. 現在の修学旅行の問題点は何か。

- ◎生徒の質の変化(附中3年での修学旅行の経験、自主性・社会性の未発達等)により、修学旅行が生徒にとっても教官にとっても以前のように楽しいものではなくなった。
- ◎東北と北海道を旅行するため移動の時間が多く、費用が割高という印象が残る。

3. 修学旅行をどう変更するか。

A. 旅行の目的地を北海道東部とする。

- ◎日常生活の場から遠く離れている所の方が魅力的で期待が高まるし、日常生活とは異質なものに触れることは貴重。更にあまり俗化していない所。と考えると国境の海・雄大な自然ということで、北海道東部を旅行地とする。

B. 3年生の5月下旬～6月上旬を実施時期とする。

- ◎高等学校の生徒としての生活体験が1年2ヶ月では修学旅行を楽しむ力は不十分。
- ◎それでは3年生ではどうだろう。
 - (イ)生徒は2年間の高校生活で知識が増えている。→旅行地に対する理解力が出来る。
 - (ロ)附高祭・100km徒歩などの自治会行事により自主性・社会性が身に付く。
 - (ハ)生徒は2年生に比べて大人になっている。

以上3点により修学旅行を楽しむ力が付いていると考えられる。

- ◎共通一次テストとの関連について。3年生で修学旅行を行うことを前提として、各教科で授業内容を検討していただき生徒の不安を解消する。更に共通一次の重圧を受けている生徒達に意図的に学校が緊張をほぐす場を作ることは意味がある。

- ◎生徒を育てて来た我々教官が、可能な限り生徒と対等な立場にたって生徒の成長を確かめる場としての修学旅行という視点からも3年生で行うことが望ましい。

以上

この日の審議は3月17日の教工会議に継続された。そして、共通一次テストに絡む生徒と保護者の不安と動揺、費用問題、そして長い日程問題等に若干の不安を持ちながらも、ほとんどの教官が自らの考えを発言し尽くした状態で、採決に入った。結果は圧倒的多数でもって、高3の春に道東にて修学旅行を実施することに変更する、という案が支持された。

この時の圧倒的多数をもっての変更は意外にも思えたが、それまでの数年間の生徒の問題に関する生徒指導会議等での討論からすれば、本校では当然の結論でもあった。

というのは、有名私立受験校と共に有名受験校として国立大学の附属校が注目され初めると共に、指弾されるようになっていく中で、本校は中・高6ヶ年一貫の全人教育を大目標に努力を重ねて来たのである。たまたま、修学旅行での生徒の幼稚な不祥事から検討が始まり、前記の原因等が指摘されて来た。世間は学力偏重に流されている。教師も保護者も、大人も社会も、子供がおとなしく机に向かい勉強していれば、あるいは塾や予備校に行って勉強していてくれれば、子供達が弱い者いじめをしていても大目に見て来た。品のない立居振舞いで売店をうろついたり、万引きなどがはびこったりもした。それまでの世間は、子供が平和日本を創造していく一員になるように、皆で厳しい目で子供を見つめ、子供達もそれに応えようとして来た。しかし、進学率が高まり、有名大学に入る事が、有名大企業に入れるのだ、という風潮が強まって来た時、学校も、世間も、社会の一員としての子供の成長を軽視し初めた。こうした社会風潮に対する本校の常識の挑戦であったとも言える変更であった。

(3) 修学旅行の現況

北海道東部を目的地とする修学旅行は、今年で6年目を迎え、本年度は、5月24日より6月1日までの8泊9日の日程で実施された。

修学旅行の準備は、1年前から始まる。担任間の協議のうえ、教官1名が前年の修学旅行に参加して下見を行い、下見の報告を担任間で検討し、コース、宿泊地の案を作成し、教工会議において決定する。本年度の実施コース等は、下記のものである。(次頁の表と注記を参照されたい。)

この旅行の目的は、①北海道東部を重点とした大自然に親しみ、実感としての感動を通して豊かな感性をみがく、②集団行動を通して友情を深め、望ましい人間関係、自主性及び責任感の育成を図る、③日常生活では触れることの出来ない風物に接し、人生経験を豊かにする、の3点がある。3年生になると同時に、各クラスより旅行委員を募り、教官と生徒の協同作業で旅行は具体化していく。その準備段階から、生徒の修学旅行は実質的に始まり、旅行後一冊の旅行文集が出来上がって終る。生徒達がどのような感想を述べてくれるか、そのことが私達教師にとって、目的がどれほど満たされたかを知らされる一つの機会である。以下、生徒の感想を挙げることで、この項を終えたい。

……どこまでも続く草原、雄大な山々、そして静まり返る湖など、見るもの出逢うものすべてに興奮し、感動を覚えた。中でも摩周湖と開陽台での印象が強い。……開陽台の広々とした大地に比べて一人の人間など小さいものであると感じた。また、とても爽快な気分になり、思わず草原に寝ころんべしまった程で、このまま時間が止まってほし

いという気持ちになった。

この修学旅行でメインとなったのが、網走での自由行動である。……能取岬の休憩所の二人のおばさんは、とてもきさくでいろいろな話をお聞きすることが出来た。中でも冬の厳しさには驚いた。……話を聞くうちに自然の厳しさを再度痛感させられた。こんな所で年中ほとんど毎日、働いておられる二人の苦勞は計り知れないものだと思うが、笑いながら冬の話をするのを見て、北海道の人のおおらかさと、その裏にある強さを強く感じた。……

(28期生 N君の文章より)

日次	月日	行 程	宿 泊
(1)	5/24 (金)	ひかり352号 新大阪 → 東京 → 上野 15:30 18:46 19:50 特急ゆうづる1号	
(2)	5/25 (土)	21便 特急おぞら7号 青森 → 函館 → 新田 → 奥志 → 然別湖△ 5:08 5:25 (舟)9:15 9:30 (舟)長万部10:58 16:02 16:30 17:30	然別湖温泉ホテル (01566)7-2211
(3)	5/26 (日)	※自由散策 然別湖 → 上土幌 → 足寄 → オンネト → 阿寒湖 → 弟子屈 → 養老牛温泉△ 8:30 10:20 16:40 11:50 12:20 12:50(食)14:30 15:40 16:00 17:00	花山荘(01537)8-2234 藤屋 8-2341
(4)	5/27 (月)	……………終 日、養老牛温泉を中心とした選択プラン……………養老牛温泉△	ホテル大 8-2131 養老牛荘 8-2224
(5)	5/28 (火)	(網走山コース) 養老牛温泉 → 斜里 → オシンコシンの滝 → ウトロ → ウトロ港 → ウトロ → 斜里 → 原生花園 → 天都山 → 網走△ 8:00 9:40 10:00 10:40 11:00 11:10(食)12:00 12:30 14:00 14:10 15:25 15:50 16:30 17:00 17:30	ホテル大観 (0152)48-2411
(6)	5/29 (水)	……………終 日、網走を中心とした選択プラン……………網走△	
(7)	5/30 (木)	網走 → 計呂地 → 石北 → 大湯 → 銀河流星の滝 → 層雲峡 ※ △ 9:00 9:40 10:00 11:45 12:10 12:30(舟) 15:00 15:10 ※到着後黒岩登山	ホテル大宮 (01658)5-3211
(8)	5/31 (金)	(臨時) 特急はくつる4号 層雲峡 → 塩川 → 函館 → 青森 → /▲ 9:50 11:30 12:28 (舟)長万部17:16 19:09 19:40 23:30 23:59	
(9)	6/1 (土)	ひかり245号 上野 → 東京 → 新大阪 (舟)郡山6:23 9:18 10:17 13:30	

(注)

- 5月27日 終日、選択プランにより活動。(イ)納沙布岬方面、(ロ)霧多布岬方面、(ハ)牧場見学・野付半島方面、(ニ)野付半島方面、(ホ)養老牛温泉附近の散策、以上5コース) 養老牛温泉に連泊。
- 5月28日 8時発。斜里より知床半島へ。オシンコシンの滝、ウトロに立ち寄り、知床五湖散策のあと斜里へ戻り、原生公園、天都山(オホーツク博物館)に寄り、網走湖畔へ(17時30分着)。ホテル大観泊。(予定では、ウトロより乗船し、知床半島、オホーツク海をみるはずであったが、悪天候のため変更。)
- 5月29日 早朝より、グループ活動(34グループ。旅行前に計画したコースで活動。摩周湖方面、サロマ湖方面、網走市内散策等々)。17時30分頃全員無事帰着。夜、ホテル前にてキャンプファイヤー。ホテル大観に連泊。

3 今後の課題

教官会議で修学旅行の変更を決定した後、学校の方針はPTAの会合やH・Rで保護者と生徒に、繰り返し、丁寧に説明された。社会風潮からして、生徒と保護者に不安や不満が無かったと言えば、嘘になるであろうが、生徒と保護者は、よくそれらを抑えて、学校の方針を理解された。そして、前の「修学旅行の現況」で述べた如く、高3の春に修学旅行を実施することが定着しつつある。また、心配していた、今回の変更による大学合格状況の悪化という事態は生じなかった。そして、2年次に行くよりはるかに落ち着いた修学旅行が出来ている。

ところで、生徒の変化に伴って設置された行事委員会は、3年間の活動をもって、解散された。この行事検討の結果、無くなった行事は春季体育大会だけであった。そして、変更は修学旅行の実施学年の変更だけであった。この事は、本校が創設されて以来、知育・徳育・体育の各面で生徒の成長に良かれと、試行錯誤しながら創始してきた各行事の理念はやはり普遍的に守らねばならないと判断した事であった。ただし、2年生に余りに重い負担となっていた修学旅行を3年生に移す事によって、バランスを良くしたものとも言える。

とは言え、我々は1981（昭和56）年から特別委員会としてカリキュラム委員会を設置している。これは新しい教育課程実施に関したものであるが、この委員会では現在の生徒の能力をもっと自由に伸ばすカリキュラムを作れないものかと、新課程実施後も検討を続けている。最近では、研究部が中心になって、中・高合同研究部会を開いて、中・高全教官の共通理解を深める事も行っている。これらは、やはり、我々の全人教育の理想を貫くためには、学力偏重の風潮に迎合せず、個々の生徒の能力と特性を今まで以上に伸ばしてやれる体制をしっかりと作らなければならないからである。というのも、修学旅行での飲酒・喫煙・盗難・万引・異性問題等々の愚行が増加しつつあり、一般には管理を強化したために、旅行中に生徒が死亡する事件があったり、監督教官の眼を逃がれようとしてヴェランダから墜落した中学生の事故があっても、共通一次テストを口実に、高校での修学旅行は実施期を早めたり、安易なものに変更するのが、当然であるという社会風潮があるからである。子供が自然の中で伸び伸びと何かを得るべく活動するためにも、保護者の理解を得るためにも、今後はこのより困難な課題に今まで以上に真剣に取り組む必要があるだろう。

岡	博和	岩城	一郎
園方	太司	柴山	元彦
富田	健治	高木	正喬
中西	一彦	琢磨	昌一
場本	功	武田	和生
藤村	克子	横田	稔良

生徒会・自治会

はじめに

中学校生徒会は開校の翌23年より、高等学校自治会は開校の年31年に発足し、今日まで、40年、30年の歴史を重ねて来た。生徒会、自治会の活動は、生徒の日々の活動にあるのであるが、生徒達のエネルギーは、生徒会、自治会行事に集中する。生徒会行事としては、各委員会活動、三附中交歓会等があり、高等学校自治会行事は、附高祭、音楽祭、百軒徒歩等がある。10年前の、中30周年・高20周年の際には、開校以来の生徒会、自治会の活動をそれぞれの行事を通して、年を追って出来るだけ鮮明に浮び上がらせようと、行事内容だけでなく、行事計画から参加の様子、またそれらの行事の中で生徒達が、どのように考え行動したかをまとめてみた。今回、昭和50年以降の10年間の生徒会、自治会の活動をまとめるに当たり、中学校1年に入学した生徒達が、高等学校を卒業するまでの6年間に、生徒会、自治会行事にどのように参加していったかを生徒達の成長の過程を通して見ることとした。昭和18年に入学した中学校27期生は、高校21期生として昭和54年に卒業し、昭和54年に入学した中学校33期生は高校27期生として、昭和60年に卒業している。即ち、昭和48年から昭和60年まで在籍していた2組の学年を選んだ。

§ 1 生徒会

1 生徒議会

(1) 昭和48年4月～昭和49年3月、昭和54年4月～昭和55年3月

27期生（1年）	33期生（1年）
規律規定改定の4年目（第4期） 残された条文が少なく、新入生を含めた委員会を組織すると混乱を招くばかりなので、検討委員会を廃止し、役員会が肩がわりということに生徒議会で可決 1学期 4/19 生徒集会、「新しい規律規定の実施にあたって」の説明会 残された2つの条文について原案の相違を話し合う。 2学期 教官側修正案を役員原案として提案。 早朝登校に関する条文 ホールの条文 生徒総会において、早朝練習の	第1回 4/6 議長及副議長の選出 議事選択委員の選出 役員会の方針発表→承認 「心のふれあう生徒会」 第2回 4/23 各委員会の方針発表→承認 第3回 諸連絡のみ 第4回 5/21 各委員会のキャンペーン発表及びその質疑応答 第5回 5/28 議会議決法について→次回へ持ち越し 第6回 6/11 各委員会のキャンペーン発表及びその質疑応答→承認 第7回 6/18 各委員会のキャンペーン

条文は可決、ホールの条文は保留

ある組より「長期休暇中は家庭の指導を受ける」といった検討委員会もとの案、校外生活の条文に沿った代案が再び提案
役員会は現規定を実施した結果、附中生は努力目標軽視の安易な方向へ流れつつあるので規制をゆるめるべきでない、と現状重視の必要を主張。

役員会原案は生徒議会で可決
12/24 生徒総会において原案可決

規律規定改定の流れ

第1期(S.45) 生徒総会において規律規定改定が決定

生徒総会において努力目標の原案可決

第2期(S.46) 努力目標の字句修正

旧規律規定の条文の削除改正

前文、後文

「我々の理想的な学校生活とはどんな規定より得られるのか。どんな基準できまりを決めているのか。」という問題提議

校外生活の条文

きまりの定義

定義と条文

第3期(S.47) 名称決定

「規律規定」「努力目標」

「校則」

校外生活の条文

付加条文

ホール及早朝練習の問題は教官と意見対立

結論のついた条文に関し

発表及びその質疑応答の残り→承認

議会議決法について

第8回 6/25 議会議決法草案作成委員会について→作ることに決定

第9回 7/9 各委員会の反省
議長・副議長・代議員の反省

第10回 9/9 議長及副議長の選出
議事選択委員の選出

第11回 9/17 議会議決法について
体育大会の生徒会企画について

第12回 9/22 生徒会企画の種目について
各委員会の方針発表

第13回 9/26 生徒会企画の種目について

第14回 10/1 生徒会企画の種目について→玉入れに決定

第15回 10/8 体育大会の反省
生徒会企画の反省

第16回 11/12 学芸会の原案提出→承認
役員会の方針発表及びその質疑応答

具体的方針不足のため、次回改めて発表

第17回 11/19 役員会の方針発表→承認
「意欲と行動なくして事

第18回 12/6 生徒会主催体育的レクリエーションの原案提出及び質疑応答→承認

第19回 12/22 各委員会の反省
議長・副議長・代議員の反省

議会議決法についてのアンケート結果報告→白紙の状態に戻す。

第20回 1/19 議長及副議長の選出

<p>生徒手帳に載せるかどうか検討→努力目標に含まれる条文は一切載せないことに決定</p> <p>未解決の2つの条文を除き生徒総会において、全文承認が行われ、新規律規定誕生</p> <p>実施は48年度よりと決定</p>	<p>議事選択委員の選出 各委員会の方針発表及びその質疑応答→承認（一部次回まで保留）</p> <p>第21回 1/26 前回保留の委員会方針再発表→承認</p> <p>第22回 1/18 議事選択委員会についての質疑応答 時間不足のため次回へ持ち越し</p> <p>第23回 1/23 議事選択委員会についての質疑応答 放送委員会・文化委員会主催の音楽コンサートの主旨説明・その質疑応答→承認</p> <p>第24回 3/10 各委員会の反省 役員会の反省 議長・副議長の反省</p>
--	---

(2) 昭和49年4月～昭和50年3月, 昭和55年4月～昭和57年3月

27期生（2年）	33期生（2年）
第1回 春体の原案発表	第1回 4/24 正副議長選出
第2回 三附中の原案発表 委員会、役員会の方針発表 「選挙をしなかった1年生と生徒会との結び付け」 「初めて完全実施になった規律規定の運営」 「多彩な行事への工夫」	議事選択委員選出 役員会の方針発表及びその質疑応答→承認（一部次回まで保留）
第3回 ベルマーク委員会について	第2回 4/23 前回保留の役員会の方針 質疑応答→承認 「過去を未来に生かそう」
第4回 春体・三附中の反省	各委員会の方針発表及びその質疑応答→承認
第5回 修学旅行中の座談会について 委員長の出席について 生徒議会見学の予定発表	第3回 4/28 五月生徒集会の活用方針 案提出及びそれについて 協議→可決
第6回 委員会の中間報告 月曜日の昼に議会案内の放送を	第4回 5/19 各委員会のキャンペーン 発表
第7回 委員長の出席の義務は 月曜日の昼の放送について	第5回 6/2 六月生徒集会の活用方針 提出及びそれについて協
第8回 委員長の出席の義務は	

	生徒議会見学の報告				議→可決
第9回	体育大会の生徒会企画について	第6回	6/19	三附中交歓会の反省	
	規律規定について→分類しては	第7回	7/3	文化的企画の原案提出及びその質疑応答→可決	
第10回	生徒会企画について→応援合戦	第8回	7/14	各委員会の反省	
	校内の美化について			生徒会企画アンケート結果発表	
	各委員会の方針発表	第9回	9/9	正副議長選出	
第11回	規律規定の分類について			文化的企画の反省	
	各委員会の方針発表			体育大会の原案提出→可決	
第12回	秋体の反省			議事選択委員選出	
	学芸会の日程発表	第10回	9/20	体育大会生徒会企画の原案提出及びそれについて協議→否決	
第13回	新役員の方針発表	第11回	9/22	各委員会の方針発表及びその質疑応答→承認	
	学芸会の係の分担と目標発表	第12回	10/13	体育大会の反省	
第15回	学芸会の劇間の歌の代案について			前期生徒会の反省	
	委員長の挙手権について	第13回	10/20	役員会の方針発表及びその質疑応答→承認(一部次回まで保留)	
第16回	委員会活動の中間報告			学芸会の原案提出→可決	
	委員長の挙手権のアンケートについて	第14回	11/4	前回保留の役員会の方針再発表及びその質疑応答→承認	
第18回	学芸会の反省	第15回	11/18	球技大会の原案提出及びその質疑応答→否決	
第19回	委員長の挙手権のアンケートによる原案発表	第16回	12/2	学芸会の反省	
第21回	委員会活動の反省	第17回	12/17	諸連絡のみ	
第22回	委員長の挙手権→与えないと決議	第18回	12/22	各委員会の反省	
第24回	委員会活動の方針発表	第19回	1/20	正副議長の選出	
第25回	規律規定を浸透させるには			議事選択委員の選出	
第26回	規律規定浸透についての役員会原案・対策の発表・討議			委員会の方針発表	
第27回	アンケート結果発表	第20回	2/9	厚生委員会の方針発表	
第28回	規律規定浸透について会長説明	第21回	2/16	文化クラブ発表展示会について	
第29回	委員会活動の反省	第22回	2/19	スポーツ大会について	
	生徒会活動の反省			校内での飲料その他について	

- 第23回 2/23 校内での飲料その他について
 第24回 3/4 校舎内での飲料購入について

(3) 昭和50年4月～昭和51年3月, 昭和56年4月～昭和57年3月

27期生 (3年)	33期生 (3年)
第1回 役員会の方針発表 「規律規定の実践」	第1回 4/20 正副議長選出 議事選択委員選出
第2回 各委員会の方針発表	役員会の方針発表及其 質疑応答→承認
第3回 規律規定の説明会と討論会について	「自分自身を見つめられる生徒会」
第4回 投書箱について	各委員会の方針発表及び その質疑応答→承認
第5回 規律規定実践について 役員会側から具体的な原案提出	第3回 5/18 意見会原案について協議 →可決
第6回 各委員会の中間報告	第4回 7/11 校則第11条の改正案について(規律委員会より) →承認
第7回 役員会の規律規定実践に関する報告 ベルマーク委員会の報告 規律委員会からの下校時刻調査の報告	第5回 9/9 正副議長選出 各委員会の方針発表及び その質疑応答(一部次回まで保留)
第8回 役員会の規律規定実践についての報告	体育大会生徒会企画の原案提出及びそれについての協議
第9回 第一学期の各委員会の反省 生徒集会の存在についての調査報告	第6回 9/14 正副議長の選挙についての協議→前議会の選挙及議事を有効とする。 前回保留の委員会の方針再発表及びその質疑応答→承認
第10回 体育大会の種目・係→承認 生徒会企画を続けることに決定	体育大会生徒会企画原案についての協議→保留 原案取り下げ
第11回 体育大会の生徒会企画のあり方について討議→フォークダンスに決定	第7回 9/16 体育大会生徒会企画についての協議→否決
第13回 各委員会の出席を向上させることについて	第8回 9/28 前期役員会の反省
第15回 体育大会各係の反省 前期役員会の反省	第9回 10/19 後期役員会の方針→承認
第16回 学芸会の日程発表 委員長の挙手権について討議→クラスへ持ち帰る。	
第17回 学芸会の係の分担発表 委員長の挙手権について→今ま	

	で通り無くなった。		学芸会原案発表
第18回	各委員会の中間報告	第10回 11/19	付加条文について
第19回	後期役員会の方針 「生徒会の中心部を知ってもら う」 「新旧の規律規定を比較し理解 を深める」	第11回 11/14	付加条文について 規制という事における昔 と今の意味の取り方
第20回	身体障害者の絵ハガキ、クリ スマスカートの購入について意見 交換	第12回 11/16	付加条文について 規制しない、自由、とい うことについて先生に聞 く
第21回	身障者の絵画作品購入について →生徒会として参加することに 決定	第13回 12/11	役員側改正案提出→保留 付加条文について 付加条文のもつ本来の意 味
第22回	学芸会の各係の反省 身障者のハガキの第一次結果発 表	第14回 12/19	各委員会の反省 学芸会の反省
第23回	ベルマーク委員会の正委員会へ の昇格の件	第15回 2/8	正副議長選出 委員会方針発表 音楽コンサートについて 原案提出
第24回	ベルマーク委員会の立場につい て	第16回 2/19	球技大会原案提出→承認
第25回	ベルマーク委員会の立場につい て→現状維持 第二学期の各委員会の反省	第17回 3/13	後期生徒会役員会反省 各委員会反省
第26回	正副議長、及び議事選択委員の 選出		
第27回	第三学期の各委員会の方針説明		
第28回	前回承認されなかった委員会の 方針を承認		
第29回	文化クラブ発表会、音楽会のプ ログラム発表		

(4) 〈生徒の作文より〉

27 期 生 (3年)

今年度、附中生徒会は、大きな転期に直面していた。規律規定改定から2年、改定に直接携わった先輩はすべて卒業し、いわば「規律規定を与えられた」かたちの我々が、いかにしてその精神を理解し、実践していくか、これが我々に与えられた課題であった。そこで前期役員会は、その大きな目標として、「規律規定の実践」

33 期 生 (3年)

「みんなの生徒会」—生徒会を語る時、誰もが、一度は口にする言葉である。しかし、それらの人は、どこまで生徒会を考え、それをどこまで行動に移したであろう。「みんなの—」確かにその通りである。また、そうなくてはならない。しかし、今これを、あまりにも簡単に、

を掲げ、活動していくことに決定した。これは、それまで「規律規定の理解」ということがよく言われてきたが、頭の中で分かっている、それを実際の生活の中で活用出来なければ規律規定の意味が無いのではないかと疑問から、「もう理解の段階は過ぎた。今こそ我々がこの精神を実行に移していかなければならない。」という結論に達したためである。

(中略)

我々は我々に規定というものを考え、少しでもみんなが実践してくれるよう努力した積りである。それが功を奏さなかったのは非常に残念だ。もとより規律規定の実践には個人の自覚が最も必要なのだから、もっと深く考えてほしかった。その精神は実践しなければ死んだも同様であり、現在実践されきっていないのは事実であるからだ。今、附中には「規律規定ばなれ」とでもいうべき傾向があるようだが、このすばらしい伝統の灯は、どうか絶やさぬように、そしてもっともっと明るくするようにしてもらいたいと思う。

口にはしていないだろうか。

近頃、生徒会と役員会を、同じ物として見る人が多いように思う。今、これを読むあなたも、その一人ではないだろうか。それは、完全なまちがいである。生徒会というものは、生徒全員の集合をこう呼ぶのであって、役員会というものは、その集合から、選出された者が集まって出来た、いわば代表機関なのだ。だから、ここには、少数意見を大きく拡大し、教官に、また他生徒に、広く訴えるという任務があり、逆に、生徒会には、この任務を成功させるため、働きかけ、時には、役員会の後押しをするという任務がある。このように、生徒会と役員会は、任務も異なる、全く別の物なのである。

という事は、生徒会活動が、本来どうあるべきか。

現在、生徒会活動とは、役員会のみ活動と考えられているが、本来の生徒会活動とは、つまり、生徒会と、役員会の共存による活動を、指すものではないだろうか。

(中略)

みんなは、もっと、自分の主張を見せるべきだ。どんな形だっていい。そして、もっと生徒会に参加すべきだ。それが、本来の生徒会としての活動だから…。

2 三附中・交歓会

[27期]

日時 昭和48年5月18日(金)10:00~3:30

場所 平野

日程 10:00 開会式

- ・開会の辞
- ・校長挨拶
- ・運営説明
- ・選手宣誓
- ・準備運動

10:30 競技開始

- ・ボートボール
- ・バレーボール
- ・ドッチボール
- ・ソフトボール

12:00~1:00 会食

— 1 年 —

[33期]

日時 昭和54年6月22日(金) 9:30~3:30

場所 天王寺

日程 9:30 集合(着替えを済ませた状態)

9:40 開会式

- ・校長挨拶
- ・生徒挨拶
- ・宣誓
- ・日程・会場説明
- ・競技説明
- ・体操

10:00 試合開始

- ・ボートボール
- ・バレーボール

- 2:00 交歓会
- 各校各チームに交歓のリーダーを作り、三者協力して行う。その内容は当日までに各会場校チームの交換のリーダーが中心となって計画し、他校へ連絡する。
(当日、三者でよく話し合い練っておく。)
 - 課題曲
「あの素晴らしい愛をもう一度」
- 3:30 閉会式
- 成績発表
 - 講評
 - 閉会の辞

※予備日 9月14日(金)

- ドッチボール (女子)
 - サッカー (男子)
- 12:45 試合終了
- 1:00 昼食
- 部屋割りして3校歓談出来るようにする。
- 2:00 全体交歓
- 学校紹介 (各校20分で、スライドによる説明)
 - 歌一校歌
応援歌
全体歌「手のひらを太陽に」
- 3:10 閉会式
- 生徒挨拶
 - 講評
- 3:30 解散
- ※雨天決行

[27期]

— 2年 —

[33期]

- 日時 昭和49年5月17日(金) 9:30~3:40
場所 天王寺
- 日程 9:30 開会式
9:50 座談会
- 各校それぞれ20グループに分かれ、グループ毎の三校合同座談会とする。
 - テーマを設定し意見を交換する。テーマは、あまり堅苦しくならぬよう配慮する。「中学生の遊びについて」
- その他
- 先生について
 - ラジオやテレビについて
 - 会場校で各グループ毎の座談会の司会者を決めておく。
- 10:45 交歓試合 (昼食も含む)

- 日時 昭和55年6月13日(金) 9:30~3:30
場所 平野
- 日程 9:30 集合
9:50 開会式
- 校長挨拶
 - 生徒挨拶
 - 宣誓
 - 日程説明
 - 全体交歓 (校歌・応援歌)
 - 会場説明
 - 競技説明
 - 体操
- 10:50 試合開始
- バレーボール
 - バスケットボール
 - ドッジボール
 - ソフトボール
(すべて男女別)
 - 昼食は12:00~13:00までに更衣場所や中庭で済ませます。

- 種目 バレーボール
ドッジボール(女子)
バスケットボール
サッカー(男子)
- 昼食は、なるべく同じゾーンの三校チームが寄り集まり、歓談しながらとれるようにする。
- 2:30 全体交歓
- 校歌・応援歌・学校紹介
- 課題曲「翼を下さい」
- 種目ゾーン毎の交歓
- 3:30 閉会式
- 3:40 解散

※雨天の場合の予備日 9月20日(金)

- 2:30 フォークダンス
「オクラホマ・ミクサー」
- 3:20 閉会式
- 3:30 解散
- (雨天時)
- 9:30 集合
- 9:50 開会式(体育館)
全体交歓
- 11:20 各クラスに分かれてゲーム
(15班)
- 12:30 昼食(グループ)
- 1:30 閉会式(体育館)
- 2:00 解散

[27期]

— 3年 —

[33期]

- 日時 昭和50年6月19日(木) 9:00~3:00
場所 池田
- 日程 9:00 学校着, 更衣
9:20 集合
9: 開会式
- 校長先生ごあいさつ
 - 開会のことば
 - 日程説明
 - 諸注意
 - 選手宣誓
 - 体操
- 9:50 競技開始
- 卓球
 - バレーボール
 - バスケットボール
 - ソフトボール(女子)
 - サッカー(男子)
- 1:50 競技終了, 集合
座談会, リクレーション
- 運動場にちらばって行う。
 - 男子12班, 女子12班の計24班に分かれる。

- 日時 昭和56年6月19日(金) 9:30~3:30
場所 池田
- 日程 9:30 集合, 更衣 9:40
閉会式
- あいさつ
 - 宣誓
 - 日程, 会場説明
 - 競技説明
 - 体操
- 10:00 試合開始
- バレーボール
 - サッカー
 - バスケットボール
 - 昼食は12:00~1:00までに適宜済ます。
- 2:00 全体交歓
- 各校それぞれ20分程度
 - 校歌, 生徒歌, 応援歌
 - 学校紹介
学校の特色や近況紹介。
スライド使用は自由。
- 3:10 閉会式

- ・議題は「男女交際」について
前もって、グループで話し
合っておく。
- 2:30 全校交歓
 - ・学校紹介
5分あまり、ユニークな
ものも可
 - ・主題歌合唱
「この広い野原いっぱい」
 - ・校歌
- 3: 閉会式
 - ・成績発表
 - ・閉会のことば
 - ・校長先生のごあいさつ

※雨天のときは9月12日

- 3:30 解散
- (雨天時)
- 9:30 集合
- 9:40 開会式
- 10:00 全体交歓
- 11:00 各クラスに分かれてゲーム
などを行う。
- 12:00 昼食(グループ毎)
- 自由時間
- 1:00 閉会式
- 1:30 解散

三附中文交歓会の魅力

体育大会関係の行事は去年まで、春季体育大会・三附中文交歓会・秋季体育大会と三大行事があった。そして、前者の二つは行事の多い附中の特色を表すものであって、今年になっていろいろ討議の末、春季大会は消滅された。それはやはり交歓会の魅力によるものではなかろうか。この三附中文交歓会の企画に折り込まれている前回から始められた座談会がある。今年も池田のグラウンドで20数班に分かれ行われたのだったが、司会としての僕も完全にしらけてしまったのだ。何かしゃべれ…。！といたいけど、皆は、互に慣れない相手を前にして、終始下を向いたままだった。他の中学とは違い同じ附中生が集まっているのにこの状態では何の意味も持たれておらず、これでも交歓会かと思われた。しかし、交歓試合となるとみんなの目も輝き、互いの学校の意地をかけ我々天王寺もいつもにはない学年全体が一つとなって、他校とぶつかり合い、完全勝利を手にしたのだった。

やはりこの異色の行事は僕の脳裏に焼き付いている。(27期生の作文より)

三附中文交歓会とは何なのか

僕達33期生は、今までに2回三附中を行ってきた。そのたびに僕は三附中は、いったい何の為にやるのだろうか。交歓という意味を辞書で引くと①共に楽しむ事②打ち解けて交る事となっている。しかし、実際問題として楽しめているだろうか。また、打ち解け合っているのだろうか。僕は打ち解け合っていないと思う。ただ、スポーツをやって、はしゃぎ回ってそれでうち解け合うことになるのだろうか。変に附中生であるという誇りが強過ぎてか試合中でも相手をののしり出場すると僕のように5ファールをして退場と言うことになってしまう。そして、試合が終わると何が残るかと言うと相手への怒りや憎しみ以外何も残らない。こうなると相手と打ち解けて交わるという事以前の問題である。僕のような考えをする人も中にはいると思う。僕のような考え方をする人が一人でも減るように生徒会が望むのなら、企画の段階でもう少しでも、打ち解け合えかつ楽しい三附になるようにしてほしい。(33期生の作文より)

§ 2 自治会

1 附高祭

附高祭の前身は文化クラブの発表会である。附高創立3年目、昭和35年より38年まで4回続いた。昭和39年には、「みんなで楽しく遊ぼう」というテーマで自治会祭が行われた。翌昭和40年に、両者を合わせた形で附高祭が2日の日程で幕を開いた。第3回から、3日となり、また何かを考えるためにやろうという方針が出て来た。『たとえば第3回のスローガンは、「附高と附高生を考えよう」、第5回は「自己を見つめる」これと共に講演・映画・シンポジウム・グループ別討論などがプログラムの中にはいつてきた。第4回の附高祭のグループ別討論のテーマを見ると、「学校自治」「安保」「友情」「生と死」「宗教と生活」など。これからは当時の附高生の様子がしのばれる。また、この当時にはこれらの討論の基盤になる組織があったことも見逃せない。たとえば「空想より科学へ」(エンゲルス)を読む会というのもあったそうである。

フリータイム(今の有志企画の前身と考えられる)という企画がプログラムの中に入れられたのは、第7回(昭和46年)からである。それまでの附高祭はおもに団体でまとまってやるものだった。そこで、もっと個人で好きなことをやりたいという要求が出てきたのである。中身としては映画・フルート・落語・フォークコンサートなど。

附高祭が4日間になったのは第9回(昭和48年)からである。このときからプログラムは多少の変更はありながら、一定の形をとって来た。1日目は前夜祭、2日目、3日目に学級企画・文化クラブ発表・講演・映画・体育企画など、そして4日目は、有志企画・模擬店・後夜祭・ファイヤーストーム。さて、学級企画はどうして出来たのだろうか。附高祭が4日間になった時ぐらいから附高生の³個立分散化³と言われるようになった。受験の影響もあって、ホームルームの話し合いがうまくいかない、みんなに連帯感が無くなった、などである。それを何とかしよう、みんなで何かをすればクラスがまとまるはずだ、という考えで学級企画は生まれた。今の⁴大講堂企画はこの学級企画の名前が変わったものである。(附高新聞第178号「附高祭小史」より)

21期及び27期は、4日間行われるようになった際高祭に取り組み、それぞれの状況にかかわっていたのである。以下に於て、両期生が2年の時のプログラムの概要と反省の文章を紹介することを中心として、それをたどってみよう。

○前夜祭

「君よ9月8日に熱くなれ」

これから4日間の附高祭が始まる。

さあこのキャッチフレーズのもと、皆で思いきり楽しもう。

- ・フォークダンス
- ・開催の儀
- ・有志演奏
- ・模擬店・大講堂企画紹介
- ・ゲーム・カラオケ
- ・花火

○大講堂企画

- ・I A 「時の氏神」
- ・I B 「マクベス」
- ・I C 「人形の家」
- ・I D 「椿姫」
- ・II A 「草の指輪」
- ・II B 「真夏の夜の夢」
- ・II C 「歓楽の鬼」
- ・II D 「屋根の上の狂人」
- ・III A 「ひかりごけ」
- ・III B 「守銭奴」
- ・III C 「正義の人々」
- ・III D 「崑崙山の人々」

今年は学級企画の劇が12並びました。どの劇も各クラスが夏休み中頑張って作り上げた努力の結晶です。

○文化クラブ発表会

とにもかくにも、半年間の各クラブの活動の結晶です。なにとはともあれ、一度展示場に足を運んで下さい。きっと何かを見つげられるはずです。

- ・E S S 英語劇“Hamlet”
- ・音楽部 プラスバンド演奏
- ・化学部 金属イオン、大和川の水質
- ・写真部 スライド上映、パネル展示
- ・生物部 ブランクトン、タバコの生物に与える影響
- ・地学部 プラネタリウム、研究発表
- ・鉄研部 レイアウト展示、研究発表

○前夜祭

さて、気になる附高祭の企画のトップバッターを紹介しましょう。皆様御存知のあの大盛り上がり大会が間違いなしといわれる前夜祭。

今年は3組のバンド演奏に加え、毎度おなじみの“ラブアタック”、そして去年よりも一段とグレードアップした内容でせまるさまざまなゲーム。その他にもカラオケ大会など、二重丸付きの企画の目白押しで、他の企画の準備をする暇など、決して与えません。

○大講堂企画

- ・I A 「ポルトガリヤの皇帝さん」
- ・I B 「私は貝になりたい」
- ・I C 「日時計」
- ・I D 「友情」
- ・II A 「新撰組」
- ・II B 「寿命判断」
- ・II C 「闇の足音」
- ・II D 「ひかりごけ」
- ・III A 「その妹」
- ・III B 「合牢者」
- ・III C 「乞食の歌」
- ・III D 「ピグマリオン」
- ・有志 「シャドウ ボイス」
- ・III年有志 合奏

○文化クラブ発表会

文化系クラブの活動内容はあまり知られていません。それでこの附高祭という機会に各文クラの活動の成果を見てもらおうというのがこの企画です。是非、お越し下さい。

吹奏楽部、体操部、化学部、生物部、物理部、地学部、写真部、数理研同好会、地歴部、美術部、陶芸・七宝同好会、自治会執行部（アイヌ問題展）及び合同発表「夏」

○体育企画

体育企画は、する側と見る側に別れる

- ・美術部 作品展示
- ・園芸同好会 チューリップの球根配布
- ・家庭科同好会 作品展示
- ・書道同好会 作品展示
- ・物理同好会 研究発表,マイコン展示

○映画

“イチゴ白書”

— STRAWBERRY STATEMENT

大学紛争の中で彼らはいったい何を感じ、どう生きたらうか？平穩無事に暮らす僕たちにとって、提起されている問題は大きい。大学と高校、アメリカと日本という違いを越えて主人公は我々に訴えかける。

○講演

“リップ号の航海”

日本女性初の太平洋単独帆走横断を成し遂げた小林則子さんをお招きして、16mmの映写も交えながらお話を聞きます。

○有志企画

今年も例年によって有志企画であります。うまく時間を使って数多くの企画に参加しましょう。

- ・ROCK演奏
- ・FOLK演奏(2グループ)
- ・演劇「友達」(演劇同好会)
- ・修学旅行写真展
- ・修学旅行映画(FBS)
- ・将棋大会

ことたく附高生全員が参加できる企画です。また文化的色彩の濃い附高祭において、思う存分身体を動かすことができるのは何といても体育企画において他にないでしょう。みなさんの積極的な参加を切望します。

- ・綱引き
- ・障害物競走
- ・ウルトラクイズ

○講演企画

「大学について」

講演企画は、他の企画と違い、受け身の企画といえるでしょう。しかしながら、日頃接することの出来ない人の話を聞くことによって、新鮮な知識や考え方を摂取でき、新しい方向に目を向けることが出来ます。講師の森毅先生は、現在京都大学教養部教授をされています。先日お会いして、お話をしましたところ、私達が普通持っている“教授”という堅いイメージではなく、気さくな方でした。講演も楽しい話をして頂けそうですし、みなさんも気軽に聞けるのではないかと思います。

○有志企画

- ・映画
- ・戦争展
- ・バンド演奏(12グループ参加希望)

○模擬店企画

- ・I A 喫茶店
- ・I B クレープ屋
- ・I C お好み焼き屋
- ・I D 甘党
- ・II A フォーク喫茶

- ・展示“金芝河”(新聞局)

○模擬店

スバゲッティにざるそば。ライブハウスに音楽喫茶。わらびもちにパイナップル。ゲームにレース。占い、ごはん、お化け屋敷、etc…etc…さあ、この4時間にたっぷりたべよう！。

○後夜祭

後夜祭は、附高祭のフィナーレである。思いっきり楽しみ、皆でつくりあげた今年の附高祭を最高潮に高めると共に附高祭をふり返る場にしよう。

- ・盆踊り
- ・夕食会
- ・閉祭の儀(歌, shouting, 花火)

○ファイヤーストーム

物好きな男どもによって始められる。最初は騎馬戦。その後は例年のごとく寮歌を歌い、○歌をがなり、走り回り、大いにあばれる。

○デコレーション企画

非常階段3階の踊り場に腰を下ろし、初めて大きくため息をついた時、後夜祭の花火は美しく舞い上がり、団扇を持った皆がそのまわりに集まっていた。過ぎ去った4日間を思い出そうとしても、頭の中は全く空っぽで何も浮んで来やなかった。

5月になって自治会の危機が叫ばれると、僕はおもむろに恐くなってきた。—今自治会がつぶれると今年は附高祭が出来なくなる。そしてそれは僕達21期生の責任になる—と。しかし、

- ・Ⅱ B 娯楽店
- ・Ⅱ C 和風喫茶
- ・Ⅱ D 軽食店
- ・Ⅲ A 軽食店
- ・Ⅲ B うどん屋
- ・Ⅲ C 軽食店
- ・Ⅲ D 釜めし
- ・剣道部
- ・陸上部
- ・バスケ部
- ・有志(2グループ)

○後夜祭

4日間の附高祭もいよいよ終わりに近づき、みんなが一堂に会して過ごすのも、この後夜祭だけとなりました。附高祭の感想も一人一人が違うと思います。良かったと思う人、悪かったと思う人、様々。でも、もうこれで最後、思いっきり楽しもうではありませんか。夕食会、ゲーム、盆踊りに花火。どれもみんな楽しいものばかり。どうぞみなさん、存分に楽しんで下さい。

○ファイヤーストーム

「火」火はとてすばらしい。熱い。美しい。恐ろしい。その火を囲んで熱い男達が叫び、踊る。なんと絵になる光景だろうか。燃えている男には真っ赤な炎が良く似合う。誰も文句は言わない。みな、獣になれ。思いっきりさわげ、吠えろ。

○デコレーション企画

「現実には虚偽に満ちている。私達は今、精神的な貧困の中にいる。我々は嘯いではないか。私達は私として名乗りでることはできないでいる。“あんなものは附高祭じゃない”と何度叫んだことか。しかし、その叫びは、ただ暗い闇に消えていった。じっと黙って自治会室に座っていなければならなかった。余りに惨めだった。

大講堂のさなかテニスに遊び興じる人もいる一方で、校務員の方が、吹け抜けの所で、こびり付いたベンキを落していた。“一部の者が頑

H.R.ではそんなことおこまいなしにバレーボールをやっていたし、皆は誰かがやるに決まっているんだ。と口をそろえて言っていた。ここに僕達の大きな欠陥があったように思う。僕は、といえば、僕達の学年に対して満足していなかったが、少なくとも「自分の学年だ。という意識だけは持っていたように思う。

(前年の5月、1年生であった僕の目に写った19期生や20期生は、実に驚くべきものだった。生徒総会や意見会で行われた討議はとても自分達に真似の出来ないような高度なものに見え、その白熱した雰囲気は1年生の僕をも酔わせたものである。

とにかく僕は、附高という所のとてつもないすばらしさをつかんだような気持ちになり、討論が続き6時7時となって一年生などほとんどいなくなってもいつも残っていた。)

そして何よりも僕達は附高の中心になって、伝統(のようなもの)を背負わねばならないと思ったのである。しかし、あまりにもならないように見えた。誰一人として自分が2年生であることを自覚していないように思えた。自治会の危機などどうでもいいような顔をしているようだった。「つぶれるなら一度つぶしてしまえばいい。と言う者も中にはいたが、僕にはそこまで自分の学年を見捨ててしまう勇気はなかった。

執行部になっても、「学年のまとまりなんて、修学旅行や附高祭が済む迄はこんなものだ。とたかをくくる以外にはなかったのである。僕達は、みんなで附高祭を作っていくことで学年、クラスのまとまりや人間関係の空しさ、冷たさも解消されるだろうと考えた。その為には、バラバラの状態の学年の中から立った我々執行部がどんどん動いてしまっただけではカラ回りをするばかりでいけない。なんとかして皆を盛り上げるように動かねばならなかったのである。しかし、もともとまとまりのない、つまり自治意識の欠けた集団においての執行部の存在そのものが矛盾の上に立っていた、といえるのである—これと酷似した内容の文章を、2年前19期の執行部の冊子の中に見付けることが出来るはずだ。その通りである。僕達は、2年前の執行部がとっ

張っているのに、後に続く者が居ない」と多くの友人が嘆いていたが、しかし、こんな附高祭のために、隠れた場所で、まさに献身的に努力している人が存在するというを、一体何人の人が知っているのか……。

高Iの頃、ただ純心に「祭」の雰囲気を求めていた。何か解放的で、どこか熱狂がたちこめている、そんな祭を私は共有していたし、充分それに満足していた。高IIでは、その熱狂に疑問を感じ、むしろその熱狂に浸っている附高生に対して莫然とした嫌悪感を感じた。そして、その事態を打開する術もなく、自治会室にこもっているだけの自分をも嫌悪した……。

執行部になって附高祭についていろいろと考えた。附高祭とは不可分の関係にあるという前提に立って、質の高い附高祭をどのようにしてつくりあげるのか。

その条件は

イ. 附高生全員の積極的参加。

ロ. 文化的に高い内容にするため充分な話し合いをし、附高祭について考えを深める。

の二点を満たすことを考えた。全員が高い理想、あるいは理念を持ち、その達成を目指して精神的に活動するようになるには、とにかく附高祭原案を作る段階から、共に考え、つくり上げてゆくという雰囲気を醸成することだ。それには出発点を零にして、人を集め、討論し、執行部もそれに参加して各人の考え方を一つにまとめていくことだ。今思えば、これが最初の、そして致命的な失敗であった。何ら建設的なプラン、思想を明示しないで討論に入った時、主導権を握ることは難しい。とりわけ考え方が異なる場合には、少数の執行部は多数の有志に圧倒されてしまった。附高祭有志は「附高祭を行うのに面倒な意義はいらないし、各人がそれぞれ好きなことができる場が附高祭なのだから、ただ一つの意義に考え方がまとまるはずがない。だいいち、あんな抽象的な言葉が並んでも何のことかわけが分からない」と主張し、「討論を通して附高祭に対する認識を深め、文化的に質の高いものを目指していこう」という執行部と対立した。結局、教回の論争の結果、執行部は折れざるを得なかった。附高祭有志とは結局、自分達の好きなことが出来る附高祭を行って、楽

た方法によって附高の伝統や附高祭を守るすべを見出そうとしたのだ。そして僕自身も、2年前の“轍”を辿うことで我が21期生のポテンシャルな力を引き出すことが出来るのだ、と信じようとした。

しかし、執行部の力にも、そして学年そのものの力にも格段の差があったことは否めない。残念ながら僕は、そのポテンシャルな力というものを爆発させることが出来なかった。僕は2年生さえ一つにまとめることが出来ず、おまけに1年生や3年生からは2年生や僕達に対するきびしい非難を受けることになってしまった。

生徒総会の流会。そして例の事件。何もかもそうなるべくして悪い方向へ事が運んだ。1年生と3年生の板ばさみにされ、いつの間にか動き出している“附高祭”、それを背負うべき責任を認識することで2年生の1人1人が自覚を取り戻し、2年生としての意地や誇りみたいなものをもつことで団結することを願う他なかった。そして、何とか附高祭を守る為に実に体裁をたてることばかり気にする、というハメに陥ってしまった。

しかし、3年生の協力や1年生の努力、そして附高祭そのものの持つ伝統の力によって、無事附高祭はその4日間を終えた。

岡田の言い方を借りれば、それこそ僕は¹伝統の上にあぐらをかいていた。に過ぎなかったのだろう。けれども一方、附高祭そのものは今迄になく大規模なものとなった。各クラスの大講堂企画は年々充実したものになっていく。前夜祭や後夜祭の参加者も増える。今迄はクラスで4、5人しか参加者を数えなかったファイアーストームには1年男子のほとんどが参加する……。

附高祭の伝統を築き上げた²昔、とは、一体何だったのであろう？昔は、附高祭そのものに反対する者が多くて、執行部がそれを説得するのに苦勞をしたという。今では、³反対の者は反対の意志をしっかりと表示したらどうなんだ。と執行部が呼び掛けるのだ。反対の者は、総会などでさんざん意見を言ったあげく当日は家で勉強をしたり、外へ遊びに出たりしたと言う。そして、当日出てくる者はといえば、⁴前夜祭

しみたいと思う存在でしかなかった。何ら建設的な意見を持たないから“みんなで燃えようぜ”という単なる煽情的な言い方しかなかった。何よりも驚いたのは、代表委員会での審議の無用を主張し、クラスまわりで“附高祭をやろうぜ”という雰囲気が盛り上がりればそれで充分だと主張する有志もいたという事実である。そんなフィーリングだけの行動に何の意味があるのか。こんな初歩的などころで執行部は衝突しなければならなかったのだ。 “どうせ一生懸命に研究発表をしても、誰も見に来ん。そんなもんやっても無意味だ。文クラ発表には参加せん”と主張する文化クラブ部長もかなりいた。ある文クラ部長に“そんなに発表が嫌ならクラブ活動もやめればよい。発表のないクラブ活動に何の意味があるのか。そんなもんは自治会のクラブではない。やめてしまえ！”と腹立ちまぎれに言ったこともある。文化祭以前の、あの文化クラブの倦怠感……。どうしようもないまでに暗く沈んでいる。

文化クラブに限らず、およそ文化的感心を持っていると思われる相当数の人達の無気力ぶり。彼等にいくら説いても“どうせ誰もついて来ないよ”という返事ばかり。私には想像もつかない事態が起こっていた。大多数の附高生は何か逃げ腰であった。そして⁵やりたいことをやればよい”という附高祭有志たちもまた、彼等の心の底には虚しさを共有しているように思えた。その主要な原因は『受験』ということではないだろうか。

高Iから、Z会の通信添削や駿台、河合塾、高進といった予備校に多数の人達が通う。夏休みも附高祭の準備に来ない人が多くいるが、予備校の夏期講習を受講しない者はほとんどない。生徒総会も予備校の開かれる日をわざわざ避けて開いた。その一方で授業の居眠りが慢性化し、試験前ともなると、コピー屋の前は附高生の長い列ができる。

附高生の無責任さにもいつも悩まされてきた。人の話を聞かない。クラスまわりで何度となりつけたことか。そして、その度に、自尊心の強い附高生から白い眼でにらまれる。にらみ返す。その繰り返し。

代表委員会—ホールや教室でたむろしている

など暇な奴が出るもの、と割りきって、その時間にはせつせと自分達の仕事をしたくらいだそうだ。

今回の生徒総会では、意見らしいもの意見はほとんど出されなかった。そしてついには、¹僕らにはそんなむずかしいことどうだっていいんですよ、と採決だけを求めようといった声も聞かれた。

ほは行事化してしまった附高祭は、その技術的なもの積み重ねによって年々確実により良いものになって来ている。又、そういうことから²ゼロから作る、と言ったところで全く³ゼロ、に戻って考えることは、たとえ3学年がすっかり入れ変わったとしても不可能だと言えるのではないだろうか？

又、附高生そのものも変わって来ている。次第に⁴お祭り、的要素を抜きにしては考えることが出来なくなってきた附高祭に対し、⁵反対、をとなえる者は少なくなり、賛成する者も、ただなんとなく賛成というのが多くなっているのも事実だ。そして一部の附高生にとって、今のような⁶当日だけでも十分楽しめる附高祭は、⁷見るだけの附高祭、ということにもなっているのではないだろうか？はたして、このような⁸附高祭、は有志でやった場合の附高祭とどう違うと言えるのだろうか？ただ大規模なので生徒の手のみで出来ないから、というだけなのだろうか？一体⁹自治会行事としての附高祭、とはどういうことなのか？ここでもう一度考える必要があるように思う。

むろん、このような附高祭を通じて、人間関係をどうこうするとかいうことはかなり難しいことだ。もし少しでもそれがなされたとしても、それはあくまで結果論であってそれを目的にするのはやはり無理な話だと思う。附高祭は日常の上に立つものだから、もし、日常の問題を解決しようとするなら、クラスや学年や個人における日常そのものを考え直すべきだろう。

附高祭が済んで半年以上たった今、僕の頭の中の立候補から附高祭の終わる迄の記憶は、遠く薄らいだものとなっている。僕のまわりの友達はいいかかわらず友達だし、変わったと言われる我が21期の雰囲気はどう変わったのかもさっぱりわからない。殺伐としているように見えた雰

代表委員を捕まえることで定数ギリギリの代表委員会を、定刻より20-30分遅れて開く。その気のない人間の集まり（情熱のない人達の集まり）ほど随落したものはない。“別におかしいと思えるところもないし、僕もこれに賛成だから採決動議を提出します”最も経験豊富で、しっかりしているはずの3年生が、開会後わずか15分で、こんな動議を提出し、その提案が大多数の代表委員の意見を反映したものであるという事実。一票差で否決したものの3分の2に近い代表委員が、この動議支持の意志を表したことに、どうしても附高祭の意義を問いたださずにはおれなかった。附高祭なんかやめた方がいいのではないのか？……。何故、審議されることもなく原案が通るのか。審議が始まっても、居眠りする者、私語する者。

文化的に何ら収穫のない附高祭。自分の責任を全うしたいで他人に押しつけてしまう。文化的な不毛以前の問題、否、だからこそ文化的に不毛なのだ。

執行部が附高に求めたものは文化だった。よくは分らない言葉だが、人間の、附高生の知的な活動の産物が欲しかった。誰もが参加し得る場、何か出来ることのある場、それを自分達一人一人が責任をもって作り上げていくのが附高祭なのだったと思った。しかし、〈意義〉といった抽象的価値と附高祭とを結び付けることは、もう出来なくなっているのだ。……。

最後に、最大の問題は執行部にあったのかも知れない。相対主義の中で、その存在意義を見失い、十分な自信を持ってなかったし、勉強不足もあって、指導力を欠落させていたことである。困難な事態に直面した時、精神的に崩れることが多くあった。高Iの時に、真剣なディスカッションの場をもっともっと多く持たなければならなかったのだ。クラブ活動、H・Rの活動、授業など、我々の日常生活の有り方を追求することのなかった私達の招いた当然の結果といえる。“個人の自覚に任せておけばよい”という考え方は、“どうせ言ったところでどうにもならない”ということと同じであり、そこにはお互いが共存し合う土台はなく、自治会の成立する礎はどこにもないのである。しかし、それを打破することは可能なことだと思いたい。始め

団気が実は単なる主観による妄想のようなものだった為であろうか、それとも僕がそれを感じなくなったからだろうか。

◎Ⅲ年（昭和53年） 第14回

大講堂企画

Ⅶ A 劇「予告された心中」

Ⅶ B 劇「リヤ王」

Ⅲ C 劇「ガラスの動物園」

Ⅲ D 劇「葵上」

有志企画

Ⅲ年有志 ROCK 演奏

BAROQUE 演奏

討論会「大学入試を考える」

英語劇

大道芸人

は数人でもよい、次には数十人の人による討論会、読書会などの輪を広げてゆくこと。自分を守るのではなく、自分を主張し、より深く自分を理解しようとしてゆくことだろう。

◎Ⅲ年（昭和59年） 第20回

大講堂企画

Ⅲ A 劇「真夜中のパーティー」

Ⅲ B 劇「天国椅子」

Ⅲ C 劇「市場」

デコレーション企画

Ⅲ A オバケのQ太郎

Ⅲ B 凧

Ⅲ C 夏祭り

Ⅲ D 太陽熱気球

21期生と27期生が中心となって作り上げた2つの附高祭の記録を比較して見ると、6年間の隔たりがあるにもかかわらず、著しい類似性が認められる。それは、学級を単位とした大講堂企画を含めて4日の日程で行われるプログラムの類似性ととどまらず、附高祭の主体である附高生の状況そのものが同じ方向へ流れていることを示している。それぞれの附高祭に取り組み、なしとげた執行部の役員たちが異口同音に心情を吐露している上の文章によって、それは明らかである。

執行部の役員を中心にしたごく少数の自治会員は、自治的活動に関するやる気の少なさに対して、また単なる気転あるいは興奮を伴う遊びへの傾向に対して疑問を感じはじめる。その起源が持ちまえのものなのか、経験なのか、指導によるものなのかは複雑な問題ではあるが、とにかく、一般の大部分の自治会員とは違った意識をもって活動を始める。しかし、自治活動としての附高祭についての明確な理念をもつことはなかなか困難である。だが、伝統からして何らかのヒントを得ることが出来る。①附高祭は与えられた形の定まった恒例の行事ではないのであり、実施するかしないかを決定することからはじめ、何のために何を行うかを自分たちで検討し工夫しなければならないものなのだ。だからして、そういう附高祭を実施すること自体に意味を見出すことが出来ると考える。ところが実際には、具体的な指導理念を持たず、「執行部は中立の立場に立つ」と表明してみたり、あるいは抽象的なテーマを提示することによってでは、一般の自治会員を指導しきれない。討論を組織し、一般自治会員をして意義を自確し言葉で表現出来るようになさしめることが出来ず、彼らは具体的な活動にのみ目を移し、結局、遊びに終わってしまうことになる。

②附高祭を自治活動の最適の練習問題としてとらえ、即ち手段としてとらえ、これを自分たちで作り上げることを通じて自分たちを変革していけるのではないかと考え、そこに意味を見出すこともある。ところが実際には、日常の変革を求めながら日常性に屈服せざ

るを得ず、日常生活を建て直すことこそが先決問題であるという結論に至るのである。

③最近では、附高祭は附高の文化を現すものであるという観点からの意味付けが模索されているようであるが、やはり、ある方向へ流れざるをえない。

いずれにせよ、附高祭に主体的に取り組む、そこに意味を見だしそれを実現しようとした者たちは、現実との格闘の中で、一様にある種の悲哀を感じざるをえないのが実情である。だが、この悲哀をも含めて一連の積極的な体験こそ貴重であるともいえる。ただ、こういう体験を持つ者が、自治会員全体の中であまりにも少ないということが最大の問題であるだろう。

2 百軒徒歩

1974年3月に第1回目が実施されて以来、今年(1986年)で12回目を数えるに至った。この間の報告は全附連において、1974年(第1報)、1977年(第2報)、1983年(第3報)がなされており、冊子にまとめられている。ここでは他の自治会行事同様21期生と27期生が、それぞれ中心になっておこなった2年次の百軒徒歩を記載する。

第5回

1978年3月13日(月)～14日(火)

1年生 22期生 参加者182名

2年生 21期生

3年生 20期生

○距離 68km

○コース(出発15時)(到着16時20分)

近鉄榛原駅→大神神社(夕食)→長岳寺→石上神社(夜食)→白河溜池→円照寺→奈良公園(朝食)→滝坂道→峠の茶屋→円成寺→山口神社(昼食)→南明寺→八坂神社→国鉄笠置駅

○地図



第11回

1984年3月12日(月)～13日(火)

1年生 28期生 参加者135名

2年生 27期生

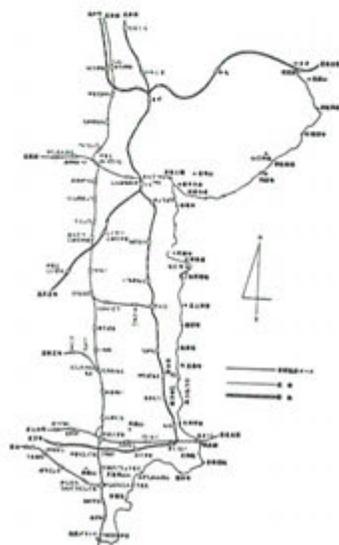
3年生 26期生

○距離 80.1km

○コース(出発11時)(到着15時45分)

近鉄壺阪山駅→高松塚(昼食)→近鉄朝倉駅→大神神社(夕食)→石上神社(夜食)→奈良公園(朝食)→滝坂道→峠の茶屋→円成寺→山口神社(昼食)→南明寺→八坂神社→国鉄笠置駅

○地図



○「何故百軒徒歩をやるか」冊子より

百軒徒歩に求めるもの

①「社会」と「高校生」

どこかおかしいんじゃないか。何か狂ってはいないか。今の社会を見て思う。そしてふとまわりを見回しただけで、たとえば新聞を読んだだけで、「やはりおかしい」と確信する。一議員選挙。「あの党はおかしい」。「あの人は間違っている」、「あんな考えでやってゆけるものか」相手をけなす。じゃあ、あなたはもうどうするんですか。別に何があるわけでもない。ありきたりの問題、医療問題、老人問題云々とならべる。そして形だけの解決策を述べる。(中略) どうしてこんな社会になってしまったんだろうか。僕は大人には全くといっていいほど「純粋さ」がないからだ、と考える。利害関係が常にかまむ世界で、体のどこかに持っているはずの「純粋さ」が奥底に埋もれ、自分自身にそれが存在することすら見失っているのだと思う。しかし、我々は利害関係など全く持たぬ「高校生」だ。純粋な気持ちで、求めたいものを求めることができるのだ。そして我々の求めるもの、それは我々の思う「理想社会」であり、僕の呼ぶ「附高の世界」である。そんなものは無いかもしれぬ。しかし、「ある」と信じて求めることの出来る、生涯二度と訪れてこぬかもしれぬ時期に、我々はいるのだ。それは素晴らしいことだ。つまり、純粋さを失わず、その状態から行動するという事は、おそらく「真理」と呼ぶべきものの追求につながるのであるから。(以下略)

(2.「附高」その現状と「附高の世界」一略す。)

③ 現状打破のための「体験」

他人が勝手に「何か」をしている。その「何か」は何か分からないが、その「何か」は疑いもなくすばらしい「何か」である。だから何も干渉する必要はない。「勝手に」にやらせておけばいい。—そんな世界を附高に求めたい。そのためには「疑い」があってはならない。では、どのようにして「疑い」をなくすか。

「疑い」がおこるのは、他人を一人のすばらしい人間として認めていないからではないか。

○「何故百軒徒歩をやるか」冊子より

・非日常性について

普段の私達の生活は平凡である。確かに、それが魅力的な時もあり、落ちついて暮らせるといういい点もある。しかし、だからと言って、平凡な生活だけに満足してはいけない。

平凡な、繰り返しの生活において、私達は、活力を失いがちだ。その反動として、不満を持つ事がある。しかし、たいていは、それにどう対処すればよいか判らない。また、その不満を持つ事すらないのは、平凡な生活の中で、すでに自分を見失っているのだと思う。

このような状態では、自分を生かせず、可能性を埋もらせてしまうだけだ。そうでなく、私達のそれぞれの個性と可能性を発揮させ、自分を大切にすることが必要だ。なぜなら、それが自己の発展につながるからだ。

この状態から抜け出すきっかけとして、百軒徒歩を考えてみたい。百軒徒歩は、非日常的な行為であり、普段とは異なった環境に自分を置く事になる。だからそこには、いつもとは別の自分が生まれるはずだ。その自分から、今までの自分と、その生活を省りみる事が、現状認識への大きな助けとなるだろう。そして、それが、日常に何らかの変化を与えるきっかけとなると考える。

・「歩く」という動作について

「歩く」という動作は、人間のすべての動作の中でも最も基本的なものであり、いつも生活の中心に置かれてきた。何かをするには、物理的また精神的意味においても「歩く」という動作が、かかわってくる。

また、「歩く」ことは、どんな用具や技術も必要でない。つまり百軒徒歩のために新しく器具買ったり、時間を割いて練習する必要もない。必要なのは、自分の二本の足のみだ。こう考えてくると、この行事に、だれでも取り組む事が出来ると言える。そして、それは多くの人が参加でき、多くの人と接する機会が出来るのだといえる。つまり、多勢の人達と意気投合する事が出来、助け合い、励まし合えるのだ。

もう一つ、「歩く」という動作は、一般的に言って、日常的な動作である。私達は、そういう日常的な動作でもって、非日常性を目指している。

また理論上「すばらしい人」だと思っても、それを確認できることがないからではないか。では、どうすればよいか。僕はこう思う。「とんでもないこと(勿論、すばらしくとんでもないこと)を皆と一緒にすればいいじゃないか。」それを終えたあと、まず自分はすごいことをしたなあ、という感激がある。それ自体すばらしいことだ。しかしそれだけではない。他の人も皆、同じことをしている。自分と同じ苦しさを味わって、そして今、自分と同じ感激を味わっている。すごいことじゃないか。仮りに、馬鹿みたいだと思っていた人がいたとしても、この体験は、そいつを「すばらしい奴」として認めるのに十分な体験じゃないだろうか。しかし、反面、その体験は「みんなで」したということを体で感じられるような、どでかいことでなくてはならない。

僕は、その「体験」を「百軒徒歩」として実行したいと思う。それは、「みんなで」したということを実感できる「どでかい」行事であり、すなわち「疑い」をなくすことのできる行事である。

この行事は過去4回行われてきた。我々は、それに乗っかっている一面もある。しかしその求めるもの、目的とするものは毎回違う。今回は「附高の世界」への引き金としてのそれをしようと言っているのである。前にも述べた通り、新しい所から出発しようと言っているのである。(4. 実際の「百軒徒歩」一略す。) (第5回実施草案より)

○参加形態

原則として1・2年生全員参加としたが実際の参加者は180名であった

○実施について(実施草案の目次)

- 序 百軒徒歩に求めるもの
- 1 実施期日
- 2 実施コース
- 3 参加
- 4 講習
- 5 班

これは、普段の生活においても、自分自身の物事に対する取り組み方を考える事によって、新たな可能性を見い出せるという事を意味する。こういう事が、自分の身体を通して実感できるのは、百軒徒歩ならではであると考える。

・社会とのかかわりについて

百軒徒歩は、公の社会の中で行う行事である。

私達は、日々の生活において、なれあいで物事を済まし、身勝手な生活をしているところがある。それは、自分が附高という集団の中のみ存在しているところから、生まれているように思う。社会に対する甘えがあるのだ。だから、そういう立場から離れ、社会との関係を認識し、自分に対する責任について考えるべきだ。

百軒徒歩は、絶えず、誰かに何らかの迷惑をかけずに実行出来ない。それは、真夜中に200人近くの間人がたてる足音や、レスト場所での付近の人々に対する迷惑であったりす。つまり、百軒徒歩を歩く時、身勝手な行動を取る事は許されない。常に、自分の行動に対する責任を考えなくてはならないのである。これから社会との関係を増してゆく、この高校時代において、附高という枠を離れ、社会の中の自分を見つめる事は、自分の存在を明確にし、より大きな視野を持つことになるだろう。

○参加形態

自由参加とした。しかし「理想は自発的な意志で、全員が百軒徒歩を歩く」とした。

○実施について(実施草案の目次)

- 1. 実施日 1-1 実施日
- 1-2 コース
- 1-3 参加
- 2. 実行委員会 2-1 設置及び構成
- 2-2 任務
- 2-3 説明会

- 6 班長下見
- 7 集合
- 8 出発
- 9 行進
- 10 チェックポイント
- 11 レストポイント
- 12 食事
- 13 制限速度
- 14 車、通信
- 15 前進停止
- 16 断念
- 17 奈良
- 18 迷うこと
- 19 中止
- 20 解散
- 21 帰宅後
- 付 予定コース地図

- 3. 班-3-1 班
 - 3-2 班長
 - 3-3 区間講習
- 4. 特別隊 4-1 特別隊
 - 4-2 構成
 - 4-3 P隊
 - 4-4 A隊
 - 4-4 A隊
 - 4-5 M隊
 - 4-6 通信
 - 4-7 車隊
 - 4-8 本部
- 5. 集合 5-1 集合
 - 5-2 出発式
 - 5-3 遅刻
- 6. 行進 6-1 行進
 - 6-2 班間
 - 6-3 休息
 - 6-4 食事
 - 6-5 人間道標
 - 6-6 第2種道標
 - 6-7 ルートマップ
 - 6-8 コースタイム
 - 6-9 コースの変更
- 7. 中止 7-1 出発式
 - 7-2 出発後
- 8. 断念 8-1 断念
 - 8-2 断念者の収容
 - 8-3 奈良
- 9. 迷った時 9-1 迷った時
 - 9-2 本コースへ回り道できな
かった場合
 - 9-3 連絡
 - 9-4 探索
- 10. 解散 10-1 解散
 - 10-2 帰宅後
- 11. 付記 11-1 雨具
 - 11-2 火気厳禁
 - 11-3 買物
 - 11-4 中物品について
 - 11-5 さし入れ
 - 11-6 (行動について)

上記の目次にある内容について、第11回の実施草案を例として載せる。

1 実施日

1-1 実施日

昭和59年3月12日(月)～13日(火)

- ・この日は月齢8で明るいで夜間道に迷いにくい。
- ・実施には2日間必要であり、また次の日には休養をとる必要のある。従って試験休み中のこの日に実施する。
- ・この日は極力クラブの合宿、練習等は避けてもらいたい。
- ・この行事は教官その他の多大な協力を必要とするため予備日がとれない。よって当日悪天候等で実施不可能な場合中止する(7-1 出発後の項参照)

1-2 コース

近鉄吉野線壺阪山駅西、高取町健民グラウンド(奈良県高市郡高取町)より橿原市、桜井市、天理市、奈良市を経て国鉄関西本線笠置駅前(京都府相楽郡笠置町)に到る全長約80.1kmとする。

- ・このコースのうち金屋～奈良は山の辺の道、奈良～笠置は柳街(どちらも東海自然歩道)を通る。道標が多く、よく整備されているので迷いにくい為である。
- ・3月上旬に参加者全員にルートマップを配布する。
- ・当日の状況によりコースを変更する場合がある。変更については6-9コースの変更の項参照。
- ・詳しくは折り込み地図参照。

1-3 参加

参加資格のある者は1・2年生全員とする。

- ・自治会行事であるから全員参加が望ましいが、百科徒歩は非日常性の伴う行事であるから参加には種々の障害がつかまとう。これは個人差があるので、各個人で判断してもらう外ない。
- ・身体の都合上どうしても歩けない者は(C.P)人員として参加できる。
それ以外は認めない。
- ・2月中旬に参加申し込み用紙を配布し、参加、不参加を決定する。これ以後新たに参加することは出来ない。
- ・百科徒歩参加者は集団の中でそれぞれ責任ある行動をとらなくてはならない。これは百科徒歩が危険を伴う行事であるからだけでなく、沿道の住民に非常に大きな迷惑を及ぼすからである。よって、各個人に対して全体と同等の重い責任と自覚が要求される。このことをよく踏まえた上で参加して頂きたい。
- ・百科徒歩は各個人が己の力で歩くことを目指す行事である。従って各個人は個々で責任の取れる行動をとらねばならない。
- ・百科徒歩参加者は後述の説明会等に参加することを当然の義務とする。
- ・参加には保護者の承認を必要とする。

2 実行委員会

2-1 設置及び構成

代表委員会がこの草案が可決されてから、3日以内に百科徒歩実行委員会を設置する。

- ・各クラス男女一名以上の委員及び執行部4名により構成される。
挙手権は各構成員一票ずつ、但し委員長長の判断で議題により挙手権を変更することができる。

2-2 任 務

百軒徒歩実行委員会は、百軒徒歩実行にあたって、参加の呼び掛け及び以下に述べる仕事、その他を行う。

- ・参加申し込み、ルートマップ作成、健康診断等の事務を行う。
- ・参加者全員に対して、事前に説明会を行う。

2-3 説明会

重要な集会であるので無断欠席者は参加出来ないこともある。

- ・当日の説明、適切な歩き方の指導及び諸注意を行う。
- ・班編成もこの時行う。

3 班

3-1 班

- ・班は各自自由に構成できる（男女混合は不可）行動中の会話等も百軒徒歩の大きな要素であり、気の合った者と班を作ることが望ましい。

3-2 班 長

- ・各班において班長1名、副班長2名を置く。班長は百軒徒歩終了まで班を統率し、班員の健康状態に留意する。副班長は班長を補佐する。これ以後参加者への伝達は班長を通じて行う。
- ・班長が断念した場合、1回以上の下見経験者が班長代理となり、もしその班に班長代理に迷する者がいなければ特別隊を派遣する。

3-3 区間講習

各班代表者に事故防止の為に特別行動の区間で区間講習を行う。

- ・区間は 1) 壱阪山へ大和朝倉（桜井市）
2) 大和朝倉へ石上神宮（天理市）
3) 奈良公園へ南明寺（へ笠置）とする。
- ・班長及び副班長は必ず出席しなければならない。正・副班長が出席出来ない場合・代理を出し、各班が1区間最低一名参加していなければならない。
- ・事前に講習会を設ける。

4 特別隊

4-1 特別隊

当日の全体の統率、安全確保の為に特別隊を設け、実行委員会より当日の運用を委嘱され、総隊長は最終決定権を持つ。

- ・特別隊は全体に対して前述のことを行う為に行動する。従って参加者はその指示に従ってほしい。

4-2 構 成

特別隊員は下見経験者の中から実行委員長が任命する。

- ・特別隊には総隊長のもとにパイロット（Pilot）隊、ミドル（Middle）隊、アンカー（Anchor）隊がある。以下、P隊、M隊、A隊と略す。
- ・詳しい事は実行段階で決定し、実行委員会の承認を得る。

4-3 P 隊

P隊は常に全体を先導し、ペースメーカーの役割を果たす。
また、前進、停止などの指示をP隊より出す。

4-4 A 隊

A隊は常に全体の最後尾を歩き、P隊との差を一定にし、全体のペースを守る役割を果たす。また、迷った班の捜索及び出発の際にチェックポイント、レストポイント（後述）の後始末を行う。

4-5 M 隊

全体の中間に位置し、そこでペースメーカーの役割を果たす。
また各班の監視、通報の中継も行う。

4-6 通信

特別隊は無線により連絡を保ち常に全体の状況を把握していなければならない。

4-7 車 隊

車は教官の協力により1日以上動員し、次の〔C.P.〕に待機してもらう。

4-8 本 部

本部はam 7時～pm 8時は高校教官室、pm 8時～am 7時は宿直室とする。

5 集 合

5-1 集 合

3月12日（月）10時

高取町健民グラウンド（近鉄吉野線壱飯山駅西4分）

- ・詳しい集合時は実行実行委員会で決定する。
- ・前日は十分に休養を取っておく。
- ・当日健康が優れず、参加しない者は必ず7時30分までに班長に連絡する。それ以降は本部へ連絡する。
- ・遅刻は特別な場合を除き厳禁とする（詳しくは5-3遅刻の項参照）

5-2 出発式

準備が整い次第出発式を行う。

- ・点呼をとる。
- ・連絡事項、諸注意等を連絡する。

5-3 遅 刻

事故等やむを得ない場合を除き、原則として遅刻は認めない。

- ・遅刻者は集合時刻までに本部と連絡を取り指示を仰ぐ。
- ・詳しくは当日総隊長が判断する。

6 行 進

6-1 行 進

各班は常にパイロット隊とアンカー隊の間を歩く。歩行中、他の班を故意に追い越してはいけない。

6-2 班 間

全コースを次の5区間に分ける。

- 1) 高取町健民グラウンド～高松塚（約 2.9km）
- 2) 高松塚～大神神社（約22.5km）
- 3) 大神神社～石上神宮（約11.1km）
- 4) 石上神宮～奈良公園（約28.8km）
- 5) 奈良公園～笠置駅前（約22.8km）

1), 4)の区間では全体を4つ前後のブロックに分け、全体行進する。

2), 3), 5)の区間では班間2分30秒の班別行動とする。

- ・1)の区間は百科の最初の区間であり、行進のペースを覚えてもらうために全体行進とする。
- ・2)の区間は昼間であり、道標も何ヶ所かあるので、前の班が見えなくてもルートマップを見ながら班毎で歩ける。
- ・3)の区間は、夜間ではあるが山の辺の道（東海自然歩道）であるので、道標も多くよく整備されている。この為、ルートマップを見ながら十分班毎で歩ける。

- 4)の区間は迷いやすい上、ちょうど真夜中から明け方となり、最も眠たくなって注意力が散漫になりやすい。よって全体行進とし、特別隊の監視の眼が行き届く様にする。
- 5)の区間は柳生街道（東海自然歩道）で道標も多く、よく整備されている上昼間なので班別行動が可能である。

6-3 休息

安全確保の為に約1時間に1回、チェックポイント[C.P.], レストポイント[R.P.]で休息をとる。原則として他の地点で休息をとらない。但し、天候等により、位置を変更することがある。

- チェックポイントでは、人員点呼、時間調整、休息等を行う。
 - 1), 4)の区間では特別隊が以上の指導を行う。2), 3), 5)の区間では[C.P.]人員を1ヶ所につき2人以上配備し、以上の指導を行う。また非常時には、[C.P.]人員は適切な指示を出す。
- レストポイントでは10分間休息する。レストポイント到着時刻もペース調節の目安とする。2), 3)の区間では、レストポイントに[R.P.]カードを置き、到着時刻、その他を記入する。P隊が後続の班に順に回していき、最後にA隊が回収する。

6-4 食事

食事は以下の5ヶ所できり、いずれも持参の弁当とする。

- 高松線-昼食(最低 35分間)
- 大神神社-夕食(45分間)
- 石上神社-夜食(最低 55分間)
- 奈良公園-朝食(最低 60分間)
- 山口神社-昼食(30分間)の5食とする。

6-5 人間道標

班別行動2), 3), 5)の区間において、ルートマップだけでは間違いやすい地点に人間道標を配備する。

- 人間道標はP隊が1ヶ所につき2名以上出し、最後はA隊に合流する。
- 人間道標は正しい道順を各班に指し示すと共に、班員の点呼、異常の有無の確認等を行う。

6-6 第2種道標

ルートマップを見ても間違いやすい地点で、人間道標を配布していない所には第2種道標を置く。

- 第2種道標は実行委員会で作製する。
- 第2種道標はP隊が所定の位置に置き、A隊が回収する。

6-7 ルートマップ

全コースの詳細なルートマップを参加者全員に配布する。
各自は必ずこのルートマップを見ながら歩く。

- ルートマップは受行委員会で作製する。
- 常に自分達が今、どこを歩いているのかを確認しながら歩くこと。

6-8 コースタイム

班間を一定に保つため、コースタイムを定める。[C.P.], [R.P.]毎の到着、出発時刻、人間道標の通過時刻を目安にして、ペースを調節しながら歩く。

- 班数17班(and 特別隊3)

	②P隊②	②A隊②
壺阪山	11:00	11:15
高松塚(昼食)	11:46~12:21	12:01~13:06
大神神社(夕食)	18:36~19:21	19:21~20:06

	㊸P隊㊸	㊸A隊㊸
石上神宮(夜食)	22:34～ 0:00	23:19～ 0:15
奈良公園(朝食)	6:32～ 7:37	6:47～ 8:22
山口神社(昼食)	11:30～12:00	12:15～12:45
笠置駅前	15:00	15:45

- ・ペースは平均4 km/h
- ・詳しいコースタイムは特別隊で決定し、実行委員会の承認を得る。

6-9 コースの変更

降雨、時間の遅れ等により、コースを変更する場合がある。
変更の決定は特別隊が下す。

- ・特別隊は変更したコースを通る旨を全隊に連絡し、混乱、事故、事故等の起こらぬ様、留意する。
- ・変更後の行動は状況により特別隊が判断する。

7 中止

7-1 出発前

前日に中止を決定した場合、前日中に参加者全員に、班長を通じて連絡し、連絡出来なかった場合、当日出発地で点呼をとり解散する。当日、降雨その他で、出発地で中止になった場合は、点呼をとり解散する。その場合、[C.P.]人員には、その代表者に連絡し、後は連絡網で知らせる。

- ・参加者は中止の連絡がない限り、当日、出発地に集合する。

7-2 出発後

途中で中止になった場合は、全体で隊を崩さず、駅またはバス停に向かい、そこで点呼をとり解散する。途中で中止の指示を出す場合、3)、4)の区間では交通機関が動いていないので、極力大神神社以前で中止の判断を下す様にする。

- ・中止の判断は実行委員長、特別隊総隊長、及び自治会長が協議の上、最終的に総隊長が下す。
- ・中止の判断基準及び中止後の行動の詳細は実行段階で検討する。

8 断念

8-1 断念

途中でどうしても歩行を続けることが出来なくなった場合は、断念する。自分が断念したいと思ったら、無理せずに班長にそのことを告げる。もちろん完歩することが望ましいが、体力には個人差があり、当日の体調も一様でない。従って途中で断念しても個人の限界まで歩くということは十分に意義のあることである。断念者の出た班は、その場に停止し、特別隊の到着を待つ。

- ・班別行動の区間(2)、3)、5)の場合、後続の班は断念者の出た班を追い抜き、断念者発生を次の人間道標または[C.P.]人員に連絡する。

断念者を収容したA隊はP隊に連絡し、P隊は大神神社または石上神宮で全体を停止させる。

- ・停止後の行動は、状況により特別隊が判断する。

8-2 断念者の収容

特別隊は断念者の氏名等をすぐ本部へ連絡する。また、断念者は帰宅後すぐ本部へ本人が連絡する。

1) 断念者がまだ歩ける場合

特別隊に加わって次の[C.P.]まで歩く。そこから付き添い人と共に最寄りの駅またはバス停に行き、そこから1人で帰宅する。夜中で交通機関が動いていない場合、車に乗って朝まで待ち、奈良での断念者と共に帰宅する。

2) 断念者がどうしても歩けない場合

あらかじめ教官と連絡して、場所を指定出来るようにしておく。

そして特別隊員がおぶって、車の通れる所まで連れていき、地点を連絡して車に来てもらう。班別行動の区間で車が来るまで30分以上かかる場合はP隊は次の〔C.P.〕で全体停止させる。

3) 急病、負傷等で手当が必要な場合

車で最寄りの病院へ運ぶ（車については4-6参照）。

4) 断念者が一人で帰宅出来ない場合

必要に応じて班員もしくは特別隊員が付き添って自宅まで送り届ける。

8-3 奈良

奈良の大休止の時、全員に対して検診を行う。異常のある者は断念する。

- ・健康調査票を1つ手前の〔C.P.〕で配布、記入してもらう。
- ・奈良以降はルートマップを見ながら慎重に歩かねばならないので、疲れ等で注意力が散漫になっている者は断念すること。
- ・断念者は本部のP隊出発時に近鉄または国鉄奈良駅へかたまっていく。その他は8-2の項に従う。
- ・断念者によって班員数にアンバランスが出た場合には、班の再編成を考える。しかし、班の人数が多くなり過ぎない様に注意する。

9 迷った時

9-1 迷った時

おかしいと思ったらすぐその場で停止し、次の班が来るのを待つ。停止後10分たっても次の班が来なければ、迷ったと判断し、来た道に戻って確実にコースだと確認出来るところまで戻り、他の班または特別隊が来るのを待ち合流する。

9-2 本コースに復帰出来なかった場合

本コースがどこか分からなくなってしまった班は、A隊が次の人間道標、あるいは〔C.P.〕に着く時間の20分後まで、コースと思われるところで待つ。それでも救助されなかった場合は、なんとかして電話を見付け、本部に10分間隔で連絡し、指示を仰ぐ。

- ・各班で地図及びコンパスを最低1つ用意しておく。
- ・2)の区間では、北に進めば国道165号線が、3)の区間では西へ進めば県道があり、随所に電話がある。
- ・詳しくはルートマップを見れば分かるようにしておく。

9-3 連絡

特別隊員が、人間道標または〔C.P.〕で迷った班があることを確信したら、A隊へ何らかの方法で連絡する。迷ったという連絡があったら、P隊は復帰の連絡があるまで大神神社または石上神宮で全体を停止させる。

9-4 捜索

A隊は迷った班があることがわかったら、人員をさき捜索隊を編成すると同時に、P隊に連絡する。捜索隊はトランシーバーによってA隊との間に密接な連絡を保つ。20分間捜索しても発見出来ない場合はA隊に合流する。P隊の一部は捜索隊が捜索を打ち切ったら本部に連絡し、迷っている班と連絡がとれるまで上記停止地点で待つ。どうしても連絡がとれなかった場合は、停止地点で中止とする。迷った班が発見された場合の行動や中止の判断は、当日特別隊が決定する。

10 解散

10-1 解散

- ・A隊到着後解散式を行い、諸連絡の後解散する。
- ・相当疲れているので気をゆるめず、まっすぐに家へ帰ること。
- ・途中で中止のときの解散は、7の中止の章参照。

- 帰宅するまで百軒は終わらない。そのことに留意して帰宅すること。

10-2 帰宅後

帰宅したら全員がすぐ本部（学校）へ本人が電話すること。

- 絶対に連絡を忘れない。
- 帰宅後は十分休養をとること。

11 付 記

以下の条文を付記とする。この付加された条文は重要であり、守られなければならない。極度にこれを逸脱するものについては特別隊が適当な処分を行う。

11-1 雨 具

ポンチョ等の全身及び荷物を覆うことの出来る雨具と傘を必ず持参しなければならない。

- 降雨の場合、両方が絶対必要であるので、忘れた者は参加出来ない。

11-2 火気厳禁

当日は火気厳禁

- コース周辺には人家、寺院、森林等が数多く存在し、万一出火した場合、これ等に多大な被害が出る。これを未然に防ぐ為に火気厳禁とする。
- カイロは使い捨てカイロのみとする。

11-3 買い物

当日は買い物厳禁とする。

- 多くの参加者が買い物をするとその地域の住民に迷惑がかかる、またゴミ等も大量にできる、等からである。

11-4 用 具

実行委員会が指示及び適当と認めた物以外持ってきてはならない。但し、実行委員会が特別に認めた場合はこと限りでない。

11-5 さしいれ

当日さしいれは禁止する。

11-6 その他

沿道の住民に迷惑を及ぼす行為（人家の前でさわく、夜間、ライトを人家に向ける等）は厳禁とする。

特別隊から指摘された者は以後注意すること。（1-3参加の項参照）

- ゴミは全て持ち帰りとする。

第9回百軒徒歩実施の際の教官役割分担表

ポイント	健民グラウンド	高松塚吉墳	小塚山田	御子観音寺	聖林池	倉橋	朝神	大山田	葉原	園原	石上	名取	弘道	杉田	山原	藤原	白根	奈良	四郎	峠	円成	山口	山神	南生	柳屋	笠置			
出発時刻	12:12	13:13	14:14	15:15	16:16	17:17	18:18	20:21	22:23	23:01	00:00	01:58	02:58	03:47	04:34	05:19	06:17	07:59	09:09	09:24	10:24	11:26	12:09	13:00	14:59	15:59	A隊着		
先頭責任者	浅野											田中		高木															
（健歩）	本間・横田																												
	網・美・栗山・塚野・東元											藤原・峰地																	
	田原・平林											井原・岩城																	
車付添	浜谷						浦久保・河野・白土											千種											
宿日直	・副 藤原						・副 藤原											・副 武田 越智 塚野 板井 田村											

教護
奈良公園で、上林
先正・橋本先生による
全員検診

緊急の場合
赤崎医院
天理徳の家
天理 明城詰所
中井医院

○第5回百軒徒歩

執行部から自治会行事として提案された。その意義は「現状の附高と個人の見直し」であった。この年度より、班別行動区間が設けられるようになった。道標が多くて道に迷にくい区間として、夜間の大神→石上間を班間2分で歩き、奈良→笠置間を班間4分とした。これは本来の自分の力で歩くという事に大きく近付いたと言えるだろう。なおこの年度より、ルートマップが作られるようになった。

○第11回百軒徒歩

執行部から自治会行事として提案された。その意義は「非日常的体験を附高生全員で共存しよう」であったが、百軒徒歩そのものが「日常化」して来たのではないだろうかと実施後反省している。第4回の68kmのコース距離は毎年すこしづつ延び、この第11回で80.1kmまでになったが、時間的にも体力的にも、そろそろこの距離も頭打ちになるだろう。新たな視点が必要である。

※なお、1985年度の百軒徒歩は、コースを大幅に変更し、平城京跡から南へ山の辺の道を通り、明日香を抜け石舞台から柏森、芋ヶ峠を経て吉野川宮滝に出て吉野山に登り近鉄吉野駅に出る約82のコースで実施された。

3 音楽祭

21期生と27期生がそれぞれ2年生の時の音楽祭を記する。

1977年12月19日（土）（於小講堂）	1983年12月3日（土）（於小講堂）
1年生 22期生	1年生 28期生
2年生 21期生	2年生 27期生
3年生 20期生	3年生 26期生

(前詞)

「年の瀬も近付いて来て、街を吹き抜ける風も冷たくなって来ました。そして、12月は音楽祭の季節です。今年は21団体(12クラスを含む)実質350人が参加して、この日を目指して練習を重ねて来ました。さあ、今日はいよいよ音楽祭です。何もかも忘れて思いっきり歌いましょう。私たちの歌声で北風も吹き飛ばしましょう。一つの歌声が、どどんひろがって、学校中にひびき……素晴らしい音楽祭を作ろう!そして、あなたの心に何かがそどきますように」(委員長)

(プログラム)

- 1:00 開会・テーマソング(新しい友達77)
- 1:10 I-B「みんなの歌メドレー」
II-C有志「たとえば」
「塔の春」
バレエ部「アヴェヴェルム
コルプス」「カノンメ
ルツエン」
演劇同会「(店頭発表)」
- 2:05 I-C(有)「パチンコラン
ランブルース」
III-A「眠れぬ夜」「愛の賛
歌」
II-B「マイ・ウェイ」
I-C「はるかな友に」「七
つの水仙」「サイレン
トナイト」
- 3:00 唱歌集をうたう会
「荒城の月」「はにゆ

(前詞)

「今年も音楽祭をやることになりました。昨年とくらべて、今年是有志段階での話しあいでもあまり積極的なものは見られず、昨年までやってきたのだから…という色合いの濃いもので、また附高生全体の音祭意識は低く特に2年生の場合、音祭実行の賛成者という人はごく少数で先行きがあやぶまれていました。それがそのままプログラムの方にもひびいて有志は3つでそのうち2つは毎年恒例のものです。委員会の方も定足数に達しないことがしばしば。委員長になった僕も責任を感じたわりにはいいかげんで、数日前となってから、うろうろしていました。そのため、いたらぬ点が多々あると思います。おわびします。毎年のごようですが、今年も音祭実行が決定してから当日までほとんど短期間で練習も充分に出来なかったかもしれません。しかしみんなで歌を作り、歌を作っていくことの楽しさは分かってくれたと思います。よくまとまっているクラスにはグランプリを初めとする各賞がありますし、また1年生には新人賞もありますので精一杯に歌ってください。」(委員長)

(プログラム)

- 1:25 集合
- 1:30 のど自慢大会
- 2:05 開会のあいさつ
- 2:10 3年有志「走って下さい」「ダ
ンライオン」
I-C「オーバードライブ」
「罅めぐり」
II-B「さらば青春」「夏色の
思い出」
III-D「Somuch in love」「安

- うの宿」「旅愁」等
 I - D (有)「サウンドオブ
 ミュージック」
 II - A「かいじゅうのバ
 ラード」「鳥になった
 少年」
 III - B「朝陽の中を」「悲し
 きレイントレイン」
 3:55 休けい
 4:10 コーラス「水のいのち」より
 ToDa バンド
 「(オリジナル)」
 Pushmi-pullyu「ワインカ
 ラーのときめき」「あ
 んたのバラード」
 III - C 恋する哲学者たち
 「シェリーにくちづ
 け」「巣立つ日まで」
 「青空の絵日記」
 5:05 I - A「誰もいない海」「こ
 の広い野原いっば
 い」
 II - D エンゼルス「ケサ
 ラ」
 執行部とおともだち「都ぞ
 弥生」
 III - D「Tombstone to the
 Sky」「幼想」「涙をこ
 えて」
 6:00 ブラスバンド
 6:10 成績発表、表彰
 6:30 終了

※21期生が3年生の時に音楽祭で歌った歌は下記の通りである。(1978年12月2日)

- III - A「灯を高くかかげて」
 「素足の世代」
 「グッバイモーニング」
 III - B「切手のないおくりもの」

- 息の日々」
 カヌー部とその友達
 「Sweet memon'es」
 「Hey Beppin」
 I - B「モルダウ」
 「Someday Somewhere」
 —休けい—
 3:20 II - D「松田の子守歌」「蒼い
 フォトグラフ」
 III - C「Someday」「愛と青春
 の旅立ち」
 I - A「21世紀」「Ya Ya」
 II - C「銀輪はうたう」「恋の
 季節」
 III - A「めぐり逢いはすべて
 を越えて」「時代」
 寮歌愛好会「都鍋弥生」「北辰
 斜に」
 —休けい—
 4:30 I - D「22才の別れ」「蒲田行
 進曲」
 II - A「X'masメドレー」
 III - B「旅姿六人衆」「想い出
 がいっばい」
 5:00 ブラスバンド
 5:15 表彰、閉会のあいさつ
 5:45 終了

※27期生が3年生の時に音楽祭で歌った歌は下記の通りである。(1984年12月13日)

- III - A「幕情」「歌をあなたに」
 III - B「追憶」「私の唄」
 III - C「流浪の民」「明日に架ける
 橋」
 III - D「思いのままに」
 「シュガーはお年頃」

- 「チョコタン」
Ⅲ-C 「フィッシュ・アンド・
 チップス」「私の詩」
Ⅲ-D 「地球はまわるよ」
 「時代」「めぐりゆく季節」

21期生と27期生がそれぞれ中心になって行った2年生の時の音楽祭をプログラムで比較してみた。21期生の時は、有志参加も多く（7組）、合唱に多くの時間を費しており、音楽祭に向けた情熱がうかがわれる。27期生の時は、その盛り上がりは2年生にはあまりなく、のど自慢大会を入れるなどしてなんとか盛り上げようと苦労していることが分かる。このように最近の音楽祭は3年生が熱心で2年生はなんとなく昨年あったから今年もという程度の気持ちしか出ないようである。

おわりに

中学校の生徒会活動は、委員会活動が中心となる。27期生の場合、規律規定が実施される年に当たり、改正に直接携わった先輩達が卒業していくなかで、「与えられた規律規定」になる事を憂える声がある。また、三附中交換会では、勝負にこだわる自分達を反省する声や、非常に魅力を感じている生徒もいる。

高等学校の自治活動の実体は、附高祭の中に見ることが出来る。文化クラブの発表の場から発展した附高祭は、文化クラブの日々の活動の低調さを反映して、発表内容は年々お粗末になり、反面前夜祭、後夜祭が派手になり、遊びの傾向が強くなっている。それぞれの附高祭で、中心になって活動した執行部及び少数の自治会員達は、生徒の無気力、無関心さ、などを異口同音に述べている。高校17期生に始まった百軒徒歩は、ロマンと附高生の現状打開への夢として始められた。この精神は、ごく少数になって来たかも知れないが、今日に受継がれている。今年（昭和60年度）は新しいルートを作るという事で、熱心な有志諸君が休日を返上して下見し、3月12、13日実施にこぎつけている。また、音楽祭では、年々によって中心的2年生の盛り上がりが違うけれども、最近では3年生が熱心になっているようである。

この10年間を通した、2つの学年について、生徒会、自治会の活動の記録を整理してみた。どんな些細な内容であっても、その行事に青春をかけた、少人数生徒達の汗がにじんでおり、これらの少人数の生徒達に附中・高は支えられているといえるだろう。中学校で生徒会役員を経験した生徒達の非常に多くが、挫折感を表明する。この事も含めて、中・高一貫した指導のあり方を検討しなければならない。

岩城 一郎
岡 博昭
柴山 元彦
富田 健治
中村 英治

ク ラ ブ 活 動

§ 1 本校クラブ活動のねらい

本校のクラブ活動の目標と実践について、昭和60年度学校要覧から引用する。

1 クラブ活動のねらい

- ① 自主的な、しかも、規律ある生活態度を身に付ける。
- ② 各自の個性や趣味に応じて活動し、自己を知り、開発につとめる。
- ③ クラブの一員であることを自覚し、互いに協力してクラブの発展に寄与する態度を養う。
- ④ (体育) 強健な心身を養うと同時に、社会性や指導性を身に付け、人格陶冶につとめる。
- ⑤ (文化) 社会性を身に付け、視野を広め、人格陶冶につとめる。

2 クラブ活動

- 各クラブは有名無実にならぬよう、常に教官の適切な助言のもとに、活発に活動すよう留意する。
- 活動計画を慎重に立案し、十分な効果を上げるようにつとめる。
- 対外活動については、顧問教官の助言及び指導のもとに活動するようにつとめる。

中学校

- クラブは参加を希望する生徒のみで構成し、クラブの運営、活動はクラブ員で行う。
- 生徒は必ず1つのクラブに入部し、活動すること。

高等学校

- 全生徒はいずれかのクラブ活動をすることが望ましい。
- 生徒の自発的、自治的な活動を本来の目的とする。

経費

- クラブ活動の経費は生徒会費(中)、自治会費(高)の経費の一部が当てられる。(ただし同好会は除く)、不足分はクラブ員がまかなう。
- 各クラブの中学校体育連盟、高等学校体育連盟その他の加入金は学校でまかなう。
- 対外行事などへの参加のための交通費、ユニホーム、個人的に使用する用具などはすべて自己負担とする。

§ 2 中学校におけるクラブ活動

1 クラブ活動参加状況の移り変わり

体育系クラブ

		昭51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
陸上競技	男	21	23	20	14	16	21	14	23	20	28
	女	14	12	8	9	15	10	12	17	24	24
	計	35	35	28	23	31	31	26	40	44	52
剣道	男	22	19	23	13	25	21	25	19	23	20
	女	4	10	6	3	6	7	6	3	8	13
	計	26	29	29	16	31	28	31	22	31	33
柔道	男	21	16	19	11	27	31	35	28	29	27
	女	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	21	16	19	11	27	31	35	28	29	27
サッカー	男	40	36	42	23	48	50	46	46	52	60
	女	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	40	36	42	23	48	50	46	46	52	60
バスケットボール	男	32	47	43	24	45	46	46	39	43	46
	女	19	30	34	20	25	27	24	29	24	25
	計	51	77	77	44	70	73	70	68	67	71
バレーボール	男	8	24	27	20	13	13	15	17	20	17
	女	23	19	21	13	18	21	25	19	13	18
	計	31	43	48	33	31	34	40	36	33	35
硬式テニス	男	41	30	45	29	35	35	36	42	41	35
	女	44	33	31	23	31	28	25	31	32	30
	計	85	63	76	52	66	63	61	73	73	65
卓球	男	19	22	27	26	27	17	14	20	29	28
	女	11	5	6	1	9	12	9	8	5	3
	計	30	27	33	27	36	29	23	28	34	31

全生徒の体育系クラブの部員の占める割合について、昭和50年度と昭和60年度を比較してみると、前者が66.3%、後者が77.1%となり約10%の増加率を示している。また、この10年間の体育系クラブの部員数は全体のほぼ7割～8割を占めており、体育系クラブに生徒の人气が集中しているようである。身体の成長期である中学時代に保護者や生徒自身が体育系クラブを選択したものと考えられる。各クラブについては、部員数において、それほど大きな変動はない。強いて言えば、世間一般に人気のあるスポーツについては、入部者数に多少の影響もあるようである。クラブによっては、これ以上部員数が増加すると施設面で多少の無理が生じ、活動に影響の出るところもある。各クラブの指導に当たる顧問教官は、それぞれの場面での適切な指導を与えるべく、指導者講習会等にも参加し、研鑽を積み重ねている。

文化系クラブ

		昭51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
社 会 科	男	7	9	9	5	8	6	12	12	11	10
	女	1	0	0	1	1	1	2	3	2	0
	計	8	9	9	6	9	7	14	15	13	10
数 学	男	0	4	6	2	(廃止)					
	女	14	12	3	1						
	計	14	16	9	3						
科 学	男	46	43	22	14	17	19	14	17	12	10
	女	9	13	11	9	4	5	6	4	3	3
	計	55	56	33	23	21	24	20	21	15	13
音 楽	男	7	6	6	4	7	10	11	16	11	11
	女	13	19	21	17	26	25	27	25	27	28
	計	20	25	27	21	33	35	28	41	38	39
美 術	男	1	1	0	0	1	3	2	2	0	0
	女	8	6	8	6	12	7	10	10	12	10
	計	9	7	8	6	13	10	12	12	12	10
技 術	男	15	9	9	9	22	25	24	24	22	25
	女	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	計	15	9	9	9	22	25	24	24	22	26
英 語	男	7	6	11	8	17	12	19	3	1	0
	女	13	12	18	7	18	21	20	19	18	13
	計	20	18	29	15	35	34	39	22	19	13
書 道	男	0	2	0	0	(廃止)					
	女	12	7	5	4						
	計	12	9	5	4						

体育系クラブの部員の占める割合が、7～8割なのに対して、文化系クラブの方は2～3割ということになる。もう少し詳しくみると、昭和50年度では33.6%が文化系クラブ員であったものが、昭和60年度では22.9%と、かなりの人数的な落ち込みを示している。スポーツに生徒の興味、関心があるということが、一つの大きな理由になるかもしれない。更には、現代っ子の特徴として、落ち着いて、じっくりと作業をするのが苦手であるということも大きな理由となろう。後者の場合はクラブ活動だけの問題に留まらず、他方面からも論議しなければならない問題であろう。さて、各クラブについての推移をみると昭和55年度に数学クラブと書道クラブが廃止されている。クラブの部員数が7名を欠いた時点でクラブの存廃が議論される。生徒自身の気持ち尊重されることは言うまでもない。文化系クラブの活動は地味で発表の場がそれほど多く持たれていないので、顧問教官の指導には、かなり工夫が必要となり、生徒の意欲的な活動を引き出そうと努力を重ねている。クラブの顧問には、各クラブの指導にふさわしい資質を持つ教官を配当している。特に、教科との関わりを持つクラブには、教科担当の教官が配当され、生徒により適切な指導が出来ることを目指している。

2 クラブ活動の現状

本校のクラブ活動は、生徒全員が必ずどれか1つのクラブに入部しなければならない、クラブ全入制を採っている。しかも、必修クラブと課外クラブとが一体化した形態をしている。1年生でクラブ決定をすれば、原則として3年間同一クラブに所属し、意欲的に活動するよう指導している。そのため、中1のクラブの最終決定までに、文化系クラブ、体育系クラブの紹介・見学、そして、1週間の仮入部という、大変慎重な段階を踏んでいる。生徒は、その間に、自分の希望や適性、保護者の意見や助言を考慮して、中学3年間あるいは中・高6年間のクラブ活動を決定するのである。途中でのクラブ変更は余程の事が無い限り認められないので、真剣に判断を下すように指導している。クラブ活動が学校生活においてかなり大きな位置を占めることは、想像に難くないであろう。

さて、クラブ組織の変遷の流れの中で、全校クラブ制から1人1クラブ制に変わり、現在は、それが定着しているのであるが、生徒のクラブ活動に対する意識はどうか、また、活動の実態はどのようになっているか、について、生徒からアンケート調査を行ってみた。この調査結果を基に、クラブ活動を更に効果的な教育活動の一環として意義付けていきたい。

〔クラブ活動実態調査（昭和60年12月実施）——中学校の部——〕

調査項目	体育系クラブ (245名中)		文化系クラブ (73名中)	
1. 現在のクラブを選んだ動機	○やってみたかった	151名	○やってみたかった	47名
	○心身を鍛えるため	42名	○より深い知識・技能を付けるため	14名
	○小学校時代からやっていてさらに続けたかった	38名	○小学校時代からやっていて更に続けたかった	6名
	○友人にすすめられて	24名	○親にすすめられて	4名
	○より深い知識・技能をつけるため	21名	○友人にすすめられて	2名
	○親にすすめられて	12名		
2. クラブの週平均活動日数	1日-11名	2日-7名	1日-3名	2日-8名
	3日-10名	4日-9名	3日-27名	4日-24名
	5日-36名	6日-173名	5日-10名	6日-1名
3. クラブの活動日数について	ア. 多すぎる	87名	ア. 多すぎる	5名
	イ. ちょうどよい	125名	イ. ちょうどよい	48名
	ウ. 少なすぎる	35名	ウ. 少なすぎる	19名
4. 1日の平均活動時間	ア. 30分	12名	ア. 30分	7名
	イ. 1時間	150名	イ. 1時間	36名
	ウ. 1時間半	75名	ウ. 1時間半	22名
	エ. 2時間	1名	エ. 2時間	4名
	オ. 3時間	1名	オ. 3時間	0名
5. クラブの活動時間について	ア. 長すぎる	21名	ア. 長すぎる	3名
	イ. ちょうどよい	130名	イ. ちょうどよい	49名
	ウ. 短かすぎる	93名	ウ. 短かすぎる	19名
6. 自主活動について	ア. 計画的におこなっている	53名	ア. 計画的におこなっている	8名
	イ. 時々おこなう	114名	イ. 時々おこなう	29名
	ウ. 特におこなっていない	74名	ウ. 特におこなっていない	34名
7. クラブ員同志の人間関係について	ア. うまくいっている	91名	ア. うまくいっている	30名
	イ. ふつう	130名	イ. ふつう	38名
	ウ. うまくいっていない	29名	ウ. うまくいっていない	5名

調査項目	体育系クラブ (245名中)	文化系クラブ (73名中)
8. クラブ活動について家庭では	ア. 支持してくれている 140名 イ. 無関心 83名 ウ. 反対している 21名	ア. 支持してくれている 30名 イ. 無関心 36名 ウ. 反対している 7名
9. クラブ活動で一番楽しいこと、うれしいことは	○試合に勝つこと ○技術が向上すること ○人間関係がおもしろい ○共同でプレーするとき ○先輩や先生にほめられること ○たくさん練習できる ○先輩としゃべれること ○後輩が指示どおりに動いてくれる	○作品が完成したとき ○活動しているとき ○部員全員で何がする時 ○合奏できること ○結論にたどりついたとき ○興味あることができるとき ○友達がいること ○自由なこと
10. クラブへの今後の取り組みについて	ア. 積極的に取り組んでいきたい 190名 イ. あまり意欲がなく違うクラブを試みたい 36名 ウ. クラブはしたくない 19名	ア. 積極的に取り組んでいきたい 61名 イ. あまり意欲がなく違うクラブを試みたい 11名 ウ. クラブはしたくない 1名

前に行った調査結果と今回のものを比較し、特に顕著な点について考察しておく。調査項目1のクラブ選択の動機については、前回も今回も生徒の興味・関心によるものが体育系・文化系共に過半数である。項目2については前回と今回で大きな違いが見られた。体育系クラブにおいては、前回では、4日と5日がほぼ2・3割であったのに対して、今回では6日と答えたものが実に7割弱にも達している。一方、文化系クラブにおいても、前は、1日というのがほぼ全員なのに対して、今回は、3日、4日というのが3割強ずついる。この結果より、クラブ活動がかなり活発に行なわれており、学校としてもかなり重視した生徒の活動と捕えているのである。また、この活動日数について、約半数の生徒はちょうどよいと答えており、生徒もクラブ活動を学校生活において、かなり大切なものとして考えているということが窺える。しかし、体育系クラブの3分の1の生徒は多すぎると答えていることも見逃せない。毎日、大変忙しい学校生活を送っており、生徒が、クラブ活動を初めとして、種々の活動に追いまわられているという状況がないかどうか、懸念する。項目4については、活動時間が下校時刻との関係から、1時間程度に集中しており、項目5において、生徒もやや少ないと感じながらも、大旨満足しているようである。項目6の自主活動については、体育系で3分の2、文化系で半数の生徒が行っている。項目7のクラブ内の人間関係については、ほぼ良好である。項目8の家庭での支持は、体育系・文化系で4～5割得ている。項目9の回答では、文化系では前回も今回も差は感じられないが、体育系では、試合の勝敗にやや固執する傾向が今回の調査に見られるのが、やや気になる点でもある。項目10の回答では、大多数の生徒が、意欲的に取り組んでいこうという姿勢が感じられる。全般的に、生徒のクラブ活動への取り組みについては、かなり意欲的、積極的であると認めることが出来、充実した学校生活を送るうえで、極めて、大切な活動となっている。しかし、少数の生徒が、異なるクラブを希望したり、クラブをしたくないと答えているという事実を見逃すことなく、適切な指導をすることが必要である。更には、中・高を通じて、クラブ生徒を系統的に育てるという考えの基に、中・高生合同での活動も行われており、顧問教官の連絡も密となり、かなり成果を上げている。

クラブ活動個人カード

クラブ _____ 年 _____ 組 _____ 番 名前 _____ クラブ活動を有意義にするためにこのカードを利用しよう。結果だけでなく、原因や理由についてもくわしく書こう。									
項目	1 学 期			2 学 期			3 学 期		
1	今学期の具体的な目標								
2	目標達成のため、特に努力をしたこととその結果								
3	備品、用具の管理 活動場所の整備								
4	そ の 他 (例 対人関係など)								
事 実 の 記 録									
出席状態(部長記入) (/) (/) (/)									
出席率									
A 80%以上、B 60%以上 C 60%未満									
	顧問印	担任印	保護者印	顧問印	担任印	保護者印	顧問印	担任印	保護者印

〔カード配布手順〕

- 1) 1学期初めに、各クラブでカード配布。
- 2) 各自の目標を記入後、部長が一括して顧問へ。
- 3) 学期終了10日前に部長から配布。
- 4) 各自反省文記入後、部長が出席を記録して 顧問へ。出席状態の一覧表をクラブ係へ。(1週間前)
- 5) 顧問から担任へ。
- 6) 担任から保護者へ。
- 7) 学期初めに、目標を記入して各部長へ。
- 8) 旧カードは学校で保管。

クラブ活動における評価として、生徒自身による自己評価法を現在においても採用しており、自主的かつ主体的な活動をその主たる目的としている。部長→顧問→学級担任→本人→保護者と回覧させてゆく事により、それぞれが活動状況とその評価を知ることになるということは現在も変わらないが、自己評価用紙の修正があったので、説明を付け加えておきたい。体育系・文化系クラブの区別をなくし、同一の用紙にした。しかも、各観点における評価をA、B、C、ではなく(出席率のみABCの評価を残している)、文章表現による評価を取り入れた。これにより一層幅広い評価が可能になった。

最後に、クラブ活動の現状についてであるが、最近特に体育系クラブに入部者が偏り、文化系クラブの活動がどうしても低調になりがちである。体育系クラブのような華やかさはなく、地道な活動であるため、生徒自身の意欲にかかっている点で、顧問教官の苦勞があるようだ。又、体育系クラブの中にあっても、レギュラー選手とそうでないものとの取り組み方の違い等、生徒自身の自主活動と言いながらも、顧問の指導性に比重がかかってくる。様々な問題点をかかえながらも、クラブ活動が人間形成の一環として果たす役割は大きく、私たち教官もこの活動を大切にしていきたい。

§ 3 高校におけるクラブ活動

1 クラブ活動参加状況の移り変わり

体育系クラブ

		昭51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
陸上競技	男	14	23	22	23	13	18	19	17	15	20
	女	6	11	9	14	14	11	9	5	6	6
	計	20	34	31	37	27	29	28	22	21	26
剣道	男	5	15	22	17	18	19	20	10	9	15
	女	0	2	4	8	13	18	19	11	7	11
	計	5	17	26	25	31	37	39	21	16	26
サッカー	男	12	26	17	21	21	24	21	21	33	28
	女	0	2	2	0	2	2	0	0	5	6
	計	12	28	19	21	23	26	21	21	38	34
バレーボール	男	9	14	11	12	17	18	12	17	12	18
	女	6	13	9	14	16	8	3	15	24	25
	計	15	27	20	26	33	26	15	32	36	43
バスケットボール	男	9	9	8	17	16	11	16	17	19	15
	女	12	15	9	11	16	16	18	10	11	9
	計	21	24	17	28	32	27	34	27	30	24
柔道	男	5	15	13	9	10	7	9	11	7	20
	女	0	2	0	0	1	1	0	2	0	0
	計	5	17	13	9	11	8	9	13	7	20
硬式野球	男	12	21	23	26	25	13	16	20	20	15
	女	0	3	4	0	3	2	0	0	0	4
	計	12	24	27	26	28	15	16	20	20	19
卓球	男	7	15	19	16	18	7	11	15	17	17
	女	10	17	13	8	9	2	4	5	4	6
	計	17	32	32	24	27	9	15	20	21	23
硬式テニス	男	19	22	22	21	17	24	19	17	22	21
	女	6	18	22	17	13	8	6	11	9	13
	計	25	40	44	38	30	32	25	28	31	24
ワンダーフォーゲル	男	4	9	14	10	11	20	20	17	9	10
	女	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
	計	4	9	14	10	11	20	22	17	9	10
カヌー	男	6	12	12	11	15	14	(廃部)	/	/	/
	女	1	2	2	0	3	4				
	計	7	14	14	11	18	18				
体操 (S.54, S.55は同好会)	男	/	/	/	0	2	2	2	0	0	0
	女	/	/	/	10	11	15	13	20	16	23
	計	/	/	/	10	13	17	15	20	16	23

文化系クラブ

		昭51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
化 学	男	4	3	5	6	4	6	0	6	6	3
	女	4	1	2	0	3	0	0	3	0	0
	計	8	4	7	6	7	6	0	9	6	3
生 物	男	4	2	10	13	10	10	8	6	2	3
	女	6	2	6	8	6	0	1	2	4	3
	計	10	4	16	21	16	10	9	8	6	6
地理・歴史	男	7	14	11	14	26	26	25	24	8	12
	女	9	9	8	3	8	5	6	12	3	3
	計	16	23	19	17	34	31	31	36	11	15
地 学	男	6	7	14	22	12	10	14	15	12	11
	女	2	2	7	6	6	2	7	6	3	15
	計	8	9	21	28	18	12	21	21	15	26
E. S. S	男	2	5	/	/	/	/	/	0	1	3
	女	4	3	/	/	/	/	/	8	4	1
	計	6	8	/	/	/	/	/	8	5	4
美 術	男	0	0	4	0	1	8	3	0	0	2
	女	4	5	12	16	6	5	1	6	7	4
	計	4	5	16	16	7	13	4	6	7	6
音 楽 (S.56から吹奏楽)	男	14	22	16	12	10	9	10	9	2	7
	女	19	13	19	8	11	14	17	14	10	12
	計	33	35	35	20	21	23	27	23	12	19
文 芸	男	6	1	4	9	/	7	/	/	9	7
	女	5	4	7	5	/	0	/	/	2	2
	計	11	5	11	14	/	7	/	/	11	9
鉄道研究会	男	8	5	12	10	/	/	/	/	/	/
	女	0	1	1	0	/	/	/	/	/	/
	計	8	6	13	10	/	/	/	/	/	/
園芸同好会	男	0	4	/	/	/	/	/	/	/	/
	女	1	5	/	/	/	/	/	/	/	/
	計	1	9	/	/	/	/	/	/	/	/
落語研究会	男	6	3	/	/	/	/	/	/	/	/
	女	0	0	/	/	/	/	/	/	/	/
	計	6	3	/	/	/	/	/	/	/	/
囲碁・将棋	男	/	/	11	14	11	19	22	24	12	8
	女	/	/	4	0	0	0	0	1	1	1
	計	/	/	15	14	11	19	22	25	13	8
写 真	男	1	9	9	16	12	7	7	9	12	17
	女	0	0	0	0	0	0	0	0	3	8
	計	1	9	9	16	12	7	7	9	15	25

		昭51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
物 理	男	5	9	0	6	12	6	15	9	4	12
	女	0	0	0	2	3	1	0	3	0	0
	計	5	9	0	8	15	7	15	12	4	12
新 聞 局	男	2	2	4	11	0	8	10	2	0	0
	女	0	2	0	2	0	1	9	2	1	0
	計	2	4	4	13	0	9	19	4	1	0
放 送 局	男	16	10	6	10	11	17	22	22	10	22
	女	3	12	10	5	11	15	12	8	8	5
	計	19	22	16	15	22	32	34	30	18	27
陶芸版画同好会	男	/	8	4	1	1	3	5	1	2	2
	女	/	0	0	0	4	2	2	1	1	5
	計	/	8	4	1	5	5	7	2	3	7
数理学研究会	男	/	/	/	/	/	/	/	12	9	5
	女	/	/	/	/	/	/	/	0	0	0
	計	/	/	/	/	/	/	/	12	9	5

〈注1.〉斜線部は、そのクラブ、同好会の存在しないことを示す。

〈注2.〉この表に示さなかった短命の同好会、研究会を以下に示しておく。

○朝鮮語同好会 (51年・52年) ○演劇同好会 (52年・53年・54年)

○書道同好会 (52年・53年・54年) ○映画同好会 (53年・54年・55年)

○家庭科同好会 (52年)

〈注3.〉新聞局の数字は有志局員のみを示してある。

2 クラブ活動実態調査 (昭和60年11月実施)

回答数	高1	87名
	高2	85名
	高3	88名
	総計	260名

〈注〉3年生は殆どの者が調査時にはクラブを引退しているため、2年生の時のことを考えて回答させた。

調査項目			
1. 現在クラブに所属していますか。 (人数)		所属している (体育系・文化系)	所属していない
	1年	77 (56・21)	10
	2年	52 (42・10)	33
	3年	63 (49・14)	25
	総計	192 (147・45)	68
	クラブに所属していない理由		
	○途中退部	18名	
	○入りたいクラブがない	15名	
	○勉強 (その他) のため、時間がない	13名	
	○なんとなく	4名	

調査項目	体 育 系 (147名中)		文 化 系 (45名中)	
2. 現在のクラブを選んだ動機	○中学校からやっていて、さらに続けたかった 60名 ○やってみたかった 58名 ○心身を鍛えるため 20名 ○友人にすすめられて 9名 ○親にすすめられて 1名 ○より深い知識を得るため 1名		○やってみたかった 30名 ○より深い知識を得るため 11名 ○友人にすすめられて 4名 ○中学校からやっていて、さらに続けたかった 1名	
3. クラブの週平均活動日数	1日- 1名 3日- 4名 5日-19名	2日- 1名 4日-15名 6日-111名	1日- 7名 3日- 4名 5日- 6名	2日- 7名 4日- 6名 6日-15名
4. クラブの活動日数について	ア. 多すぎる 14名 イ. ちょうどよい 119名 ウ. 少なすぎる 11名		ア. 多すぎる 4名 イ. ちょうどよい 36名 ウ. 少なすぎる 4名	
5. 1日の平均活動時間	ア. 1時間 3名 イ. 1時間半 21名 ウ. 2時間 103名 エ. 3時間 8名 オ. その他 12名		ア. 1時間 11名 イ. 1時間半 8名 ウ. 2時間 19名 エ. 3時間 1名 オ. その他 3名	
6. クラブの活動時間について	ア. 長すぎる 6名 イ. ちょうどよい 111名 ウ. 短かすぎる 31名		ア. 長すぎる 2名 イ. ちょうどよい 36名 ウ. 短かすぎる 1名	
7. 自主活動について	ア. 計画的におこなっている 29名 イ. 時々おこなう 69名 ウ. 特におこなっていない 46名		ア. 計画的におこなっている 10名 イ. 時々おこなう 21名 ウ. 特におこなっていない 14名	
8. クラブの現状について	A) 指導者について ア. 今のままでよい 100名 イ. 適当な指導者がほしい 49名 B) 顧問について ア. 今のままでよい 122名 イ. 不満である 22名 C) クラブ員同志の人間関係について ア. うまくいっている 91名 イ. ふつう 50名 ウ. うまくいっていない 7名		A) 指導者について ア. 今のままでよい 34名 イ. 適当な指導者がほしい 9名 B) 顧問について ア. 今のままでよい 40名 イ. 不満である 4名 C) クラブ員同志の人間関係について ア. うまくいっている 13名 イ. ふつう 26名 ウ. うまくいっていない 6名	
9. クラブ活動について家庭では	ア. 支持してくれている 74名 イ. 無関心 44名 ウ. 反対している 30名		ア. 支持してくれている 20名 イ. 無関心 20名 ウ. 反対している 6名	

調査項目	体育系 (147名中)	文化系 (45名中)
10. クラブ活動で一番楽しいこと。	○試合に勝った時 37名	○活動がうまくいった時 8名
	○技術が向上した時 24名	○活動している時 7名
	○練習をしている時 21名	○先輩と親しく話をする事 5名
	○皆と話をする事 10名	○皆と話をする事 4名
	○先輩と親しく話をする事 3名	
11. クラブへの今後の取り組みについて	ア. 積極的に取り組んでいきたい 104名	ア. 積極的に取り組んでいきたい 26名
	イ. あまり意欲がない 23名	イ. あまり意欲がない 12名
	ウ. できればやめたい 6名	ウ. できればやめたい 1名

○調査のねらいとまとめ

今回のクラブ活動調査の目的は中学、高校のアンケートの調査項目をほぼ同一のものにしていることから窺えるように、クラブ活動の中学校と高等学校の関連をみたいということにある。

結果をみると、まず生徒は自主的にクラブを選択していることが分かる。中学、高校のどちらも、また体育系、文化系を問わず、生徒は誰に強制されたわけではなく、まず自分で「やりたいからやる」とでもいう様にクラブを選んでいる。そして、選んだことを持続させたいという希望も目立っている。持続ということが大切なこととすれば、6年間は活動に十分な時間と言えるだろう。

クラブを日々の学校生活の中でみると、日常の中で大きい位置を占めているのが分かる。体育系のクラブでは活動はほぼ毎日と言ってよく、文化系でも、週3日以上という場合が多い。もっとも高校の文化系のクラブの活動日数の多少が分散しているが。

活動時間は中学は1～1.5時間、高校は2時間位が平均と言える。このことと活動の中で生徒たちが感じていることをみれば、改めてクラブの学校生活の中における意味の大きさが感じられる。

意味が大きいというのは常に求められ答えられ満たされるのを待っていると言い換えていいであろう。例えば、高校生では、現状でいいと言う生徒がいる一方、技術指導を求め顧問に対してはもっと密接なかかわりを求めている生徒たちがいる。

以上のことがアンケートから分かるのだが、次にこの全体的なクラブ像と生徒一人一人の日々の実際の活動の姿とを併せて、クラブの問題を考えていく必要があるであろう。

3 クラブ活動の研究発表（全国附属連盟高校部会教育研究会）

クラブ活動に関する研究発表が、生活指導部により、全附属・生活指導部会で、昭和45年・46年・50年・55年・60年になされている。クラブ活動の諸問題、とくにクラブと受験、リーダーシップと連帯性の欠如、生徒の個人主義的傾向、各クラブの部員数の変動、クラブの存廃、クラブ顧問のありかたなど本校におけるクラブ活動のありかたについての根本的な問題が取り上げられている。これからも継続的に発表されていくものであろう。以下は昭和55年・60年の発表内容である。

昭和55年（第22回全附連研究会） 発表者 岩城一郎・高木正喬

「クラブ活動の現状分析と検討（第三報）」

- 本校生徒のクラブ活動参加の数的変動
- クラブ顧問の眼からみたクラブ活動の現状
- 十年前の顧問の考え方についての資料

この発表では、各クラブ員数の変動、クラブの盛衰について触れられ、今一度クラブ編成に関する基本的な方針について確認がなされている。また、各クラブ顧問からのクラブ活動の現状報告がなされており、クラブ顧問の生徒との日常的な触れ合いの重要性が指摘されている。

昭和60年（第27回全附連研究会） 発表者 琢磨昌一・西谷 泉

「クラブ活動の現状（第四報）」

- 本校生徒のクラブ活動参加の数的変動
- クラブ顧問の眼からみたクラブ活動の現状
- 文化系クラブの現状に対する生徒達の認識

この発表では、特に文化クラブの衰退について述べられている点が注目される。後期執行部は「文化系クラブの建て直し」ということを活動方針に取り上げ、附高でよりよい高校生活を過ごすために附高文化の担い手として、文化系クラブを位置付け、低迷している文化クラブの活動を活発にさせるため、文化クラブの代表者を集めて討議を行ったり、中3生（附高30期生）への呼び掛けを行ったりしている。

あるクラブ部長は次のように言っている。「一般的に、文化クラブの衰退という問題は、部員の無自覚、部員数の減少、附高全体の文化クラブに対する無関心の3つの面があるといえるが、僕に言わせれば、後の2つに関しては仕方ないと思う。現在のように趣味が多様化・個別化してくると、地味で明確な目的に欠ける文化クラブに関して興味が薄れてくるのも無理は無い。確かに、文化クラブのプリントや冊子をすぐごみ箱に捨ててしまったりする行動については常識的に問題はあるが、その精神面に対しては、我々は何ら強制力もっていないのである。部員の無自覚ということに関しては、ほとんど全クラブについて言えるのではないだろうか。クラブ全体として、なんとなく目的意識に欠け、部員一人一人が、今何をすればよいのかが解らず、その結果、雑談したり、遊んだり、クラブをさぼって勝手に帰ったりする。そういった状況を打破するためには、まず第一に部長がしっかり自覚をもって、無理にでも部員をひっぱっていくこと。第二に何か具体的な目標を決めること。この二点さえしっかりすれば何とかかなると思う」

以上のように、中・高のクラブ活動はなされてきている。高校におけるクラブ活動は少なからぬ問題をかかえていることが分かる。この10年間のクラブ部員数の動向をみると、体育系クラブでは大きな変化はないが、文化系クラブでは、2、3のクラブを除いては、減少を示してるし、かろうじてクラブとしての位置をとどめる部員数を維持しているか、一次的に休部になったり、同好会になったりするクラブもある。また、2、3年同好会として存在し、そのまま廃部になるものも多い。元来、文化クラブはそんなに多くの部員がいるというものではないが、継続的な目標をもった活動が続くためには、

やはり一定の部員がいるということは必要な条件である。それが充分確保できない状態にあるということの要因は的確に求められなければならない問題である。そこに附中・高教育の一環としてのクラブ活動のあり方を求めることが出来るかも知れない。

金井 友厚
高橋 一幸
井畑 公男
田原悠紀男

